

---

# 仮面の魔女と黒い銃

桂樹緑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の魔女と黒い銃

### 【Nコード】

N9585U

### 【作者名】

桂樹緑

### 【あらすじ】

VR対戦ゲーム『ペルソナクライン』のプレイヤー『ジエット・バレル』こと真壁陸朗。彼はある日、正体を隠したトッププレイヤー・秋月雪乃の操る『ストレীগ』との賭け試合に大敗する。賭けの代償は、「雪乃の言うことを一つだけ聞く」こと。否応なしに雪乃のパートナーにされた陸朗は、彼女とたった二人きりで、ゲーム内最大の組織である『白銀騎士団』と敵対することになってしまう。

## 1 - 1 敗北

記憶が飛んでいた。

半ば反射的に『知覚変換』センス・リアクトのダイレクト・フィードバックのレベルを落としながら、今何をやっていたのだろうかと考える。

ちらりと視線を動かせば、目に入ったのは自分の対戦用アバターの手足だった。ひよる長い手足を持つこの姿は、『黒い銃身』ジェット・パレルと彼自身が名付けたものだ。もっとも名前と異なり、今日は廃虚での対戦だったから、装甲のカラーリングをグレーの都市迷彩にしている。思い出してきた、自分は今対戦中だったのだ。『ペルソナクライ』デュエルモード 感覚同化型ヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションの。

「くそっ！」

吠えるように吐き捨てながら、敵の姿を探す。

そうだ、完全に思い出した。とんでもない加速でぶっ飛んできた敵アバターの一撃を喰らって、意識を刈り取られたのだ。

思考内デスクトップのコンソール・パネルで『審判装置』ジャッジへとアクセスし、タイムカウントを確認すると『69』と表示されていた。さっき見た時はまだ『70』だったから、およそ一秒ほど昏倒していたことになる。コンマ何秒の単位で攻守の入れ替わるこの『ペルソナクライ』においては、致命的と言っている隙をさらしていたはずだ。

「それなのに、追撃しなかっただろ？ ナメられてるのかよ……ッ！」

アバターに装着された仮面ヘルメットの奥で、ギリツと唇を噛み締める。

だが今もって敵を捕捉できない自分の不甲斐なさを棚にあげてまで、相手の傲慢を責めることはできなかった。ナメられるだけの醜態はさらしているのだ。

『かつてイケブクロと呼ばれた廃虚』を模した対戦フィールドには、敵の気配はなく静まり返っている。音といえば時折建材の崩落が起こり、建物が倒壊して地鳴りを響かせるのみだ。

「どこ行きやがった？」

センサーの有効範囲ギリギリのところまで、こちらの出方をうかがっているのは間違いない。市販されているセンサー拡張プラグインなど、性能はどれもどっこいどっこいだ。『ペルソナクライン』というアプリに習熟しているのならば、相手のセンサー範囲にアタリをつけるのは、不可能というほど難しいことではない。

それができるだけの技量を持つ相手であるのは認めるが、こつもナメてくれると腹が立つ。あるいはそこまで計算の上で、対戦相手は彼を挑発しているのかもしれない。

「……こんな奴にバカにされてたまるか」

舌打ちをしながら、ごく自然に彼は思考内デスクトップにある、そのアプリケーションを起動した。自分自身で組み上げた、フィールド内にいる対戦相手の位置を特定するプログラムだ。

先述のセンサー拡張プラグインとはまったく性格が異なる。『ペルソナクライン』というアプリのセキュリティ・ホールを利用して、直接対戦相手の位置情報を不正に取得する干渉プログラム。いわゆるチートツールだった。

卑怯な手段という自覚はある。ただこれだけのシンプルなチートでも、索敵がシステムに組み込まれている『ペルソナクライン』では、圧倒的な優位が得られるのだから。

だがその歪んだ『圧倒的な優位』は忘れられない蜜の味がして、暗い愉悦が仮面の下にある口元を吊り上げたのを感じた。

アバターの両腕で主武装であるロング・ライフルを構えながら、チートツールが反応を返してくるのを待つ。時間にして一秒にも満たないような刹那の時だが、今の彼にはその数倍か数十倍の長さにも感じられた。

「来い、早く来い……来たっ！」

祈り、願う彼の目に映る『ホロ・モニタ投影視覚』のレーダーに、対戦相手を示すシンボルが一際強く輝いた。彼の立つ、その真後ろに。

「なっ……あがアッ!？」

咄嗟に身体を入れ替えたとき、敵はすでに手にした薙刀のようなグレイヴ武器を振り上げていた。

武器を盾代わりにして、なんとか攻撃を受け止める。だが強烈な打ち込みに、ジェット・バレルの瘦躯が大きく揺らいた。

敵アバターはそのままグレイヴの刃を引っかけるようにして振り抜き、ライフルごと彼を廃屋へと吹き飛ばす。

「ぎっ!？」

叩きつけられて、舌を噛んだ。突き抜けるような痛みを感じる。

すべての感覚が情動的に『リアクト変換』されているヴァーチャル・リアリティ空間。『ワイジョン・スペース思考空間』においては、痛みさえもフィードバックされる。もっとも安全装置があるので、実際に血が出るということはないが。

「危ねえ……噛んだおかげで、また意識トバされずに済んだか」

瓦礫から立ち上がり、コンソール・パネルで半分ほどになった残

りライフ・ポイントの確認をしながら、小さく息を吐く。

自分は二発喰らっただけでフラフラしているというのに、目の前に悠然と立つ敵アバターは、息一つ切らしているように見えない。

長い角の生えた仮面にも、板バネを重ねたような形状の装甲にも、傷一つなかった。当たり前だ、ただの一回だって、こちらは有効打を当てられないのだから。相手のライフ・ポイントは百パーセントだ、一ミリも減っていない。

「くそっ……むかつく野郎だ」

一方的になぶられているようで、とても気分が悪い。

正直言って、これほどの相手と立ち合うのは初めてだった。これほど強いのに、名前が知られていないというのが信じられない。手玉に取られている自分でさえ、イケブクロ・エリアではそれなりに知られた存在であるというのに。

どこかうさん臭いと感じて、チートしてんじゃねーのかと言いかけるが、慌てて口をつぐむ。

自分の事を棚に上げすぎた。やましいのは自分であって、むしろ藪蛇になりかねない。

二連続でダウンを取られて、自覚以上に頭に血が上っているのだろう。汗をかかないアバターであるはずなのに、じつとりと背中が冷たいもので濡れていくような錯覚を覚えた。

『この程度か。あくどく勝っている奴がいるって聞いて、久方ぶりに繋いでみたけど……思ったほどじゃあない、期待はずれだな』  
「なっ!?!」

間合いを取りながら息を整えていたジェット・バレルに、手にしたグレイヴを突き付けながら、対戦相手であるアバター『山羊角』ゴート・ホーンは落胆らしきたため息をついた。

プライバシーを守るための標準装備である、アバターのボイスチ  
エンジンで加工された、男だか女だかわからない声がやけに腹立  
たしい。

タイミングが良すぎるほどの見透かしたような言葉に、怖気のよ  
うな不快感が胸の奥にいつぱいになる。

「な、なんだよッ、お前はッ!？」

『どもるな、器が知れるよ。痛い腹があるからといって、その態度  
はよくないな』

「ぐッ……!」

証拠などあるはずがない。足がつくようなへまはしていない。い  
ないが　やはり見透かされると焦りは隠せなかった。

動揺し、激昂しそうになる気持ちを抑えて、バックジャンプで一  
気に距離を取る。こんな近い距離では、射撃タイプであるジェット・  
バレルは十分な能力を発揮出来ない。何はなくとも間合いだ。怒り  
は銃弾に込めて叩きつけてやればいい。

『おやおや、案外と冷静だ』

「うるっ……せえよっ!」

装甲のハッチを開き、内蔵されたミサイルをばらまく。命中は期  
待していない。ただ敵の足を止めたかった。あの踏み込みは脅威だ。  
気づいた時にはもう、目の前にいるのだから。

弾幕が廃墟ごと敵の周囲を吹き飛ばす。粉塵が舞い上がり、煙幕  
となってベールのように視界を奪った。だが、これで終わりではな  
い。ここからがむしろ本番、真骨頂。

向こうは見えないが、自分は見える。座標取得プログラム最大の  
恩恵は、この状態にあるのだ。

「そこっ！！」

ロング・ライフルを構え、煙幕の中に叩き込む。同時に新しいチートツール　弾道自動補正プログラムを起動して、念には念を入れる。

装甲に着弾した金属音、そして車輪の空転する甲高いスキール音が、煙幕の中で悲鳴のように響いた。数発攻撃を受けつつも、小刻みなストップ・アンド・ゴーで敵アバターが追撃をかわしているのが、リーダーの反応でわかる。

なるほど、と思った。あの音が敵の機動力の正体だ。踵部分に装着された車輪　グライド・スピナーと呼ばれている、地上滑走システム。

扱いが難しいこのシステムの使用者はそれほど多くないが、確かにあれを装備しているのなら、爆発的な機動力にも納得がいく。しかもスキール音の大きさを考えると、かなり大出力のタイプを装備しているのだろう。

「…………この状況で直撃を避けるか普通！？」

仕留めきれなかったことに、苛立ちがさらに募る。視界を奪った上でなお、敵アバターに直撃を与えられなかったことはショックだった。

「だけど追い詰めちゃあいる。あっちとしては良くないカタチのはず……………だったら」

彼は『不正<sup>チーター</sup>改変者』、卑劣なプレイヤーだ。しかし腕がないわけではない。状況を分析し、予測することにかけては自信があった。そうでなければ、状況に応じて様々なプログラムを使いわけるといった芸道をこなせるはずがない。

『はあっ！』



「そう来るよな！」

煙幕を突き破りながら、猛然と突進してくる敵アバター。速度、そしてタイミング共に彼の予想通りだった。こう来ることは、わかっていた。ならば、やりようはある。

グライド・スピナーは『地上を滑走する』という性質上、その機動がほぼ平面に限定されるという弱点がある。相手の上下の機動に追従するのが難しいのだ。不可能ではないだろうが、それはグライド・スピナーという機構が本来想定している動きではないため、どうしても無理がある。ジェット・バレルはそこを突いた。

「らあーっ！！！」

アバターの脚部に力を込めて、大地を蹴り上げる。同時に身体各所の姿勢制御用スラスタを点火。ちょうど敵が水平に振り抜いた、グレイヴの上スレスレを飛び越える。

目の前には、滑走していく無防備なゴウト・ホーンの背中があった。重なりあった装甲は背中にも及んでいるが正面ほどではない、撃ち抜ける。逆さまになったままそう確信し、ライフルを抜き撃ちした。はずだった。

集中が意識を加速させ、『時間』を置き去りにする。無限に引き延ばされた刹那の瞬間。身体はもどかしいくらいに遅くしか動かず、ただ精神だけが加速された『世界』でそれを見た。

グライド・スピナーで突っ込んできたゴウト・ホーンの身体が、突然斜めに倒れる。バランスを崩したのではない、わざとだ。あれは倒したのだ。事実そのまま地面に手を突くと、腕を支点に百八十度ターンして、突っ込んできた勢いそのままに戻って来た。

『甘いよ』

「な、なんっ……」

だ、と言い終えるよりも早く、懐に入り込んだゴウト・ホーンの肘打ちが、ジェット・バレルの胸板に突き刺さる。

「が……はっ!？」

衝撃で息が詰まる。加速されていた精神が我に返り、痛みと共にアバターと同期する。

ジェット・バレルの身体は、大きく後方に跳ね飛ばされていた。決してペルソナアバターとしては重い方ではないジェット・バレルだが、同じくらいの体格相手にこれほどあっけなく吹き飛ばされない。

敵はグライド・スピナーの突進力を殺さず、そのままあの肘打ちに乗せていたのだ。容易くできることではない、だがそうでなければ説明のつかない威力だった。

廃墟をぶち壊し、再び瓦礫の中へと逆戻りしたジェット・バレルの受けたダメージは深刻だ。

大して強化もしていない胸部装甲は見る影もないほどに砕け散り、内部のプログラム・フレームが露わになっている。

コンソール・パネルに目を移せば、ライフ・ポイント残量だって五パーセントにも満たなかった。もしも肘ではなくあのグレイヴで貫かれていたら、今頃はとくにゲームオーバーとなっていただろう。

「こいつ……!」

格が違う。

認めなくてはならなかった。このアバターは、凄まじく強い。これほどの相手がまったくの無名であるなんて、信じられなかった。

かといって、これから有名になる大型新人という感じもしない。

場慣れしすぎているのだ。圧倒的なまでの対戦経験が、あのゴウト・ホーンというアバターの戦闘能力を支えていると直感した。

はつきり言つて、彼が作り上げたジェット・バレルのポテンシャルは低くない。総合性能でならば、おそらく同ランクのペルソナアバターの中でも高いほうだろう。それだけのアバターを構築する技術が、彼にはあった。

だが敵は、ジェット・バレルが戦法を確立する上で生まれた弱点  
装甲の強度であったり、接近戦での立ち回りだったり を、  
的確に突いてくる。それは数多くのペルソナアバターと戦った経験  
がなければ到底なし得ない、老獪とさえ言える動きだ。

「ふん、正体を隠して正義の味方気取りってわけか。よくやるぜ」

きつとランキング上位の、どこぞの有名プレイヤーのダミー・アバターなのだろう。彼はそう結論付けた。

市販パーツを適当に組み合わせただけの野暮ったい外見は、油断を誘うための欺瞞にしかもはや思えない。

『ペルソナクライン』の上位ランカーが能力にリミッターをかけ、アバターの外見を変更して下位フィールドで戦うという話はごくまれにある。大抵の場合はいわゆる『初心者狩り』か、その『初心者狩り』に対する制裁目的だ。

このゴウト・ホーンの場合は口振りからして後者に近い。おそらく最初から自分を倒すことが目的で乱入してきたはずだった。

どこで自分を目をつけられたのか。この一種無法地帯と化している下位フィールド 別名『外道フィールド』<sup>スレット・タンク</sup>で、チートを行う者はそれほど珍しくない。チート使いの事情は様々にあるが、少なくとも自分だけが狙われる理由はないはずだった。

それでもなおピンポイントで『制裁』を加えて来たのは、それこそ正義感の権化のようなものなのか、あるいは単にどこかで  
れこそ現実<sup>リアル</sup>も含めて 買った恨みを、自分が知らないだけなのか。

判断は付かない。

彼のそんな困惑した様子が伝わったのだろう。ゴウト・ホーンは軽く肩をすくめると、自嘲するような口振りで言った。

『なに、正義を名乗るつもりはないよ。ただの憂さ晴らしみたいなものさ』

「……………本当なら、迷惑な話だぜ」

『そっちが言うべき台詞ではないと思うけど？』

「ああそっかい！」

瓦礫から身を起こし、なんとか立ち上がる。

強がっては悪態をついたところで、満身創痍なのは変わらない。

もはや勝ち目はゼロだろう。万に一つの勝機もない。

ただし“うやむや”には持ち込めるかもしれない。

コンソール・パネルに目を走らせると、タイム・カウントは『37』と表示されていた。残り時間を使って死ぬ気で逃げ回り、首尾良く対戦用バトル・フィールドの外へと飛び出してしまえばノーゲームだ。

ここまで腕の差があるとそれすらも難しいとは思いが、こういう時のために組んだ緊急脱出用チートプログラムも準備してある。時間さえ稼げば、不可能なことではないだろうと考えていた。

「けど……………せめて一発くらいは当てないと、ムカついたまんまだ」

ノーゲームになったとしても、対戦成績に傷がつかないだけだ。精神的には完敗、向こうも引き分けた気にはならないはず。腰抜けと思う存分あざ笑うことだろう。

「そいつはどう考えても悔しいよな」

一矢報いる　それをやれたらある意味勝ちだ。そのくらい実力に開きがあると、彼は自分と相手の戦力差を計算していた。

ずいぶん情けない事を言うものだ、苦笑してしまう。

しかし今はそれが精一杯で、そしてそれすら満足にできないであろうことがわかっていて自分が情けない。

もっとも相手は煙幕の中ですら、弾道自動補正プログラムを凌駕するような化物だ。自分が心血注いで開発したツールがこうまで役に立たないのには信じがたいものがあつたが、事實は事實として認めなくてはならない。やるなら、ツール抜きのカチだ。条件は尚悪い。それでもやるか……？

しばし逡巡した後、腹をくくった。たまにはこういう対戦もありだろうと、自分を納得させる。

「のるかそるかは好きじゃあないが……」

『ん……？』

ライフルを構え直したことに反応して、ゴウト・ホーンが頭を上げた。その名を象徴する、ねじくれた長い角の奥にある仮面の目が、じろりとジェット・バレルを睨む。

『仕掛けてくるんだ。意地を見せる気かな？』

「お前の完全勝利を阻めば、俺の溜飲<sup>パーフェクト</sup>つてやつは下がるんでな」

『それはずいぶんと志が低い』

「何とも言いやがれ。どうしようが俺の勝手だ」

『確かにね……では来たまえ、引導を渡してやるっ』

「気に入らねーな、その芝居がかった台詞と上から目線。おごるな、ヤギ野郎」

『……目線の角度が力の差だよ。チート<sup>ゴ</sup>ときでは埋まらないほどのね』

「ほざいてるッー」

横っ飛びで移動しながらライフルを連射したのと、ゴウト・ホーンがグライド・スピナーを急発進させて突っ込んできたのは、ほぼ同時だった。

『今の打ち込みを避けた！？』

グレイヴの刃が空を斬り、敵アバターが初めて驚いたような声を上げた。

たしかにゴウト・ホーンの打ち込みは速い。しかしいい加減、目も慣れた。読みが当たればギリギリ反応できなくはない。

そもそも、さっき一度は避けたのだ。もう一度やれないわけがない。

『まさか、かわされるとはね』

「直線的なんだよ、グライド・スピナーは！」

『そうは言っても、なかなか反応がいいじゃないか。段違いだった、さっきまでとは！』

「だから、その上から視線をやめやがれ！」

残っているミサイルを全弾バラ撒いて、旋回中の相手の周囲を吹き飛ばす。

結局のところ、射撃型の要点はここにある。逃げる空間を削り取られれば、あとは当たりに来るしかない。動いている標的を狙って当てるのではなく、標的に動いてもらって当たらせることこそが基本にして極意。

もっともこのゴウト・ホーンほどの強者であれば、追い詰めてもなお刹那のタイミングで避けてくるだろう。もう一押し、もう一押し何かで虚を突かなくては、尋常でない相手の人間性能を凌駕することは叶わない。

ゴウト・ホーンはひゅん、ひゅんと踊るように風を切りながら、グライド・スピナーを細かく加減速させてジェット・バレルの撃ち込む弾丸を避けていく。

だが、その場から踏み込んでくる様子はまだ見せない。戦いぶりの変わったジェット・バレルを警戒しているようだった。

『声色でわかる。腹をくくると強くなったね』

『てめえにや関係ないことだ！』

『そうでもない。今のほうがずうっとマシだ、少し見直したよ。訂正しよう、わざわざ撃いだ甲斐はあった』

『勝手なことをッ！』

『だが手遅れだ。そんな残り体力では僕に一発当てるのだって、もはやままならないはず……！』

『そうだろうなあ、そうだろうよ！ わかってんだよ、そんなことは！』

あくまで冷静な相手と、焦りを隠せない自分。

ああそうか、実力の差というのはこういうときにも出てくるのかと、初めて知った。強者は決して慌てない。どんなときでも冷静沈着なのだ。そしてそうではられない者が、弱者の位置に立つことになる。

『わかってるなら、あきらめたらどうかな？』

『はん、やなことだ』

『なかなか往生際が悪い。そろそろ終わりにしようと思ってたのだが』

『思惑通りにいかせてたまるか。粘れるだけ粘ってやるよ！』

ライフルの残弾を撃ちきるまでは、この状態を維持出来る。だがリロードの際に起こる一瞬の間、そこで間違いなくゴウト・ホーン

は勝負を決めようと襲いかかってくるだろう。その時にはもう、間合いはゼロになる。こちらは一発撃てるか撃てないかがせいぜいだ。

『いつまで続く、その曲がった根性で！』  
「弾丸切れまでさ！」

そう言った瞬間、引き金が空しい金属音を立てた。まさしく今が弾切れだった。

ライフルの自動装填装置オートリローダーが起動して、アバターのアイテムインベントリから弾丸のデータをロードし始める。

『もらった！』

好機とばかりに、猛然と間合いを詰める敵アバター。これまで以上に速かった。

逆にジェット・バレルは一呼吸以上遅れている、リロードが間に合わない！

(何か、何かないか！？)

ギリギリの状況の中で、必死に考えを巡らせる。

この場に及んで、今さらチートに頼るものか。そもそも今からプログラムを起動したのでは間に合わない。

これまでか 諦めが精神を支配しかけたその瞬間、閃くものがあった。目に映っていたのは、ホロ・モニタの片隅にあった『ペルソナクライン』のデフォルトコマンドリスト。

検証している余裕はない。直感を信じて、そのコマンドを実行する。

「アーマー・パージツ！」



『な、なにッ!?!』

瞬間、ジェット・バレルの全身が爆裂した。装甲が吹き飛び、分解され、『情報デブリ』と化して発光しながら対戦フィールドの空間へと消滅する。

『アーマー・パージ』 チートでもなんでもない、単なる『ペルソナクライン』の基本ゲームシステム。彼はそれを利用した。

ペルソナアバターは、任意でその装甲を排除できる。アバターのパラメータには重量の項目も存在するため、『アーマー・パージ』は、それを瞬間的に軽量化するための最終手段として存在するシステムだ。

ペルソナアバターの重量は、搭載された『アイ・デュー・アーマー情報密度装甲』の強度に由来する。単純に、密度が高く装甲は強靱であるほど重量は重くなるのだ。

よって重装甲であればあるほどアーマー・パージの恩恵は大きい。が、ジェット・バレルのように軽装甲の射撃型にとっては、わざわざ装甲を排除することに大したメリットはない。

だが十分だった。爆発して、光って消えるだけで十分だったのだ。目の前で閃光が炸裂し、一瞬ではあってもゴウト・ホーンの動きが止まる。

確かにわずかな、ごく短い時間のことであつたかもしれない。しかしリロードの時間を稼ぎ、最後の一発を撃ち込む。ただそれだけのためには、ほんの刹那で事足りる。

「ぶち……当てるッ!」  
『クッ!』

狙うはゴウト・ホーンの頭部。当たれば一発逆転もあり得る急所狙いだ。

どうせ狙うなら貪欲に。しくじったところで、失うものなど勝ち

星くらい。背中を見せずに倒れたのなら、男の面目は保たれる。  
そんならしくない想いに高揚感さえ抱きながら、引き金を引いた。  
しかし、

『……惜しいな。もっと地力を鍛えていれば、この首だつて獲れた  
だろうに』

「ッー!？」

明暗を分けたのは、反応速度の差だった。

普通の相手ならば、おそらくジェット・バレルは敵の頭を撃ち抜くことができたろう。だがゴウト・ホーンは普通の相手ではなかった。自分よりもはるかに強力なペルソナアバターであるという単純にして冷酷な事実が、最後の一手を反故にする。

眉間を狙った銃弾が、目標を捕らえることはなかった。ギリギリのところゴウト・ホーンが首を動かし、急所を外したのだ。

弾丸は額からこめかみを削るようにかすめると、ゴウト・ホーンの由来であろう、ねじくれた角に当たる。金属を叩き割るような音がして、左側の角が根本から折れた。

致命傷、ならず。ここまでだった。

「あーあ。ま、こんなもんか。所詮は俺だしな」

『卑下することはない。見事、と言わせてもらおうよ』

「そいつは、どう……も」

「ごん、と身体に縦向きの衝撃が走り、頭から真つ二つに斬り裂かれる。

ライフ・ポイント残量がゼロとなり、アバターの視界がゲームオーバー時のノイズ・エフェクトに切り替わる直前、片側の角を失ったゴウト・ホーンと眼が合った。

冷たい仮面に隠され、素顔など見えるはずはない。しかし何故

だが、相手は満足げに微笑んでいるような気がした。

## 1 - 2 真壁陸朗

高層ビルのエレベーターに乗っているような浮遊感と共に、意識が現実へと引き戻される。

『知覚変換』によるヴァーチャル・リアリティ空間『思考空間』へのアクセスを終えたジェット・バレル 真壁陸朗は、ゆっくりと眼鏡の奥にある両目を開いた。

「……何時だ？」

時間の感覚が狂っている。直前までやっていたことを、よく思い出せなかった。『思考空間』の最深部 現実よりも時間が速く流れる『深層球殻構造体』にダイブしていると、こういうことがよく起こる。

比較的時間の流れが緩やかなスフィア表層部で半日以上潜っていたから、こっちの感覚では一時間ちよつとは経っているはずだ。

左手に装着した極薄の『パーム・コミュニケーションター掌装着型端末』に意識を送り、思考内デスクトップの時計をホロ・モニタ上に呼び出す。四時四十二分だった。

「ちようど一時間、だな」

陸朗がいるのは学校の図書館だ。人気のあまりない、この奥まった個人用読書ブースから『思考空間』へアクセスするのが陸朗の日課だった。

家よりも回線が太く、快適な環境でグローバルネットを利用できる、というのがその理由だ。

普通の生徒の中には、学校側にログを取られるのがイヤだからという理由で、学校からの『思考空間』へのアクセスを控える者が少

なくない。

繋ぐのは陸朗のように一種開き直っている人間がほとんどだ。とくにスフィアへの直通回線の軽さは、利用者の少なさがもつとも大きい理由に違いない。

もつとも陸朗にしてみれば願ったり叶ったりだ。学校でもやるというよりは、学校こそが彼にとつて『ペルソナクライン』をプレイするために適した環境だった。

「さて、どうすっかな……」

『日課』を終えたはいいが、中途半端に時間が空いてしまった。

家に帰るにはまだ早い。かといってもう一回『ペルソナクライン』にログインしたら、おそらく戻ってくる頃には運動部の帰宅と鉢合わせになるだろう。ああいう連中と、わざわざ同じバスに乗るのもバカバカしい話だ。

それに 今日のもう、ログインしたい気分ではなかった。

こつこつと机を叩きながら、窓の外へと目を向ける。赤い夕日を受けてまぶしそうに目を細めた、神経質そうな面差しをした少年がそこには映っていた。

しかしいつもならば『思考空間』から戻って来たあと、どこか鬱屈としたものを溜め込んでいたはずの顔が、今日はやけにすっきりとしているように見える。

理由ははつきりしていた。今日唯一の黒星のせいだ。

「……何だありゃ、バケモノか」

ゴウト・ホーンの事を思い出すと、苦笑しか出ない。

スペックで劣るダミー・アバターを用いてあの強さ。本気を出したらどこまで強いのか、まったく想像もつかない。ああいう不公平なまでに強い存在が『上位ランカー』なのだと うらやむよりも

先に納得してしまった。

冷静になってみると、どうしてああまで意地を張ったのかが、わからない。最後こそ欲を出したが、『敵わない相手だ』というのわかりきっていたのに、どうして意固地になったのか。

自分を納得させられそうな理由はいくつか思いつくが、そのどれもが口に出すには恥ずかしすぎて、今の陸朗には受け入れがたいものがあつた。

冗談じゃない、あんなやり取りはもうたくさんだ。俺は戦うのが好きなんじゃなくて、勝つのが好きなんだ。勝ち目のない戦いなんて、逃げてしまえばよかつたんだ。

しかし自分にそう言い聞かせてみても、そろそろしいほどの嘘は自身すらも騙すことはできなかつた。

なぜならそれは詭弁でしかなく、彼にもかつてはあつたからだ。

ああいうものに憧れて、ああいう風になりたいと思つていたことが

けれども、なれなかつた。

雲上人めいた上位ランカーたちを見上げながら、勝つたり負けたりを繰り返す毎日。不甲斐ない自分に苛立ちを覚え、いつしか『ペルソナクライン』にログインする目的が、ただ『勝つこと』のみへと変質していき、チートに手を染めるようになった。それがいつだった思い出せなくなつたころ　ついに出会つた『本物』が、あのゴウト・ホーンだ。

「格が違うよな、やっぱり」

一蹴された、と言つていいだろう。口先で自分を慰めても意味はない。

強いとはああいうことなのだと、かつて憧れたのはああいうものだったのだと、骨身に沁みて理解した。

速くて強い。ゴウト・ホーンというペルソナアバターを説明するのは、ひどくシンプルな言葉で事足りる。動きにも無駄がほとんど

なかった。

「……最短距離を突いてくるんだよな、あいつ」

左腕を宙で動かすようなジェスチャーを行い、思考内デスクトップから先ほどの戦闘のリプレイ動画を呼び出す。すぐさま神経を介し、ホロ・モニタへと映像が浮かび上がった。普段ならこういう『敗北の記録』はさっさと消去してしまうのだが、今回ばかりは特別に残しておきたい気分だった。

まだチートに手を染めていなかったころは対戦の度にリプレイを確認し、自分や他人の動きを研究したものだ。それを思い出し、ずいぶん懐かしい気分になる。

ゴウト・ホーンの動きは、リプレイによって第三者視点から見ても目で追うのがやつとというほどのものだった。

静と動の使い分けが抜群に上手いため、ただでさえ速いの、より一層見切りづらい動きになっている。これでは対戦中、目で捉えきれなくても当たり前だ。

性能にリミッターをかけた、ダミー・アバターでさえ並の上位ランカーと同等以上なこの動き。本来のペルソナアバターで戦えば、この何倍も速いはずだ。相当な腕利きがゴウト・ホーンの正体なのだろうと、容易に想像できる。

破れかぶれの一撃だったとはいえ、そんな強者の角を一本折ったのだ。自分も捨てたものではないなと、少しだけ嬉しくなった。

「ま、結局はこの時に勝負はついてたんだろうけどさ」

リプレイは戦いの終盤、ジェット・バレルがカウンターで肘打ちを喰らい、吹っ飛んだところまで差し掛かっていた。

「一歩間違えたら腕折れてんじゃないか、アレ。よくもこう思い切

った機動ができるもん……だ……？」

腕を軸にして、グライド・スピナーの勢いを殺さずにターンするゴウト・ホーン。同じシーンを巻き戻し、繰り返し再生する。気になることがあった。

「どっかで見た、間違いない。どっかで見た動きだぞ、これ」

陸朗は自分のプレイのみならず、他人の対戦リプレイもかなりの量をチエックしている。

身の回りに親しい対戦仲間のいなかった彼は、リプレイを分析することで他人の動きや戦術を研究していた。とくにランキング一桁台に位置するマスター・クラスと呼ばれるペルソナアバターたちの動きは、何度も繰り返し見たものだ。それこそ目に焼き付けるように。

そんな忘れようもないリプレイ映像の一つと、今回ゴウト・ホーンが見せた動きに、どこか共通点がある気がした。

「まさか……いや、でも」

マスター・クラスは数千人とも数万人ともいわれるペルソナアバターの頂点に立つ存在だ。その数はランキング一桁台というところからわかるとおり、全部で九人しかない。しかも陸朗の地元である池袋界隈に出没する者となるとただ一人 『剣の魔女』<sup>ストーリーガ</sup>と呼ばれるペルソナアバターのみだった。

ただ、彼女はここ一年ほど『ペルソナクライン』内に姿を見せていないと聞いている。引退したのではないかという噂すらあった。

はやる心を抑えながら自分のライブラリにアクセスし、リプレイをダウンロードする。やけにもたついて思えるのは、興奮のせいだろうか。



「よし……」

ほどなくダウンロードが終わった。

わずかに緊張して、ごくりと唾を飲み込む。

再生が始まると、リプレイにはオペラピンクに輝く装甲を持ったペルソナアバターが、大剣を構え猛然と斬り込んでいく姿が映っていた。

黄金色の髪のような放熱索を翻し、ゴウト・ホーンをはるかに上回るスピードでフィールドを駆け巡るその動きには、一種の感動さえ覚える。それがストレーガだった。

ストレーガはグライド・スピナーを使っているわけではない。彼女の機動力の根幹にあるのは全身に装備した無数のスラスターだ。その推力を精緻にコントロールすることで、三次元的な高速機動を実現している。

地上を滑走していたゴウト・ホーンに比べると、彼女は空間を立体的に使うため、一見その動きは全くの別物だ。

しかしよくよく見ると、静と動の切り替え　細かい加減速や、スピードを維持したまま腕や踵を軸にするターンなど、緩急を効かせて鋭角に動くクセのようなものが、両者には共通しているように思えた。

「確証はない、よな……」

似ている、というだけだ。思い込みだと言い切られたら、納得してしまう程度の根拠に過ぎない。反論されたらすぐに主張を引っ込める程度のものだ。

だがゴウト・ホーンやストレーガが得意とする鋭角機動は、刹那を見切る優れた目と失敗を恐れない強い心がなくては、なし得る事ではない。そしてそれを可能とするペルソナアバターが、そう何人

もいるとは思えなかった。

## 1 - 3 呼び出し

『図書館の利用について、確認したいことがあります。放課後、生徒会室にまでお越し下さい』

そんな電子メールを陸朗が受信したのは、翌日の昼休みのことだ。教室でコロッケパンをかじりながら、ホロ・モニタ内で差出人のところに目をやれば、そこには『生徒会』と書かれていた。ご丁寧にデジタル印章まで付いている。

手の込んだ冗談だとは思えなかった。わざわざ陸朗一人を陥れるのに、生徒会の名前を騙る必要などないのだから。

(生徒会？ なんでまた？)

図書館の利用というのはもちろん『思考空間』へのアクセスも含めての話だろうが、こうして目を付けられるほど、常軌を逸した使い方はしていないはずだった。

学校でスフィアを含めた『思考空間』の利用そのものは校則でも認められていたし、『ペルソナクライン』などスフィア内で展開するアプリケーションについても、直接制御こそできないものの、その利用自体は学校側が把握できるようになっている。当然、問題があれば遮断が可能だ。

そして『ペルソナクライン』は多少マイナーではあるものの、健全なヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションである。学校側が名指しで放課後や休み時間における個人的な利用を制限しているアプリだということはない。

要するに、陸朗には呼び出しを受けるような心当たりはまったくないということだ。

「ま、考えてもわかるわきゃねーか」

正確な言葉ではない。正しく言えば、陸朗は考えることを最初から放棄していた。その原因は、今か今かとくつつきそうになっているまぶたにある。

眠そうな理由はもちろん夜更かし　昨日帰宅したあと、遅くまで対ゴウト・ホーン用のアバターセッティングをやっていたせいだ。こんなにまで『ペルソナクライン』のことだけに集中したのは、本当にずいぶんと久しぶりだ。

等身大の人型機動兵器に意識をダイブして対戦するという、実にマンガチックな設定を持つ『ペルソナクライン』というゲームは、プレイヤーの分身となるペルソナアバターの構築において、過剰なほどの拡張性を持つ。その気になれば、いくらでも凝れるとまで言われているくらいだ。

とはいえ、ただリアルマネーをかければ強くなるというものでもないし、そもそも単純に強いアバターを作ればいいというものでもない。

たとえば昨日リプレイで見た、ストレーガという最強クラスのアバターを陸朗が使ったとしても、ろくな戦果は上げられないだろう。中身であるプレイヤーとペルソナアバターの相性まで考え、無駄を削り最適化していく。そういう緻密で地道な作業が求められるそれがアバターセッティングだった。

もともと凝り性で職人気質のある陸朗は、この作業が嫌いではない。興が乗ったときなど、それこそ何時間でもいじり倒していたものだ。昨夜のように。

そうしなくなったのはいつだったか　思い出すことはできなかったが、想像することはできる。しかしそれは“その日から現在までの”自分を否定することにも等しくて、考えを無理矢理頭の隅へと追いやリセッティングに没頭した。

とはいえ実のところ、対ゴウト・ホーン用のセッティングなどす

る気はなかった。二度と戦わないつもりだったのだから当然だ。

しかし帰宅後も対戦リプレイを繰り返し見ていると、心の奥底がうずいて、いてもたってもいられなくなった。地力で劣る自分が、どうやったらあの強力なアバターに一泡吹かせることができるのか、考えても考えても止まらなかつた。

有効と思える武装の選定、アイテムインベントリの整理と拡張、それによって不足したアバター・ポテンシャルの再配分、変更した武装や能力に合わせた戦術立案。やることはいくらでもあつた。自宅のサーバーを利用しながら夢中になって取り組むうちに、気付けば空が白んでいて　結局、二時間ほどしか寝ていない。

午前中の授業など、話半分以下にしか聞いていなかった。居眠りしなかつたのが、奇跡的ではある。

学校の成績に関しては赤点さえ取らなければいいやと諦めている陸朗だが、だからこそ授業態度で目を付けられるわけにはいかない。少なくとも見た目くらいは、殊勝に授業を受けていると取り繕わなければならぬのだ。

ならば、昼休みに少しでも寝ておくべきだろう。授業は午後も続くのだ、居眠りの誘惑に耐えるのは、昼飯を食べてからが本番だ。だというのに、目を閉じると脳裏に浮かぶのはメールの文面だ。考えても分かるはずがないと結論したはずなのに、不思議だつた。

本能的なものなのだろうか。陸朗はメールから、言いようのない危機感に似たものを感じていた。

確かにこれまでは大丈夫だつた。

だが状況が変わつたとすれば　誰かが突然、目に余る、禁止にしようとか言い出した可能性はゼロではない。

とくに今年の生徒会は、例年になく活発に活動している。まるで『改善』することに餓えているかようだ。もしかしたら図書館利用時における自分の長時間アクセスが、そういう生徒会の『やる気』にロックオンされてしまったのかもしれない。

「はあ……めんどくさいな」

パンの切れっ端を飲み込んで、顔をしかめる。大して美味くもない購買のパンが、余計に味気なく感じられた。

どれほど気分を損ねていようと、生徒会にいちいち逆らうつもりはない。学校で接続するなど言われたら、素直に従うつもりだった。もともとは放課後、不自然なくらい回線が空いていること気付いたから、有効活用していただけたことなのだ。

しかしこれから禁止にするというのなら、その旨をメールで伝えてくれればいいのだ。わざわざ生徒会室にまで呼び出すというのが気に入らない。

そこまでのことか、と思う。遊びで学校の回線を利用しているのは確かに褒められるようなことではないが、ここまでの仕打ちは何かおかしい気がした。

もちろん成績が下がっているなどであれば、呼び出しという事態もありうる。

だが幸いにも陸朗はどの科目においても赤点を取ったことはなかったし、だいたいそれならば担任が生活指導の担当だ。生徒会が首を突っ込んでくる理由にはならない。そう反論したところで、聞くような相手ではないのが厄介だ。

目をつけられたら終わり、というのが生徒の中で密かに流れている生徒会の噂だ。半分は与太話だとしても、一般生徒からの圧倒的サポートを背景に、相当な強権を振りかざしているのは事実だ。

どうしてそんなことが可能なのかと言えば、マンガみたいな話だが、これはもう『生徒会長』ただ一人のカリスマ性にあつた。

学校生活に義務感以外のものを見出さず、友達どころか名前を知っている生徒すら少ない陸朗でも、彼女のことだけはそれなりに詳しくかつた。そのくらい、今の生徒会長は校内で有名人だ。

曰く、『ミス・パーフェクト完全無欠』。曰く、『歴代最強の生徒会長』。曰く、『生まれついでに統率者』などなど、彼女を称える言葉は枚挙に暇が

ない。

陸朗自身はそうした空虚な形容をする輩を嫌っていたが、今年の生徒会長という存在がそう言われるほどの傑物である、ということには理解していた。

もつとも理解しているだけで興味はない。無視できるのなら無視していただろう。そう、こんな風にちよっかいをかけてこなければ、存在すら気にもとめなかったはずだ。

(……けど変だな。図書館の利用なら図書委員会の管轄じゃないのか?)

クラウド・コンピューティングの急速な発展によって、ネットワーク・コミュニケーションが成熟しつつある現代では書籍のデジタル化も進み、紙の本というものがコレクション目的の嗜好品となりつつある。

だがそんなご時世でも、学校に図書館というものは存在しているし、司書を手伝う図書委員会なるものも存続していた。

存在自体は旧態依然とした教育者側のノスタルジーが詰まったものであることは違いないだろうが、陸朗は図書館という施設が好きだった。

単純に両親が本好きという好事家の家庭に育ったこともある。そして何よりも図書館は利用者が少ないということがいい。

学校生活というものをわずらわしく感じている陸朗にとって、図書館はパーソナルスペースに近い感覚でいられる、数少ない場所だった。

しかし、その憩いの場に今生徒会からのメスが入れられようとしている。心穏やかなわけはなく はつきり言えば不愉快だ。

しかも図書館を管理する図書委員会ならばともかく、何故かその頭越しに生徒会が直接自分に干渉しようとしているのだ。納得はできないし、不思議だった。

「行ってみりゃ、わかるんだろうけど。行きたくねえなあ……」

生徒会室に呼び出されるといふのは、生徒たちの中では特別な意味を持っている。それも良きにつけ悪きにつけ。

生徒会室に入っていくところを見られただけで、校内ネットワークで尾ひれがついた噂があつという間に広がり、『次の犠牲者』が出るまで行く先々でひそひそと囁かれる羽目になるだろう。そのくらい影響力のある存在なのだ、今の生徒会は。

この学校に限らず、ネットワーク社会が抱える問題は、二十一世紀初頭から本質は何も変わっていない。『情報の真偽に関わらずあつという間に拡散する』ことは、情報化社会の大きなメリットであり、デメリットだ。扱いを間違えれば、手痛い火傷を負うことになる。

もつとも、そういう危険性さえ上手く利用できる人間こそ、時代の成功者となるのだろうか。あいにくと一介の中学生に過ぎない陸朗には、まだ縁のない話だった。

彼にとって当面の問題はネットワーク社会の抱える病巣ではなく、降って湧いたような災難と、退つ引きならない状況のほうだ。

行かないという選択肢はない。無視すれば催促のメールが来ることは目に見えているし、当然だが心証も悪くなる。わざわざ悪い方へと自分を追い込んでいく必要はない。

結局はなるべく他の生徒に見つからないようにしながら、生徒会を訪ねるくらいしか取り得る手段はないだろう。

放課後、という曖昧な時間を指定されたのは幸いだった。せめて部活動をしている生徒が移動するまで待つて、生徒会室に向かえばいいだろう。

そこまで考えて相手が時間を決めたとはいえないが、こと生徒会に関しては何があつても不思議ではない。自分でもずいぶん被害妄想めいたことを口にしていていると思つてゐるが、たった一通のメール



のせいで自分が追い詰められたのは事実だ。

「まいったなあ……」

また、ため息。このまま放課後まで数時間、憂鬱な気分でないく  
てはならないと思うと、そのこと自体がまず憂鬱だった。

1 - 3 呼び出し（後書き）

登場人物の少ない小説だな…… W

1 - 4 秋月雪乃

生徒会室の扉は他の教室のような自動ドアではなく、今時オートロックすらついていない、古めかしい両開きの扉だった。ただ古いというわけはもちろんなく、立派な彫刻の施された天井まである木製の扉は、陸朗のような人間が見ても金がかかっていることだけはわかった。

まるで生徒会の権力を象徴するかのような扉だ。似つかわしいといえは似つかわしいが、こういう権威主義的な趣味はどうも好きになれない。気後れしてしまう。

基本的に陸朗は小心者だ。世間様と波風を立てずに生きていきたいと思っっている。シヨッキングでスリリングなイベントは、仮想現実の中だけでたくさんだ。

だがそんなふうを考える彼が、今こうしておそらくは入学以来、もっともシヨッキングでスリリングな状況に立たされているのは、なんとも皮肉なことだった。

どうしよう ドアをノックしようと手を上げたまま、固まること数分。叩くという簡単なはずの行為に気後れして、手が震える。

周囲に人はいない。なのに、緊張で口の中がカラカラだ。つくづく現実リアルの自分は臆病なのだと思ひ知らされる。たかがこの程度のことであたふたするのだから。

「うーん、早く入ってきてくれないかな」

「ひうつ!?!」

「誰かに見られたくないのなら、そこで突っ立っているよりかは、入ったほうがよっぽどマシだと思うけどね?」

その声は、生徒会室の扉の中から聞こえた。扉越しなので少しくぐもっているが、少女の声だ。諭すような口振りだが、それでいて

反論を許さない毅然とした印象を受ける。

逆らえない、と直感した。

「あ、あ……」

「はーやーくー」

「は、はいっ！」

ノブに手をかけると、それは大した抵抗もなくスムーズに回った。ぎいっと見た目通りの低い音を立てながら、ゆっくりと扉が開く。

「ほ……あ」

見ただけで思わず変な声が出た。

初めて入る生徒会室は、そうして感嘆の声を上げるに相応しいものだった。無味乾燥でそれこそ牢獄のような教室とは違う、言わば『高級そうな』雰囲気を持った場所である　と、感じた。

「よく来てくれたね。二年F組、真壁陸朗君」

「うえっ!？」

声のしたほうに振り向く。

そこにいたのは数々の噂から想像していたような、眼鏡をかけて詩集でも嗜みつつ、アフタヌーンティーを楽しむような完全無欠のお嬢様ではなく　窓際に置かれた大きな高級デスクの上に行儀悪く腰かける、金髪碧眼の美少女だった。きっちりと着込んだブレザーの襟元に結ばれたネクタイの色から、三年生であることがわかる。初対面の相手だ。しかし、それが誰であるかはすぐに思い当たった。

腰まであるふわふわした金髪と、ブルー・サファイアの瞳、白磁の肌。日の光の中にあって、それにいささかも劣らぬほどの、まさ

しく輝くような美貌。

日本人離れた容姿を持つこんな美少女など、この学校には一人しかない。

「はじめまして、僕は秋月雪乃<sup>あきつきゆきの</sup>。この学校の……生徒会長なんてものをやってる。ま、気軽に『雪乃ちゃん』とでも呼んでくれてかまわない」

「ゆ、雪乃ちゃんはちょっと……」

「いやいや、かしこまらなくて構わないよ。生徒会長なんて、そんな大したものじゃないんだ」

彼女はそう言って、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

かしこまらなくていいと言われても、彼女を前にして緊張しない生徒などいない。色々な意味で、彼女は圧倒的すぎるのだ。同じ中学生だと思えないほどに。

「そうだ、立たせっぱなしじゃ悪いよね。そっちのソファにかけてくれるかい」

「あ、はい。じゃあ失礼して……」

促されるまま、部屋に置かれた応接セットに腰を下ろす。ぎしぎしと関節が音を立てそうなくらい、ぎこちない動きだった。

「固いなあ。そんな緊張しなくてもいいんだけど……コーヒーでも飲む？」

「コーヒーですか？」

「それとも、紅茶のほうがいいかな？」

「コ、コーヒーをお願いします！」

「はいよー」

生徒会長は頷くと、机から降りて部屋の片隅にある棚に向かった。私物だろうか、そこにあるのは外国製らしきステンレスのコーヒー・パーコレーターだ。

同じ棚から品のいいデザインのカップを取り出し、コーヒーを注ぐ。ふわりと漂う香ばしい匂いのおかげか、少しだけ心が落ち着いた気がした。

「お待たせ」

コーヒーと小さなミルクピッチャー、そして砂糖壺をテーブルに置いた生徒会長は、陸朗の向かいのソファに座る。一挙手一投足がいちいち優雅で、育ちの良さを感じさせる仕草だった。

陸朗は受け取ったコーヒーを喉の奥に流し込むふりをしつつ、生徒会長の様子をつかがう。

目の前では、彼女が砂糖壺から角砂糖を取り出すところだった。数は三個。ミルクもたっぷり入れていた。意外に甘党らしい。

しかしもちろん、知りたいのはそんなことではない。ないのだが、彼女は素知らぬ顔でカップの中身を緩やかに傾け、その味と香りを堪能していた。

「さて……と。わざわざ来てもらったんだ、こっちの理由から話るのがスジってもんだよね」

しばらくしてカップの中身が半分ほど減ったころ、生徒会長はようやくに本題に入るつもりになったようだった。

「とりあえずメールでは図書館利用についてと書いたんだけど……さて、キミに心当たりはあるかい？」

「……ないと、思います」

「ない？」

「少なくとも呼び出しを受けるようなことは、なにも」  
「なるほど。図書館で放課後ゲームをプレイするのは別に悪くない、と」

「ええ」

昼休みからずっと考え続けたが、やはりゲームプレイぐらいで生徒会長に呼び出されるとは、どうしても思えなかった。

「要するに、『褒められたことではないが問題はない』くらいに思ってるってことか」

「そうですね、けど」

言葉を濁す。

そんな陸朗を、生徒会長を名乗る少女はまじまじと観察していた。正直居心地が悪い。品定めをされているようだ。

「うーん、僕の顔を伺うような言い方はやめたほうがいいね。悪いクセになるから。それより陸朗君、『ペルクラ』 いや、『ペルソナクライン』は楽しいかい？」

「……ッ！」

アプリの名前を出されて、少し驚く。が、知っていても当然だ。全部調べた上で、自分を呼び出したのだろうから。

「毎日プレイしているようだけど……どうかな？」

「正直、わからないです。習慣みたいなものだし……だから、強烈に面白いつて感じることはもうなくて……」

生徒会長はそう、と頷くと、形のよい顎の先を摘んで考えるようなそぶりを見せる。

「あの、そういう言い方するってことは、やっぱり学校でプレイするってのがマズかったんですか？ それとも、これからダメになるとか」

「いや、そんなことはないよ？ そもそも学校からゲームしてるの、キミだけじゃないし。ま、多くはないけどね」

「そ、そうですか」

じゃあなんで呼びつけたんだ、と喉元まで出そうになった言葉を飲み込む。

きつと、それをこれから説明しようというのだろう。陸朗は彼女が口を開くのを、辛抱強く待った。

「ぶつちやけた話をするね、別にキミに詰問やら注意やらをしようってつもりはないんだ。ここに呼んだのは……」

「呼んだのは？」

オウム返しに問い返すと、可憐な口元がさも愉快そうに笑みの形を作る。

「単なる興味本位さ。キミが習慣になるほどやり込んだ『ペルソナ クライン』、その話を聞こうと思ってね」

「そ、それだけのことで!？」

「先に言っておくけど、もちろん公私混同だよ。でも、どうしてもキミに直接尋ねたかったからね。こういう機会を作らせてもらった」

「俺にですか？」

「そう、キミにだ」

そう言つと、生徒会長は陸朗の左手を優しく掴んだ。手首のリングから伸びる極薄の『掌装着型端末』を付けた左手を。



「な、なにを？」

「ちよつと借りるよ、キミのパムコンを」

「借りるって……」

答えるより先に、生徒会長は陸朗と同じように『掌装着型端末』を装着している左手を彼の掌に重ね合わせる。一瞬、ピリッと『掌装着型端末』に電気が走ったのを感じた。二人の間でクローズド・ネットワークが繋がったのだ。

「少しデータを送るけどいいかい？ 大したサイズじゃないから、ストレージの容量は気にしないでいいよ」

「か、かまいませんけど」

生まれて初めて触る女の子の掌は、たてえようもなく柔らかかった。

陸朗がそのぬくもりにどきまぎしながら頷くと、すぐにホロ・モニタにアクセス許可の申請が出る。ウイルス・チェッカーを起動しつつ、それにOKと答えた。

流れてきたデータは、『思考空間』へのアクセスログだった。ざっと目を通すと、学校からVSへのアクセスを洗い出したものだということがわかる。

「一応説明すると、これは昨日の放課後、学校からVSへアクセスした記録だ。一般生徒の閲覧は禁止されているものだが……今だけは特別だよ？ それでだね、これにはもちろん陸朗君が図書館からアクセスしたのも入ってる。というか、ほとんどキミのばっかだね」

「あ……す、すみません！」

「別に謝らなくてもいいんだけど。で、これを調べるとキミが同じカテゴリの動画……『ペルクラ』のリプレイを繰り返し見ていた

ことがわかる。それも特定のものだけを数種類。なぜだい？」

「な、なぜって言われても。俺はちょっと、調べ物をしただけで」

昨日繰り返し見たリプレイといえば、あの『剣の魔女』に関連するものだけだ。たしかにあれから他のリプレイもダウンロードして見比べてみたが、陸朗の直感を補強するような材料はなかった。

陸朗にとってはその時点で、リプレイそのものについての興味は完結してしまっている。今さら「なぜ」と問われても、大して答えようはない。

「ふうん。調べ物、ね」

すつと、生徒会長が目を細めた。

「な、なにか……俺、まずいことしたんですか？」

「そういうわけじゃないんだが……キミがしていたことではなく、キミが見ていたものに興味がある。どうしてこのリプレイを見ようと思ったのか、それが知りたい」

「それは……」

どうしてそんなことに興味を抱くのか、まるでわからない。

しかしその青い瞳を真っ直ぐに向けられると、喋らずにはいられない気分になる。抗いがたい、無言の強制力があつた。

「昨日『ペルクラ』で戦った対戦相手の動きで、ちょっと」

「っていうと？」

興味津々といった様子で、生徒会長が話の続きをつながした。

「説明しても理解してもらえないかわかりませんが……動きに個人

のクセが出やすいんですよ、このアプリ。それで、加速や減速するタイミングの取り方とか、そういう数値で出てこない部分が気になつて」

「なんだい、相手がズルでもしてると思ったのかい？」

「そういう意味じゃなくて……ただ、前に見たことのある動きだったから」

「それでリプレイを調べた？」

「ええ。ある有名なプレイヤーの動きと、どうにも似てる気がしていやその確証とかはなくて、単なる俺の思い込みだったりするのかもしれないけど、そのときは似てるって感じた……か……」

身を乗り出すようにして話を聞く生徒会長の顔が、すぐ目の前にあった。重ねたままの左手がほんのりと汗ばんでいるのを感じる。

それが自分の汗なのか、それとも彼女のものなのかすらわからない。

「あ、あの」

「うん？」

「ちよつと、近いです……」

「そうかい？ 僕としてはもっと近づいてもいいんだけど」

口元に変わらぬ微笑みを浮かべたまま、生徒会長はすすつと音もなく陸朗に身を寄せる。長い金髪が揺れるとシャンプーのものだろうか、不思議な甘い匂いがした。

「いや、だから」

「そんなに嫌わなくてもいいじゃないか。大事な話は、ここからさ」  
「は？」

左手にまた小さく電気の痛みが走る。

ホロ・モニタ内に、『思考空間』の最深層・情報球殻構造体へのアクセスが行われているアナウンスが表示された。外部から目の前にいる生徒会長から、自分の『知覚変換』が制御されようとし

ているのだ。しかし手を重ねられたまま、振り払うことすらできなかった。

陸朗はただただ混乱し、間抜けな声を上げるだけ。状況が把握できなかつた。

「え？ え！？」

「ありがとう、だいたい僕の推測通りだった。というわけで、キミをこのまま帰すわけにはいかなかったな」

「は、はいい？ なんで！？」

青い目が静かに陸朗を見上げていた。大きく澄んだ瞳に、動揺を隠せない自分の顔が映っている。

「さっきのデータ、よく見たのかい？ ダメだなあ、流しただけだろう。よく見てれば気付いたろうに……いいかい、あれには校内から『ペルクラ』で遊んでいた記録が載ってた。そう、『校内』だ。図書館だけじゃあない」

「俺以外の記録も載っていたと……？ でも、それが？」

「記録は二カ所。一ツは図書館、一ツは『ここ』だ。そして両者は同じ時間、同じフィールドに繋いでいた……つまり、どういうことだろうね？」

それは教師が生徒に質問を投げかけるような口調だった。挑発的な表情が、「まだ気付かないのか？」と問いかけている。

考えれば、答えはすぐ見つかった。

そういえば彼女はさっきから、ずっと『ペルソナクライズ』を略称で呼んでいる。まるでそのほうが言い慣れているかのよう。

ようやく気付いた。生徒会長が何を言おうとしているのか。いや、何者であるのかを。そして、陸朗自身に向けられた視線の意味を。

「俺と同じ時間に、誰かがこの部屋から『ペルクラ』をプレイしていた……いや、俺と対戦していた！ だったら、それって!?!」  
「そう。キミが昨日戦っていた相手は……この僕さ」

にいつと、生徒会長の口元が魔女のように吊り上がる。

その瞬間、真下に向かって自分の中にある『なにか』 魂とか、そういう不定形のものが引きずり出されるような、大きな力を感じた。

陸朗はこの感覚をよく知っている。スフィアへ『知覚変換』するときに感じる『引力』だ。それはつまり、生徒会長による外部アクセスによって、自分の『掌装着型端末』が完全にその支配下に置かれたということだった。

同時にホロ・モニタ内で勝手にプログラム・ランチャーが起動し、システムが『ペルソナクライン』を起動させていた。もはや止めようはない。

視界はすでに現実から『思考空間』の映像へ変換され、世界は仮想現実へと切り替わっていた。ほどなくペルソナアバターが展開され、スフィアへと突入することになる。

見れば、目の前にいる生徒会長も自分と同じようにスフィアへと引き込まれつつあった。いや、違う。彼女に同調する形で、陸朗こそが引きずられているのだ。

「な、なんで『バディ・リアクト同調変換』をつ!?!」

「ちょっと付き合ってもらつよ、ジェット・バレル。まだ、確かめたいことがあるからね」

1 - 4 秋月雪乃（後書き）

ヒロイン登場。

やっと登場人物二人目。

リアクトにかかった時間は、ほんの一瞬だった。

深海の底を抜けるように、ある一点で引力から解放される。『知覚変換』によってアクセスするデータの海の最深層　情報圧縮による超高速処理空間である『スフィア』へと到達したのだ。

そこは世界を裏返したような空間だった。球状の情報境界面の内側に、ヴァーチャル・リアリティで再現された『世界』が張り付いている。上を見上げれば、青い空の代わりに反対側の大地が見えた。スフィアは『思考空間』内にいくつも存在するが、現実におけるメガシティ単位でそれぞれが個々の球状世界として独立している。学校からアクセスできるのは、東京二十三区をモデルにした『トーキョー・スフィア』だ。

陸朗たちが今いるのは、そのうちのイケブクロ・エリアと呼ばれる区画だった。

彼にしてみれば、慣れ親しんだ場所。ホームグラウンドそして世界の文字通り裏側にある『もう一つの現実』だ。

「くっ……！？」

その『現実』に気づいたときには、もう自分も生徒会長も、ペルソナバターをその身にまとっていた。思考内デスクトップには、周囲にペルソナクラインのバトルフィールドが展開されたことを示すシグナルが表示されている。

昨日、自分を一蹴したあのペルソナバター、ゴウト・ホーン。彼女が、自分のすぐ近くにいる。

当たり前だ。掌を重ねて行くバディ・リアクトで、彼女によってスフィアへと半強制的に連れてこられたのだから。

半ば混乱したまま繋がれていた手を振り払い、彼女から距離を取

った。

「……つれないなあ。女の子に、この仕打ちはないんじゃない？」  
「あんたが……ゴウト・ホーンだったのか」

おどけたようなその言葉に、敗戦の記憶が甦る。

一本角のペルソナアバターを睨みつけると、彼女は困ったように肩をすくめた。

「なんでこんなことを？ 制裁でも加えようっていうんですか、昨日みたく？」

「うーん、ずいぶんくだらない質問をするね」

その言葉には、どこか揶揄するかのような響きがある。

「くだらない？」

「だってそうじゃないかな？ キミが僕に聞きたいのは、そんなどうでもいいようなことじゃないはずだ。違うかい？」

お前の考えなど、なにもかもわかっているぞ。そう言わんばかりの口ぶりに反感を覚える。

しかし、事実生徒会長の言う通りだった。彼女の目的など、知ったところでどうにもならない。なるようにしかならないだろう。むしろ今気になっているのは、彼女がゴウト・ホーンであったことと、その『正体』のほうなのだから。

だが陸朗には ジェット・バレルにはわかっている。彼の疑問に、ゴウト・ホーンが素直に答えることなどないことを。

「俺の質問になんか、答える気はないでしょう」

「まあね。けど、それもキミ次第だ。僕に言うこと、きかせてみな



よ。力尽くでもかまわない、できるものならね」

そう言って、含み笑いを漏らすゴウト・ホーンこと生徒会長。傲慢極まりない台詞だが、それを裏付けるだけの力を、彼女はたしかに持っていた。

「力尽く……ですか」

「そうさ。考えてもみなよ。ここは『ペルソナクライン』……そのバトルフィールドだろ？」

彼女の言うとおり、すでに『ペルソナクライン』が起動しているため、周囲は現実。生徒会室を再現した通常空間ではなく、元の空間データをベースとした専用のバトルフィールドへと切り替わっている。

状態は昨日と同じ廃墟。おそらくここへ引き込んだとき、生徒会長がわざとそう設定したのだろう。

「バトルフィールドに、ペルソナアバターが二人。とすれば、やることなんてひとつしかないじゃない」

「……昨日の続きをしようとも？」

「はっはっは。あれは僕の勝ちだよ、疑いようもなくね。こっこの傷は、この角だけだもん」

彼女　ゴウト・ホーンはそう言って、片方折れたままの角を指差した。

「もっともダミー・アバターとはいえ、僕にまともな攻撃を当てた奴は久しぶりだ。正直言って、ずいぶん驚いた」

「大した自信ですね、会長」

「会長はやめてほしいなあ。今の僕はゴウト・ホーンだよ、ジエツ

ト・バレル君」

上から目線が素なのか、挑発なのか判断がつかない。

昨日と違い、ボイスチェンジャーを通さない彼女本来の涼やかな声から、その内心を推し量ることは難しかった。

「結局、何をしようってんですか、あんたは？」

苛立ちがつのれば、いつまでも従順な『下級生』を取り繕っても  
いられない。自然と言葉が荒くなった。

「続きじゃなくて、仕切り直しだね。負けを取り返したくないかい、  
リベンジ・マッチさ、ジエット・バレル。全力を出してみなよ。キ  
ミの力は昨日みたいに、角一本分で終わりじゃないはずだ」

「……あれでも、精一杯やったつもりなんだけどな」

「精一杯……うん、精一杯か。たしかにそうかもしれない。けどね、  
だけどね……『その先』って、あるものだよ？ キミはそこまで使  
っちゃいない」

「そんなの、あんたにわかるはずが……」

「わかるさ。なにせ僕はキミより強いからね。『その先』だって知  
っている」

「……ッ……」

事実を事実であると突き付けられることは、ときに大きくプライ  
ドを傷つけることがある。その事実を受け入れていたとしても、な  
お。

「キミが望むなら、それを教えてあげることやぶさかじゃないけ  
ど、どどどどする？」

そのまま聞き流すには過ぎた言葉だった。彼女が　ゴウト・ホーンが強いことは認めている。だがことさらそれを鼻にかけ、その上「哀れなお前に恵んでやる」と言わんばかりの物言いには、さすがに我慢ならなかった。

「馬鹿に……してるのか？」

「怒ったかい？　僕の言葉に腹を立てたのかい？　じゃあ、やってみなよ。僕を地べたに叩き付けて、ひいひい言わせながらごめんなさいって謝らせてみたまえ。もちろんキミの持ちうるもの、すべてを使ってね。チートしたつてかまわないよ、ん？」

試すような口振りだった。だが、こうやってけん制してチートを封じようというつもりはないのだろう。いや、間違いなく彼女は心底「チートをして構わない」と思っている。

ジェット・バレルごとき、どうにでもできるという絶大なる自信おそらくそれは事実で、真実だ。しかしそこまで言うかと、そこまですの矜持に傷をつけるかと、怒りのボルテージがさらに加速する。

「……俺、あんたのこと嫌いになりそうだ。いや、嫌いだ、間違いなく！」

「それは困るな。僕はキミのことが好きになりそうなのに」「そついう台詞が……いちばんむかつくんだ！」

もはや敵意を隠すことはやめた。

吐き捨てるように言って、アイテムインベントリを開き、武器のデータをロードする。装備したのは、愛用のロング・ライフルだ。

勝てるかどうかなんて関係ない。とにかくこの腹が立つ女に一発ぶちこんでやらなければ、気がすまなかった。

「いいぜ、やってやるよ。リベンジ・マッチだ。昨日の借りを返し

「やる！」

「くっくっく。そうこなくっちゃ」

銃口を突き付けられても、ゴウト・ホーンの態度はまったく変わらない。余裕たっぷりひとしきり嘲笑すると、彼女はぱちりと指を弾いた。

虚空の一点で情報粒子が密度を増し、『シヤッ審判装置』が実体化する。

「時間は無制限、勝敗はダブルノックアウトによるドローなしのサドンデス。白黒はつきりつけるといふことでいいかな？」

「望むところだ」

「即答か。さすがに男の子だね、カッコいいじゃない。そこまで腹を決めてるんなら、ただの勝負じゃつまらないな……」

さつき初めて出会ったときに似た、悪戯っぽい口振りだった。仮面の奥では、さぞや悪辣な笑みでも浮かべているに違いない。

「つまらない？」

「つまらないさ。せつかく現実リアルの知り合い同士デュエルの対戦なんだ、勝ち星のやりとりだけじゃもつたいない。だから……ここはひとつ『賭け』でもしようじゃないか、ジェット・バレル」

「賭け……だと？」

また妙なことを言い出した。

ゴウト・ホーン いや、彼女が『秋月雪乃』であるときから、その言動はどこか突拍子がない。陸朗にとっては予想外のことばかりをやってくる。

手玉にとられているようで、面白くない。むしろはらわたが煮えくりかえっている。

だが、そうやって陸朗が腹を立てることさえ、彼女は計算尽くな

のだろう。重ね重ねの挑発は明らかにわざとだ。退けないところまで陸朗を追い込むことこそが、彼女の目的。

しかしそれに気付いたところで、今さら振り上げた拳を納めるつもりなどない。この高慢な女の鼻を明かしてやる。それだけを今、考えていた。

「……賭けるものは？」

「キミの身柄と、僕の身柄。勝った方は負けた方の言うことをひとつだけ、なんでも聞かなきゃいけない……なんてのはどうだい？」

「ずいぶん、ありがちな。個性派気取りのあんたらしくない条件だが」

「なーに、わかりやすい言葉にして、言質を取るだけだよ。結局はさっき言ったとおりさ。腕尽くで僕を屈服させてみな、ジェット・バレル」

「ああなるほど、それはわかりやすい！」

「その言葉、同意と見なしていいようだね。じゃあ……始めようか」

すつとゴウト・ホーンが腕を一振りすると、手の中にグレイヴが現れる。

『審判装置』が開始のシグナルを二人のホ口・モニタに送ったのは、それとまったく同時のことだった。

1 - 5 再戦（後書き）

学生の頃、学校の視聴覚室にサターン持ち込んで、バーチャファイターやってたことを思い出します。

## 1 - 6 奇襲

奇襲。

リベンジ・マッチの立ち上がりは、その二文字から始まった。

「おおおっ!!」

咆哮しながら大地を蹴りつけ、低い姿勢でゴウト・ホーンへと突進するジェット・バレル。

陸朗のペルソナアバター『ジェット・バレル黒い銃身』はその名の通り、射撃戦を主体としたチューニングをされている。インファイト接近戦もこなせないことはないが、わざわざ不向きな距離を維持する必要はない。開幕と同時にけん制しながらバツクダッシュで距離を取るのが、通常の戦闘セオリーだ。

しかし彼は今、そのセオリーを破った。ロング・ライフルを槍のごとく構えての突撃。むろん、やぶれかぶれの単なるセオリー無視ではない。狙いは間合いを詰めての射撃だ。

ゴウト・ホーンに残る傷 アバターの象徴とも言えるその角を折ったのは、ごく至近距離からの一撃だった。無論本来は仮面破壊を狙っていたもの。ゴウト・ホーンがかわしたのは、さすがというほかない。

だがしかし、彼女をしてなお超至近距離では直撃を避けるので精一杯だったのだ。だからこそ角は折れた。突破口はそこにある。

避けきれないタイミングでの至近射撃 直撃を狙える可能性は、それ以外思いつかなかった。いや、これしかない。

開幕と同時の奇襲。この先彼女と何分戦うか、戦えるのかわからないが、間違いなくもっとも命中率が高いのは、今この瞬間になるはずだ。

状況、間合い、距離、そのすべてを揃えるチャンスは、そうめつたにあるものではないのだから。

開幕がミドルレンジで始まったのも幸運だった。懐に飛び込むまでにかかる時間はほんのわずか。ジェット・バレルが軽量高機動型のチューニングであることが、ここでプラスに働いた。

「詰めてくる！？ けどっ！」

「動き出す前に、撃ち抜くっ！」

昨日の戦いで、陸朗は学んだことがあった。

ゴウト・ホーンの機動力を支える特殊装備グライド・スピナーには、いくつか弱点がある。そのうちのひとつが上下方向に機動力を発揮できないということであり、そしてもうひとつが 車輪であるがゆえに、始動にわずかなラグがあるということだった。

『ペルソナクライン』というアプリケーションは、『知覚変換』<sup>リアル</sup>技術を最大限に活用し、現実とほとんど区別がつかないほどの体験をプレイヤーに与える。だがそれゆえに、いくらでも現実から解き放たれる余地がありながら、あえて現実の物理法則による支配を許している面が存在するのだ。

甲高く耳に響くスキル音もそのひとつ。車輪であるグライド・スピナーは、急発進・急加速といった行動にグリップ力が追いつかず、空転させてしまうことがある。

前回の対戦で彼女が小刻みに動き続けていたのは、グライド・スピナーを静止させることを嫌ったに違いなかった。

グライド・スピナーは静止状態からでは始動がワントンポ遅れる。ほんのわずかな時間ではあるが、陸朗にとってはそれこそが数少ない勝機。だからこそ開幕からの奇襲だった。開幕時は静止状態

『ペルソナクライン』の対戦モードにおける不文律だ。そこそそを狙った。



「もらったあつ！」

走り込んだ姿勢のままライフルを構え、トリガーを引き絞る。狙いは一点、あの山羊の首を獲るのみだ。

ジェット・バレルのライフルには三点バースト　トリガーを一度引くと三連射される機能　はついていない。モードはフルオート連射のみとなる。しかし幾度も使い込んで慣れ親しんだこの銃ならば、指先の感覚だけで正確に望んだだけの弾数を撃ち込めるまでに習熟していた。

グリップに伝わる震動と共に、タタタツと短く発射音が鳴った。空を裂く三発の高速徹甲弾が、ゴウト・ホーンの首を撃ち貫かんと襲いかかる。

どれだけゴウト・ホーンが、その正体が達人であろうとも、無を有にすることは叶わない。ほんのわずかなタイミングの遅れは取り返しのつかない危機として、今まさに牙を剥こうとしている。

だがしかし、そこをこらえてこそその一流。ゼロを一にできないのならば、一以外の答えを探し、見つけた。それができるから一流なのだ。

「せい……やつ！」

グライド・スピナーは頼れない。ならばと彼女が選んだのは縦の動き。しかし、ただの跳躍では銃弾を避けきれはらずはなく　グレイヴを使い棒高跳びポールポルトの要領で、彼女はその身を宙へと躍らせる。

「そう避けるか、避けやがったか！」

「……っ!？」

「逃げるのならば、上しかないよな！」

しめた、まんまと、予想通りに、ゴウト・ホーンが動いてくれた。

陸朗が仮面の下で笑みを浮かべる。避けられたら玉砕する気で突っ込んだつもりはない。こうなる可能性は、二手三手の先のこと、当然のように読んでいた。

ジェット・バレルの装甲が展開し、無数のマイクロミサイルが空に向かってバラ撒かれる。昨日の反省をふまえた多弾頭ミサイルが彼の頭上で炸裂し、あたかも花火のように空を飾った。

初撃の奇襲が当たれば良し、避けられるのもまた織り込み済み。そして『点』で避けられるなら、『面』で攻める。それが陸朗の出した結論だった。

そして爆煙に包まれるゴウト・ホーン。だが減ったライフ・ポイントのはんのわずかだ。あの板バネのような装甲パーツは、想定以上に防御力が高いらしい。

「堅牢だな、ちくしょう！」

拡散弾頭ミサイル程度ではこの程度か　すぐさま頭を切り換えて、打つべき次の手を探す。ホロ・モニタ内でアイテムインベントリを展開すると、新しい武器のデータをロードした。

それはレンガを二つ重ねたほどの大きさをした、金属製の武骨な箱だ。同じ形のものがいくつもジェット・バレルの前方に実体化し、ゴトゴトと音を立てながら、扇形の壁のように積み上がっていく。ちょうど、ゴウト・ホーンの子着想地点を取り囲むような格好になる。

「やるね、奇襲そのものさえ陽動に使うとは！」

「まだ終わってないぞ、ゴウト・ホーン！」

「へっ!?　なっ、これは……クヴァートライト・ミネ指向性散弾地雷ッ!？」

「正解ッ！」

ゴウト・ホーンが着地した瞬間を狙い澄まし、無線で指向性散弾

地雷を起爆する。地雷の信管が一斉に点火され、金属製の箱に収められた内包物　ひとつあたり七百個にも及ぶ、直径一・二ミリの超合金ベアリング弾が炸裂する。

着地したゴウト・ホーンに全弾が集中するよう、適切に配置された地雷の数は四十個にも及ぶ。単純計算で三万発近いベアリング弾が、横殴りの豪雨のように獲物へと襲いかかった。

硬い板バネ装甲を撃ち抜く耳障りな金属音が、悲鳴のようにバートルフィールドに響く。断続的に黄色い輝きがきらめくのは、金属が削り取られたときに飛んだ火花か。

文字通り雨霰と降り注ぐ無数の超合金弾の猛威に曝されては、さすがのゴウト・ホーンも堪え忍ぶほかはない。完全に足が止まっていた。

「……もう一撃いつ！」

散弾であるがゆえに威力はそこまで高くないが、いかんせん数が数だ。弾雨を浴びて確実に減っていく、ゴウト・ホーンのライフ・ポイント。だがここで攻手を緩めるほど、陸朗は思い上がってはいない。

ロング・ライフルを手放すと、新しい武器を両手に呼び出す。

それはグリップとサイト、肩当てのついた、金属製の円筒だった。だいたいジェット・バレルの身長と比べると、半分強の長さがある。分類上、『無反動砲』と呼ばれる武器だ。それを両手に一本ずつ構えるジェット・バレル。

「いつけえっ！！」

グリップをしっかりと握り込みトリガーを引いた瞬間、強烈な爆風を金属筒の後方より噴出しながら、砲弾が発射される。

弾種は成型炸薬弾。爆轟波によって発生する液化化金属の超高速<sup>メタルジ</sup>

噴流によって、重装甲さえも侵徹することが可能な弾頭だ。

ジェット・バレルが発射したものは多目的榴弾と呼ばれ、ベアリングやワイヤーを内蔵することで加害範囲を広げた、『面』と『点』の攻撃を併せ持つもの。誘導性能はまったくなく、完全に相手の動きを止めたときに備えて陸朗が用意した、切り札とも言える武器だった。

飛翔する弾頭が着弾する。その瞬間、彼女の身体がぐらりと傾いたように見えた。しかしそれを確かめる暇もなく、土ごと標的を吹き飛ばして盛大な爆風が巻き起こり、ゴウト・ホーンの姿を完全に覆い隠してしまう。

「当たった！ いや、でも、これは……！」

爆風の向こうを睨みつけながら、肩にずしりとのしかかっていた無反動砲を、苛立たしげに投げ捨てる。

コンソールに表示されているゴウト・ホーンの残りライフ・ポイントが五割弱。これだけの好機に、あれだけの攻撃を叩き込んで半分までしか追い込めなかった。

仮面の下で唇を噛む。悔しさは隠せない。

「嘘だろ……こんなに撃ち込んで倒せないとか、なんなんだよ……！」

アバターの本質的なポテンシャルが違いすぎるのだ。それが大きなダメージ補正となって現れている。

アバターランクの差は、『ペルソナクライン』のあらゆる『原則』に補正をかける。本来これだけの連続攻撃は、ジェット・バレルがこれまで戦ってきたような同ランクの相手どころか、相当に格上の相手でもオーバークイルになるダメージだ。

しかし真の強者　さらなる上位ランカーとのまともな対戦経験

に乏しい陸朗は、ランク差によるダメージ補正がどれほどのものかというのを、実感として持っていない。それゆえゴウト・ホーンを見誤り、倒しきれなかったのだ。

やがて爆風が晴れる。ゆらりと幽鬼のように、ゴウト・ホーンが身を起こした。

強靱だった板バネ装甲も、拡散弾頭ミサイルと指向性散弾地雷、そして無反動砲による攻撃を立て続けに受けて細かくヒビが入り、見る影もなくボロボロになっている。見た目からしてダメージがなかったわけではないのだろうが、陸朗は倒すつもりでやったのだ。それなのにフィールドに立っているその姿からは、格の差というものを思い知らされている気がした。

「くそ！」

「そこまで悔しがることはないよ。最後の榴弾なんて、ホントにヤバかった。なんとか体をかわしたけど、直撃をもらったらさすがに危なかったよ」

「ちょ、直撃しなかったのか……！」

無数の散弾地雷の猛威にさらされた直後でなお、とっさの回避行動に移れる冷静な判断力と果敢な行動力。それこそが彼女の経験のたまものであり、強さだ。陸朗には、ジェット・バレルにはないものだ。

「しかし驚いたよ。やれば出来る子だとは思ってたが、まさか一気呵成にここまで追い込まれるとはね。油断したとか、甘く見たとかは言い訳だし、失礼になるか……」

ゴウト・ホーンの肩が震えている。怒りではない。彼女は笑っていた。

「ふふふ……たった一日でこれか、一度戦っただけでここまで対応するか、この僕に。すごいよ陸朗君、キミは僕の想像以上だ。本当にすごい……」

陸朗を讃える彼女の言葉に、嫌味のようなマイナスの感情は一切感じられない。彼女は心の底から感激し、賞賛していた。

身体を震わせるたびに、ダミー・アバターの装甲にヒビが広がっていく。ヒビのあいだから漏れ出るのは、炎のようなオーラだ。

「ほら、見てくれよ陸朗君。ダミー・アバターはもう限界だ。キミがやったんだぞ？ キミは今の連続攻撃で、このゴウト・ホーンをこうまで追い込んだ。ボロボロだよ、ゴウト・ホーンはもう戦えない。情報構造が戦闘機動に耐えられないんだ、自壊してしまうだろう……」

聞きよつたようでは、敗北宣言にもとれる。

だが違う、喜色の混じる彼女の声には、まだ確固たる自信が満ちている。敗北など、欠片たりと認めていない響きがある。

「こういう形でお披露目ストリップするとは、思っていなかったけど……『こほつび』だ、ジェット・バレル。キミが一番知りたかったであろうことを、教えてあげよう」

「じ、こほつび？」

「重くてのろいダミー・アバターはもうやめつてごとき。ここから先は……全力全開だッ!!」

バキンと大きな音を立てて、ダミー・アバターが崩れ落ちる。ただの情報デブリと化した板バネ装甲が風に溶け、内部に隠されていた『正体』をさらけ出した。

それはゴウト・ホーンよりも一回りほど小さい、女性型のペルソ

ナアバターだった。鮮烈なまでのオペラピンクにきらめく、ドレスの優美さと剣の鋭利さをあわせ持つ刃状装甲。まるで『秋月雪乃』の髪そのものであるかのような、風にたなびく黄金の放熱索。顔に装着している、切れ長のアイ・カメラを持つ装甲と同色の仮面。

そんな優美で伶俐な本体とは不釣り合いなほど武骨な大剣を携えて立つ、威風堂々たるその姿は、見る者すべてを圧倒するほどの存在がある。

このアバターが何者であるかなど、いちいち考える必要もなかった。彼女は、間違いなく、

「キミの直感<sup>ストレージ</sup>は間違っちゃいなかったよ、ジェット・バレル。僕が……『剣の魔女』だ」

1 - 6 奇襲（後書き）

ここまで来るのに結構かかりました。



## 1 - 7 剣の魔女

予想はしていた。予感があった。

けれども……実物を前にしてなお、『剣の魔女』という伝説のアーバターがそこにいることを信じられなかった。

なんだこれは。こいつは、なんだ？ 本当に実在しているのか？ 自分はなにを見ているんだ？ 『知覚変換』の誤動作すら疑った。しかしどこにも異常はなく 魔女は確かにそこにいた。

『ペルソナクライン』のコンソールにアクセスして、対戦相手のデータ呼び出す。ネーム・エントリー部分には、はっきりと『剣の魔女』というアバターネームが書かれていた、本人に間違いはない。だがそれ以上に陸朗の目を惹いたのは、彼女の対戦成績の欄だった。

五桁もある対戦数と勝利数はカウンターストップ つまりすべてが『9』で埋まっていて、逆に敗北数はゼロ。シングルマッチにおける敗戦が、ただの一度もないということだ。噂通りの……いや、噂以上の強さ。もはやひたすらに感嘆するほかはない。

「どっちもカンスト以上の数値ではあるんだけど、勝利数のほうが実際にはちょっとだけ少ないよ。タイムアップでドローに持ち込まれたことは、それなりにあるからね」

ジェット・バレルの様子から、なにを調べているのかを察したストレーガが、そう補足する。

しかし引き分けの数が、彼女の不完全さを意味するとは思えない。むしろ時間切れに持ち込んだ相手を褒めるべきだろう。

「さて、そろそろいいかな？」

「え？」

陸朗の間の抜けた返事を聞かされると、ストレーガは困ったように小首を傾げた。

「え、じゃないよ。装甲拘束具を破棄しただけで、僕のライフ・ポイントはまだ半分残ってる。勝負はついちやいないんだ。最初に決めただろ、この対戦はタイムアップもドローもないサドンデス。キミが負けるか、僕が勝つまで終わることはない」

「それを言うなら……あんたが負けるか、だろっ」

「はっはっは、僕が負けるわけじゃないか」

「……その高慢な台詞に、ひとつことも言い返せないのがむかつくな」

「言い返されないだけの努力はしたからね。そうやってがむしゃらに上へ上と登り続けて……気付いたら、周りには誰もいなかった。敵も、味方も」

いつも凜然とした彼女らしくない、寂しそうな声色が、その言葉には混じっていた。

陸朗とて木石ではない。強いこと、それ自体が彼女にとってひとつの心の傷になっているのだと察した。

「だから名を変え、姿を変えて？」

「いや、そっちは無関係。また別件だよ。なに、僕にも色々事情があるってことさ。いい女には秘密が多いってね」

「峰不二子みたいなことを」

「尊敬してる」

ふざけた答え、だがたしかに似合う。彼女がもう少し成長すれば、きつとあんなふう<sup>タミー・アバター</sup>に男を手玉に取る美女になるに違いない。

いや、むしろもう手玉に取っているかもしれない。たとえば

陸朗とか。

「……言っておくけど、対戦でキミをからかっているつもりはないよ。油断こそしたが、手抜きはしていない。ゴウト・ホーンを破棄する羽目になったのも、単にキミの戦力を過小評価した僕のあやまちだ」

じろり、と金色に輝くアイ・カメラが動いた。どこかその目付きが険しくなったように思えるのは、彼女の仮面がソリッドな形状をしているからだけではないだろう。

「正直言って、キミをゴウト・ホーンのまままで倒しきるつもりだった。そこからじっくり話を始めようと思ったんだ。しかしキミはキミ自身の力で、僕の正体を暴いてしまった。それほど力を持つペルソナアバターだったとは、少し僕の予想を超えていた……これならば、と思ったね」

「……？」

「気にしなくていいよ。言ったる、僕には僕の事情がある。だからキミが今、理解しなきゃいけないことはただひとつ。僕からは逃げられないってことだけだ」

「本当に……大した自信だな」

かがみ込んで、無反動砲を撃つとき投げ捨てたライフルを拾い上げ、構える。

彼女は逃がさないと叫びたが、今さら逃げる気もない。怖じ気づくような段階はとっくに過ぎたのだ。

「……またそのライフルか。お気に入りなのかい」

「気に入ってはいるけど、武器に大してこだわりなんてない。今必要だから使っただけだ、あんたを仕留めるためにな」

「仕留める、ときたか。大きく出たねえ。けど、できるかな？　まだ、ライフ・ポイントはたった半分減っただけだよ？」  
「もう半分、減らせばいいだけだ」

数字の上ではそうだが、それがいかに困難なことであるか。もちろん陸朗にもよくわかってている。減らず口を叩いたのは、彼女から受けるプレッシャーに押し潰されないようにするためだ。

さっきゴウト・ホーンを追い込めたのは、奇襲から連続攻撃が奇跡的に上手く機能したからに過ぎない。同じことをやっても、奇跡は二回も起こらないだろう。

さいわいにして用意していた策はあれだけではないが、それが通じるかどうかというのは良くて五分五分だろうと陸朗はみていた。

「平面移動に特化していたゴウト・ホーンの弱点を突く作戦は見事だった。しかし優秀なキミのことだ。ゴウト・ホーンのみを想定した装備と作戦では、今の僕に通じないことには気付いてるだろう？」

頷くほかはない。

「あっさりと認めるね。理解しているのならば、それ以外の策も用意してあるということか。なら、遠慮はいらないかな」

ストレーガの声色が変わった。杖代わりに地面に突き立てていた大剣を引き抜くと、左手にそれをだらりとぶら下げないように構える。

「では続きを始めようか、陸朗君……いや、ジェット・バレル。どこからでもかかってきなよ、僕は逃げも隠れもしない」

その言葉に、なにひとつ嘘も偽りもなかった。

ストレーガは一步も動かない。ただ自然体でそこに立っているだ

けだ。

しかし、

「……ッ！」

ジェット・バレルは動けなかった。

計算も、作戦もすべて吹き飛んだ。

魔女の前に立つただけで感じる、凄まじい威圧感。一步でも動けばどこにいようと斬られる、そんなふうにはさえ思えた。

剣という武器を用いる以上、射程距離は短いはずだ。グライド・スピナーを持つゴウト・ホーン以上であろうスピードも予想はつく。それでも相手の間合いがどこまで広いのか、見切ることができない。

「く、くそっ……！」

「ふふっ、どうしたのかな？ そんなところにいたら、斬ってくださいと言わんばかりだよ？」

魔女があざ笑うように、小さく肩を揺らした。しかし、それに激昂することさえ、今の状況は許されないのだ。

わかってしまった。わずかでも動いた瞬間、自分はその大剣の鋒になると。どんな抵抗、どんな計略、どんな覚悟があろうとも、その一切合切を叩き斬り、粉碎する。あれはそういう存在なのだ、それほどまでに実力差があるのだと、本能的に理解していた。

シングルマッチにおける敗戦はただのひとつもなし。さっき記録を見たときには信じられなかったが、今こそ実感した。こんな相手に勝てる者が、『ペルソナクライズ』にいるなんて想像すらできない。

甘く見ているつもりなど微塵もない。だがそれでもなお、見誤っていたのだろう。

さっきまでの戦いは、あんなものは、彼女にすればまるで本気

ではなかったのだ。機動力で相手をかき回すことなど、彼女にすれば持てる力のほんの一部でしかない。動かなくても相手を制し、斬ることができるのだから。

真の強者は動じない。それは些事に心を動かされないというだけではない。強者は状況を支配し、弱者の動きを自在に操る。

(……………ここまで差があるのかよ！)

ライフルを持つ指先が震えた。恐怖というよりも、悔しさで。

ああ、やっぱり天辺はこんなにも遠かったのかと　そんなことを今、考えていた。

「そりゃあ遠いよ。キミと僕とじゃ努力の純度が違うもの」

「心を読んだみたいなたいな台詞を……………！」

「一流はね、相手の心だつて読めるのさ」

「あんたが言うのと途端に胡散臭いな」

「ははっ、ひどいなあ」

台詞は軽いが、彼女のまとう剣呑な気配が濃さを増していく。

「ふうむ、どうやら動きづらいと見えるね。うかつに動いたらカウンターで終わる、と気付く時点で大したものだが……………このままじゃ僕が面白くない。ちょっと遊びに付き合ってもらおうか？」

「えっ……………!？」

ぶわっと、大きく風が巻いた。ほんのわずかに目を閉じていたあいだに、魔女の姿はかき消えていた。

「こつちだよ、ジェット・バレル。しっかりしたまえ」

「……………ッ!?!」

背後に悪寒。切っ先から感じる殺意にも似たエネルギーが、背中全体を撫でるように冒しているのを感じた。

圧倒的不利な状況で、圧倒的強者から送られる殺気。それがこれほど恐ろしいものであるのかと、初めて理解した。

「きつ、斬りたきゃ斬れよッ！俺に勝って、それこそ通報でもなんでも、すりゃあいいだろッ!？」

「……何でそんな話に？　っていうか、ヤケになるのはよくないよ?」

「この状況でどうしろって言うんだよ……!」

詰んでいる。そう判断するのも無理はなかった。ここからのような行動を取っても、ほんのわずかな踏み込みで、ストレージはたやすくジェット・バレルを串刺しにできるのだから。

しかし当の『魔女』自身は、そんな陸朗の言葉を聞くと意外そうに首を傾げた。

「そうかい？　いやあ、まだまだ僕にはスキがあると思うけどね。

別に君をナメているわけじゃないが、こうやってわざわざ話をするあたりにさ」

「……ッ!」

確かにこんな会話はスキ以外の何ものでもない。だが、スキが“できた”ではない。スキを作り、これ見よがしに見せているのだ。

悪辣とさえ言えるやり口だった。これが『魔女』の名の由来かと思っほどい。

「まあ、ここで諦めるのもまた良し。僕の見込み違いだったと、反省することでしょう。だが……まさかジェット・バレルともあろう

者が、この程度の苦況ピンチで諦めてしまつとは言つまいね?」

仕掛けてこい。

要するに、彼女はそう言っているのだ。

この状態で、この後ろを取られた敗北必至の状態で、自分に抗つてみせろと言いつつ放つた。

本来なら後ろを取つた瞬間に剣を突き刺し、ゲームオーバーだつたのだらう。だが何の気まぐれか、彼女は自分にチャンスを与えたのだ。

(……口でなんと言おうとも、これはバカにされてるよな……っ！)

『魔女』の誘いに乗るのも悔しいが、この最後のチャンスを投げたしてしまうのはもつとバカだ。相手がわざわざ機会をくれたというのなら、それを利用して吠え面をかかせてやればいい。

今の陸朗でも、そのくらいのポジティブ思考はできるのだ。いや、そうとでも考えなければ、あまりにも自分がみじめだった。

だがどうする。最初の一手をしくじれば、待っているのは無様な敗北だ。彼女が与えた慈悲はこの思考時間のみ。ジェット・バレルが動きを見せた瞬間、『魔女』は手にした剣で彼を容赦なく突き刺すことだらう。

つまり要求されているのは 剣をかくぐり、相手の動きを止め、速やかに反撃に移行する そんな行動だ。しかし、それがやすやすとできるなら、そもそも彼女に背後など取られはしない。要するに、無理難題というわけだ。

(けど、やる。可能性は……これしかないッ!)

躊躇はしなかった。思考内デスクトップでそのコマンドを実行すると、ジェット・バレルの暗灰色の装甲に、光で彩られたヒビが走



る。

「アーマー・パージでッ!!」

「……ッッ!!」

昨日、ダミー・アバターだったとはいえ彼女に一矢報いたのはこれだ。そしてこの土壇場で彼が取り得る手段は、もはやこれしかなかった。

しかし、

「やはりそれか！ そう来たか！ そうだろう！ 今のキミには、それしかないッ!!」

この行動すら、ストレーガは読んでいた。『アーマー・パージ』による爆発と閃光の目眩まし。それを使うと彼女は読んでいた。

だからこそ視界を奪われたこの状態でも、いささかも動揺することなく前へと踏み込み、迷わず剣を突き出した。

ガキンッと金属音が響く。だが、そこにあつたのはジェット・バレルではない。身代わりのように地面に突き立てられた、彼のロング・ライフルだ。彼の姿はかき消えていた。

「<sup>デュイン</sup>囷ッ！ 武器を手放し、間合いを取ったか！ だが……!!」

「間合いなんか取っちゃいない。てめえから逃げられるなんて思っ  
てないッ!!」

「何ッ!？」

声は、頭上からした。

「上だと!? 距離を離さなかったのか!?」

アーマー・パージが生み出した、ほんのわずかなチャンス。その少ない時間でジェット・バレルが退避先として選んだのは、あろう

ことが敵であるストレーガの上空だった。それも彼女に手が届くほどの、低い空間だ。

やけになって飛んだわけではない。たとえストレーガの視界を奪おうとも、躊躇なく突き込んでくるのは彼にも分かっていた。だからこそ、だ。

普段の状態なら、ストレーガが自分の頭上にいる相手を迎撃するなどたやすいことだ。しかし剣を突くために踏み込み、前のめりになった姿勢では、上　それもやや後背寄りの空間は死角となる。

もちろん、ストレーガの戦闘速度をもつてすれば、生まれる隙などほんの一瞬。文字通りの瞬間の間でしかない。

賭けるにはあまりにも短い刹那の時。しかしジェット・バレルは、陸朗はその瞬間に賭けた。否、賭けるしかなかった。

ただ一つきりのチャンス。無駄にはできない。

「届けッ！」

「しまった、肩をッ!？」

落下を利用して、ストレーガの両肩を押さえ込む。これで剣を上　に振るうことはできない。関節の構造上の問題だ。そして取り回しの悪い大剣では、持ち替えてジェット・バレルを刺すことも難しい。

『魔女』に生まれた一瞬の隙が、ここで決定的な失策へと変わる。最後の一手　彼女の後背を突くべきは、捨ててしまったライフ　ルではない。そして頼れぬ己の徒手空拳でもない。

機体に仕込まれたマイクロミサイル。普段はけん制にしか使わな　いこの武器が、今は最後の武器となる。

「これでッ!」

前方宙返りしながらストレーガの背後に降りると、素早く組み付　いた。

細い見た目からは想像も出来ないほどのパワーを誇るストレーガを押さえ込むのは、上背で勝るとはいえ、華奢とさえ言える砲撃戦タイプのジェット・バレルには荷が勝ちすぎる。だがそれでも、必死に彼女にしがみつき、その動きを抑える。

「このままミサイルでッ!!」

「なっ……正気!?!」

「相打ち上等だ! 間合いを開けたらあんたは避けるだろッ!!」  
「くッ……!!」

確信があつた。わずかでも動く隙間があれば、この『剣の魔女』ストレーガは避ける。それだけの技量の持ち主であると、この一瞬の交錯で理解できた。

常識ではあり得ないことを為す『超人』。最高位ランカーとは、『ザ・オーバーロード』の一角とは、そういうものだと思身に染みて分かつた。ならば非力非才な自分を取り得る手など、選べるほどに多くない。自爆覚悟 いや、組み付いたままミサイルを爆発させるなど、これは自爆そのものだ。

「これならあんたでも、逃げられないはずだッ!」

「くく……はははっ、さすがは僕が見込んだ男の子! やってくれる! けどそんな覚悟じゃあ……まだまだ僕には届かないな!!」  
「なら試してやるッ! 吹っ飛べよ、『剣の魔女』ッ!!」

火器管制プログラムから、ミサイルを選択。プログラムを起動すれば、発射されるはずだった。

「組み付くという発想は良かったが……どうせなら、肩を押さえた時にそのまま上半身を抱え込むべきだった!」

「え?」

ぞくりと背中に冷たいものが走った。手を離せと、恐怖が命じる。だが男の意地が、プライドが、その両腕を動かさなかった。その瞬間。

「腕が少しでも動くな、キミを弾き飛ばすなどわけはない。やはりキミには……地力が足りないのさッ!!」  
「があッ!?!」

アバターの腹に凄まじい衝撃が走り、身体がくの字に折れ曲がる。ハンマーで殴られたような いや、トラックがぶつかってきたような、理不尽で暴力的な衝撃が、ジェット・バレルの身体を後方へと吹き飛ばした。

柄頭だ。剣の柄頭を、ジェット・バレルの腹に彼女は叩きこんだのだ。常識外れのパワーとスピードによって。

見れば死ぬ気で組み付いたはずの腕が、彼女に絡み付いたままもぎ取られ、肘から先がなくなっている。ただの一撃で、彼女はジェット・バレルの 陸朗の、男の意地さえ断ち切っていた。

決定的な敗北。そうとしか言いようがない。ジェット・バレルは万有引力に導かれるまま地面へと落下すると、そのまま二、三度無様に地べたを転がった。

「う……ウソだろ……こんな、これほどまでにッ」  
「これが壁だよ、ジェット・バレル。絶体絶命を乗り越える者だけが、上の世界へいけるんだ」

剣をだらりとぶら下げたまま、ゆっくりとストレーガが近付いてくる。淡々としたその台詞は、勝ち誇るでもなく、哀れむでもなく。仮面の下にある表情を読ませない、静かで諭すような口調だった。

「僕の勝ちかな」

「ああ」

両腕を失った以上、勝ち目は完全になくなった。

事ここに至っては、悪態も悪あがきもしたくなかった。素直に勝者を賞賛し、自らの敗北を潔く受け入れることだけが、彼に残された最後の誇りだ。

「うーん、何かもう手はないのかな？ チートとかで」

「……ねえよ。あつても使わない」

「どうして？ 勝ちたくないのかい？ 悔しくないのかい？ 手段を選ばず勝ってきたのがキミだろう？」

「それは……」

勝ちたいに決まっている。悔しいに決まっている。だが彼はその言葉を飲み込んでしまった。

他の相手ならば、負けが込んだ時は卑劣なチートで叩きのめしてきた。それを当たり前のように受け入れていた。

だが彼女は違う。チートのような小細工を使ったところで、勝てる気などまるでしない。それどころか、今よりも手ひどい負け方をしそうだ。よしんば勝てたとしても、そんな勝利にどれほど意味があることか。

燦然と輝く勝利を積み重ねてきた存在がここにいる。あまりにも眩しいその存在の前には、『チートしてでも勝った方が強い』とうそぶくことすら虚しくなった。

だからこそ、彼は今、素直に敗北を受け入れたのだ。どれほど悔しくて、だ。

「何を考えているかはわかるよ。その悔しさは、忘れない方がいい」  
「……ふん。こんなの、たかがゲームだろ？」

「よく言つよ。隠せてないね、悔しさを。だけど悔しくて当たり前さ」

『剣の魔女』の声は、優しかった。ただひたすらに。おもわずハッと顔を上げた。

魔女のオペラ色の仮面の奥で、機械仕掛けの目がじっと彼女を見つめている。

吸い込まれるようだった。ジェット・バレルは、陸朗は、彼女から目を逸らすことができない。

そして彼女は、静かに言った。

「……あのね、陸朗君。負けたら悔しくて当たり前だよ。ここが仮想現実の世界だからとかって、関係ない。だって、僕らがやり取りしてるのはただのデジタルデータじゃなくて……僕らのプライドなんだから」

1 - 7 剣の魔女（後書き）

書きため分はこれで最後です。  
以降はのんびり更新します。

## 2 - 1 代価

それから何があったのか、どうやって家に帰ったのか、陸朗は覚えてはいなかった。

一度生徒会室に戻ったのは確かだから、そこで生徒会長と何かを話したような気もする。しかしどんな話をしたかなど、まったく完全に覚えていなかった。

夢を見ていたのではないか、という気がする。だが『ペルソナクライン』を簡易起動してみれば、そこには間違いなく対戦相手として『剣の魔女』の名があった。

(夢じゃあ、ない)

あの戦い　と呼べるか微妙なものだが　は、確かに現実だったのだろう。手も足も出なかった、あの動き、あの脅威。目を閉じればリプレイ動画よりも鮮烈に思い出すことができる。

しかし、良い経験をした　などと、達観できるほど陸朗は老成はしていない。あんな逆立ちしても勝てないような相手であっても、負ければ悔しい気持ちに先に立つ。

正直言って、気分が悪い。見下されたわけではないが、自分が敗者というみじめな立場であるのは変わらないのだ。

「だったら、忘れよう……ってわけにも、いかないんだよなあ」

勝てない相手のことなど、忘れてしまふに限る。頭ではそれを理解していたが、素直に領けない自分がいた。

彼女の言葉が引っかかっている。

「その悔しさを、忘れるな」



彼女は ストレーガはそう言った。  
だが忘れずに、どうしろというのか。

悔しさを糧にできるのは、選ばれた一部の人間だけだ。自分のような凡俗は、くすぶる想いを抱えて悶々としているしかない。

強くはなれないのだ。彼女 生徒会長、秋月雪乃のように。

「僕が、どうかしたのかい？」

「うおあっ!？」

気がつくと、目の前に美少女の顔があった。昨日見知った顔だ。

「せ、せえとかいちよお!？」

「んー、固いねえガチガチだねえ。肩書きじゃなくて、もっと気さくに呼んで欲しいな、僕は秋月雪乃だぜ? 覚えるのに難しい名前じゃないだろ?」

「いや、その」

すつつと耳元に口を寄せられて、そんな風に囁かれると、ドギマギしてしまう。

こういうシチュエーションは、孤独 そう、孤独な青春の時を過ごしている陸朗にとって、ついで経験したことのないもの。どう対応していいのか、どんな態度を取ればいいのか分からない。

助けを求めるように もっとも、助けてくれるような友人は陸朗にはいないのだが クラスメイトたちへと顔を向ける。

「う……」

自分に向けられている奇異の視線に、ようやく気がついた。奇異だけではない、嫉妬も混じっていた。刺すような視線だ。

当然だろう。陸朗だって、この金髪の少女が持つ声望については十分知っている。雲上人だと思っただけにたいくらはには。

そんな生徒会長が、冴えないただの下級生。それも、クラスの鼻つまみ者だ。と親しげに話している。クラスメートたちにとつて、これはもはや一つの事件だった。それも、極めて許し難い方向での。

クラスメートに距離を置かれるのは慣れているが、敵視されるのは困る。大いに困る。リアルでは、波風立てずに生きたい。嫉妬するのもしられるのも御免だ。

傍らの生徒会長を睨みつけるが、彼女はにやにやとした人の悪い笑みを浮かべて意に介さない。全てを分かかっていてやっているのだ、この女は。

「くっ……!!」

「あっ、陸朗君!？」

これ以上、教室にはいられない、いたくない。陸朗は早足で教室を飛び出した。

背後で教室の中がざわめくのが聞こえる。振り返る気はなかった。陰口ならいくら言われても平気だが、さすがに耳にするのは好ましくない。当たり前だ、好き好んで嫌味や悪口を聞きたい者など、どこにいるものか。

(それもこれも……)

あの、生徒会長のせいだ。

リアルでの生活に、土足で踏み込んでくるようなこの仕打ち。許し難いものがあった。

リアルでの。この学校における彼女は間違いなく権力者。気に入らないからといって、そういう『力』を嬉々として振るうタイプ

でないことは十分察するが、陸朗のような者からすれば、彼女が奔放に振る舞うだけで十分な脅威なのだ。

「待つてよ陸朗君。待てつてば」

いつの間にか、張本人が隣を歩いていった。けっこうな早足で歩いているはずだが、しつかりと男の早足についてきている。無言で足を速めても、まったく意味がない、健脚だった。こんなことまでスキがないのか、しれっとした顔で普通に歩いているように見えるのが、余計に腹立たしい。

ついてくるな、と大声でわめきたくなるのを堪えて、ひたすら廊下を歩く。

「おいおい、どこまで行くんだい？」

「どこだつていいでしょう」

「よくない、困るよ。僕は用事があつて、キミに会いに来たんだからさ。昼休みが終わっちゃうよ」

「用事？」

ほんの少しだけ、歩く速度を緩める。

考えてみれば当たり前だった。彼女は暇人ではない。むしろこの学校内では、もっとも忙しい部類に入る生徒だろう。適当な理由で、わざわざ下級生の教室に顔を出すような存在ではないのだ。

忙しい中時間を割いた。その事実気付くと、少しばかりバツが悪くなった。相手の都合ではある。だがそこまでするのならば、その理由くらいは確かめてもいいだろう。

陸朗は足を止めると、大きくため息をつきながら、聞いた。

「……なんの用なんですか？」

「うーん、ここではちよつとね」

そう言って、生徒会長は困ったように笑った。

昼休みの廊下だ、人通りが多い。

しかもさすがは知らぬ者のいない生徒会長、道行く生徒たちがひっきりなしに挨拶してくるため、まとまった話もできない。

「誰かに聞かせて楽しい話をする気もないしね。場所を変えようか？」

一緒に来い。

彼女は目だけでそう言うと、踵を返して歩き始めた。

食料を補給しようと促され、購買に寄った後、生徒会長に連れて来られたのは、やはりというか、予想通りというか、彼女の根城とも言うべき部屋だった。

生徒会室　まるで数十年前の少女小説から切り取ったかのような、アンティークなたたずまいを持つその部屋に入ると、二人は向かい合ってソファに腰を下ろした。

「やっぱりここですか」

「ここなら、邪魔は入らないからね」

「生徒会のほかの面子は？」

「来ないよ。あらかじめ言っておいたし」

つまり、最初から陸朗を生徒会室に連れ込む気だったということだ。

「もっとも、仕事以外でここには近づく気はないんじゃないかな」

「？」

まるで、自分が嫌われているような口振りだ。

誰からも一目置かれる、最強の生徒会長らしからぬ物言いに、陸朗は首を傾げる。

「別に嫌われてるわけじゃないよ。少なくとも僕はそう思ってる。ただね、僕は『みんなのアイドル』だからさ。どうしてもってところはある、キヨリの」

それ以上、彼女は言葉を重ねようとはしなかった。

色々と思うところはあるらしいが、口にしたら負けとも思っているのかもしれない。

「じゃあ、俺もかしこまった方がいいですかね？」

「……キミは分かっているという事を言うんだから、底意地が悪いよね」

「生まれつきなもので」

「かわいくないの」

玉子サンドをほおばりながら、心底嫌そうに眉をしかめる。

「男にかわいさを期待するのは間違ってるでしょう」

「えー？ だって年下じゃんキミ。別におかしい話じゃないよね？」

「男に同意を求めてください。言われて嬉しい言葉じゃないし」

「なんだ、キミもやっぱりそーゆートコは男の子なんだ」

「かわいって言われて男が喜ぶのは、幼稚園児までですよ」

「言うねえ、男の子」

そう言って、ケタケタと笑う。よほど日頃の娯楽に飢えているの

だろうか。

彼女の「こういうところが、実に苦手だ。

「……で、俺を嘲笑うために、こんなところまで連れて来たんですか？」

「おっと、そうだった。たまに男の子と食事なんてしたから、すっかり忘れてた」

「……」

「何か言いたげだけど、聞いてあげない」

しれつと言いつつ、彼女は椅子に座り直し、まっすぐに陸朗の方へと向き直った。

蒼い瞳から放たれるのは、まるで相手を射貫くような鋭い視線。思わず息を呑んだ。真面目な話をしようとしているのが、馬鹿にでも分かる。また皮肉の一つでも言っただろうかと思っていたが、その気がどこかに飛んで失せてしまう。

彼女は少なくとも陸朗の前ではおちゃらけているクセに、時折こうして妙に鋭い表情を作るのだ。どちらが本当の彼女なのか。そんな詮無い考えが頭に浮かぶ。

「む。僕の話をちゃんと聞いてるか、陸朗君？」

「あ……す、すいません」

「まったく……もっかい言うよ。昨日の勝負のこと、覚えているかい？」

「そりゃ、覚えてます、けど……」

言葉尻が、しどろもどろになる。

昨日の勝負は結局負けた。敗北を認めた瞬間から、どうやって決着したかはよく覚えていないが、ちらっとログを見たらアバターが頭から真っ二つになっていたので、おそらくはまたしても一刀両断

されたのだろう。

「そう。勝負は僕の勝ちで、キミの負け。それはいいかな？」

「……そのくらいの潔さは、あるつもりですよ」

「素晴らしい。負けをばかす奴は、強くなれないよ。負けず嫌いとして負けを認めないのは、全然違うことだからね」

「それは経験則ですか？」

そう尋ねると、可愛らしく小首を傾げながら、生徒会長はわずかに考えるような仕草を見せた。

「どちらかというと、観察結果だね。だってほら、僕は負けたことってあんまりないからさ」

「あんまり？」

異なことを言う、と思った。

十万戦以上もデュエルを繰り返して、黒星はただの一つもなし。無敵というのも生やさしい、文字通り電腦世界最強のペルソナマスタ―が口にするような台詞ではなかった。

「そりゃシングルでは無敗だよ。それは僕の誇りさ。でも……タッグマッチで負けたことは、いくらもあるからね」

理屈としては理解できる。だが、信じがたいのは変わらなかった。もしかして、ハンデ代わりにすごく弱い相手とタッグを組んでいたのだろうか？

「足を引つ張られていた、ということではないね。むしろ……おそらく……足を引つ張っていたのは、僕だ」

「……冗談でしょう？」

「他人がどう思い、どう見ているかは分からない。でも、当事者である僕は、そうだったと考えているよ。息が合ってなかったのは間違いないね、だから負けたのさ」

淡々と語るその言葉の裏に、隠しきれない悔しさが滲んでいる。始めて見せるその表情、だがそれも一瞬の事。剥き出しになりかけた感情はすぐになりを潜め、いつも通りの、人好きのする明朗快活な彼女に戻っていた。

「ま、昔のことはどうでもいいんだ。雪乃ちゃん大失敗の巻とか、キミに聞かせたかったわけじゃないし。問題は、これからの話さ。僕と、キミのね」

「これから？ これからって、何です？」

「とぼけてるのかい？ いや、キミはそんなに器用じゃないし、素で忘れてるのかな？」

「忘れてるって言われても……」

「よく思い出してよ。約束したよね？ あの勝負、負けた方が勝った方の言うことを聞くって」

「そ、そう言えば……」

売り言葉に買い言葉。ノリと勢いで、そんな約束をしてしまった気がする。

頭に血が上っていたとはいえ、格の違いなど分かっていたはず。馬鹿な約束をしたものと、今さら後悔しても、すでに遅かった。

「……要求は？」

「いや、そんな冷酷非道の悪魔を見るような顔はやめてほしいんだけど」

どのツラを下げてもそれを言うのか。



ため息をつきつつも、その口元が愉快そうにつり上がっているのは隠せない。

「言っとくけど、キミが負けたのが悪いからね」

「くっ……！ し、しかし！」

「もちろん、僕は最初から勝つつもりで賭けをもちかけたことは、お察しのとおりではある。でも、そんな僕の絶対の自信を崩すために、キミは僕に挑んだんだろう？」

そう。彼女は最初から勝つことを前提にして、陸朗を賭けに誘った。そして何よりも腹が立つのは、雪乃がそれを微塵も隠そうとしていなかったことだ。

自分が勝って当たり前前だけど、それでもお前は賭けに乗るのか？ そんな敵をナメた態度で挑まれて、黙っていられるほど陸朗はお人好しではない。

その鼻っ柱をへし折ってやる。そう意気込んで、あの有様だ。プライドもへつたくれもない。完敗だった。その敗北を認めさせた上で、彼女はさらに要求するという。

つくづく　つくづく、最悪な性格の女だ。そこまでして自分を弄んで、この上自分に何をさせようというのか。

「そんなに悔しそうな顔するなよう。ダメダメ、ちゃんと言うこと、聞いてもらうからね」

「分かりましたよ。それで、俺に何をさせたいんです？」

逆らっても無駄というのは分かっている。いかにして被害を減らすかが、今の最優先事項だ。マスト・ファクター

「ん。まあ、最初から決めてたんだよね、実は」

「……よく分からねーけど、俺にできることにしてくださいよ？」

「なあに、できるできる。簡単なことさ。身構える必要はない」

一ミリも信頼できそうにない、軽薄な言葉だった。

しかし今の陸朗に、それを理由にして拒む権利はない。負けは負けだ、そこは認めた。賭けに破れたのだ。ならばそれをうやむやにしないのが、なけなしのプライドというやつだった。

もっとも、ある種の安心感があった。

彼女は裕福な家庭に生まれた掛け値なしのお嬢様だ。金や物をせがまれるようなことはないだろうと確信があったし、生徒会長という立場的に、生徒一人に個人的な恥をかかせるようなこともするまいと予想していた。

おそらく、たぶん、きつと 彼女の要求は、現実<sup>リアル</sup>についてのことではない。『思考空間』内での、それも『ペルソナクライン』での頼みに違いない そんな自分の読み通りになるか、否か。

わずかに手足を緊張させながら、陸朗は彼女の次の言葉を待った。

「キミに求めることはたった一つ」

ピアニストと見まごうような繊細で綺麗な指をくると回し、まっすぐ陸朗を指差す。

たっぷりと三秒タメを作ってから、彼女は 生徒会長・秋月雪乃は、傲岸不遜に、一切の拒否を許さない決然たる態度で、陸朗にこう宣告した。

「僕のものになれ、真壁陸朗。僕には、キミが必要だ」

## 2 - 1 代価（後書き）

長いプロローグが終わり、ようやく話が動き始めます。

最初から書き直そうかだいぶ悩んだのですが、とりあえず最後まで書いてから修正しようかと。

そういうわけで今シバラクお付き合い下さい。

## 2 - 2 上層区画

そして放課後。

『思考空間』に展開された『ペルソナ・クライン』のゲーム・エリアの片隅で、ジェット・バレルとなった陸朗が、壁に身体を預けながらぼんやりと立っていた。

人待ちだ。もちろん、誰を待っているかなど、言うまでもない。

「はいはい、おまたせー！ 待ったかい？」

「少しばかり」

空間がたわみ、目にするのは二回目となる伝説のアバター、ストレーガが姿を現した。

「おいおい、そこは「僕も今来たところだよ、マイハニー」とかサラリと流すところじゃないかい？」

「呼ばれたんですか、マイハニーって？」

「……いやごめん、僕が悪かった」

呼ばれたところを想像したのだろう。

秋月雪乃ことストレーガは、げんなりとした様子でこめかみのあたりを抑えてかぶりを振った。

彼女のアバターは今、オペラピンクの刃状装甲ドレスの上から、ダークグレーのフード付きマントを羽織っている。

妙に地味な色のマントであるあたり、どうやら正体を隠しているつもりらしい。

「その格好は？」

「キミに壊されたダミー・アバター、修復してないんだよ。もう要

らないけどね、キミがいるから」

「はあ」

「……覇気がないねえ。しっかりしてよ、男の子だろ？」

「セクシャルなハラスメントですよそれ」

「おまけにパワハラもつけてあげようか？」

「あんたが言つとシャレになってません」

その気になれば、陸朗本人はおろか、彼の親を路頭に迷わせるくらいは簡単にやってのけるだろう。

秋月の長女というのは、それくらいのビッグゲームなのだ。学生である陸朗ですら知っているレベルの。

(しかし……)

マントを風になびかせて歩くストレーガについて行きながら、周囲に視線を走らせる。

見慣れたはずのイケブクロ・エリアの光景。しかし、いつも一人で歩いていたこの場所が、少し違って見える。

どこに連れて行かれるのか、陸朗は聞かされていない。尋ねるタイミングは、すでに逸していた。それに必要ならば、向こうから説明をしているだろう。しないということは、黙ってついてきて欲しいということなのだ。

「……どうしたもんかな」

「何か言ったかい？」

「いえ、別に」

フードを被った頭が、もぞつと動いた。後ろを振り向いたようだが、フードに邪魔をされてこちらが見えず、諦めて前を向き直したらしい。

「心配しなくてもいい。もうすぐ着くよ」

足を止めると、彼女は二十メートルほど先にある、大きな建物を指差した。長さが不揃いな円柱を無数に束ねたような、天にそびえる巨塔。

それが何であるか、陸朗にも覚えがあった。

「『セントラル・エリアポーター  
統合転送機構』です……よね？」

「さすがに知ってるか」

「そりゃ知ってます。もつとも、あまり近付きませんが。こういう『上層区画』への入り口って、俺には縁がないですし」

「縁がない、か。だろうね」

二人が今歩いてきたのは、現実リアルでいうところの都道四四一号線、俗に『立教通り』とか『要町通り』と呼ばれている道だった。

その道を要町方面から歩いて十数分ほど着いたこの場所が、池袋駅西口。『スフィア』における『セントラル・エリアポーター  
統合転送機構』だ。

「つて、まさか『上層区画』に行くんですか？」

「そだよ。あ、切符ポータル・パス買ってね切符。クレジットある？ ないなら貸すけど」

「いえ、それは大丈夫ですが……そもそも俺、ランカーじゃないから『上層区画』入れませんよ？」

『上層区画』とは、スフィアにおける中枢管理領域にもっと近い、情報的に安定した状態にある領域を指す。『ペルソナクライン』をプレイしているアバターから見ると、球状世界として構築されたスフィアの中心に浮かんでいる、多層構造物として存在していた。

その『上層区画』へ入るためには、一つだけ条件がある。

対戦勝利によって獲得できるアバターポイントが一定値以上ある『ランカー』以外は、入場ゲートで弾かれてしまうのだ。これは建前上は初心者を保護するための制約だが、誰もその建前を信じてはいない。

事実上、『上層区画』でのプレイは一定以上の実力を持つ存在への特典である。そういう認識がまかり通っていた。

ジェット・バレルがホームとしているスピット・ダンプのようなフィールドでは、このアバターポイントがほとんど溜まらない。

ゆえに実力はさておき、公のランキングにおいてジェット・バレルというアバターは、『上層区画』へ侵入する資格を持たなかったのだ。

「その辺は大丈夫。僕とパートナー登録したろ？ めかりはないさ」

「けど……上つて、そんな、急に言われても」

「そういう反応を予想していたからね、面倒だし黙ってた。でもついてきてもらうよ、これも賭けの負け金の内だと思ってね」

「わ、わかりましたよ……ここまで来て、今さら帰るとか言いませんよ」

賭けの結果、今のジェット・バレルはその身分を『魔女』の所有物に甘んじている。無論望んではないし納得もしていないが、賭けの結果を反故にするほど、陸朗の性根は腐っていない。

おまけに互いに現実リアルを知っているのだ。逃げ場はない。ならば負けは負け、よほど無体なことではなければ従うのが得策だろうと、彼はこの状況に折り合いをつけていた。

渋々ながら『クレジット 電腦通貨』を取り出し、バスタード・ベンダー 券売機で切符を買う。けれどもやっぱり気乗りはしない、とてもしない。

トーキョー・スフィアの中核部に浮遊している『上層区画』は、陸朗にしてみれば近付きたくないし、近付いてはいけないし、近付くことは許されない、そんな場所だった。

理由はひとえに、彼が『不正改変者』<sup>チーター</sup>であるためだ。

名うて、『不正改変者』としてはそう言ってもいい陸朗だが、それゆえに敵も少なくない。怨みを買っている自覚もある。正体を隠したストレーガと戦ったとき、狙われた理由をそこに求めたくらいには。

『ペルソナクライン』のゲームシステム上、スフィアの大部分に設定された『通常戦域』<sup>ニユートラル・フィールド</sup>では、戦闘拒否設定にしておけば対戦モードに入ることはないので身の安全を確保できるが、『上層区画』<sup>デューエル</sup>ではそうはいかない。

『上層区画』での設定は『戦闘拒否不可能』<sup>戦闘拒否不可能</sup>、夜討ち朝駆け罪に問わずなバトルロイヤルモードの仕様になっている。そんなところに陸朗 ジェット・バレルのような身の上でノコノコと姿をさらすのは、彼の感覚からすれば論外もいいところだった。

「気休めだけど、俺もそういうの被っておこう」

アイテムイベントリからポンチョ状の野戦コートをロードし、身にまとう。自分でカスタマイズしたアイテムなので、ちょっとした追加機能を付与してあるが、今は使用する必要はないのでそのまま羽織った。

そんなジェット・バレルの様子を、じつとストレーガが見つめていた。

「何か？」

「コートか……もったいないな、せっかく細身でカッコいいアバターなのに隠しちゃうのは」

「そんなこと言われても。『戦闘拒否不能戦域』<sup>アンリミテッド・フィールド</sup>を、何も対策しないで歩くってのは考えられないでしょ」

「警戒しすぎじゃない？ 男らしくない、堂々としなよー？」

「……どのツラ下げてそれを言うんだあんたは……」



自分だってフードで正体を隠してるくせに、そんなことを言われる筋合いはない。

「冗談だつてば。怒りっぱいね、キミは」

「誰のせいだと思ってるんだよ!？」

「あとで牛乳と煮干しを奢っちゃおう、うん」

「人の話を聞け!」

しかしさらつとスルーされてしまった。だいたいそんなもの奢ってもらっても困るのだが。

そうやってイライラしてるうちに、『統合転送機構』の中央部にあるポータルエレベーション・ドライバの前に到着していた。

「んじゃ行こうか? ドライバの使い方は知ってる?」

「そのくらいは。パスをロードしながら、ドア横のスクヤナに掌合わせればいいんですよね?」

目の前にそびえる巨大な円柱を見上げながら答える。

縦方向の交通機関であるポータルエレベーション・ドライバを使うのは初めてだが、要するにこれはエレベーターのようなものだ。乗って、上に飛ばされて、『上層区画』に到着する。それだけの機構だ。

先にスクヤナに触れた彼女の続いて、インベントリからさつき購入した切符を<sup>ポータル・バス</sup>ロードし、読み取り口へと重ね合わせると、円柱の一角が空気の抜けるような音と共に開いた。

「そうそう。よし、乗るよ」  
「……あの」

ストレーガがドアの中に煌めく光の奔流に身を委ねようとした瞬間、陸朗は ジェット・バレルは、足を止める。

ここから先は、陸朗にとって初体験のエリアとなる。思うところがあった。

怖じ気づいたわけではない。だが、少しばかりは覚悟を決める必要がある。そのためには、こんな曖昧な気持ちでは無理だ。

「ん、何だい？」

彼女が振り向くのを待つ。

そのまま行ってしまう素振りがあれば、掴んでも止めるつもりだったが、その必要はなかったようだ。

『魔女』はマントの裾を軽く翻しながら、彼の方へと向き直る。

「……やっぱり、よく分からないままってのは、性に合わないんですよ」

「どづいことだい？」

約束は約束、だが知るべきことは知っておきたい。そのくらいの権利は、主張しておきたい。出会ってからこつち、彼女には主導権を握られっぱなしだ。それが少しばかり、面白くなかった。

「俺みたいなのは、本来こんなところに近づく機会も必要もない。というか、近付きたくない。そのあたりは、会長も知ってるはずでしょう」

「うん、そうだね」

「じゃあ何故なんです？ そういう俺の立場とかを無視してでも、

連れて行きたい理由ってのは？」

「ふむ、つまり連れて行かれるにしても、納得しておきたいということかな？ ……気持ちには分かるけど、理由を知ったら約束を反故にされそうだしねえ」

見下されている、という感じではなかった。

どちらかという自分の無茶が分かって、不安になっているように見える。

「どんだけ無体なことさせるつもりですか、あんたは？」

「いや、そこまでの事態にはならないと思うけど……万が一はあるかも」

彼女はそう言って、ちらりとジェット・バレルの顔をうかがう。どうやら、確約しなければ話は進みそうにない。

彼女のような人間に目をつけられたのが運の尽きだったと諦め、ジェット・バレルは首を縦に動かした。

それを見ると、彼女はつるりとしたカウル状のペルソナに手をやり、困っているかのように、その表面に軽く爪を立てた。上手い説明を思いつかない、とでも言いたげな仕草だ。

「結局、どういう理由なんです？」

「……ま、大したこっちゃないんだ」

その声色は、わざとらしく軽薄を装っていて、ひどく信頼できないような台詞に思える。それでも陸朗は辛抱強く、彼女の次の言葉を待った。

そして。

「まずはキミにも、見てもらおうと思っただ。僕の……『敵』って

やつをね」

「敵……?」

聞いた言葉を繰り返す陸朗。

だがもつ、彼女はそれに答えようとはしない。静かに踵を返すと、エレベーション・ドライバのシャフトの中へと、身を躍らせる。

結局、望んだ答えを得られないまま、陸朗は彼女を追いかけるほかなかった。

「ごうん、と鈍い音が身体の奥から響く。

気がつけば、ジェット・バレルの身体が、エレベーション・ドライバのシャフトから外に出ていた。

「う……」

わずかな吐き気。スフィアにいる限り、実際にこみ上げるものなどありはしないが、思わず口元を抑える。

「わ……! 大丈夫かい!？」

「ああ、いえ、少し気分が悪くなっただけで……すぐ治します、から」

トラフィック・エラーによる転送酔いだろうか、地上でポータルを利用するときは、こんなことはなかったのに。

頭を振って、無理矢理吐き気を押さえ込むと、周囲の光景が目に入った。

「あの、ここは……?」

「ここは『上層区画』のイントランスさ。『ペルソナクライン』内での呼び方は、『シユールニヤ・ガーデン』だね」

スファイア本体と空間的に切り離されているのだろう。不自然なほどに広大な空間が、どこまでも続いていた。ただし空は見えない。空の代わりにあるのは、無数のブロック状の構造物だ。ランダムに積み上げられた幾何学的なオブジェが、何層にも積み重なっている。天井と地面、どちらも同じデザインだった。まるで異形のビルの群れに、上下から押し挟まれているようだ。

「当たらずとも遠からずだね。あのうちの幾つかは本拠地として、中堅以上のアライアンスが使っているはずだよ」

アライアンスというのは、『ペルソナクライン』におけるアバターたちの共同体、いわゆるギルドやクランといったものに相当するシステムだ。

『ペルソナクライン』はゲームデザイン上、デュエル一対一の決闘を重視した設計になっているが、Co-op大人数での共同戦闘行為が不可能なわけではない。

そして多対多の戦闘を円滑に運営するべく、アバター同士が連帯することをサポートするためのシステムが、アライアンスだった。

ちなみに、陸朗はアライアンスには入っていない。彼が主な活動場所に使っていた『スピット・ダンプ』にもいくつかアライアンスはあったが、彼は独り身を好んだ。その方が身軽でいい、という判断からだった。

もちろん、アライアンスに関してうとい、というわけではない。むしろその逆だ。群れないからこそ、敵となる『群れ』の動向については、常にアンテナを張り巡らせている。そういう情報収集は、彼にとって日常だった。

(そういえば……)

『ストレーガ剣の魔女』がどこかのアライアンスに入っていた、という話は聞いたことがない。

アライアンスについてに限らず、パーソナルデータ 突き詰めれば目撃情報がほかの有名アバターに比べて圧倒的に少ないのは、彼女の大きな特徴だった。

そもそも『剣の魔女』は、陸朗も見ていたあのリプレイが『思考空間』で共有されたことにより、知名度が一気に広まったアバターだ。

いかなる理由か、もともとアバター・ランキングにおいてほとんどのパーソナルデータがマスクされていたので、リプレイ公開までほとんど都市伝説に近い扱いをされていた。徹底して己の正体を隠すというのが、少なくとも一線にいた頃の魔女のやり方だった。

しかしランキング上位者というのは彼女のような特殊な例外を除き、自己顕示欲旺盛な傾向がある。トーキョー・スフィア最大のアライアンスである『エンプレス・オーダー白銀騎士団』を率いるリーダー、『エンプレス・オブ・クローム聖銀の女皇』など、自分たちの勢力を誇るかのような行動がとくに多いことで有名だ。

「アライアンスか……」

ふと、そう呟いたストレーガの言葉には、どこか苦い雰囲気があった。

「誰かに合わせるのはどうも苦手だね。アライアンスもいい記憶があんまりないよ、おかげで今は無所属さ」

この言い方だと、彼女もかつてアライアンスに所属していたこと

があるように聞こえる。

追放にでもあったのだろうか？ だとしたら、きつと所属していたとき、他人の迷惑を顧みないわがまま放題をやらかしたに違いない。

「なんだい、その生ぬるい視線は？」

「いえ、別に」

それより と言いかけて、ゆっくりとあたりを見回す。

初めて見る場所だが、想像とは少しばかり違っていた。もっと、上位ランカーがあちこちにたむろしているような、そんな空間を想像していたのだが、彼自身とストレーガ以外のアバターの姿は見当たらない。

しん、とまるで死んだように静まり返っている。

「静かですね」

「そりゃ、今日は貸し切りだから。人が少ないんだよ」  
「貸し切り？」

誰がだろうか。

まさか、この『剣の魔女』がそんなことをするとは思えない。

もちろん彼女は仮にも現役最高ランクのアバターだ。しばらく身を隠していたとはいえ、本来の人脈は相当なものだろうし、その気になればどんなことでも実現してしまいそうなイメージはある。

だが、自分を連れてくるためだけに『上層区画』を貸し切りにするなど、さすがにあり得ない。

「どういうことです？ 誰がここを貸し切りに？ 何のために？」

「えらくクエスチョンマークが多い台詞だね」

「はぐらかさずに」

「……今日はここでパーティがあるのさ。まったく、バトルロイヤル上等の『アンリミテッド・フィールド戦闘拒否不能戦域』で壮行会とは、思い上がりも甚だしんじゃないか。ねえ？」

同意を求められても困る。

「話がまったく見えてこないんですけど」

「パーティがあるんだよって、言ったじゃない」

「いや、だから誰がパーティを開くんです？」

ストレーガは仮面の下で、わずかに目をしかめたようだった。視覚補正用のシールド・コンタクトが、不愉快そうに細められている。何か口にしたくないことを、我慢しているのだろう。わずかの後、渋々といった様子で彼女はこう答えた。

「……これからここで開かれるのはね、三大アライアンスの一つ、

『エンプレス・オーダー白銀騎士団』の出陣式だよ」

「はあ、なるほど……って、はいいい!？」

「変な声出さないですよ。パーティだよパーティ、そんな驚くことないでしょうが」

「いや、そこじゃないです! 『白銀騎士団』って!？」

「……イタバシ、ネリマ、ナカノ、シンジユクの四エリアを支配する、トーキョー・スフィア最大最強のアライアンスだよ。さすがに知らないとは思わないけど？」

「分かってる! 俺が言いたいのはそうじゃない!」

「じゃあ、何？」

「……あなたは、『白銀騎士団』相手に何をやるつもりなんだよ!？」

ようやく、聞きたかった質問に辿り着いた気がした。



巨大アライアンスが施設貸し切りで開くパーティ。それがこれから行われようとしている。

そこに乗り込んだ、無関係で部外者で招かれざる客の『剣の魔女』。この状況で何もしない いや、何もしでかさないわけがない。そして『統合転送機構』で彼女が漏らした、『敵』という一言。これだけ揃えば、何が目的かなんて馬鹿でも分かる。

「ひどいなあ、ジェット・バレル。僕がまるでよからぬことでも企てるような口振りじゃないか、そりゃ」

いかにも心外です、と言わんばかりに肩をすくめる。しかし、たった数日間の付き合いではあっても、彼女がどういう人間性の持ち主かは、だいぶ分かってきた。口で何と言おうと、微塵も信用できるものではない。

「……違うんですか？」

「あつたりまえだろ。信用ないなあ、僕」

「さつき下で言ってたことは？」

「……確かに、ここには僕の『敵』がいる。けど、それだけさ。闇討ちしようだなんて、考えちゃいないよ」

「なら、なんでここに？」

「決まってる。参加しに来たんだよ、パーティにね」

その台詞にはどこを切り取っても真実が含まれていない そんな風にしか思えない、胡散臭い言葉だった。

## 2・2 上層区画（後書き）

自分で書いておいてなんだけど、ヒロインの行動が実に大雑把だわ  
どんぶりヒロインと名付けたい。  
ちなみにおっぱいもどんぶり並です。

「ああ、ちなみに……もう帰ろうと思っても、キミ一人じゃ帰れないからね」

「はえ？」

さすがに付き合いきれない、陸朗がそう考えたのを見透かしたように、ストレーガが告げる。仮面の奥では、その口元が悪辣につり上がっているに違いない。

「僕のパートナー権限で入ってるんだ、出る時も僕が一緒じゃないと出られないよ。何のために認証があると思ってるのさ」

「なにいつ!？」

「ログアウトしてもここに出ちゃうよ。あとあと面倒なことになるから、あんま変なことほしくないようにね」

『上層区画』のセキュリティは固い。そういう点でも、『ペルソナクライン』の開発者が、この空間に対し特別な価値を付加しようと考えていることが分かる。

一通りゲームを遊んだユーザーが辿り着く、いわゆるエンド・コンテンツにおいてステータス的な活用ができるよう、最初から想定してあるのだろう。事実、『ペルソナクライン』ではかなりの数の高ランク専用コンテンツが、この『上層区画』に用意されている。

その結果、この場所はトップランカーを数多く抱えている、『白銀騎士団』を含めた大規模アライアンスによる共同支配が行われることとなったのだ。

そのため陸朗のような“下々の者”は、『上層区画』の実情などほとんど知らない。いや、知りたくもない、と言った方が正解か。

無論言うまでもなく、そこに渦巻く感情は『嫉妬』だ。「あいつ

らだけ上手くやりやがって」「 そんな風に思っている。格差社会とそのひずみは、『思考空間』の中にすら存在するのだ。

しかし本来ならばそんな『嫉妬』を一身に受ける存在であるストレーガは、他人の負の情念など高らかに笑い飛ばすような、圧倒的に豪快な性格の持ち主だった。

もしかして、こうでないと『上』には行けないのではないかと、思わせるものがある。自分とはオーラのようなものが違うなあ、などと陸朗は思ってしまったのだ。本人に言うとは調子に乗りそうなので、口にすることはないが。

「どうかしたかい？」

「ああいえ、別に」

まじまじと見ていたせいで気づかれてしまった。慌てて顔を動かし、視線をよそへと向ける。

果ての分からない無機質な風景は、平衡感覚でも麻痺させる効果があるのだろうか。少し、頭がくらくらした。

「……で、どうよ、感想は？ 初めてなんだよね？」

「ええまあ、何というか……意外と殺風景なところですね。これって、処理を軽くするために？」

「いやあ……設計者の趣味じゃないかな。地上はほら、バトル・フィールドの処理を重ねなければ、現実リアルそっくりなわけだろ。それに比べると、こっちは完全な架空の施設だからね。現実味を出しても面白くないってとこじゃない？」

「なるほど」

死んだような雰囲気のあるビル街だが、言われてみれば神殿のような、そんなある種の神々しさを感じなくもない。だとすれば、さしずめここは文字通りの『天上界』だろうか。

「それでも普段はもつと、人がいるかな。でっかいライアンスは、大抵交代で配下を駐屯させてるし。規模は様々だけどね」

「今日は『白銀騎士団』の貸し切りだからってことですか」

「いえす、ざつっらい。ただその分、騎士団連中の警戒は厳しくなってると思うよ」

「何故です？」

「簡単だよ、テロるのに都合がいいからさ。いかに騎士団がでかくても、この『上層区画』すべてにくまなく警備を配置するのは不可能だ。普段なら大手ライアンス同士が互いに監視しあうことで、頭数と死角を補っている。けれども、それが今はいない。隙だらけさ」

「……大丈夫なんですか、それで？」

「だから言つたる、思いつてるってね。自分は何者にも傷つけられない、そう確信してるんだ。その名のごとく女王様気取りなんだよ、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』は」

吐き捨てるような強い語勢に、隠しきれない嫌悪が滲んでいる。

傲慢、というならストレーガ自身も相当なものだが、それは棚に上げているようだ。いや、あるいは同族嫌悪なのかもしれない。大組織の長である女皇に比べたら、取り巻きを持たない彼女は、さしずめ裸の王様といった感じだが。

「僕の裸がどうしたって？」

「うえっ!?!」

「キミ、時々考えてることがだだ洩れになってるから、気をつけた方がいいよ」

「は、はあ」

別にやましいことを考えていたわけではないが、思わず恐縮して

しまつ。

「もっとも、年頃の男の子だもんね。興味があるのはしょうがないよ。僕もそういうの、理解がないわけじゃないし」

「いや、違くてですね……」

「隠さなくていいって。僕は全然気にしてないから」

ひどい誤解だった。

「さて、いつまでも立ち話しててもしょうがない。そろそろ行くところか」

「どこへです？」

「もちろんパーティー会場だよ。中央にある大広間でやってるはずさ」

彼女はそう言って、ばさりとマントを羽織り直すと、ゆっくり歩き始めた。追いかけながらその背中に向かって、さっきから気になっていたことを尋ねてみる。

「あの、会長」

「ああ、そうそう。その会長ってのやめてね。ここは学校じゃないんだしさ。僕とキミはただのプレイヤー同士だよ、会長も生徒もないだろ、つか、下手したら現実リアルが割れる」

「じゃあ、なんて呼べば？」

「アバターの名前で……『ストレージ剣の魔女』と呼べばいいよ」

「わかりました会長」

「……おい」

一瞬、すさまじい殺気がジェット・バレルの全身を突き刺した。

「じよ、冗談ですよ、ストレーガ」  
「まったく……」

ため息をひとつつく彼女。だが、さっきの怒気は本物だった。軽い冗談のつもりだったが、あれほどの怒りを見せるとは想定外だ。どうやら、彼女は現実と『リアル』を切り離すことに、強いこだわりがあるらしい。

だったら学校で素性を知らせてまで、自分などに関わる必要などなかったと思うのだが。

正直、彼女が何を考えているのか分からない。今だってそうだ。

「それで、何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

「ああ……ええと、場所もそうですけど、やけに詳しいじゃないですか、そのパーティとやらのこと。どこでそんな情報仕入れたんですか？」

「何だ、そんなのか」

彼女は事も無げに言うと、ついつと右手を差し出し、自らのアイテム・インベントリから立体電子書類状のアイテムをロードする。ホロ・ペーパー薄水色の半透明のその書類には、『召集状』という題名が書かれていた。

「召集状？」

「そう。騎士団員のランカーのみに配られたものでね。今度、久しぶりに女皇直々に出陣するらしい。その前に閲兵式みたいなのをやって、士気高揚しようって魂胆なんだな。ま、他のアライアンスに自分たちの力を見せつけるって意味も、当然あるんだが」

「出陣……『領土戦』コンクエストですか？」

『領土戦』<sup>コンクエスト</sup> というのは、文字通りアライアンスが『戦域』<sup>エリア</sup>の支配権を奪い合うシステムを指す。

各戦域にはそれを統治する『城』<sup>キャッスル</sup>が存在し、イケブクロ・エリアならばサンシャイン60、シンジユク・エリアなら都庁というように、現実<sup>リアル</sup>においてエリアを象徴する建造物があるところに『城』は配置されている。その『城』を巡って、アライアンスは鎬を削るといふわけだ。

『城』を手に入れたアライアンスは、獲得した『戦域』<sup>ボトム・ポイント</sup>を本拠地としているプレイヤーから各種租税の徴収のほか、『城』持ち専用の一時的な能力ブースト・スキルの使用や、所属アバター上限数の拡大など、様々な特典を得ることが出来る。血眼になってまで『城』を求めただけの理由は、確かにあると言えた。

そしてトーキョー・スフィアに存在する二十三の『城』をいよや二十三の『戦域』のうち、四つを支配しているのが『白銀騎士団』なのだ。

四つの『戦域』を支配しているアライアンスは、騎士団のほかに二つ。しかし新規の『戦域』獲得に今もっとも近いという意味で、騎士団はほかのアライアンスよりも頭一つ分ほど抜けていると言えた。

そんな状況であるならば、もう一押しして『戦域』を獲得するため、『領土戦』へアライアンスの頭首<sup>リーダー</sup>自らが出陣するというのも、あり得ない話ではない。

「いや、それが『領土戦』じゃないんだよね。というか、大規模共同戦闘<sup>ポピュラー・デュエリング</sup>ですらない。ただのプレイヤー主催の大会なんだ、ちよつとばかり賞品が特殊なだけのね」

「そんなのあり得ないですよ！ どうして頭首がそんな、ただリスクだけを抱えるような真似を？」

「さっきも言っただろ。自分が負けるわけないと思ってるのさ」



頭首権限を持つアバターは、アライアンスや『戦域』から受ける能力ブーストなどの恩恵と引き替えに、ある弱点を抱えることになる。あるいは責任と言い換えてもいい。

それは自分が敗北したとき、頭首は自分が本拠地と設定していた『戦域』を失ってしまう、ということだ。

たとえばイケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を支配しているアライアンスがあったとして、本拠地がイケブクロに設定されているとする。この状態の頭首がイケブクロで敗北した場合はイケブクロを、シンジユクの攻城戦で敗北したら、イケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を失ってしまうのだ。

このようなりスクの中で『城』を取り『戦域』を支配する、ということは並大抵の努力でできることではない。所属アバター数では全アライアンス中最大を誇る『白銀騎士団』ですら、二十三箇所中四つしか支配できていないというところからもそれが分かる。

『戦域』の支配者が変わることなどしょっちゅう。それどころか、暫定支配者すら決まっていない『戦域』も多々ある。ジェット・バレルの本拠地であるイケブクロ・エリアもそうだ。

そう。あたかも戦国時代のごとく、『領土戦』は熱く激しく燃え上がっていた。

「そう、そんな状況で頭首がフラフラ対戦にでかけるとか、バカにしてんのかって思うよ。いや、してるのさ。きっと……自分以外の全てのプレイヤーのことを」

「そういうものですかね？」

「それは……あつと。そろそろ着くはずだよ、女皇の話はこれで終わりだ。騎士団員が増えてくる、女皇批判は連中にはタブーだからね」

目的地の入り口が見えてきたことで、ストレーガの語気が鋭くなった。

大広間と彼女が呼んだホールは、正直言って広間という言葉が似つかわしくないほど巨大なものだった。大きさでいえば野球場ほど、それもただの野球場ではなく、東京ドームとかそついった規模のものに匹敵するサイズだ。反対側が霞んで見える。

その先の入り口らしきところに、物々しい藍色の戦闘用重甲冑デュエリング・アーマーと身の丈の二倍もある長槍ランスで武装した、一人のペルソナアバターが立っていた。

「検問らしきものがありますね。騎士が詰めてる」

「なに、この召集状があれば、問題はないよ。自動改札みたいなもんさ」

「そついやそれ、どうやって手に入れたんです？」

「蛇の道は蛇だよ、ジェット・バレル」

まつとうな手段でないということだけは分かった。

（大丈夫なのか、本当に？）

そんな陸朗の不安を煽るように、検問に立っていた騎士団員が二人を呼び止める。

「止まれ」

事務的な言葉だった。

ランカーだけでも数十人、そのパートナーとして来ているものも含めれば、女皇の召集状によって呼ばれたアバターの数は百を越えるだろう。いちいち何らかの情緒的反応を返してなど、到底いられなくて当然だ。

「召集状を見せろ」

「これでいいかい？」

マントの隙間から手を伸ばし、召集状の立体電子書類を騎士団員に見せるストレーガ。

「五番隊所属、『ブラッド・ハウンド鮮血獵犬』か？」

「いかにも。おつとめご苦労さん」

「そっちは？」

「僕のデュエル・パートナー、『ディープ・グレイ暗き深淵』だよ」

「知らん顔だな。他アライアンスの人間か？ ならば、たとえパートナーであっても入れるわけにはいかないが」

「フリーだったけど、入団希望っていうからスカウトしたんだ。登録が間に合わなかったただけでね、人物は保証するさ」

「ほっ……」

胡乱な目付きで、じろじろと無遠慮にジェット・バレルを眺め回す。

ディープ・グレイという存在に不審点を感じたのだろう。当然だ、本当にいるのか、今でつち上げたのかは知らないが、少なくともジェット・バレルはディープ・グレイではないのだから。

しかしここは『ディープ・グレイ』らしく振る舞わなければならぬいだろう……どうやって？

視線でストレーガに助けを求めるが、彼女はわずかに頷くだけで、具体的に何かの指示を与えてはくれなかった。

もはやハツタリで切り抜けるしかない。

「ディープ・グレイですッ！ ブラッド・ハウンドさんの下で、勉強させてもらってますッ！！」

「……」

青い騎士は答えなかった。身じろぎ一つせず、じつとジェット・バレルを見つめ続けている。器を見定めているようにも思えた。

ジェット・バレルは高機動射撃型という戦闘特性上、あの『山羊<sup>ホーン</sup>角』の角のようなドレスアップパーツをほとんど装備しない、ネイキッド・スタイルのアバターだ。そのつるりとしたシンプルな外観は特徴がなく、同じ戦闘特性を持ったアバターと似たり寄ったりだ。相当見慣れた相手でなければ、個体識別は難しい。要するに、誰が誰だかなど分かりっこないのだ。

彼がディープ・グレイ氏（仮）の存在を確信していない限り、嘘を見破られる可能性はほとんどないはずだった。

「もういいかい？ 遅刻しちゃうよ」

しめしめ上手くいったぞ、馬鹿め間抜けめ益暗め、そんな思いつく限りの卑劣な言葉を押し隠したまま、ストレーガは青い騎士の横を通り抜けようとした。

「……待て」

「まだ何か？」

「ブラッド・ハウンド、一つ聞きたい。貴様、『仕事』はどうした？」

「……まだ途中だよ。スピット・ダンプは制圧中だ」

聞き覚えのある単語に、ジェット・バレルの動きが止まる。

何か、とてつもなく嫌な予感がした。こういう時の勘は、外れた試しがない。

即座にアイテム・インベントリにアクセスして、いつでも武器が取り出せるように準備する。用心のため いや、そうではない。それはもう、確信に近かった。

「手こずっているのか？」

「まさか。一番手強い奴は落としたからね。後は雑魚ばかりさ、時間ばかりかかると」

「そうか……」

青い騎士はそう言うと、二、三歩後ろへと下がった。手にした槍がゆっくりと降りてきて、腰の辺りに構えられる。

「つまり……落としたから、連れて来たのか？ その男を……『黒い銃身』を！」

「ッー!!」

ぶうん、と風が巻き、長槍が空を裂く。だが一瞬それよりも早く、ストレーガはその身を宙へと躍らせていた。

「ジェット、下がって援護！」

「分かっていますよッ！」

言われるまでもない。不穏な気配はやはり外れなかった。何が自動改札だ、いきなりルビコン河になってるじゃないか！ 聞きたい疑問と言いたい文句は山ほどあったし今でも増えているが、今はそれどころではない。

騙そうとした不埒者二人に怒りを燃やす受け付け騎士は見るからに重装甲のインファイター。あんなのと真つ向勝負など、死んでもごめんだ。

即座にインベントリからP-90に似た二丁のアサルト・ライフルをロード。弾をバラ巻きながら、後ろに跳んで大きく距離を取る。頑健な青い騎士の装甲は、威力の低い減装弾などやすやすと弾いてしまうが、今はそれでいい。相手を一瞬でも足止めできるなら、彼の役目はそれで十分だ。

「ちい！ ジェット・バレルと……そっちの貴様！ 何者だ！？」  
「狼藉者ってところかな！ 悪いが、ここは通してもらおうよ！！」

空中でマントを脱ぎ捨てるストレーガ。

彼女はやる気だ。その両手にはもう、二振りの剣が握られていた。

## 2 - 3 検問（後書き）

だいぶ世界観についての説明が多いです。

そして相変わらず性格が悪くて血の気の多い魔女であったW

ちなみに『ペルソナクライム』というVRゲーム、内容としてはFPS（視点）+RTS（世界構造）+RPG（成長要素）+武器格闘ゲーム（アクション）という感じのシステムになってます。

総合体験型アプリケーションとか、そんな雰囲気という言葉にまとめられるかな。

## 2 - 4 野良犬

「オペラピンクの戦闘礼装！<sup>ドレス・アーマー</sup> 輝く黄金色の放熱索！<sup>フラチナ・フロンド</sup> 貴様……キ  
サマ、『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup> か！」

マントを脱ぎ捨てたストレーガの姿を見て、青い騎士が驚愕めいた声を上げる。

当然だろう。伝説の存在だ、それが眼前に現れれば歴戦の勇士であつても動揺はやむなし というわけではないようだった。

「おっと、僕をご存じで？」

「知らぬはずがあるか！ 我らが女皇の仇敵ならば、我らの仇敵よ  
！！」

「およ、その程度の認識なの？ なるほど、つてことは……」

「何をゴチャゴチャと……さえずるな、魔女！ 女皇に成り代わり、  
ここで成敗してくれる！」

青い騎士の長槍が唸りを上げる。蛇体のごとくしなり、いまだ宙にあるストレーガを打ち据えようと襲いかかった。

素早い動きをしにくい空中、<sup>ファースト・アタック</sup>初太刀はもらったと、青い騎士も確信していたことだろう。なるほど、道理だ。ジェット・バレルであるならば、あの一撃を避けようもない。

だが彼女は『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup>。十万戦無敗と謳われる、もっとも最強に近いペルソナアバターだ。<sup>タイムマン</sup>そんな彼女ともあろう者が、どのような体勢だろうと一対一で遅れを取ろうはずがない。

両手に構えたやや細身の剣を、槍の穂先にかち合わせる。一ミリの狂いもなく、鋭く尖った先端同士をぶつけたのだ。

ビィインと、金属が軋む耳障りな音が響く。それが耳に届いたとき、彼女はすでに次の行動へと動き出していた。



一瞬、ストレーガの全身が発光したように白く輝く。全身に装備したスラスターを、瞬間的に吹かした。精妙にコントローラされるスラスターが生み出した推力は、空中にある彼女に爆発的な加速を与え、その身を一条の閃光と為す。

「懐がから空きだよ。ざっくりいかせてもらう！」

「その程度の打ち込み、装甲で弾いてくれる！」

「できるかな？」

「なめるな！ この戦闘用重甲冑、生半可な攻撃を通しはせん！！」

「ああ、そうかい。だったら試して……みようじゃないか！」

ストレーガは身体ごとぶつかるようにして、双剣を青い騎士の胸元へと突き立てる。

甲高い金属音と共に表面を切っ先が引っ掻き、火花がパツと輝いた。

「言ったらう！ 無駄だ！」

「確かに刺さらない。けど無駄かどうかは……僕が決める！ 生意気言ってんなよ、このバケツ頭が！」

「ば、バケツ頭！？」

確かに青い騎士の鎧は、ストレーガの打ち込みをその表面で弾き、受け流していた。だが彼女の顔には、いささかの動揺さえも浮かんでいない。これでよいと、その目が言っていた。

「装甲の一番厚い部分で受け止める。確かにディフェンスの基本中の基本だ。ならばこっちも基本中の基本、装甲の弱いところを狙うまで！」

「ぬっつー！」

装甲表面に剣を滑らせ、装甲の弱い部分 すなわち可動する関節部分へ切っ先を向ける。狙いは肩口、脇の下。前後上下と複雑な可動を行うその関節は、ストレーガにとっては剥き出しの弱点も同じことだ。

「もらった!」

「ぬっ!!」

だが、青い騎士もまたランカー。騎士団の屋台骨を支える強者の一人だ。即座にストレーガの双剣が避けられないことを察すると、一つの躊躇もなく身体を捻る。くれてやる、そう言わんばかりに、左肩を大きく突き出した。

双剣の刃が青い騎士の肩に食い込む。『剣の魔女』の卓越した殺法は、アバターの関節をまるでバターののようにやすやすと切断していた。

「ぐうっ!!」

「ちっ……!!」

うめき声と舌打ち。

無論前者が青い騎士、後者がストレーガだ。

彼女にしては珍しく、いらついた雰囲気をもっていた。青い騎士の文字通りの捨て身、腕一本を犠牲にする防御のせいで、一太刀で仕留め損ねたからだろう。

「一合で終わらせるつもりだったが……案外、やる」

「なめるなと言ったはずだ!」

痛みを堪えているのがありありと分かる、だがその言葉はまだ闘争心を失ってはいなかった。

『感覚変換』によるダイレクト・フィードバックは、プレイヤーの体感で自在に動かせることを実現しているが、同時にアバターの受けたダメージを『痛み』として伝えてしまう。

純粹に受けたダメージを全て伝えていてはまともに動くことすらできないので、その機能にはレベルとリミッターがかけられているが、多くのトッププレイヤーはリミッターギリギリまでダイレクト・フィードバックのレベルを上げ、反応速度を鋭敏にチューニングしているのが常だ。

この青い騎士も例外ではなかった。現実<sup>リアル</sup>で腕一本を失うに等しい痛みが、今彼を襲っていることだろう。それをかみ殺し、なお仇敵に立ち向かおうとする彼の姿には、鬼気迫るものがあつた。

「じゃあっ!」

片腕一本で長槍を操り、鋭い連続突きを繰り出す。巨軀だが、その速度は軽量級にも劣らない。

しかし相手はストレーガ、一対一では負けなしの鬼神である。しかもその戦闘力は、超絶的な機動性能に由来するものだ。こと速さで比べたならば、遅れを取る理由は何一つとして存在しなかった。

「ぬるい……精進が足らんね。まったく、あいつは何を教えるんだ、キミたちに?」

「聞いた風な口をつ! 思い上がるな、魔女!」

「大した忠誠心だね。だが思い上がってるのはキミのほうだぜ?

その隻腕で僕と渡り合おうなぎ、十三年ほど早いんじゃないかな」  
「貴様<sup>役立たず</sup>がその男をかばっていることに比べれば、片腕などちよつどいいハンデだ!」

「……」

一瞬、ストレーガの目が危険な色を帯びて煌めいた。その両腕が

目にも止まらぬ速さで動き、猛烈な突風 剣を振るったときに起こる『刃風』が、青い騎士の身体を弾き飛ばす。転倒こそまぬがれたものの、大きく体勢を崩す青い騎士。

「こっ……これはっ!？」

「ハンデが……どうしたって？」

確かに青い騎士の装甲は硬い。ブルー・メタルに輝く装甲は、ストレーガが操る細身の双剣を防ぎきり、一寸たりとて斬り込ませない。過日にジェット・バレルとの戦いで用いた豪剣を使えば良さそうなものだが、彼女はあえてそれをしなかった。

何故ならば。

「硬い装甲も考えものだね。時にはこうして命取りになる！」

「ぐはっ! おぐっ! うおっ!」

ストレーガはあろうことか、装甲を斬らず、その衝撃のみを装甲の奥にあるフレームに叩きこんでいた。斬らぬ斬撃 矛盾を体現したその攻撃には、装甲厚などまさしく無意味。どれほど強靱な装甲であろうと、厚みを突き抜けて内部にダメージが炸裂するのだ。卓越した技量と、華奢な見た目からは想像もつかないほどの膂力、圧倒的なまでの剣速。ストレーガが備えるその三つが合わさってこそ実現される妙技だった。

堂々たる体躯に相応しいだけの耐久力タフネスが青い騎士を支えてはいたが、それも時間の問題。やがて足がもつれて、ぐらりと身体が傾く。それを見逃すようなストレーガではなかった。

「はあっ!」

「ぐおっ!」

そのまま懐へと潜り込み、剣の柄でアップー気味に殴りつける。顎を打ち据えられ、今度こそもんどり打って青い巨体が崩れ落ちた。ストレーガと青い騎士には、二回り以上の体格差がある。大人と子供、そういうレベルだ。その差を覆す、圧倒的なまでの戦闘能力。それこそが魔女の真骨頂。

「う、うぐっ！」

「すぐさま立ち上がる、その意気や良し。けど、彼のことをハンデ呼ばわりは許せないんだよね。その醜態で、そんな台詞は吐かせない」

「な、何だと？ 貴様ならともかく、あんな下層の弱小アバターに、騎士団の一員たるこの私が劣るとでも……」

「ふん。じゃあ、その身で知ってもらおうじゃないか。ジェット！」

彼女は双剣をアイテム・インベントリに収めると、戦いを見守っていたジェット・バレルの名を呼んだ。

「な、何です？」

「後は任せた。キミが仕留めろ」

「は、はいいつ！？」

いきなり何を言い出すのだこのヒトは？ と、陸朗の頭の中がクエスチョン・マークで埋め尽くされる。台詞と声は聞こえても、言葉の意味が理解できなかった。

あの青い騎士に喧嘩を売ったのは彼女だ。正体がバレなければ大人しくしているつもりだったと言っていたが、こうなった今はその言葉も怪しく思える。ましてやどうして自分が彼女の尻ぬぐいをせねばならないのか。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 何で俺が……」

「あんなに見くびられて、悔しくないのかキミは!？」  
「いや……事実ですし、あの人の言ってること」

陸朗自身はハンデ扱いに異論はなかった。ストレীগに一蹴される程度の力しかない自分など、足手まとい以外の何者でもない。どれほど自分に甘く点を付けようと、数合なりともストレীগと打ち合えるランカーに勝ち目などないと思っていた。

むしろ感心していたくらいだ。さすがは上位ランカーだ、すげえなあとか、まさしく他人事に思いながら。

「はあ……キミにはやっぱり覇気が足りないなあ。ちょうどいい機会だよ、これは」

「何がちょうどいいのかさっぱり分からないんすけど」

「キミが自分の身の程を知るのにちょうどいいってこと。ほら、行った行った!」

「わわっ!？」

ドン、と背中を押されて、青い騎士の前に転がり出てるジェット・バレル。

ジェット・バレルは決して小柄なペルソナアバターではないが、その彼よりも頭一つ分ほど大きい敵アバターが、彼のことをじろりと見下ろしている。

「……正気か？」

「悪いけど、それはあの人魔女に聞いてくれ」

ぎぎぎつと、軋むような音を立てて、青い騎士の頭がストレীগへと向いた。

彼女は腕組みして壁に寄りかかるといって、完全な傍観者スタイルだ。きつと、あの仮面の下ではいつも通り、美しくも悪辣な笑みを

浮かべているに違いない。

「なんだい、青いの？ ジェットを倒すのは、そもそもキミたち騎士団の目的だったんだろ？ おあつらえ向きじゃないか、彼を倒せたらその首、キミたちにくれてやるよ」

「……『蒼い氷壁』だ」

ジェット・バレル本人を無視して、話がどんどん進んでいる。――ミリも彼の意志を反映する気はないらしい。

「青いの、仕切り直しにするよ。まずはダメージを修復するといい。ジェットに手は出させないから」

「ちよっ！ まっ！」

「……後悔するなよ」

ばちつと音を立てながら、青い騎士改めブルー・グラードの足下で光が弾けた。円状の幾何学的紋様。たとえるなら魔法陣のような。が展開され、そこから立ち上る光の帯が、ブルー・グラードの全身を包み込むと、斬り落とされた腕を初めとして、彼の受けていたダメージがみるみるうちに回復されていく。

対戦終了することでアバターの状態がリセットされるニュートラル・フィールドと異なり、アンリミテッド・フィールドでは、ログインしている間に受けたダメージを回復する手段は限られている。

一つは時間による自動回復。何もせず、その場にとどまっていれば十五分ほどでダメージは全回復する仕様だ。しかし移動していたり、ましてや戦闘を行っている場合は当然回復はストップ。いつ襲われるか分からないアンリミテッド・フィールドで、そんな悠長こととはやっていられない。

そこで登場するのが『リカバー・コード』と呼ばれる回復用アイテムだ。『ペルソナクライン』内の通貨である『クレジット』で購

入することができるそれを、一個や二個は常に持ち歩くのは、どんなプレイヤーでも常識のレベルだ。当然、ブルー・グラードも二、三度全回復できる程度には所有していた。

「災難だな、ジェット・バレル。あのような魔女に目を付けられて」

調子を確かめるように、再生した腕をぐるりと回すブルー・グラード。ストレーガの打ち込みで受けたダメージも、すでに回復しているようだ。

「同情されてもなあ……やることはやるんだろ、あんた？」

「無論。貴様らスピット・ダンプの住民を駆逐するのは、女皇の決定事項だ」

現在暫定支配者の存在しないイケブクロ・エリアにおいて、最大の戦闘力を持っている集団は、ジェット・バレルらスピット・ダンプの住人だ。無論アライアンスに比べれば団結力などないに等しい有象無象に違いはないが、こと共通の『敵』が出てくれば話は別。拙いながらも手を組んで、アライアンスの侵攻を撃退したことは一度や二度ではない。

エリア制圧を狙うアライアンスから見れば、頭の痛い存在だった。

「……俺たちを駆逐してどうする？」

「言うまでもない。イケブクロを獲る……！ ブラッド・ハウンドは、そのための尖兵だった。もつとも、どうやら報告すらできないほどの敗北……『活動臨界』<sup>リミット・バースト</sup>に追い込まれたようだがな」

じろりと睨んだ先にいるのはもちろんストレーガだ。かつて招集状の入手方法を尋ねたときに『蛇の道は蛇』と言ったのはつまり、哀れな『鮮血獵犬』をぶちのめして奪い取ったということなのだろう。



う。

おまけに『活動臨界』<sup>リミット・バースト</sup> 一度に強烈なダメージを与えることで『ペルソナクライン』から強制ログアウトさせる行為のこと。急激な『感覚変換』解除によって神経系に付加がかかる怖れがわずかながらあるため、再ログインするためには一定期間の経過と簡易的なメデイカルチェックが必要になる。に相手を追い込んでいるのだから、その攻撃の苛烈さたるや推して知るべしだ。えげつない。

「同じ騎士団とはいえ直接の面識はなかったが、その無念察するに余りある。せめて奴の任務を私が果たすことで、その慰めとしよう」  
「地上げ屋め。そんなにイケブクロが欲しいのか」

「当然だろう。戦域拡大は全てのアライアンスの悲願だ。貴様や魔女のような野良犬には分かん話だろうがな」

「野良犬、ね」

ランカーが実力の劣る者を見下すのは納得できる。それは強さの裏打ちがあるからだ。上下がランクという数字ではつきりと表れている以上、反論は負け犬の遠吠えに過ぎない。

ましてや、ジェット・バレルには己が汚い方法に手を染めている負い目がある。どれだけ見下されても、その事実に関しては弁解の余地など一片もない。

だが。

「あんたらみたいに徒党を組まないことを、ごちゃごちゃ言われる筋合いはねえんだよな……！」

思考内デスクトップから、アイテム・インベントリにアクセス。

実体化したのは、愛用のロング・ライフルよりもさらに大型の火砲。攻城戦などで用いられる、大口径破碎榴弾砲『ストライク・ワゴン』だった。

「おっ……」

黙って会話を聞いていたストレীগが、小さく声を上げた。ジエツト・バレルのやる気を感じたのだろう。

「そんな武器、持ってたんだ。いいチョイスだよ。でも……」

「分かってる。そうそう当たるもんじゃない、こういうのはな」

「ふふ、分かっているならいいさ。上手くやんなよ」

その声はどこか楽しげだ。傍観者ですらない、ただの『観客』だ。手など一切出さない、魔女は暗にそう言っているようだ。

だが、それに異など唱えようはずもない。いや、手など出させない。陸朗にだってプライドはあるのだ。踏みつけられても、蔑まれても黙り続ける案山子ではない。

ブルー・グラードは彼を野良犬と呼んだ。しかし、野良犬は野良犬でも彼は飼い犬崩れではなく、鋭い牙も爪もある『野生の猛犬』オオカミだった。

## 2 - 4 野良犬（後書き）

魔女は設定上強すぎるので、バトルはどうしても一方的になってしまっなあ。

五分で戦える奴を早く出さないと……。

あとオオカミってルビは無茶があると思う、我ながらw

## 2 - 5 蒼い氷壁

対峙する二人のペルソナアバター、『ジェット・バレル黒い銃身』と、『ブルー・グラード蒼い氷壁』。鎧兜に身を包んだブルー・グラードに比べると、装甲を外し軽量化を図っているジェット・バレルの見た目は、あらゆる意味で対照的だ。

構える巨砲『ストライク・ワン』は、確かにブルー・グラードをも撃ち崩せそうな威容であった。しかし、それを支える両腕はフレームが剥き出しになっており、あまりにも細く頼りない。

脆弱さを補うように、分厚いディフェンス・プレート携行防盾が砲の機関部に取り付けられているものの、それでも彼の身を全て守るには足りないだろう。どうしてもこの超重量は足かせになるし、的になる。

通常、このクラスの重火砲は攻城兵器として使われることが多い。大地に身体を固定し、イナーシャル・キャンセラー慣性中和装置を併用して、反動を軽減させて使うのが常だ。持ち運んで使うにしても、それは重量級アバターであることが多い。高機動射撃を得意とする軽量瘦躯のジェット・バレルが使うには、あまりにも不釣り合いだった。重火砲の、そしてジェット・バレル自身の長所を、互いに潰してしまう。ミス・マッチ 常識的に考えれば、そうなる。

だがそんなことは分かっている。自分の武器だ、エモノジェット・バレル自身だって弱点など百も承知だ。だがそれでも、これを使わなければいけない理由というのはある。

かつて魔女との戦いで、アバター・ランクの差によるダメージ補正によって苦汁をなめたことは、彼の記憶に新しい。上位ランカーとの戦いは初経験だったが、それゆえに鮮烈に記憶に残ったのだ。単純な攻撃力不足、彼はそれを懸念した。ストレーガの打ち込みを弾いたあの防御力を、低く見積もるのは愚者の思考。それゆえにジェット・バレルは愛用のロング・ライフルではなく、この火力に特化した重火砲を選んだ。刺さらぬ矛に意味はない、軽装タイプの

機動力という自分の利点を捨てても、火力を選ぶ必要があったのだ。もちろん、それを補う方法は幾通りも準備した上で、だが。

(よし……)

両手でぶら下げるように『ストライク・ワン』を構えながら、相手のブルー・グラードの様子をうかがう。

相手もまた、左前に槍を構えて『見』に徹しているようだった。だが見た目ほど重心を大地に預けてはいない。曲げた膝の具合から、いつでも動き出せるよう力を溜めているようだ。あたかも、獲物に飛びかからんとする猫科の猛獣のように。

相手は仮にもランカーだ。自分と比べてどちらが強そうに、あるいはどちらが格上に見えるかといえば、考えるまでもない、間違いなくブルー・グラードのほうが。

実力も同様だろう。地力に勝る相手に、ペースを掴まれたら負ける。そう確認した瞬間だった。

「まずはッ！！」

ブルー・グラードが動いた。

先手を取られた！　だが、理にはかかっている。『ストライク・ワン』のような重火砲を装備したアバターは、接近戦では滅法弱い。撃たれる前に間合いを詰めれば、恐るるに足りない。それもまた教科書通り。

彼の判断に間違いはなく、繰り出される長槍がジェット・バレルの仮面<sup>ヘルツナ</sup>を捉え、貫かんと唸りを上げた。

(……怯むな！)

迫る槍。だがジェット・バレルは　陸朗は、己を叱咤し乱れた

心を一瞬で押さえ込めると、まっすぐにブルー・グライドの巨体を見据え、迎え撃つ。

「はアツ!」

狙いを定めている余裕はない。重火砲をがっちり抱え、気合いとともにトリガーを引き絞った。

砲口が蒼白く輝き、チャンバーから砲身で加速・圧縮され熱光体と化した情報粒子が、奔流となってほとばしる。

「当たるかッ!」

かわすまでもなかった。轟音はブルー・グライドをかすめただけで、光はその身を打ち据えることはない。

しかし、それでいいのだ。当たれば幸運、だが外れても不運ではない。

なぜならば。

「一撃で仕留めて……何ッ!」

繰り出した槍が空のみを穿つ。さっきまで、確実にジェット・バレルはそこにいたというのに。その身は一瞬で遙か彼方へと移動していた。そう、遠距離戦<sup>アウトレンジ</sup> 彼が得意とする距離へと。

「反動を使ったか。いいね、いいね、その発想。そういう突拍子もないことなのさ、僕がキミに求めていたのは!」

魔女の嬌声上がる。手を叩きだしそんな口振りだ。

「反動? まさか重火砲を撃った衝撃で移動したというの……ぬあ

っ!？」

ブルー・グラードの動揺を突いて投げつけられた『何か』が、その頭部を直撃する。爆弾 投擲タイプの円盤状地雷ディスク・マインだった。

「くそっ！」

ブルー・グラードは慌てて向き直るが、すでにジェット・バレルはその場にいない。

ジェット・バレルはスラスターを吹かして間合いを取りながら、さらにディスク・マインを構え、投げつける。このタイプの武器は威力よりも爆風によって視界と行動を遮ることができるのが最大の利点だ。

(この間合いを……維持するッ！)

相手の行動を制限し、制圧する。それはジェット・バレルのような砲撃戦タイプのアバターにとって、絶対の真理であり奥義だ。

反動で移動するという奇策は、二度も三度も使えるものではない。速いとはいえ直線移動、それに無駄撃ちであることには違いがない。読まれてしまえば射撃後の無防備な瞬間を狙われるのは必然。

動け、止まるな。そう己の足を叱咤し、重い火砲を抱えて走り続ける。

インファイトは相手の土俵。そこに踏み込んだら負けの覚悟で、ディスク・マインの爆風を利用し、相手の行動を遮り移動時間を稼ぐ。相手の自由を奪うこと、自分の自由を奪われないこと。それが銃使ガンナーいたる者の忘れるべからざる心得だ。

ジェット・バレルは奇策を好む。相手をいかに出し抜くか、そればかりを考えて、戦いに臨む、そんな男だ。カタにはめて勝つ、そういう戦い方こそ、彼が本来望み求めるものだ。そのために、彼は

銃使いガンナーとなつたのだ。

布石を打ち、罫を張り、策を練り、敵を追い込む。すなわちそれは、当たるべくして当たるのだ。その戦術に偶然はなく、ただ必然のみが積み重なって現出する。そう、彼は勝つべくして勝つ。その行動は、全て同じベクトルを向いている。

「そこおっ!!」

ディスク・マインによつて徹底して追い詰めたブルー・グラードに向けて、『ストライク・ワン』スライアが火を吹いた。

高密度の熱エネルギーをこの世界において再現された必滅の砲火は、空を裂く一条の蒼白の槍となつて、標的へと殺到する。

そう、まさに殺到だ。本体の半分を占める巨大なエネルギー・ドラィヴが生み出す出力は、その本来の役目である対城兵器の名に恥じぬもの。溢れ出した死を呼ぶ光の奔流は、今度こそブルー・グラードの巨体を飲み込んだ。かに見えた。

「なんのおっ!!」

「流石と言つべきかよ!!」

ドームのように拡散・膨張・炸裂する光体の向こうで、青いアバターが一瞬見えた。動いている、直撃していない。ランカーの意地か、狙い澄ました一撃を、彼は辛うじて避けていた。

いまだ荒れ狂う光の残滓を突き破るようにして、ブルー・グラードが踏み込んでくるのが分かった。手にした槍はしっかりとジェット・バレルを狙っている。ダメージはほとんど見られない。

詰められる。着弾確認の分だけ、初動が遅れた。今度こそ当てる気で、仕留める気で撃つたことが裏目に出た。判断を誤つたと後悔する暇はない。あの構槍突撃は避けきれない。当たる、そしてそこからおそらく横への薙ぎ払いへシフトするだろう。剣ならともか



く、槍のレンジは広い。一撃目を耐えてから動き出したのでは、薙ぎ払いという追撃をかわしきれない。どうする　！？

「……コイツでっ！！」

ジェット・バレルは左腕にディスク・マインをロードすると、投擲するのではなく、それを手にしたままブルー・グラードへと殴りかかる。いや、正確に言えばブルー・グラードではない。彼の手にした長槍、それこそが標的。

「自爆する気か！？」

「南無三ツ！！」

長槍がディスク・マインを貫く。穂先によって裂けた構造材から、内包されたエネルギーが溢れ出し、爆風が炸裂する。

ブルー・グラードにとっては、今日何度も味わってきたもの。視界を遮り、足が止まることは厄介だろうが、彼の装甲からすれば威力は脅威になるほどではない。装甲表面を少々削り取る程度のものだ。何発も喰らい続けるのでなければ問題なかった。

だが解せないのだろう。なぜ、ジェット・バレルがこのような真似に及んだか理解できず、苛立ったように叫んだ。

「くっ……何のつもりだ！？　そんなに私の槍が怖いか！」

「ああ、怖いね」

少し離れたところに立つジェット・バレルが答えた。詰めたはずの間合いが、また開いている。

「なにっ！？　そうか、今度は爆風を利用して……身体を後ろに流したというのか！」

「あんたの槍はずいぶん堪えそうなんですね。爆風で装甲を焼いたほうがなんぼかマシだったのさ」

「こんな避け方があるとはな……！」

ブルー・グラードの声には、隠しきれない動揺が滲んでいる。文字通り捨て身の回避、下手をすれば爆風も槍も喰らっていたような際どい動きだ。

実のところ、ジェット・バレルは無傷ではない。そもそもが余波で大きく吹き飛ばされるような軽量軽装甲のアバターだ。爆風を浴びれば、頑強さが自慢のブルー・グラードのように、装甲がわずかに削り取られるくらいでは済まない。

コンソール・パネルに表示されたジェット・バレルのライフ・ポイントはおよそ七割にまで減っていた。

楽な戦いではない。

それは、最初から分かっていたことだ。あの魔女は、ストレージジェット・バレルにいつだって無理難題しかよこさないに決まっているのだから。

けれども、きつと 出来ないことは口にしない。そう、信じていいたいような気がした。

ちらりと魔女を見る。仮面の奥にあるその目から表情を押し量るのは難しいが、決して機嫌が悪そうには思えない。むしろ得意げに自慢を口に出しているかのようだ。

どうだい、なかなかできるだろう、キミってやつも。僕の見立ては間違ったりしないのさ という感じに。

彼女が言いそうなことが、自然に思いつく。まだ三日の付き合いだというのに、随分と密度の濃い交流をしているからだろう。戦いというコミュニケーションは、案外言葉よりも雄弁に本人を語るも

のだ。

ブルー・グライドとの交錯も同じだ。あくまでもなんとなくだが、その傾向は掴めてきていた。

彼は勇猛だ。誇るべき闘志の持ち主だ。しかし 少々、搦め手に弱い。矛を交えたからこそ、その性向が明確に分かる。

どこまでいっても、ブルー・グライドは『騎士』なのだろう。自らのプライドに拘り、節を曲げることができない。だからジェット・バレルが仕込むちょっとした策で、たやすく翻弄される。それでも彼がランカーという地位にいられるのは、ひとえに反応速度や決断力といった、プレイヤーとしての基礎能力に恵まれているがゆえ。しかし、そこから生まれる自信こそが、ジェット・バレルの付け入る隙になる。

「くっ……この間合いでは！」

「おっと、近付かせるか！」

自分の得意距離ベストレンジへと詰めようと焦っていたブルー・グライドに、装甲に内蔵してあるホーミング・ミサイルをお見舞いする。鼻っ柱に直撃されて、角の付いたバケツのような形の頭が大きく揺れた。

「ぐおっ!?!」

「はははっ! 凹んだバケツになっちまったな」

「お、おのれえっ!」

安い挑発にも簡単に乗ってくる。同格の相手ならばまた別なのかもしれないが、格下に馬鹿にされるのは、我慢がならないのだろう。その気持ちはよく分かる。だからこそ 利用する、させてもらう。

「シュッ!」

地面を滑走させるように、アンダー・スロー下投げでディスク・マインを投擲。本来、これはこうして地形に這わせるようにして使うものだ。さつきまでのように手榴弾のごとく投擲するのは、いささか定石から外れていた。

ディスク・マインの本来の使用方法。それは設置することにある。スピンをかけて投げることにより、ディスク・マインは投擲先で停滞。地形に張り付いたようになる。その様はまさしく『地雷』マイン。ディスク・マインの名の由来は、偏にこの使用方法にあった。

一つ、二つ、三つ……アイテム・インベントリからありつただけのディスク・マインを連続でロードし、次々に設置する。ちょうど、ブルー・グライドを取り囲むような格好にだ。逆上し、突っ込んでくる彼の動きを先読みするのは、それほど難しいことではない。

「しまった!？」

ここに至って、ようやくブルー・グライドも自分の失策を理解したようだった。行く手を埋め尽くすような無数の地雷を前にして、思わず足が止まる。

飛ぶか、征くか。二つに一つだ。ここで止まれば狙い撃ち、ブルー・グライドの立場からすれば、どちらかを選ぶしかない。しかし重装甲であるがゆえに、ブルー・グライドは空中機動性に劣るのは明らか。飛べばジェット・バレルの対空射撃の的になるのも、また目に見えていた。

ブルー・グライドは征くしかない。たとえ、それをジェット・バレルに選ばされたことが、分かりきっていたとしても。

「たかが! 地雷ごときでっ!」

雄叫びと共に、ブルー・グライドが地雷を踏み越える。投擲とし

たときとはわけが違う、踏まれた荷重で起爆したディスク・マインは、その爆発エネルギーを正しく上方向へと集束させる。『地雷』マインの名が付くのは伊達ではない。

無論これだけで倒すことはできない。ブルー・グラードにもランカーとしての意地がある、傾きはしても膝を屈するには至らない。しかしそれでも、確実に動きは鈍る。爆発と閃光に怯むのは人の本能、あらがえるものではない。進み討ち果たすその覚悟が、ジェット・バレルに届く前に途切れる。

動きが止まった。撃ち抜くのは、今　確信とともに、トリガーを引き絞ろうとしたその時。

「エンプレス・オーダー白銀騎士団を……なめるなっ!!」

咆吼と共に、構えた槍を大きく振りかぶる。

「なっ……!!?」

まさか、と考えるよりも速く、長槍がブルー・グラードの手から離れる。甲冑に包まれた太い腕から放たれた一撃は、音速の壁を突き破り、巨大な矢と化してジェット・バレルへと襲いかかった。

避けられない、すでに腰を落とした射撃体勢に入っていた。逃れられない直撃、ここまで追い詰めてからの逆転敗北が頭をよぎる。投擲された槍の勢いは凄まじい、喰らえば残り七割のライフ・ポイントを丸ごと持っていかるのは確実。投槍のサイズではない、投擲はないとタカをくくっていたツケを支払うことになる。

「さ……せるかあっ!!」

悩んでいる暇はなかった。トリガーから指を離すと、足をしっかりと踏ん張り、身体全体を使って『ストライク・ワン』を振り回す。

ディフェンス・プレート  
携行防盾を前面に立てて、迫り来る槍を迎え撃った。

「ぬあつ！」

まず衝撃が肩を、そして全身を襲う。踏みしめた踵が地面に食い込み、耳障りな擦過音を立てる。金属が引き千切られるような音とともに、もう一段上の衝撃が叩き込まれ、身体が後ろへと流される。防ぎきれなくなった携行防盾を槍が貫通し、本体である重火砲の機関部へと食い込んだのだ。

もはや槍が盾にした『ストライク・ワン』ごと自分を貫くのは時間の問題。その幻像がはつきりと見える。弱い考えが生み出すその幻を打ち払えと、己の心に活を入れ、しっかりと重火砲を握り直した。

「ここですっ！」

ついに機関部を槍が貫く。その瞬間全身を捻り、『殺意』の顎から身を逸らした。ジェット・バレルの脇腹を、槍の穂先がかすめていく。だが、それだけだ。槍はアバター・フレームに突き刺さることなく、重火砲を串刺しにしただけで、止まった。

だが……。

「ぬおおおっ！！」

「ッ！？」

殺気を感じ振り返れば、そこには腕を振り上げ、殴りかかろうとするブルー・グライド。防御に徹している間に、間合いを詰められていた。足下からはぶすぶすと、地雷で焼かれた装甲が煙を上げている。それでも足取りに弱さはなく、ただジェット・バレルを討ち果たさんとする気概だけが、彼の身体から満ちていた。

「素手同士なら、負けんツ!!」

「が……はあっ!?!」

鉄拳をまともに喰らった。顎 いや、頬か。

圧倒的な体重差は、ジェット・バレルに踏みとどまることを許さない。槍を受け止めたとき以上の衝撃で、真横に身体を吹き飛ばされる。

(ダウンは……できないツ!)

転んでしまえばアウトだ。マウントポジションを取られ、ライフ・ポイントがゼロになるまで殴られ続ける。ここで立て直さなければ、反撃の目はない。

瞬間的にスラスターを吹かし、無理矢理体勢を整える。一瞬だけ地面に足をつけると、そのまま地面を蹴った。横でも後ろでもない、ブルー・グラードの懐へ向かって飛び込む。

「なにっ!?!」

「あんたのせいで重<sup>エモ</sup>火砲はオシャカだ! 間合いを取る意味はねえ!」

機関部を貫かれ、機能を失った重火砲は、もはや単なる鈍重な金属の塊でしかない。だが、いちいちそれを手放している余裕はもはやなかった。

「白兵戦で、その細腕で勝てるっても!」

「勝てるかじゃない! 勝つんだよツ!!」

今までとはまったく逆のベクトルを向いた行動に、一瞬だが動揺

したブルー・グランド。だがすぐさま意識を敵へと集中すると、追撃を加えんとばかりに襲いかかる。やはりランカー、強者だ。槍はなくとも、白兵戦は己の土俵とばかりに、その動きには躊躇がない勝てるという確信が、その拳から溢れている。

事実、そうだ。先ほどの拳一発で、さらに一割強ほどライフ・ポイントを削られた。今のジェット・バレルを五発か六発殴るのは、それほど困難なことではない。

だから、

「喰らうわけにゃあ、いかないんだっ！」

「なにいつ!?!」

「撃てなくたって、こういう使い方だつてあるっ!?!」

わずかに身を沈め、構えた重火砲をスパイクのごとく地面へと突き立てる。だが身体の勢いは止まらない、突き立てられた場所を起点に、砲身ごと身体が跳ね上がる。

「と、跳んだっ!?!」

「うらあっ!」

だがそこで重火砲を放さなかった。腕の力、体重移動、スラストの推力。全てを活用して、重い金属の塊であるそれを引き上げる。それに意味はあるのか。もちろんある、あるに決まっている。そうでなければ、やりはしない。

「こいつで、どうだあっ!」

「な、なんだとおっ!?!」

重火砲の機関部を、ブルー・グランドの頭上へ力任せに振り下ろす。すでに火器として役には立たない『ストライク・ワン』だが、



その質量そのものは破損前と変わらない。そう、ジェット・バレルは超重量の打撃武器として、重火砲を使ったのだ。

ただでさえアバター一人分に匹敵する重さを持つ金属塊だ。その上運動エネルギーを加えて叩き付けられれば、いかに防御力が自慢といえど、ひとたまりもない。

「ぐがあ……っ！」

ぐしゃり、と金属が変形する嫌な音を立てながら、一撃で半壊するブルー・グラードの頭部。だがそれでも倒れない。彼を動かしているのは、栄光の『エンプレス・オーダー白銀騎士団』としての矜持か、それとも格下に負けられないという意地か。

「……しぶとい！　だが、これで！」

だが、どちらであろうと今尽きる。

着地したジェット・バレルは、『ストライク・ワン』に突き刺さっていた槍を引き抜くと、原型を止めていない頭部へと、決り込むように突き立てた。

金属が裂け、情報粒子のスパークルが迸る。ペルソナアバターにとって、頭部は絶対的な弱点だ。破壊されれば、一撃でノックアウトもありえるほどの。

しかし、頭部を串刺しにされてもなお、ブルー・グラードは数秒間痙攣するように動いていた。それでも　やがて、ゆっくりと膝から崩れ落ち、ついにその動きを止めた。

ジェット・バレルの思考内デスクトップで、コンソール・パネルの数字が変化する。勝利数が一つ、カウントされて　戦いは、終わった。

## 2・5 蒼い氷壁（後書き）

青騎士戦決着。

いきなり魔女にポコポコにされてるほどの基本噛ませなんですが、書いてみたら意外に長くなった。

このあと出すキャラの戦闘描写と被らないように気をつけないとなあ。

## 2 - 6 白銀騎士団

「ははっ、やったじゃないか！」

疲労から重火砲に身を預けるようにして立つジェット・バレルに、ストレーガが駆け寄って祝福する。喜色溢れる言葉は、まるで我がことを喜ぶかのようだ。

「ま、なんとか勝ったって感じですが」

「いやいや、僕は信じていたよ。キミはやれば出来る子だって。ちよろいもんだろ、ランカーなんてのはさ」

「そこで「はい」なんて答えられるほど、俺は思い上がってません」

「んー、謙虚だねえ。まだ自信が足りないかな？ よし、もう一人くらい手頃な相手を見つけて……」

「頼むから勘弁して下さい……」

腕を掴み、引き留める。こうでもしないと、魔女は本当に敵を探してきてしまいそうだ。

「えー、なんでだい？」

「気力が尽きました。もう集中できないですよ、今日は」

「ふむ、今後の課題は精神面の鍛錬、と。特訓メニューを組んであげよう」

「謹んでご辞退申し上げます」

どうやら師匠ポジションを狙っているらしい。冗談ではなかった、彼女の基準で特訓などされた日には、アバターはおろかりアルの方まで再起不能になるのは確実だ。是非とも遠慮したいところである。

「そうかい？ 僕、キミはまだまだ強くなれると思うんだけどね。今の戦いを見て、もう疑いようはないと思ったんだけど」

「相性とか、幸運とか、自分の能力以外のところにはずいぶん助けられた気がしてるんですがね、本人としては」

「バカなことを。まぐれでどうにかなるような……」

「い、いいや……まぐれ……だ！」

すつと、二人の頭上に影が差す。

ブルー・グラードが、二人の背後に迫っていた。リカバー・コードを再度使ったのだらう、めちやくちゃになつたはずの頭部は、ゆつくりと再生しつつある。それでもまだ本調子ではないようで、その動きはのろく緩慢だ。しかしそれがかえって、得体の知れないゾンビのような不気味さを感じさせていた。

「なっ……いつの間に!？」

「やれやれ、往生際が悪いね」

ジェット・バレルを守るように、ブルー・グラードの前に立ち塞がるストレーガ。言葉には、明らかに不快感が滲んでいる。折角の勝利、彼への祝福に水を差されたと、腹を立てているのは明らかだった。

軽蔑を滲ませたその言葉。だが、敗北者は気付く様子もなく、威嚇するように両腕を広げて、ただ妄言を吐き散らす。

「認めんぞ……こんな結果は……! 薄汚い手を使ったのだらう!

? スピット・ダンプの野良犬が、私を倒すことなどできるはずが……!」

「使っていない、キミは地力で負けたんだ。見苦しい真似は止すんだね。自分がマヌケだと、世に喧伝するだけだよ? 彼への侮辱は許さない」

「ふざける！ 魔女の言葉など、信じ……！」

ブルー・グラードの台詞は、最後まで口にされることがなかった。

「が、がはあっ！？」

彼の腹部を、鉄柱のようなものが貫いていた。

いや、柱ではない。よく見れば、それは円錐を途中で断ち切ったような形状で、側面には荒々しい『刃』が幾筋も走り、円錐の断面まで伸びている。どこことなく、トンネル掘削用のシールド・マシンを彷彿とさせる形だった。先端こそ尖っていないが、全体の雰囲気は騎兵槍ランスに近い。ただし、尋常でないほど大きいのだが。

「ぐ……あ……！」

ゆっくりとした動きで、後ろを振り返ろうとブルー・グラードが身体を動かす。

だが、自分の胸幅ほどもある巨大な槍に串刺しにされているのだ。ぎこちなく捻って傾けることしかできない。しかし、がくがくと震えるその身体は、腹部へのダメージだけが原因でないように見える。恐れている、そして怯えている。そういう印象を受けた。

「ジエツト……！」

「分かりますよ。誰か、来る……！」

人の気配を感じた。ブルー・グラードの肩越しに、視線をホール  
のほうへと向ける。

いや、それは本当に人であるのか。ズシン、ズシンと地面を揺らすほどに重厚な足音を立てる者が、本当に人なのか。

凄まじく重い、凄まじく巨大な何かが、こちらに近付いている

それはきつと、錯覚ではない。

「気をつけて、ジェット・バレル。この『ミンチ・ランサー重戮槍』を使うのは、騎士団ではたった一人だけ。奴が来るよ」

「奴……？」

この巨大な槍を投げた相手に、心当たりがありそうなストレীগの言葉。しかし、誰ですかと問うまでもなかった。

ほどなくホールゲートから、一人のペルソナアバターが姿を見せる。ぬうつと現れたそのアバターは、天を突くという言葉が相応しい超巨体の持ち主だった。

最大サイズのH級フレームを持つブルー・グライドよりも、さらに二回りは大きい。高さも、横幅も、そして厚みも。彼と同じ騎士甲冑に似た重装甲を身にまとっているようだが、見るからに堅牢なその威容は、もはや二足歩行する銀色の戦車にも等しく思える。いかなる手を用いてアバターとして成立させているのか、規格外としか言いようのない巨大な体躯の持ち主だった。

「……き、騎士団長……！」

「痴れ者め！ 敗者が勝者に背中から襲いかかる法があるか！」

エフェクターを通した合成音声が、半死半生のブルー・グライドを轟く雷鳴のように激しく怒鳴りつける。

騎士団長と呼ばれたアバターは、まだ突き刺さったままのミンチ・ランサーに手をかけると、軽々と彼の身体ごと持ち上げた。あの重量級アバターを、片手でだ。恐るべき臂力としか言いようがない。

「女皇の配下に恥知らずは要らぬ！」

ミンチ・ランサーの握り手近くに取り付けられた、大型レシプロ

エンジンにも似た機関部が唸りを上げる。本体の『刃』が振動し、あたかもチェンソーのように高速で動き始めた。ガリガリと音を立てながら、アバター・フレームが内側からえぐり取られていく。『挽肉作成機』の名を冠するのは伊達ではない。

「ゆ、許し……」

「……猛省せよ……！」

ブルー・グラードの懇願は一切聞き入れられることなく、騎士団長がミンチ・ランサーを横真一文字に振り抜いた瞬間、その五体が木っ端微塵に爆散した。残骸すら残らない。

彼のアバターは全てが情報粒子の光塵となり、スライア世界の風へと溶けていく。これこそ、アバターが『活動臨界』リミット・バーストを起こしたとき特有の現象だった。

「す、すごい……！」

ブルー・グラードの防御力がどれほどのものか、実際に立ち合ったジェット・バレルはよく知っている。自分だけではない。おそらく本気でなかったとはいえ、一度はストレーガの剣すら弾いているのだ。けっして脆いわけではない。

だというのに、その青い重装甲を易々と貫き、ガラクタのように槍の一振りですれどごと粉々に打ち砕く。騎士団長の名に恥じぬ、凄まじいまでのパワーに、戦慄さえ覚えた。

「あいつは、一体……？」

「覚えておくんだ、ジェット・バレル。あれが白銀騎士団ナンバーツィ、ガウエイン『太陽の騎士』。通称『不死身のガウエイン』だ」

騎士ガウエイン。それは『アーサー王伝説』の登場人物として知られている名だ。アーサー王の側近、かの有名な『円卓の騎士』の一員にして、至誠忠勤から『忠義の騎士』とまで呼ばれる騎士の鑑である。

その名を冠しているのは伊達ではないのだろう。この『太陽の騎士』もまた、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』という主に仕える忠臣に違いなかった。女皇の名誉を汚そうとしたブルー・グラードを、かくも苛烈に処断したことから、それが分かる。

しかし、そんな忠義の塊のようなところこそが、ストレীগの気に入らないところのようだった。皮肉たっぷり口を開く。

「やあガウエイン、騎士団長ともあるう者が、わざわざ出迎えにまで出てくるとは。団長職はいつから使いつ走りになつたんだい？」

「黙れ、魔女。貴様の言葉は聞くに耐えぬ」

「ふん、つれないじゃないか。偉くなったものだね」

「下野した貴様に言われる筋合いはない。それとも地位に未練があるのか、俗物」

「勘違いしないでほしいな。そんなくだらないもの、興味なんてあるものか」

ビリビリと、二人の間の空気が帯電していく。スパークする情報粒子が、目に見えるくらいに。

なるほど二人は間違いなく旧知であるうが、同時にこの上なく険悪な関係でもあるようだった。

「……女皇の命令がなければ、脳が焼け落ちるまで何度でも『活動臨界』に追い込んでやるところだ」

「寝言は寝てから言うものだよ？ できっこないね、お前じゃ無理さ、ガウエイン」



「いつまでも己が最強であると思わぬことだ、魔女」

ガウエインの剥き出しの敵意を感じた。無論それは直接ジェット・バレルに向けられたものではない。にも関わらず、装甲表面に無数の針を突き立てられるかのような錯覚を覚えた。センサーの故障ではないかと、一瞬疑ってしまったほどだ。

肝心の魔女とはいえ、意外にもガウエインの敵意を平然と受け止めていた。剣を抜くことすらしない。まるで相手が襲いかかってくることはない、と、確信しているようだ。

いや、事実確信しているのだろう。ガウエインは先ほど『女皇の命令』と口にした。騎士団長の地位にある者にとって、その命令は何よりも重いはず。どれほど遺恨があるかは知らないが、女皇の意向に背いてまで牙を剥くとは思えない。

それでも、自分たちを見下ろすその巨体から、いくばくかの怖れを感じずにはいらなかったが。

「ほらほら、子供じゃないんだ。いつまでも面白いこと言っていないで、使いつ走りらしく用事を済ませたらどうなんだい？」

この人は他人を怒らせる天才なんじゃなからうか。ロールプレイ演技というものをまったく行わず、日常生活の延長としてスラスラと罵倒が出てくる。どういふ育ち方をすればこれだけ悪口雑言に長けるのか、秘訣を教えて欲しいくらいだ。

「ふん……」

鼻白んだ様子で、ガウエインが踵を返して歩き始める。口では何も言わなかったが、ついて来いという意志が感じられた。

「……どうします？」

「どうしますも何も、行くに決まってるじゃない。何のためにわざ

わざとこんなところまで来たと思ってるのさ？」

さっさと歩き出すストレーガ。

それをもったいぶって、正確なところを教えてくれないのはあんなです。そんな恨み言を喉の奥に飲み込むと、その背中を追って歩き始める。

ストレーガとガウエインのあいだに、かつて何があったのか。隣を行くストレーガに目を向けるが、仮面の奥に表情を隠した彼女は何も語ることがない。仮面のアバターはこういうとき、不便だ。すぐ横にいる人間の顔色さえ、伺い知ることはできないのだから。

「……まあ、キミの聞きたいことは分かるよ」

「うえっ!？」

「そんなに驚かなくても」

「あ、いえ……」

心の中を読んだかのような彼女の言葉に、思わず声が裏返った。いや、ストレーガなら、秋月雪乃であるならば、他人の心の一つや二つ、読み切ることができて不思議はない。そう思わせるだけの雰囲気、彼女は身にまとっている。経験の為せるものだろうか、それとも、

「ま、すぐに分かるさ、すぐにね」

「そう……ですか」

話を打ち切るように、ストレーガはそう言った。

そんな風に言われてしまえば、首を縦に振るほかない。反論するための根拠を、彼は持ち合わせていないのだから。

「ちょっとは期待してもいいよー？ きっと退屈はしないだろうし」

愉快そうに彼女は「ふふん」と鼻を鳴らす。

嫌な予感しかない。

確かに彼女にとっては『退屈しないこと』なのかもしれない。だがジェット・バレルにとってはトラブル。それも、超弩級の厄介事が、この先に待っているようにしか思えなかった。

鬼が出るか蛇が出るか。そう身構えていたジェット・バレルが連れて来られたのは、ホールというにはあまりにも広すぎる空間だった。

広さはちよつとした野球場ほどもあるだろうか。これまでの場所のように無機質なデザインではなく、どこか古代ローマ「コロッセオ」の闘技場を思わせる雰囲気だ。

数千人は収容できそうな客席部分には誰もいない。代わりにホルの中央部に百人はくだらない数のアバターが集まっているのが見える。『エンプレス・オーダー白銀騎士団』のランカーたちとそのパートナーだろう。

整然と並び、控えた彼らの姿からは、美しささえ感じる。整えた隊伍は誰のためであるのか。

考えるまでもない、自分やストレীগに見せるためではないのは明白だ。二人は招かれざる客、彼らにしてみれば『ブラッド・ハウンド血色獠犬』と『ブルー・グラード蒼い氷壁』という同胞を討ち果たしてきた紛れもない襲撃者だ。そんな相手を、これほど丁寧に迎える謂われはない。

「まったく……ヒマというかムダというか。どうして大きいアライアンスは、こういう過飾が好きなのかね？」

「俺に言われても……」

大アライアンスに所属などしたことないのだから、分かるわけが

ない。それでも推測するなら、集団を維持するためには力を見せる必要がある、とかだろうか。分からない話ではない、昔から閲兵式とか馬揃えとか、支配者が己の力を天下に誇示するイベントは存在する。そういうものなのだろう。

『聖銀の女皇』というアバターについては名前くらいしか聞いたことがないが、きっと自己顕示欲が強いタイプに違いない。

「いや、真逆だよ。どちらかといえば彼女は控えめでね。大人しすぎるくらいで、自分に自信がない。いつもどこかの誰かに頭を下げている……そんな子だったよ」

「……詳しいですね」

「色々あってね」

ストレーガはそう言って、軽く肩をすくめる。その言葉にどこか寂しそうな雰囲気混ぜていたのは、ただの気のせいなのだろうか。

「ま、何にせよ、はつきりしてるのは……」

ストレーガが脚を止める。

「ろくなもんじゃなかったことさ。このアライアンスは、何もかもね」

シールド・コンタクトに覆われたその眼は、並んでいる『白銀騎士団』の騎士たちの最奥に向いていた。どこか冷ややかに、彼らを見つめるストレーガ。静かに、誰かを待っているようだ。

前を歩いていたガウエインが、一步横に動いた。道を空けるように脇に控えると、騎士達もまた、その列を左右に分けていく。モーセを描いた映画『十戒』で紅海が神の力によって二つに割られたよ

うに、一人の存在の意志が彼らの隊伍を二つに割っているのだ。

並び立ち塞がる騎士たちによって隠されていた反対側に、一筋の道が出来た。魔女のいる場所から、真つ直ぐに伸びる道が。

「ふん」

あまりにも芝居がかった大仰な演出に、鼻白んだように小さく声を上げる。腕を組み直し、開いた道の向こうから来る者を待ち受けた。

「……誰が来るのか、聞かないのかい？」

「今さら……分かりますよ、もう。俺のことバカだと思ってませんか？」

「ははは」

否定しなかった。バカとされているのかもしれない。

だが実際、バカでも分かるだろう。訓練したのか、それが忠誠心から出るものか、そこまでは分からないが 騎士たちがそこまでしなくてはならない存在など、ただ一人しかありえない。

「あれが……！」

ジェット・バレルの視線の先に、人影が現れる。

それは白銀色のマントを身に纏ったような姿をした、女性型のアバターだった。

放熱索を兼ねた長い髪は、ホールの照明を受けて、虹色の輝きを帯びているように見える。手には杖 中核コアとなっている赤い宝珠の周りを囲むように黄金色の金属フレームが配置され、さらに刃のように鋭い三日月型の金属板が取り付けられている。何を模してどのような杖を持っているのかは分からないが、白銀のような色をし

たマント状の装甲版と相まって、どこぞの神妙なる神官のような印象があった。

アバターの美しさという意味では『剣の魔女』<sup>ストレীগ</sup>も相当なものだが、彼女はそれとはまったく別ベクトルの美しさを持っているように見えた。

圧倒的存在感だ。彼女と比べれば、騎士団長と呼ばれたガウエインですら霞む。誰しもが、そこに在ることを無視することができない。そんな強烈な個性が、記憶に焼き付いた。ジェット・バレルは、彼女の姿を忘れることはないだろう。少なくとも、この『ペルソナクライン』をやめるまでは。

「……ようこそ、と言つべきでしょうか？ それとも、久しぶり……かしら？」

ゆっくりと歩きながら、銀色の仮面を付けたアバターは言った。鈴の音のような、とでも言えばいいのか、とても澄んだ。それでいて、どこか蠱惑的な魅力の声だ。けっして大きくないのに、よく通る。上質の陶器同士を打ち鳴らしたとしても、こっちはなるまい。

「飲まれるなよ、ジェット・バレル」

「分かっちゃいますがね……あれが、アライアンスの頭首の存在感……！」

正直言つて、自分が圧倒されているのを感じていた。少しでも気を抜くと、平伏して彼女の軍門に降ってしまいそうだ。まるで洗脳<sup>ヒュブ</sup>音波<sup>・ゲノイス</sup>がごとき声。ただの声さえ、自分とは格が違うということを本能的に理解してしまった。この感覚は、以前にも一度味わったことがある。

「……！」

ふと、隣に立つ魔女の横顔に目を向ける。彼女の超然とした雰囲気は、どこか『剣の魔女』に、ストレーガがまとうそれと同質のものだ。

しかし二人を比べると静と動。女皇は静で、魔女が動。外見からも、似ている部分を見つけることができない。銀の衣に身を包んだその姿はどこか柔らかく、鋭く尖った魔女のオペラピンクのドレスとは似ても似つかない。

何から何まで『ストレーガ剣の魔女』とは対照的。それが『エンプレス・オーダー白銀騎士団』を統べる頭首、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』というアバターだった。

2・6 白銀騎士団（後書き）

ようやくここまで来たか……長かったなあ。

そして『聖銀の女皇』のルビがはみ出すので困るw



## 2 - 7 聖銀の女皇

「まったく……何も変わってないとは。成長がないね、女皇<sup>クロム</sup>」

ゆっくりと近づいて来る女皇に向けた言葉には、どこか懐かしさのようなものが滲んでいた。

いや、滲んでいるように見える。古い知己、旧交を温めるかのよう装っている。そう、装っているだけなのだ。言葉の裏側には、隠しきれない敵意と、なぜ混ざっているのか分からない憐憫、その他複雑な感情が幾重にも折り重なっている。一言では形容しがたい感情、そして関係が込められているように感じられた。

珍しいことだと思う。ストレীগ 秋月雪乃という少女は普段、軽佻浮薄な態度で自分の本心を見せようとしないのだから。

無論、彼女の内心の全てを推し量ることができるほど、ジェット・バレルは成熟した精神の持ち主ではない。だがそれでも今の彼女が、ただならぬ感情を抱えていることだけは確信できた。

「そうね、私は変わらない。私は私のままよ、いつまでもね」

二人のすぐ近くまで来ると、女皇<sup>クロム</sup>は足を止めた。ストレীগが剣を抜けば、その首に届く距離。だが平然としたまま、聖銀の女皇はそこに立っている。この魔女が自分を討つことはない、確信しているかのようだ。

「その結果が、このお山の大将なのかい？ アライアンスは大きくなっても、中身は力と恐怖で従えた、有象無象じゃ意味がない」

「……彼らは私を慕ってくれる、大切な人たちよ。従えているつもりはないわ。守ってくれているのよ」

「守っている……？ ふうん、なめられたもんだな。僕が手下を恐

れて手を出さないと思ってるのかい？」

「まさか。あなたはやるときはやる人よね。でも、状況の不利が分らないわけじゃない。違うかしら？」

「……たかが百人やそこらで、僕が止められるとでも？」

圧倒的なまでの自信。だが、彼女の言葉に嘘はない。乱戦で百人を討ち果たすというのも、ストレーガであればやってのけるだろう。そういう人種であると、その佇まいこそが雄弁に語っている。幾つもある魔女の恐怖を語るための形容詞は、決して大仰なものではない。それだけの実力を持っているのだ。

だが、そんなストレーガを前にして、女皇はいささかも心を乱した様子がない。魔女の力をよく知りつつも、確信を持ってその前に立っているように見える。

「私のための百人よ。彼らが……そしてガウエインがあなたに食らい付いているあいだに、私があなたを討つ。そう、討つわ……だけ」と

女皇は言葉を切ると、己を両腕で抱き、マント状装甲をを翻しながらぐるりと楽しげに回る。挑発　というわけではない。心の底から楽しげに、楽しいから回っているのだ。

「私は、あなたを討ちたくない。分かっているでしょう、ストレーガ？」

「……」

その瞬間、ぎしつと魔女の指が音を立てた。鋭い鉤爪にも似た、金属で出来ているはずの指が、握り込まれて悲鳴を上げている。すぐ分かった、彼女が計り知れないほどの怒りをそこでせき止めているのだ。彼女に少しでも自制心が欠けていれば、後先考えず、す

ぐにでも女皇に斬りかかっていたであろうということ。

仮面で素顔が見えないのは、幸いだったのかもしれない。彼女は今たぶん、校内のアイドル『秋月雪乃』として、絶対にしてはいけない表情を作っていただろうから。もっともジェット・バレル、つまりは陸朗以外の生徒が見ているはずもなかったが。

「討ちたくないから、何だというんだ。そんな気遣いは無用だよ」「気遣いだなんて。あなたのことを大切に思うのは、当然でしょう？　だって、私とあなたは……」

「僕は……お前の所有物じゃない！」

絞り出すような声だった。悪魔が地獄の底に響かせるような、そんな声色だ。

言葉から殺気を感じて、ざわりと騎士たちに動揺が広がる。しかしそれを、片手を上げたガウエインが制した。さすがは騎士団長と云うべきか、完璧な統制が行き届いているようだ。

女皇は満足げにその様を見届けると、小さく頷き話を続けた。

「ええ。もちろんよ、ストレーガ。あなたは、私の大切な親友だもの。『物』ではないわ」

朗らかで穏やかな意味を持つその言葉。だがそこから、言いようのない惨憺たるものを感じた。何か得体の知れないものに包み込まれるような、そんな恐怖が背筋を駆け上る。ストレーガの側にいるだけでそうなのだ。直接向けられているストレーガの感じる『おぞましさ』たるや、察するに余りある。

エフェクトのかかっている素の声からして、女皇は現実リアルでのストレーガやジェット・バレルと大差のない年齢だろう。中学生子供ではなく、大人にもなりきれない。まだ少年とか、少女とか、そういう言葉で語られる年齢のはずだ。

にも関わらず、その言葉から感じられるのは『母性』に似た、それでいて負の情念のこもった『何か』だ。演技ロールプレイしているのではない、心の奥底からわき出る、包み込むような『何か』。欲してやまない、飢えて求めるような感情が目に見えるようだった。

「もう一度……そう、もう一度、あなたとこうして話す日を、ずっと待っていたわ。話せば、きっと分かってくれるって……」

「……あれから、もう二年だ。そろそろやめないか、僕に干渉しようとするのは」

「どうして？ 親友のことを心配するのは、当然でしょう？」

心底、何を言われているのか分からない。そんな様子で、女皇は首を傾げる。

これまでの彼女の言動、そのベクトルは全て「ストレーガのために」という方向で一致している。その反応も、納得はできる。ただし、それはこの上なく独善的だった。

今、女皇は魔女と会話をしている。しかし、彼女の言葉を聞いているようで聞いていない、聞く気がない。言葉が交わされているわけではなく、魔女の言い分はすり抜けていき、ただ一方的に女皇が自分の意志を告げているだけだ。

「心配……？ そんな言葉で片付けられるものでもないだろうに」

「悲しいわ、私たちの友情を疑うなんて」

「僕は真面目な話をしているんだ！」

芝居じみた女皇の態度が、よほど癪に障ったのだらう。彼女らしからぬ　　そう言い切れる剣幕で、声を荒げる。

「私はいつも真面目よ。こんなことで冗談は言わないもの」

「なお悪い。冗談でないのならね」

彼女たちにかつて何があったのか。ジェット・バレルはそれを知る由もない。しかし、二人のあいだに横たわる溝は、とても深く広いものだということは分かる。

「僕たちはもう道を違えたんだ。お前の元に戻る理由も、意志も、僕にはない！」

そう答えたストレীগの言葉に揺らぎはない。それは完全なる決別の言葉だ。

二人の会話から察するに、何度もこの種の会話は交わされてきたのだろう。だが、女皇は彼女の翻意を願い、魔女はそれを否定し続けている。といったところか。

こういうものは、どこまでいっても平行線で終わる。話の前提がすでに違つのだ、普通に考えれば、歩み寄ることなどあるはずがない。

「どうしても？」

「くどいよ。何度繰り返させる気だ。お前の時間は、あの二年前から止まっているのか？」

「くどい……？」

女皇の声色が変わった。今までの、どこか譎言めいた現実感のない言葉ではない。そこには包み隠していた、生の感情が少しだけ覗いている。

「そこまで言うの？ そんなにも、私の元には戻りたくないの？」

「当たり前だ。お前がやっていることは、ただのライアンスの拡張じゃない。ペルソナバターの、プレイヤーの駆逐だ。そんな奴のところに戻る気などない！」

トーキョー・スフィア最大のアライアンス、『白銀騎士団』のよくない噂は、ジェット・バレルのようなアウトローの耳にも届いている。

ここ一年半で一気に最大勢力へと踊り出た、その手腕は強引かつ悪辣。

以前、騎士団が『コンクエスト領土戦』で、ジェット・バレルが根城にしているイケブクロへと攻め込んできたことがある。あいにく彼は現実でリアル試験期間であったため、直接対峙はしていない。けれども知り合いのアバターから、おおよろくでもない連中だったと、話を聞き及んでいた。

ジェット・バレル自身とて『チーター不正改変者』だ、けっして褒められることをしている存在ではない。しかし騎士団は、そんな彼が思わず眉を潜めてしまうほどのやり口を使うのだ。

「僕はあれほど言ったはずだ、強引で卑劣なやり方はやめろと！アライアンスを大きくするのはいい、だが……正々堂々とした手段でやれと！」

とにかく使えるものはなんでも使う。あらゆる手段を使って、自分たちの勢力を大きくする。それが『白銀騎士団』の基本理念だという。

敵の主力を通常対戦で『活動臨界』へと追い込み、『領土戦』に参加させないなど、ゲーム内で完結するものはまだ序の口。

嘘か誠か、キログラ暗号取得プログラムによるアカウントハックや、あまつさえ運悪くリアル割れしていたとあるアバターが拉致監禁ストレスの行為まで受けた、などという都市伝説めいた話すらある。

滅多に運営が動くことがないという『ペルソナクライン』の特殊な事情もあいまって、深層は闇の中だが、かようなほどにダーティな手段を活用している『白銀騎士団』というアライアンスに、

そういう噂は数え切れないほどあった。

「何が『騎士団』だ、聞いて呆れる。プライドのないやり方で、一体何が得られるっていうんだ!？」

「……私には、私の居場所を守る義務と責任があるの。そういう私のやり方に、ガウエインたちも付いてきてくれているのよ？ 大アライアンスのリーダーというものはね、その『場』を維持するため、どんな努力だって惜しむことは許されないの」

「しかし……!」

諭すような女皇の言葉。だが、それでストレーガが納得できるはずもないのは当たり前だ。きつと二年前から、ずっと同じことで意見を戦わせてきたに違いないのだから。

「ガウエイン！ キミたちはそれでいいのか!？」

「……我は、いや我らは女皇の言葉に従うまでだ。二年前に、我はそう決めた。そうだ、貴様が騎士団を去ったあの日からな」

無然とした態度で、ガウエインが答える。どうやらこの巨体の騎士も、二年前の事情を知る者の一人ということか。

「ふうん……殊勝だね。じゃあ、僕の『裏切り』も許せるんだ？」

「……ッ!」

冷やかな言葉の刃は、ガウエインの急所を抉ったのかもしれない。睨み付けるように、その視線が魔女の仮面に向けられたまま動かなかった。

「どうなんだい？」

「それが女皇の望みであるならば、我が異を唱える法はない」

感情的には納得出来ないだろう。喉の奥から絞り出したような言葉には、苦渋が満ちている。根深い対立は、この二人の間にもあるのは間違いない。

「阿諛追従の輩ってのは、感心しないよ」

「なんとも言う方がいい。我らには我らの立場がある。野に下ったお前にとやかく言われる筋合いなどない」

「ああ、そうかい」

鼻白んだ様子を、魔女は隠そうともしなかった。

「本当に……二年経っても何も変わりやしない。少しは頭を冷やしたのかと思っただが、期待した僕がバカだったよ」

「あなたの方こそ。理想だけで人が動かせるはずもないことは、あなたが一番よく知っているはずよね？」

「……だから？」

その言葉に反応したかのように、魔女の肩がピクリと動いた。まとう雰囲気、肌を　アバターの装甲表面を切り裂くような剣呑なものに変化する。

「いえ、分かっているからこそ……よね？」

ちらりと、女皇の視線が動く。ジェット・バレルの方にだ。その視線は、魔女のように射貫くがごとく鋭いものではない。冷たくて同時に生温い、生理的嫌悪感を覚えるものになで回されるような、そんな視線だ。たとえるなら、蛇妖メドゥーサのような　とでも言えばいいのだろうか。

そういう目で、女皇はジェット・バレルをじっと見つめている。



品定めでもしているようだった。

「あなたが連れてきたこのパートナー。ええと……なんて名前だったかしら？」

「『ジェット・バレル黒い銃身』だ、女皇」

「ああ、そうそう、ジェット・バレルだったわね。スピット・ダンプでは名の知られたアバター。昔は強かったようですが、今は色々と身を持ち崩して最底辺暮らし……だったかしら？」

言われて愉快的なプロフィールではないのだが、何一つとして間違いはない。どこでそこまで調べたのかは気になるが、それを今、いちいち口にする気にはなれなかった。

それに、女皇の視線にさらされているだけで、気分が悪くなりそうだ。詳しい事情を知らないジェット・バレルは、当然二人の会話に割って入ることはできない。それなのに、ただここにいるだけで地雷原のただ中に放り出されたような焦燥感を感じていた。

あの目。女皇の目だ。目が言っている、お前こそが魔女の急所だと。それが何故か、どうということなのかは分かるはずもないが、彼女がそう言おうとしていることは分かる。

しかしどうすることも出来ない。女皇の糾弾に、身を任せるほかない。

「まあ……スピット・ダンプあんなところにいるような輩がどのような人物か、考えなくても分かるけれど。そういう人種と手を組んで、一体あなたは何を為すつもりなの、ストレーガ？」

「言わなくちゃ分からないのかい？」

小馬鹿にしたような女皇の台詞にも、魔女は動じた様子がない。傲岸不遜に胸を反らし、この場にいる誰よりも尊大に振る舞う。文句があるなら勝手に言えとばかりに、とりつく島もない。

ふふんと鼻を鳴らすと、ジェット・バレルの腕を取って絡ませる。そのままびたりと女皇を指差すと、高らかにこう宣言した。

誰にも、何にもはばかることなく、ただひらすらに自分の意志を示す。それが『剣の魔女』<sup>ストレীগ</sup>のあり方だ。

「決まってるだろ、クロム。僕がやることなんて、二年前からたった一つきりだ。お前と、お前の騎士団を叩く……叩いて潰す！ 僕と、この『黒い銃身』とでね」

「冗談を言っている様子はない。彼女は真剣だ。そしてそれが可能であると、間違いなく信じていた。

「宣戦布告だよ、『<sup>エンプレス・オブ・クロム</sup>聖銀の女皇』。お前と、僕の……僕たちの、戦争だ」

2・7 聖銀の女皇（後書き）

仕事忙しいのに加えて、純粹に難産しました。

プロット段階で魔女と女皇の対立原因を先送りにして誤魔化してたんですよねw

そのツケをここで支払うことになってしまったという。

### 3 - 1 雪乃の過去

「どどどどーすんですか!?!」

「どつするって、何が?」

「宣戦布告ですよ!」 『エンプレス・オーダー 白銀騎士団』 に 『コンクエスト 領土戦』 挑むなんて、聞

いてませんよ!?!」

『ペルソナクライン』 からログアウトした瞬間、陸朗は反射的に雪乃へと詰め寄っていた。

生徒会室には二人きり。誰も見ていなくて助かった。押し倒さるばかりのこの状況を誰かに見られたら、校内ゴシップでは済まされないだろう。最悪、転校ものだ。

「まあ、言っていなかったからね。知ってたら、さすがに怖じ気づいてたろ?」

「そ、それは……だけど!」

「やっと見つけたパートナーの腰が引けてたら困るじゃない? だから、退つ引きならない状況に追い込ませてもらった」

「お、俺をハメたんですか!?!」

「うん。これでキミもめでたく騎士団の敵ってわけさ」

にたりと笑う雪乃。思わず「魔女め!」と叫び出したくなるところをこらえて、陸朗は大きく息を吐き出した。

「間違いなくそうでしょうね。下手すりゃ賞金首だ」

正直、よく『リミット・バースト 活動臨界』で現実へとぶつ飛ばされず、まともな口グアウトさせてもらえたものだ。

『エンプレス・オブ・クローム 聖銀の女皇』の気まぐれ いや、慈悲ですらあるかもしれな

い。彼女の目には、『白銀騎士団』という巨大アライアンスに自分と陸朗、たった二人で挑もうとしている雪乃の姿は、さぞや滑稽に映っていることだろう。

やれるものならやってみろ。つまるところ、女皇の態度はそれに尽きる。そして、自分たちを倒すことなど 出来るわけがないと思っっているに違いない。

そして、それは間違いではないのだ。

宣戦布告？ 何をバカなことを。そもそも、戦争になどなりはしない。たった二人で何を、どうしろというのか。無理無茶無謀の三拍子、無為無策にもほどがあるというものだ。

「どうして、あんなことを言ったんです。できるわけがない！」

「キミはそう思うのかい？」

「当たり前ですよ！」

「決めつけちゃあ、ダメさ。できないじゃない、やるんだよ」

客観的に見て、そんな精神論でどうにかなる問題ではない。しかし断言する彼女の言葉には、いささかの迷いもなかった。開き直っているのとは違う。あるのは確信だ。自分と そして、陸朗の力を信じている。そんな目をしていた。

「不安は分かるよ。常識的に考えたらできないって考えるのは当然。そこまでは間違ってない、キミは間違えていない。だけど……やり方はある」

自信満々に、雪乃はそう言い切った。文句のつけようもないほどに卓越した個人戦闘力を持つ彼女だが、集団戦闘においてはいまだ未知数、陸朗には見せていない。ただ彼女はまだ、実力の底を明かしていないことだけはわかる。そんな彼女ができると言うのであれば、それはおそらく事実なのだろう。

やり方はある　そして、そのやり方には、きっと陸朗が必要なのだ。だからこそ、彼女は陸朗の前に姿を現した。そうでなければ、彼女が声などかけるはずがない。ならば果たして　自分はそのように使われるのか？　そこは一番の興味、関心、そして不安だった。

「なんなら、まずはとくと想定してる作戦を説明してあげてもいいんだけど、どうする？　それとも愚痴なり文句なりを言いたいのかな？　聞くだけ聞いてあげるよ。それ以外のことはしてあげないけど」

言いたいことも聞きたいことも山ほどあったが、彼女がこんな態度では言ってもしょうがない。口にするだけカロリーの無駄だ。まずは真意を確かめるべきだろう。これからどうするのか、己の身の振り方を決める前に。

「それを聞くより先に、まず確認していいですか？」

「なんなりと」

「……気は確かなんですか？　はっきり言って、正気とは思えません」

自分とアテにならないチート野郎の二人組で巨大アライアンスに宣戦布告。もちろんそれ自体も大概だが、敵地のど真ん中でそれをやってのける度胸こそが異常だ。

ああいうことが出来る人間は、なかなかいないだろう。ゲームだから『ペルソナクライン』だから、という区分けにはあまり意味がない。そこを意識してしまうような人間は、そもそもあんな行動を取らないはずだ。

無論、陸朗自身にもできない。巻きこまれたからあの場にいただけで、許されるならば即座にあそこを逃げ出したかつたくらいだ。真似しろと言われても無理だ。

「あそこでやらなきゃ意味がなかった。あいつは……」  
『エンプレス・オブ・クローム 聖銀の女皇』

は、巨大組織の長なんだよ？ だから心情的なこだわりがあっても、『剣の魔女』たるこの僕であろうと、取るに足らない存在と見なす必要がある。そう振る舞わなけりゃいけない立場なんだ。普通の手段じゃ、取りあってもえなかつたさ」

「だから、わざわざ相手の懐に飛び込んだと」

「そういうことだね。あいつの劇場型な性格はよく知ってる。あの状況でこつちから出向けば、上手いこと話を回せると思ったのさ。それでもまあ、無事に戻れる確率は五分五分だったけど。女皇がよくても、周りが許さない可能性はあつたんだ」

「……」  
『ガウエイン 太陽の騎士』ですか」

「ああ。あいつが僕を許さない可能性はあつた。あえて挑発してみせたけど、ずいぶん我慢を重ねてみたいだね。いやあ、すっかりしてるよ。昔はあんなこと言ったら、即座に突っ込んで来たものだけど。血の気の多い子でさあ」

言葉には、どこか懐かしむような響きがある。

雪乃とガウエイン、そして女皇は親しかったのだろ。それがなんらかの理由で決別した。今までのやりとりからして、それはまちがいない。

「ずいぶん詳しいですよね、会長。あの二人のこと」

「ン……回りくどいね。言わなくてもわかってるんじゃない、キミ？」

「……以前、仲間だったんでしょう？ 同じライアンスに所属していた。違いますか？」

「正解だよ、ご名答だね。もっとも、ほかに答えはないと思うけど」

まるで懐かしい思い出を回想するように いや、事実懐かしい

思い出に違いない。話から察するに、二年は前のことのはずだ。だからこそだろう、彼女はしんみりとした眼差しで宙を見つめた。

「僕があいつらとつるんでいたとき……というか、実際のところ僕はクロムとだけ組んでいたんだが、当時よく対戦してた連中がなにかと集まるようになってね。やがて、僕をアライアンス・リーダーにした集団ができた。その名を……」  
アウトランダーズ  
「異邦人の旅団」

「『異邦人の旅団』……?」

「聞いたことはないと思う。活動期間が短かったからね。たぶん一ヶ月もなかったはずだ。『領土戦』をやったことも一度きりだし、知ってる人がいたとしても、おそらく『白銀騎士団』の前身くらいの認識だろう」

陸朗は情報には聡いつもりだったが、『異邦人の旅団』という名前についての記憶はない。おぼろげながら、現在のトップランカーたちが集うアライアンスが過去存在していたという噂くらいは覚えがあったが、今現在の状況から考えると眉唾だろうと思っていた。

しかし雪乃の言うことが本当なら、そして彼女には嘘をつく理由がない、噂は事実だったということになる。一体どのようなアライアンスだったのか、彼らしくもないことだが、俄然興味が湧いていた。

「とはいえ、面子は騎士団とはまるで違ってた。共通してるのはクロムとガウエインだけさ。まあ……はみ出し者の集団だったな。今のイケブクロ・エリアほどではないけどね、無秩序で、ゆるい集まりだった。駄弁るのが好きな奴も、戦うのが好きな奴も、商売が好きな奴も、みんな一緒くたでさ。目的はなにも持たず、ただ『ペルクラ』で一日数時間を思い思いに過ごす。そんなアライアンスだった」

「なるほど。けど問題は……その『異邦人の旅団』でなにがあった



かですよ」

「……やっぱり、それを聞きたい？」

「当然。それこそ核心でしょうに。会長と女皇のあいだにある確執は、生半可なものじゃない。そのくらい、俺にだってわかる。何事もなかったら、ああはならない」

「そうだよねえ……ああはならないよねえ」

雪乃の柳眉が、辛そうにしかめられていた。

彼女が女皇とあんなってしまった原因でも考えているのだろう。当事者なのだから知っていて当然、しかしここまで洩るからには、語りづらいことであることは十分に察する。

しかしそれでも、これだけは確かめなければならないことだ。正悪をいちいち口実にする気はないが、なにも知らずに利用されたような形になることだけは御免だ。すでに退つ引きならない状況であるとしても。

「実のところ、こっちの事情については頃合いを見て、僕から切りだそうとは思っていたんだけど……催促されたんじゃあ、しょうがないよね。いいよ、話そう」

雪乃はしばし考えてから、小さくうなずいた。

「出ようか？ ちょっと長い話になるだろうし」

くいつと、親指で窓の外を指す。ガラスの向こう側に見えた空は、少し赤みを帯び始めていた。

「で、なんでラーメン屋なんですか？」

「好きだから」

生徒会室を出た二人は、雪乃の「ちょっとお腹が空いたな」という一言で、軽く食事をしていくことになった。無論陸朗に拒否権らしきものはなく、有無を言わずという感じで連れて来られただけであるのだが。

赤いのれんのその店には、でかかど『札幌ラーメンおろちよん』と書かれている。この屋号で博多ラーメンを出したら詐欺なので、札幌ラーメンの店なのだろう。

「しかし……意外だ」

「みんなそう言うんだよ。まいっちゃうよね」

「そりや言うでしょう。会長は『秋月』のお嬢様なんですし、そのイメージとかけ離れてますよ、こういう店」

「怖いなあ、先入観ってのは」

店先にいると、ゲンコツダシと味噌、そして脂の香りが遠慮なく漂ってくる。好きな人間にはたまらない匂いだろう。そして陸朗もこういう脂っこい食べ物嫌いではない。くうつと、小さく腹の虫が鳴いた。

「あ」

「ふふつ、キミも準備出来てるみたいだし、入ろうか」

小さく笑いながら、のれんをくぐる雪乃。彼女にわずかばかり遅れて、陸朗も店内に入る。

狭くて小さい店だ。コの字型のカウンターに座れるのはせいぜい八人ほど。それ以外の席はなかった。奥にある厨房にいた、妙に筋肉質で体格のいい中年の店主が、見事なバリトンで「らっしゅい」と声を出す。

うながされるように、壁に貼り付けられたメニューに目を向けた。種類は多くない。札幌ラーメンの味噌と醤油、あとは餃子と炒飯くらいだ。

雪乃の隣に座りながらたずねる。

「どつちがオススメですか？」

「味噌だね。つーか僕は味噌しか食べない」

「じゃあ俺も味噌で」

「ん、あえて醤油にいくと思ったんだけどなあ、キミの性格的に」

「食い物で冒険はしない主義なんで」

奥にいる店主に注文を伝えてから、カウンターにある水差しの中身をコップに注ぐ。ほんのりとレモンの香りのする冷水を飲みながらコの字の向こうに目を向けると、先客がいることに気づいた。

年齢は自分たちと同じくらいだろうか、女の子の二人連れ。眼鏡をかけたボブカットの少女と、陸朗の知識ではゴスとかロリとかしか表現のしようのない雰囲気、ロングヘアの少女だ。着ている制服に見覚えがある。あのブレザーはたしか、要町のほうにある『青葉台付属女子』の制服だ。同級生か、クラスメイトといったところか、何やら楽しみに言葉を交わしている。

こういうラーメン屋に来るタイプには見えない二人連れだが、そんなことを言ったら隣に座っている雪乃などなおさらだ。金髪碧眼の彼女こそ、こういう店には似合わない。そのツレである陸朗の心配など、それこそ余計なお世話というものだろう。

「どうかしたかい？」

「いえ、なんでもありません。それより……」

「ああ、そうだったね。と言っても、あんまり声高に言うようないつちやないんだが……」

「そうなんですか？」

「当たり前だよ。僕にしてみれば、昔の恥をさらすようなものじゃないか」

「何をしでかしたんですか、一体？」

「しでかしたというか、してしまっただというか……」

この期に及んでも言葉を濁しているからには、相当のことなだろう。しかし、そもそも説明する気はあると言っていたのだ。ここで誤魔化されるわけにはいかない。

「わ、わかつてるよ。そんな怖い顔しないでよ。ほらラーメン来るよ、食べながら話そ？」

「……頼みますよ、本当に」

念を押す。

そう言っておかないと、またはぐらかされそうな気がした。

「学校でも言っただけど、結構こみ入った話だね。まず当時の状況を教えておくよ」

小さな唇で黄色っぽい縮れ麺をもやしと一緒にすすりながら、雪乃は話を切り出した。

いつの間にか、席は満席になっている。残りの席を埋めているのは全員サラリーマン風の男たち。常連客が多いのだろうか。明らかにラーメンを作るには過剰なほど筋肉質の店主と、ずいぶん会話が弾んでいる。

雪乃はにわかに活況を呈した店内をはばかりような、少し抑えた声で話を続けた。

「それは、まだ僕が『僕』じゃなくて『私』だったころの話。秋月の跡取りじゃなくて、ただの末娘だったころの話だ」

秋月家という存在は、陸朗たちが住むこの豊島区池袋界隈では非常に大きな影響力を持つ。いわゆる地元の名士というやつで、一族からは政治家、それも大臣経験者まで輩出していると、まだ子供である陸朗でも知っているくらいだ。

雪乃自身はそれを鼻にかけるようなことはなかったが、客観的に見て彼女の能力は、秋月一族の跡取りとして、恥じることはないものがある。

「たしかに僕は今でこそ秋月の跡取り娘だ。家と、家に連なる人たちのために働く義務がある。けど、昔はそうじゃなかった」

唇を湿らせるように、レンゲですくったスープを口の中へ。好物であるはずなのに、彼女の表情は、嫌いな野菜でも食べているかのように辛そうだ。

「二年と少し前……僕には年の離れた兄がいた。僕は父の後妻の子なんだけど、彼は前妻の忘れ形見でね。家中での扱的に、僕は正直雲泥の差をつけられていた。けれども、兄は優しい人でね。そんなことは少しも気にした様子もなく、妹としてかわいがってくれたんだ」

「お兄さん……いたんですか」

「いたんですよ。過去形だがね」

つまり、今はいないということだ。

まさかと思えば表情を曇らせると、雪乃は違つ違つとばかりに、はたはたと手を振った。

「ああ、別に死んじやったわけじゃないよ？　今はどうしてるのかは知らないけどさ」

「ええと、それって……」

「そう。兄は逃げたんだよ。重圧に勝てなかったんだらうね、秋月の嫡男っていう責任の重さのさ。今頃、どこで何をしてるやら」

「妙にさばけてますね」

「しょうがないじゃん。手紙のひとつもよこさないんじゃ、心配するにも限度はある。それに……僕は兄の気持ちはわかるけど、兄の行動を認めることはできない」

少しだけ厳しい口調の言葉だった。罪人を断ずるような、決然とした響きがある。別に自分が責められているわけでもないのに、思わず陸朗は息を呑む。

「な、なぜです？」

「だって考えてもみてよ。僕が僕として今日まで生きてきたのは、秋月という環境があればこそ。そしてそれは、家を支えてくれた人たちの努力のたまものだ。どんなに父が優れていたって、ひとりでできることなんて、たかが知れたことさ。秋月っていうのは、いわば父を代表とする共同体なんだ。だから僕は父だけに育てられたわけじゃないし、ましてや僕ひとりで育ったわけじゃない。僕はその共同体にこそ育てられた……そう思っている」

「家のため、ですか」

「もちろん、好きで生まれた家ではないよ？　でも、そこで育ったのならしょうがない。生まれた責任ってやつは、果たさなきゃいけないと思ってる。だから……僕は兄を認めることはできないんだ。兄の優しさも、その背負っていた責任も、すべて承知した上でね」

普通の家に生まれたかった。彼女はそう思っているのだろう。だが、それは叶わない夢だ。生まれてしまったからには、切り離せな

い責任というものがある。雪乃が兄が逃げたことで、若い身空で思い知ってしまった。

だからこそ誓ったのだ。兄のように逃げることはすまいと。秋月という名の意味と重さを受け止めて生きようと。その決意こそが、今の『秋月雪乃』を作っているのだ。

「……なんか、世界が違いすぎて共感はしにくいけど、会長の言うてることはわかります」

「うん……まあ、結局僕は秋月という家を自分から切り離せなかっただけなんだけどね。幼すぎたとか、言い訳はいろいろあるにせよ、事実としてはそれだけだ……でも、だから」

雪乃はそこで一度言葉を切った。これから口にする言葉に覚悟が要る。そんな面持ちだ。

もちろん、先を急かすような真似はしない。彼女を見つめながら、話を続けるのをじっと待った。

三十秒　あるいは一分か、それともそれ以上だろうか。雪乃が血を吐くように辛そうにしながら、言った。

「だから、僕は……『私』は、父や祖父の決めたことに逆らうことができなくて……たったひとりの友達とした約束を、破ったんだ。悪いのは、僕なんだよ」

そのまま顔を伏せる雪乃。その白い拳は、まるで何かをこらえるように小さく震えていた。

### 3 - 1 雪乃の過去（後書き）

お待たせしました、久々の更新になります。

今回は色々背景設定説明の回。

あとラーメン屋デート。

秋月雪乃、という少女を掘り下げていく展開です。



### 3 - 2 裏切り者

兄がいなくなっってから、自分を取り巻く環境は大きく変わってしまった。雪乃はそう言った。

想像には難くない。跡取り息子が失踪したのだ、一大事どころの騒ぎではなかったろう。秋月という家、そして権力の屋台骨を揺るがすような事態だ。

「ま、その時から僕には、自由というものがなくなつたのさ。完全にというわけじゃないが……かなりのレベルでね。たとえば、進学先も変えられてしまった」

雪乃と陸朗の通う『国教学院』は、この界限ではかなりレベルの高い私立の進学校だ。卒業生からは国立大へ進学する者も少なくない。

ちなみに陸朗の成績は上の下といったところ。がんばればもつと上を狙えるぞ、といつも教師に言われてしまうポジションだ。あいにく本人としてはそこそこ点が取ればいいので、がんばることはないのだが。

そういえば雪乃は文句なくぶつちぎりの学年トップだったはずだ。テストも満点以外のほうが珍しいというレベル。教師生徒問わず、一目も二目も置かれているのは伊達ではない。

「別に無理してうちの学校に入ったとか、そういうわけではなくてね。学力的には余裕があったから、それは問題じゃなかった。問題なのは……」

「行くはずだった学校への進学を、取りやめたことですか？」

「その通りだよ。もともと僕はね、青葉台付属女子に進学するつもりだったんだ。言質を取ってたわけじゃないけど、父もそれでいい

と思っていたようだし」

青葉台付属女子、と聞いて先ほどカウンターの向こうにいた二人連れを思い出す。あいにくと今は必要以上に筋肉質な店主の巨体に遮られて、その姿は見えない。

「こら、ちゃんと聞いてくれよ」

「あああ、すいませんちよつと……」

あそこに青葉台の生徒がいたもんで、という言葉を言いかけて飲み込む。雪乃の目つきが「僕の話の聞け」と言っていた。

「まったく……内申書に落ち着きがないと書かれてるのは伊達じゃないね、キミ」

「……なんで俺の内申書の内容知ってるんだアンタ」  
「こと学校について、僕が知らないことはあんまりないね」

戦慄した。今さらだが、実はとてつもなくヤバイ人間が、学校中樞に食い込んでいるのではなからうか。

「ちなみに、内申書見たのは昨日初めてさ。それにキミだけだよ？」  
「なお悪いですよ、そりゃ。つーか、なんで俺だけ？」

「決まってる。知りたくなつたからね、キミのこと。色々調べたよ……僕を助けてくれる人なのか、知りたかつたんだ」

そう言いながら、少し冷めてしまったラーメンの残りをすする雪乃。長い金髪は、ヘアゴムを使って首の後ろでまとめている。触れたら折れてしまいそうな首筋は、うっすらと汗ばむ肌が照明を反射して、妙に艶めかしかった。

「助ける……ですか」

「そう、僕には助けが必要だったんだ」

ふう、と箸を置きながら、雪乃は小さく息を吐いた。

「さつき言ったよね、僕は約束を破ってしまったって。あれ、同じ学校に行こうねっていう、他愛のない話だったんだ」

「その、青葉台に……ですか」

「ああ。でも、その約束を果たすことはできなかった。そのこと自体はまあ、仕方がないことなんだが。そもそも、後で謝ればいいと思っただくらいだし」

たしかに、現実リアルの事情というものは、しがない学生の身ではどうしようもないこともある。雪乃とて保護者のいる身だ、できることとできないことは厳然として存在するのだろう。

「けどね、その機会がこなかったんだよ」

「……どういうことです？」

「単純に忙しくなっただけ、僕はしばらく『ペルクラ』で遊ぶことを控えてた。実際のところは息抜きで遊ぶことくらい、父も大目に見てくれたとは思っけど、正直言ってそういう気分にはなれなかったのもある。自分の中で、まだ気持ちの整理もついてなかったしね」

なるほど、道理だ。その頃はまだ雪乃の兄が失踪したばかりのはず。いかに彼女といえども、幼い時分では動揺していたのは想像に難くない。

「まあ一月弱かな。気持ちを整理して、新しい境遇に納得するまでそのくらいかかって。それからようやく『ペルソナクライズ』にアクセスした。そうしたら……」

雪乃は一旦、そこで言葉を切った。表情には自重めいた笑みが浮かんでいる。

そして一呼吸のあと、悲しそうな口振りで言った。

「僕は、裏切り者になってたんだ」

言葉の意味を飲み込むのに、しばらく時間が必要だった。

「……事態が急変しすぎじゃないすか？」

「そう思うだろ？ 僕もそう思う」

軽口にも力がない。

「僕がいないあいだに、どんな葛藤があいつにあつたのかは分からない。それを聞いても答えてくれなかつたし。ただあいつは……『聖銀の女皇』は、『異邦人の旅団』とはまったく違う組織を、その短期間に作り上げていた」

「それが『白銀騎士団』ってわけですか」

「そういうこと。そして騎士団と……いや、そのころのあいつと僕は馬が合わなくなつてね。考え方の違いが浮き彫りになってきたというか……」

全部は飲み干さない主義なのだろうか。彼女は井に残ったラーメンスープを箸先でかき回しながら、かつてを思い出すように、ゆっくりと言葉を選びながら話し続けた。

「考え方の違いってのは、結構大きな要素でね。ぶっちゃけて言え

ば、僕は彼女よりも『ペルクラ』に対して真剣じゃなかったんだよ。今にして思えば、そう言うしかない気がする」

「真剣……ですか。まあ、ゲームはゲームなりに真剣にやるっていうのは理解できますけど」

「そういうんじゃない。あいつはもっと切実だった」

雪乃は静かに頭を振る。

「なぜなら……『ペルソナクライン』は、あいつにとって全てだったからね」

全て。

とても、とても重い言葉だ。軽々しく使っていないような言葉ではない。そして雪乃も、そのことはよく理解している。それが分からない彼女ではない。

だがあえて、彼女はその言葉を使った。それだけの重さがある、ということだ。

「全て……と言われても。『廃人』ってやつですか？」

オンラインゲーム黎明期より言われるようになった『廃人』という呼び名は、実生活を犠牲にしてまで、ゲームでの成果を求めるようなプレイヤーを指す。そのため、雪乃のようにゲーム内で突き抜けた実力を持っていても、実生活を犠牲にしていない者は、『廃人』とはあまり呼ばない。

「廃人とは少し違うね。あいつは実生活を犠牲にしたわけじゃない、実生活から逃避するために、ゲームの世界に没頭してただけだから」

「それって、つまり」

「……そう。報われない実生活からの逃避先が、『ペルソナクライ  
ン』だったのさ。この『もうひとつの世界』に没頭することで、実  
生活の辛さを忘れていた。無論よくある話だよ、この手のヴァーチ  
ヤル・リアリティ・アプリケーションにのめり込む奴なんて、多か  
れ少なかれそういうところはあるはずだ。たとえばそう、キミもね。  
違うかい？」

「はいつて素直にうなずきにくい質問、やめてほしいんですが」

「心当たりはあるか。あるだろうねえ、僕にもある。あっちが世界  
の全てであれば、どんなに楽なことか」

くくく、といつものように、他人を斜め上から見ているような笑  
みを浮かべる。少し、調子が戻って来たのだろうか。

「けどね、僕にしてもキミにしても、彼女…… 女皇に比べたら甘っ  
たれてただけなんじゃないかな。そのくらい、彼女は現実に絶望し  
てたよ」

「そんなにも、ですか？」

「まあね。あんまり口にしたい言葉じゃないんだが…… 『ドメスティック・バイオ  
レンス家庭内暴  
力』ってやつだ」

急に空気が重くなった。聞かなければ良かったとさえ思う一言。  
正直ラーメン屋でする話ではない。だがもう聞いてしまった以上、  
後には退けない。自然と顔が引き締まった。

「僕もかなり後になってから知った事実んだけど…… 両親が育児  
に興味のないタイプだったらしくてね。最初はいわゆる『ネグレクト育児放棄  
』、それでも彼女が健気に育つと、だんだんと手が出るようになった  
らしい」

まるで我が事のように、辛そうに顔をしかめながら言う雪乃。

「そういう家庭環境だからね。人を信じられない彼女は、人見知り  
がそれはもう激しくて。学校でも仲のいい友達なんているはずがな  
い。学校と家、たったふたつの狭い世界でなお安らげない彼女が、  
唯一安息を得られる空間こそスフィア。そして『ペルソナクライ  
ン』になったのは、納得してもらえるんじゃないかな」

なるほど、帰結はわかった。彼女 『聖銀の女皇』がそのよう  
な過去を背負っているのならば、『ペルソナクライン』に固執する  
のは当然だ。

けれども ならばこそ、雪乃と仲違いした理由が分からない。

「親友だったんでしよう、会長とその……『聖銀の女皇』は」

「ゲームの中ではね。学校のほうでは、なかなかそう上手くいかな  
かったよ。なにせ、最初はクロムのプレイヤーがあいつであるなん  
て、僕は知らなかったくらいだし。先に出会ったのは『ペルソナク  
ライン』の中でのことだったのさ」

「上手くいかないって、なんでです？ リアル現実バレしたなら、普通に

付き合えばいいじゃないですか」

「分別盛りの今ならともかく、あの頃はまだ子供だったからね、周  
りが。僕も子供なら突き抜けられたんだろうけど、当時の僕は今ほ  
ど責任を背負ってないとはいえ、やっぱり教育された賢い子供だ  
った。だから理解しちゃってたんだよ。秋月雪乃という存在が、特  
定の一人と深く付き合うことの意味と、影響をさ」

「それは……」

要するに子供社会ではえこひいきと映ることを、当時の雪乃は恐  
れたのだ。そしておそらく彼女の推察は正しかったろう。人見知り  
するような、クラスメートと距離をおきがちな子供に雪乃が肩入れ  
すれば、どんなことが起こるか。十中八九、いじめのターゲットに

なっていたことは間違いない。

彼女はそれを恐れたからこそ、学校での親しい接触は避けていた、というわけだ。

「それ自体は正しい選択だったと思う。けど、そのせいであいつの世界はますます小さく、閉じていった。それだけが全てであるかのように……いや、さっきも言ったよね。まさしくあいつにとってはそれこそが、『ペルソナクライン』こそが全てだった」

子供ゆえの純粹さ、そして視野狭窄。世界を縮める、ありとあらゆるものが折り重なっていき、当時の『聖銀の女皇』の世界を狭めていったのだ。

「けど、僕にはどうしようもなくね。せいぜいその小さな世界にあつて、『ペルソナクライン』であいつと共にいることで満足しちやつてたのさ。無知つてのは罪だよ、ホント……自分が間違つてたつて気づけたのは、それからずっと後になつちやうんだから」

「裏切り者になつてたつてのは、つまりそういうことですか」

「うん。僕が『ペルソナクライン』に繋がなかつたあいだに、状況は悪化の一途を辿つていったわけさ。僕という支えがなくなつたことで、彼女は不安に絡め取られ……まあ、恐慌状態になつたつてとかな。狭くなり続けていた彼女の『世界』は、僕なんていうたった一人がいなくなつただけで、儂く、脆く、そして弱く見えただろう。そして彼女はどうしたか？」

そんなもの、答えはひとつしかない。

「自分の世界を、守ろうとした……？」

「正解。あいつは彼女らしからぬ決断力を発揮した。まさしく乾坤一擲だね。オール・オア・ナッシング、あいつの主観では全てをな



くすかどうかの瀬戸際だったんだろう。あいつは僕と一緒に培ったあらゆる人脈と力を使い、自分の『世界』を強化していった。その結晶がアレさ、『エンプレス・オーダー白銀騎士団』だ。そして彼女は本当の女皇エンプレスとなり、このスフィアを席卷する巨大アライアンスを作り上げたというわけさ。その過程で生まれた、ありとあらゆるひずみと恨みを黙殺してね」

最大規模のアライアンスという尊名と同じくらい、『白銀騎士団』の悪評は『ペルソナクライン』に鳴り響いている。手段を選ばないその拡張志向の理由が、たった一人のアバターの恐慌にあったと、雪乃は言った。

「しかし、それでよく騎士団の面子は女皇に従いますね？」

「ガウエインの奴は例外だと思うけど、勝ち続けるかぎり女皇から……そして騎士団というアライアンスから受ける恩恵は多い。ギブ・アンド・テイクが成立するのなら、多少の無茶は出来るものさ。無理を通せば通りが引っ込む、だ」

実にバブリーな話だよ、と雪乃は冷ややかに笑う。

そして文字通り、泡のような脆弱さを危惧したと、彼女は続けた。

「僕は『ペルソナクライン』に戻ってから、何度となくあいつに忠告した。そのやり方では、騎士団以外の全てが、お前たちの敵になるぞと。だが、あいつはもはや聞く耳を持たなかった。一度離れていった僕のことを、あいつは信用してくれなかった」

「だから『裏切り者』ですか」

「かわいさ余って憎さ百倍、よくある話ではあるけどね。だけど、そこで引っ込むような僕じゃない。口で言っただけなら、叩いてでも教えてやれと、母から秋月の流儀を教わってる。僕は僕の全力で『白銀騎士団』に挑んだ。ただ、教えるためだけにね」

「……あの、まさか一人でですか？」  
「うん。一人で」

思わず頬が引きつる。どこまで真つ直ぐなんだ、この女は。バカ正直にもほどがある。

「アホか！？ 『異邦人の旅団』はどうしたんですか！？」  
「しょうがないだろ！？ 僕がログインしなかったあいだに、当時の知り合いは騎士団に組み込まれるか、別のアライアンスを組むかしてたんだよ！ 僕には味方がいなかったんだ！！」

そんな寂しいことを全力で表明されても、陸朗だって正直困るのだが、事実であるならば責めてもしょうがない。

「……それにね、結構いい勝負には持ち込んだんだぜ？ なにせ、あいつの懐まで飛び込んで斬り結んだんだからね。でもさすがに…… 女皇とガウエイン、二人を同時に相手にするのは無理だったよ」  
「そりゃあ…… そうでしょう」

呆れるしかない。一人で戦いを挑んだ無謀さと、責任感の強さ、そして『いい勝負』にまで持ち込んでしまう、規格外の強さに。

「まあいい勝負とは言っても負けは負け。結局、僕は組織としての『白銀騎士団』には勝てなかった。目的は、果たせなかったよ。僕はいつを…… 女皇クロームを止めることはできず、二年を無駄に費やした。そしてそのあいだに、『白銀騎士団』はさらなる拡大を続けた」  
「そして今に至るわけですか。正直、あのアライアンスは俺も好きじゃないですけど…… それほどひどいんですか？」

「ひどいね。いや、状況は僕の想像を超えて悪化していると言っている。今日現在、『領土戦コンクエスト』の対立状況は最悪だ。めっちゃくちゃだ

よ、誰も彼もがいがみ合ってるくらいでさ。競い合うんじゃない、いかに相手を騙し、出し抜くかの勝負になってる。その分大手アライアンスの部下に対する締め付けは厳しくなり、恐怖政治すら横行してるくらいだ。『ペルソナクライン』全体のコミュニティは崩壊寸前と言ってもいい。皮肉なものだよ、スフィアの中で一番自由なのが、キミたちのような無法者の集まりである、このイケブクロ・エリアだっていうんだから」

「まとまりがないだけです、たぶん」

「けど、その混沌カオスこそが望ましい。僕はそれが欲しかった」

そう言った雪乃の顔は、一人の生徒会長ではなく ペルソナクラインのプレイヤー、『剣の魔女ストレীগ』としてのものだった。

「だから僕は、キミという存在に目を付けた。とはいえ……もともとキミというペルソナバターがいると知ったのは、本当に偶然だったのだけだね。『鮮血獵犬ブラッド・ハウンド』といったっけ？ 『領土戦』の前にイケブクロのまとめ役を『暗殺リミット・バースト』するため、送り込まれた奴がいたんだが、そいつのターゲットの一人がキミだった」

「……礼を言うべきなんでしょうね。暗殺者の手から救ってくれたんでしょう？」

「まあ恩義に思ってくれてもいいが、大したこっちゃないよ。まさか、ウチの学校から『ペルクラ』やってる奴がいるとは思ってなかったから、単純に興味湧いたのが助けた理由だしね」

「ということは、パートナーに選ぶのは、俺じゃなくても良かったと？」

望んでなかったパートナーではないが、誰でも良かったというのであれば、それはそれで面白くない。陸朗にだって少しばかりは、面子やプライドというものがある。

「正直なところ……キミでなきゃダメだったかと聞かれたら、答えはノーだと言わざるを得ないね。ただ二年の間で、僕の求める条件を満たしてくれたのはキミだけだった」

「条件？」

「一つは、『白銀騎士団』におもねらない反骨心があること。二つ目は、無法地帯であるイケブクロ・エリアのアバターたちに、一定の影響力を持っていること。そして最後の三つ目は……」

「三つ目は？」

「強いつてことだよ、僕を驚かせるほどね」

### 3 - 2 裏切り者（後書き）

ずいぶんお待たせして申し訳ありません。

忙しいのと疲労性の頭痛で夜も寝れないくらい苦しむもののダブルパンチで執筆どころじゃなくて……。

それでもなんとか、こうして仕上げることができました。

ちなみに、まだラーメン屋編はもうちょっと続きます。

具体的にはあと一回くらい。

### 3 - 3 山名さやか

一瞬、思考が止まった。

この金髪の女の子は、一体なにを言っているのだろう。そんなふうにさえ考えた。

陸朗はここまでストレートに、実力を評価されるなど想像だにしていなかったのだ。自他共に認める卑怯者である彼には、そんな賞賛を受ける権利はない。そう考えていたし、それが当たり前だったし、それ以外の体験はなかった。

しかし彼女は違う。秋月雪乃は、陸朗の『強さ』そのものをはっきり褒めた。彼女自身が矛を交えたからこそ出てくる台詞として、褒めたのだ。

「そういう歯の浮く台詞は……やめて欲しいんですが」

「僕がお世辞を言うタイプに見えると？」

「時と場合によっては」

「どこまで信用ないんだよ、僕……」

「だって会長、言葉に重みがないじゃないですか。その態度じゃあ、信じろって言われても」

「ひどいこと言うねえ。情けとかないのかい、キミには？ ぱっと

見の印象で他人を判断するもんじゃないぞ、陸朗君」

「それはそうでしょうけど」

実際のところ、雪乃のこうした本心の掴みにくい軽佻浮薄な態度は、かなり作っているところが大きいのだろう。彼女の生い立ちと置かれた環境。それに対する彼女なりの解答が、この『僕』という一人称と、この態度なのだ。

重圧に押し潰されないための、自分を守る鎧のようなもの 陸朗は彼女の話から、そう理解していた。

「とうかだね、僕は見込みのない奴を数合わせのためだけに、パートナーになんかしないよ。やるなら勝つためにやる、徹底的にやる、とことんまでやり遂げる。そうさ、不可能を可能にするパートナーを選ぶとも。いいかい、そんな執拗で神経質で完全主義者の僕が結論したのがキミだったんだ。もつと自信を持ってくれないと困る。本当に困る」

少し怒ったような口調だった。陸朗を見る目が険しくなっている。彼の自信のなさ、そして不甲斐なさというものに、腹を立てているのかもしれない。

「謙遜は美德だが、自信がないのは考えものだよ。キミがどうしてそうなったか、僕は分からないけど……キミの力がどれほどのものか、僕はよく知っているんだ。キミは、キミ自身が思っているよりも間違いなく強いプレイヤーだよ」

「……」

陸朗は答えられず、ただ目を逸らす。そんな彼の横顔に向かって、たたみ掛けるように雪乃は言葉を続けた。

「さつきも言ったろう。キミは僕の求める条件を全て満たしていたと。無法地帯イケブクロ・エリアですつと戦ってきたというキミの経歴、そのイケブクロ・エリアのAvatarたちに一目置かれているという人脈、そして何より、キミはこの僕に攻撃をぶち当てた。角を折られた。裸に剥かれた。この僕がだぞ？ ダミー・Avatarといっても、あそこまで僕を追い込めた奴なんて、ざらにはいないんだ。事実、騎士団にだってあれができるのはほとんどいないよ。キミだって僕の戦いを見ただろう？ 僕はあのブルー・グランドから有効打は受けていない。傲慢じゃないがね、あの程度の相手ならば

無傷で勝てる。キミとあのアバター、二人と戦った僕が断言しよう。キミはあいつより強い。強かったから、あいつに勝ったんだ」

「でも、あいつはランカーで、俺は……」

「キミはレギュレーションに従わない、アウトサイド・プログラムの使い手だから、ランカーポイントを稼げなかったただけだろ？ 僕は違法改変者チーターを無条件に弱いとは思っていない。無法地帯で戦うからこそ、得られるものもあるはずだ。キミの異常な反応速度は、レギュレーション外のでたらめなルールで戦い続けたからこそ、身についたものなんじゃないかな？」

「それは……」

言われていることは、理解できなくもない。チートやチートすれのアウトサイド・プログラムの飛び交うイケブクロ・エリア スピット・ダンプでは、通常のアバターの常識は通用しない。そこにはそのルールがあり、常識があり、独特の世界があった。

たとえば速さ。スピット・ダンプでは、とにかくでたらめにスピードだけをいじりまくるようなアバターも少なくない。『速度中毒』スピードジャンキーとでもいうべきか、古の時代のMMORPGでも、ひたすら自キャラの攻撃速度だけを高めようとしたプレイヤーが後を絶たなかったというが、誰よりも速く動くという欲望は、確かに抗いがたいものがある。その欲望に忠実になった者が行き着く先は、やはりアウトサイド・プログラムなのだ。

もつとも、速くなりすぎてアバター・フレームが速度に耐えられず、対戦が始まった瞬間にバラバラに自壊していったアバターを陸朗は何人も見てきた。しかし中には見事なバランスで、速度と実用性を両立していた者も存在する。そういう相手は、純粋に手強い。彼らの速さに対抗するため、自分が鍛えられていたと言われたら、そういうこともあるかもしれないと思う程度には。

「まあ確かに……こんなところで長いこと戦ってたせいで、変な方



向に能力が進化してる感じはしなくてもないですが」

「その変な感じが大事なのだ。騎士団は戦略レベルでは搦め手をい  
くらかでも使うけど、戦術は基本、正攻法でぶち当たる質パワー・ウォールより量の戦  
法が主体だ。まともに対峙するのは得策じゃあない」

「得策じゃないというか……とてもじゃないですが、まともに対  
したくないですね」

「大変けっこうな意見だ。まさしくその通りで、ああいうのは隊  
列を引っかき回し、裏をかき、混乱したところで崩れた奴から仕留  
めていくのが上策さ。ちよろいもんだよ、浮き足だった連中を刈り  
取るのなんて」

「……そりゃ、あんたには簡単なことでしょうけど」

単体としての戦闘力がズバ抜けている雪乃 ストレーガであれ  
ば、確かにそれは簡単だろう。だが乱戦に斬り込み、かつ巻きこま  
れずに相手を駆逐していくとなると、並の腕前でやれることではな  
い。

「そんなことないさ。要は自分の得意なポジションを作り出すって  
話だからね。僕は乱戦が得意なタイプだから、自分でかく乱して自  
分で叩きのめすのが好きだけど、キミなら……そうだな、前に使っ  
た地雷みたいので足止めして、離れたところから狙撃したりすれば  
いいんじゃない？」

「……確かに、それができりゃあ理想です」

「だろ？」

くしし、と得意そうに雪乃が笑った。

もちろん、そんな上手くはまるものではない。事実、ストレーガ  
のように仕留めそこなうことはしょっちゅうだった。それは陸朗の  
詰めが甘いということでもあるのだが、結局のところは彼我の戦力  
差に行き着く。人事を尽くしても、超えられない壁というのはある

のだ。

いや、正確に言えば超えられないと思ってしまっ壁、だろうか。根本的な部分での淡泊さ 諦めの早さが、陸朗をスピット・ダンブという場所に押し込んだ原因なのだろう。

「だったら、盛り上がってみればいいじゃない。キミの潜在能力はかなりのもんだよ。磨けば光る珠ってやつさ。正直少しばかり嫉妬したし、腹が立った。どうしてこんなにすごいやつが、こんなところでくすぶってるのかって」

「それは……勝手にすぎますよ、会長」

「分かってるって。でもね、僕は本当にそう思っただぜ？ だから……」

「だから、何？ だから私を倒すために、その力を貸してくれ。そうとでも、言っつもりなの？」

その声は、店の戸口のほうから聞こえてきた。

刺すような視線に、振り向くのを一瞬ためらう。だが、躊躇している場合ではないだろう。私を倒すため 彼女はそう言ったのだから。

言葉の意味を、確かめずにはいられない。

「そうやって、その男を引き込んで私を倒そうというのね、雪乃」

立っていたのは、さっきまでカウンターの向かいにいた青葉台女子の生徒だった。もう一人の小柄な少女を横に連れた彼女は、制服の胸を反らし、眼鏡の奥から鋭い視線を陸朗に いや、雪乃へと向けている。

これが誰であるかを問うのは、野暮というものだろう。彼女は雪乃に言った。私を倒すつもりなのかと。雪乃が倒そうとしているのはただ一人、親友にして仇敵の『聖銀の女皇』だ。ならば彼女こそ

が『聖銀の女皇』その人であると察するのは、難しいことではなかった。

「……ああ。その通りさ、僕と彼とでお前を倒す。そのつもりだよ、さやか」

「できるつもりなの？」

「やれるさ。愚かなお前を倒すことぐらい簡単だ、彼の力を借りればね」

「愚か？ 何が愚かだと言っの？」

「全部がだよ。スフィアで、現実<sup>リアル</sup>で、何回僕に言わせる気だ。お前は間違ってるんだよ、さやか。お前とお前の騎士団が、『ペルソナクライン』をどれだけ混乱させてると思ってる？ 見るに堪えないよ。だから僕と彼とで、お前に引導を渡してやる。今度こそ、お前の作ったお前の『世界』を破壊してみせる。それが……お前の道を誤らせた、僕なりのケジメってやつだ」

「……ッ！」

ギリツと、女皇が さやかと呼ばれた少女が唇を噛んだ。

「それをあなたが言っの？」

「言っさ。だって、僕とお前は……友達だったんだから」

それは、あくまでも過去形。

「……青葉台の生徒会役員名簿に、『山名さやか』って名前を見つけたときは驚いたよ」

さすがにラーメン屋で口げんかはやできない。激昂していてもその

くらいの分別は、まだ残っていたのだろう。  
店を出た四人は、路地裏で対峙することになった。

「別人かと思った。僕が知ってるさやかは、生徒会役員なんてやらないだろうと思ってたからね」

「……あなたから見て、私は変わったのかしら？」

「変わったさ。立派になったよ、どこから見ても小さい頃の面影は全くないね。どこから見ても、青葉台の副会長さん以外の何者でもない」

「その物言い……ふざけてるの？」

「僕は真面目だよ。ねえ、陸朗君？」

「会長は常日頃からふざけてるような気もしますが」

「あれ、ここって僕の敵しくないの!？」

実際、ふざけているようにも見える。だが雪乃もそれなりに真面目だろう。なにせ目が笑っていないのだ。揺れる金髪からのぞくその蒼い瞳は、鋭くさやかを見据えている。

一触即発　　そういう空気が、この場に蔓延していた。

「はあ……本当にあなたは何も変わらないわね。背が伸びただけ、その金色の髪も、青い瞳も、いつも笑ってる顔も、同じだわ」

「怒ってみようか？」

「できるのかしら？」

「お前のためならできるよ。正直、僕は本気で腹を立てている。お前の行いに……というよりかは、お前を止めることができずに自分にだけどさ」

「……そういうところも、変わらないのね。子供がそのまま大きくなっただけ」

「そうかい？　出るところは結構、出てるつもりだよ？　キミもなかなか捨てたもんじゃないと思うが、負けるつもりはない」

そう言つて、雪乃は大きく胸を張つた。

スタイル、という点ではさすがにフランス人の血を引く彼女のほうがややリードといったところか。しかし、さやかも負けてはいない。日本の巨乳業界もなかなか侮れないようだ。残念なのは、さやかの連れている後輩らしきゴスロリ少女だけだが、彼女も平均的に日本人体型だけで、恥じ入るほどではない。だが さやかの後ろで控えめをしているのは、性分なのだろう。

「ちよつ……何を言つてるのよ、あなたは！？ そつちのあなたも、じろじろ見ない！」

顔を赤らめ、恥ずかしさに身をよじりながら、さやかが素早く後ずさる。

「いやあ、陸朗君も結構男の子だねえ。でも初対面の女の子にそれはいただけないな。僕のならいくらでも見ていいけど」

「ちよ……ご、誤解ですよ！？ 俺、興味ないですから！」

「……それはそれで枯れすぎじゃない？」

「人をいつも漲つてるみたいに言わんでください。変な目で見られてますよホラ！？」

「じゃはは」

陸朗の慌てぶりに、溜飲の一つも下がったのだろう。けらけらとひとしきり笑つた雪乃がばさりと髪をかき上げる。

目付きが変わつた。鋭く冷たい、凍てつくサファイアの瞳が、真っ直ぐにさやかへと向けられる。

「さて、からかうのはこのぐらいにして……だ。まさか、こんなところで鉢合わせするとは思つてもみなかつた」

「それはこちらの台詞よ」

腕組みして睨む『女皇』さやか、腰に手を当て胸を張って視線を受け止める『魔女』雪乃。

距離が近い。お互いの胸が、ぶつかり合うほどに。お互い、微塵も譲るつもりはないらしい。わざとか、無意識か、押し相撲をするくらいだ、

思わず、女皇の側にいるゴスロリ風少女と顔を見合わせる。少しだけ、彼女は困ったように眉を斜めに傾けていた。どうやら彼女も女皇には苦勞をさせられているらしい。そこはかたない共感<sup>シンパシー</sup>が、彼女とのあいだに結ばれた気がした。

もつとも、陸朗と彼女が仲良くなってもしょうがないのだ。今の主役は雪乃とさやか。彼女たちは相変わらず、不倶戴天の敵に出会ったように睨み合っている。

「この店は、僕が見つけたんだけどね？」

「二年も来なかったのはあなたよ。私は『ペルクラ』をあがったら、必ずここに寄るようにしてるの。とやかく言われる理由なんてない」

「おっさんみたいな習慣だなあ……」

「お、おっさんですって!? だいたい、あなたが現実<sup>リアル</sup>で連絡を絶つてしまうから、私は……」

「ん?」

「な、なんでもない……ともかく! あなたに好き勝手言われる筋合いも、好き勝手されるいわれもないわ。これも、ちょうどいい機会ね……私もあなたのように宣言する。今度こそ……今度戦った時こそ、私はあなたを屈服させてみせる」

不穏当な単語が飛び出した。

どちらかと言えば柔和な顔つきやさかか言ったとは、とても思えない単語だった。彼女の内に秘めた『女皇』としての矜持。それ

が、言わせたのだと感じた。

もつとも、対する『魔女』雪乃はさほど意に介した雰囲気はない。もう一度髪をかき上げると、呆れたような口調で言った。

「屈服、ときましたか。なかなか実社会で使う単語じゃないよ、そりゃ」

「そうね。でも『ペルソナクライズ』では当たり前だわ」

「……当たり前じゃあ、なかったよ」

わずかに、雪乃の声色が変わった。緊張と　そして怒りを含んでいる。

「お前がそうしたんだ。お前がそういう『当たり前』を作った」

「否定はしないわ。でも、私にはそれが必要だった。あなたに裏切られた私にはね」

「……さやか、僕は！」

「あれは、きつかけよ。あなたの裏切りはきつかけに過ぎない。あなたが戻ってくるのなら、チャラにしてあげてもいい程度のことよ。私が作った私の居場所は、あなた一人を受け入れるくらいの余裕はあるもの」

「大した寛容ぶりだね、女皇サマは」

皮肉げに口の端をつり上げる雪乃。

「その台詞……つまり、拒否する、と？」

「そうでなけりゃ、宣戦布告なんてしないよ」

「でしょうね」

さやかも分かっていたのだろう。

ただ、それは一縷の望みゆえか、それともただの儀式か。単なる

再確認であっても、彼女は口に出さずにはいらなかったのか。さやかという人物を伝聞でしか知らない陸朗に、彼女の内心を推し量ることは難しかった。

だが、はつきりしたことがある。今、女皇と魔女の仲は完全に決裂したのだ。

「なら、いいわ。だったら叩きのめすのみよ。あなたと、その男と、たった二人だけの力でどこまでやれるか、見せてもらうわ。無論私は……手加減などしない」

「そうでなけりゃあ、意味がない。全力のお前を叩き潰すのが目的なんだ、手を抜いたとか、言い訳の余地を残されちゃ困る。めんどくさいからね、後で」

「……その言葉、あとで必ず謝罪させてあげる」

「できるものなら、やってみな」

売り言葉に買い言葉。そうやってしまふのは容易いが、それ以上に根の深い何か、そこにあるのは間違いない。

どれほど言葉を尽くしたところで、彼女たちはもう同じ道を歩くことはできないのだ。

もはやこれ以上、語る必要もないと感じたのだろう。さやかはくると身を翻し、雪乃たちに背を向けて歩き始める。彼女に付き従うように、ゴスロリ少女も去っていった。

その背中をじっと見つめていた雪乃に、陸朗はひそめたような声色で、静かに声をかけた。

「良かったんですか？ 数年ぶりに会ったのに。もっと真面目に話していれば……」

今陸朗には、この秋月雪乃という少女を、初めて気遣う気持ちが生えていた。



彼女が執拗に女皇をからかうような素振りを見せていたのが、気になったのだ。素直になれないだけではないか……そんな風に感じていた。そうすれば、もしかしたらもう少し何かが変わっていたかもしれない。陸朗はそんな風に思ったのだ。

「真面目に？ 僕は十分真面目だったよ。ああしてないと、掴みかかってしまうかもしれないからね。ああするしかなかったのさ」

「そ、それは……」

「キミも見ただろ、聞いただろ？ あいつは自分が間違っているなんて少しも思っちゃいないんだ。反省する気のない奴は、歩み寄る気のない奴だ。そんな相手とまともな話なんかできないよ。必ず、頭に血が上ったほうが先に手を出すものさ。僕はそれだけはしたくなかった。あいつは……そう、あいつは……『友達』だったからね」

「……やっぱり過去形なんですか」  
「そうだよ。今のあいつは友達じゃない。僕の敵だ。倒すべき宿敵だ。僕のためにも、そしてあいつのためにも……今のあいつは倒さなきゃいけない。本当に、あいつの居場所が無くなる前にね」

その言葉には、怒りとともに心配する気持ちが含まれている。それがはつきりと分かった。その心配こそ、かつて『友達だった』ことに対する情けのようなものだろう。

ほかの誰かに討たれる前に、雪乃自身が引導を渡す。それが、彼女の言っていた『けじめ』に違いない。

「……さて、なんだか思ったよりも根が深い問題になってきちゃったな」

ゴキゴキと音を立てて首を回しながら、他人事のように言う。

「今さらですよ。人間関係のトラブルなんて、いつだってめんどくさいもんです」

「達観してるねえ。キミを頼った僕の見立ては、やっぱり間違ってたか」

くすくす笑う雪乃。

何か、掴みきれないことを考えているような気がする。

「キミはやっぱりベターな選択だった。ベストではない。けど、ベターだ。その時、最善の選択だった。僕のパートナーに相応しい」

「おだてても、何も出ないですよ？」

「そうだろうね。おだてても、キミからは何も得られない。賭けの負け分以上のものは」

「……む」

少しだけ、鼻白むような言葉だった。

確かに今、自分がこの場にいるのは、あの時賭け試合に負けたからだ。しかし、それを理由にして戦いで手を抜くようなつもりはない。雪乃とさやか、二人の関係に思うところもある。頼られたからには、全力を尽くすつもりだった。

「俺に不満がありますか？」

「だから、ないって言ってるだろ？ 能力的にはさ、ベストではないにせよベターだったって言ってるじゃない」

「だったらなんです？ その持って回ったような、含みのある口振りには？ 俺に何か不満があるから、そんなふうに言うんでしょ？」

「ふむ」

問われた雪乃は、顎に手を当て、小さく考えこむような素振りを見せた。

「な、なんですか？」

何やら妙な予感がする。

何か、とんでもないことを言われる気がする。

「会長、あの……」

「陸朗君。賭けの負け分は今日の今、この瞬間まででいいや。キミはよくやってくれた。あいつに『宣戦布告』ってのが元々の目的だったし、キミのおかげで十分それは果たせた。だから、賭けの負け分はここまででいい」

「は？ あ、あの、それはどういう……？」

混乱する陸朗に、すつと顔を近づける雪乃。その耳元に唇を寄せると、ささやくように言った。

「分からない？ 『強制』はここまでやってことさ。あいつと本気でやり合うんだ。どれほど律儀者であっても、強制じゃあ役に立たないよ。それはやっぱり思いが違う、気概が違う、覚悟が違う。どこかでズレが出てくるんだ。だからね、陸朗君……いや、ジエット・バレル」

「は、はい……」

「ここから先は、キミが決めてくれ。僕に付いてきてくれるのかどうか。あいつらを敵に回せるのかどうか。ランカーと本当に戦える自信があるかどうか。全部自分で考えて、キミが決めてくれ。キミの意志で、女皇と騎士団と戦ってくれ。できないと思うなら、僕に協力してくれなくても構わない。それならそれで、僕の見込み違いだったというだけだ。キミを恨んだりはいしないよ」

「それは……それは……っ！」

無茶苦茶だ。これまでで一番ひどい要求だ。

自分で決めると、腹を据えろと、責任を自分で背負えと　彼女  
はこの後に及んでいきなり言い放ったのだ。

ここまで教えておいて、知らせておいて、理解わからさせておいて、自分で決めると決断を投げた。

ひどい。本当にひどい。この女は、どうかしている。そんなふう  
にさえ思った。

じろり、と半ば憎しみのこもった目で、雪乃を見る。

学校一の美少女は、脅えもせず、すくみもせず、ただ微笑みながらその目を受け止めるだけだった。

### 3・3 山名さやか（後書き）

そういうわけで二日と開けずに更新。  
頑張りましたよ、ええ頑張りました。

今回でラーメン屋編終わり。

ようやく出せた女皇の本名。

うっかりすると全部アバターしか出ない小説になるところだったんで、こうして生身の出番を設けましたw

巨乳でボブで眼鏡っ子なのは俺の趣味です。

おっぱいバンザイ。魔女もおっぱいでかいしね。

### 3 - 4 訪問者

時間をもらった。

次の『領土戦』までに決めてくれればかまわない　それが雪乃の言葉だった。

時間があつたところで、決断を先送りにする場当たりのな対処でしかないことは、陸朗も十分理解していたが、それでも即断はできなかった。

しかし決断が難しい問題であることは、雪乃も十分察していたのだろう。しばらく『領土戦』で使う武器のチューンをしてくると言つて、彼女は偽装装甲ダミー・アバターをストレーガの身にまとうと、いそいそ対戦に出かけていった。決めるには、自分は離れていたほうがいい、そういう気遣いだらう。

実際のところ、陸朗は主体性のあるタイプではない。太陽と月で言えば、間違いなく月だ。自ら光り輝くような相手が側にいれば、その影響を多大に受けてしまう。

間違いなく、雪乃はそこまで見切っている。なんだか手玉に取られているようで、少しだけ面白くなかった。

「はあ……」

今日、何度目のため息だらうか。

彼女と知り合ってから、一人になるとため息ばかりついている気がする。こうやって一人、ニュートラル・フィールドのバザーで露店　不特定多数に戦闘用の自作アウトサイド・プログラムを売ることで、ジェット・バレルはゲーム内通貨『クレジット』を得ている　を開いていても、こうため息ばかりでは常連客ですら逃げていくというものだ。

しかし、珍しくそんな彼に向かって声をかける者がいた。

「ジェット、ちょっといいかのう」  
「あ、ジジ様」

ジジ様。

ジェット・バレルほか、イケブクロ・エリアに集うほぼ全てのアバターからそう呼ばれている彼は、無論本当の老人というわけではない。単に老人口調で喋る演技を好むところから付けられたあだ名だ。本当のアバター・ネームはほかにあつたはずだが、誰も覚えていない。しかし彼は本物の好々爺のごとく、その状況を受け入れていた。

誰も悪意からそう呼んでいるわけではないからだ。彼には不思議と他人を惹き付けるような魅力。もしくは統率力があつた。本人もそのところは理解しているようで、今ではイケブクロ・エリアの顔役として雑多で個性的な面々をゆるやかにまとめている。

「何か用？」

「用がなければ話かけちゃいかんか？」

「そんなこたあないけど」

「まあ用はあるんじゃないけどな」

どっこいせと言わんばかりに、鈍い赤銅色をした身体を曲げて、ジェット・バレルの隣に腰かける。

そこでは重量級の丸っこいアバターがさつきまで露店をやっていたはずだが、いつの間にかいなくなっていた。ため息攻撃に耐えられなくなったのかもしれない。

「なんだか、ずいぶんと面倒に巻き込まれておるようじゃのう」

「……耳が早いねジジ様」

「イケブクロ・エリアのメールマガジンに、『剣の魔女』のコメン

トが載っておったぞ」

「何考えてんだあのバカ女!？」

「なんでも、二年ぶりに『白銀騎士団』に喧嘩売ったとかで、そのパートナーがお前さんっつーことになっとなるんじゃが……」

「それは……」

事実かどうかでいえば、事実だ。否定する要素がない。だが今現在には最終返答を保留しているということも、説明が面倒だった。

「だいたいは合ってるよ。三日前、魔女と賭け試合させられてね。んで負けて、ごらんの有様ってわけだ」

「アレと立ち会ったのかお前!？」

老人らしからぬ 実際、別に老人型アバターというわけでもないのだが 激しい動きで、ジジ様が身を起こす。

「一応ね。相手はナメにナメきってたと思うけどさ」

「よく無事じゃったのう……」

心底驚いたようにいうジジ様。

たしかに、魔女の本気の強さを知っていれば、自分が『活動臨界』に追い込まれず、こうしてピンピンしているのは信じられない話だろう。

「ナメきってたって言ったろ。手加減されてたんだよ、思いっきり」

「いやあ……手加減したくらいでどうにかなる奴じゃないんじゃが」

「じゃあ、運がよかつたんだろ」

「……ううん、しかしのう」

まだ納得がいかないのか、ジジ様はぶつぶつとこぼしながら座り



直す。

「まあええわい。それでお前さん、どうするつもりじゃ？」

「どうする……って？」

「あの魔女、ずいぶん無理難題を押しつけてきおったのは知っておる。じゃが、アレの望みに応える義務があるわけじゃなかるう。

お前さんはどうするつもりなんじゃね？」

「……それを、今考えてる」

「ほっほう」

その声色は、興味深いものを見つけたと言わんばかりのものだった。

普通ならば苛立つところだが、あまり何を言っても他人を不快にさせることはないという、不思議な特技をこのジジ様というアバターは持っていた。

「ま、お前さんの好きにしたらええ。アレについて行くのは、かなり大変じゃろうがのう」

「さっきからアレ、アレって……なんだかずいぶん魔女と親しそうだな、ジジ様」

「んー、昔いろいろあつてのう」

古いペルソナアバターなら、アレのことは皆知っておるよ　ジジ様は、そう言ってカカカと笑った。

「ふうん……だったらジジ様はどっちの味方なんだい？」

「心情的にはどっちの味方でもないがのう。立場的には魔女を応援せざるをえんな」

「そりゃまたどうして？」

「決まっとる。『聖銀の女皇』がイケブクロ・エリアにとって有害

だからじゃよ。あやつと『白銀騎士団』はこのイケブクロを支配しようとしておる。わしらはそれに抗っておるんじゃ。つまるところ、敵の敵は味方というやつじゃな」

「意外に単純な思考だな」

「こついうのはシンプルにしたほうがええんじゃ。もつとも魔法の奴は……」敵に回せば恐ろしいが、味方にしたらなお恐ろしい」という感じじゃがな」

「それは単なる危険物なんじゃないか？」

「そうかもつ。歩く核ミサイルみたいな奴じゃよ」

ひどい言い草だ。明らかに褒めていない。しかし、言葉にはどこか親しさのようなものも感じられる。ジェット・バレルの知らない時代の話　そういうものを、少し想像する。

それはきつと、魔女と女皇がまだ仲睦まじかったころの話になるはずだ。二人の周囲にはあまたのペルソナアバターが集い、彼らは『異邦人の旅団』なる組織……いや、居場所を作り上げた。もしかしたら、ジジ様もその場所に集う一人だったのかもしれない。

たしかめてみようか。そう思ったりもしたが、ジジ様に限らず、イケブクロ・エリアのアバターは過去を詮索されることを嫌う。きつとはぐらかされてしまつたらう。

「なんじゃ、なんぞ聞きたいことでもあるかの？」

「いや、いいよ。どうせ答えないだらうし」

「そうかの？　じゃあしょうがないのう」

聞きたいことを察したのだらう。そしてそれに答えるつもりもな  
く　もう一度、ジジ様はカカカと笑い声を上げた。

「……いかにいかに、おしゃべりはこのへんで切り上げんと。用事を済まさんとな」

「用事？ 今のが用事じゃなかったのかよ？」

「今のは世間話じゃよ。それだけのために、お前さんを訪ねたりはせん。わしも結構、忙しいんでのう」

「やっぱり、次の『領土戦』の準備？」

「うむ。いかんせんわしらは烏合の衆だからのう。『城』<sup>シタデル</sup>の防衛計画を立てるだけでも、喧々囂々じゃわい。おまけに、次はあの『白銀騎士団』が総力を挙げてくるわけじゃし」

「大変だな」

「何を他人事みたいに言つとる。『領土戦』で騎士団と真つ向からぶつかるのは、お前さんと魔女になるんじゃないぞ？」

「あ……」

すっかりと失念していたが、確かにその通りだ。矢面に立つのは、自分と魔女である。怖れはないが、それほどの大規模戦闘の経験はない。満足に動けるのかという懸念はあった。

「ただまあ、本気の潰し合いになれば『白銀騎士団』もタダでは済むまい。それを懸念しておる奴が、どうやらいるみたいじゃのう……」

「どづいうことだ？」

ジジ様は答えず、黙って自分のインベントリから一枚の立体電子書類<sup>ーパー</sup>を取り出し、ジェット・バレルに渡した。

白紙 のように見えるが、おそらくはフィルタがかかっているのだろう。ホロ・ペーパーにアクセスした瞬間、内包されたデータが展開されるような仕組みになっているようだ。

「これは？」

「対戦フィールドの転送アドレスじゃ。知り合いから頼まれた。お前さんと内密で話がしたいと言つてのう」

直接対戦時に使う対戦バトル・フィールドはスフィア内にインスタンズ形成される。

「誰？」

「それは行つてのお楽しみじゃよ」

「危険はねえんだろっな……」

魔女とつるむようになってから、ジェット・バレルは少しばかり自分の身辺に気をつけるようにしている。

『白銀騎士団』の評判はきわめて悪い。何をしかけてくる分らない相手だ。警戒をどれだけでも、やりすぎということはない。

「それは保証するぞい。それより相手が待つとるはずじゃ、早く行け」

「え！？ 待つてるのかよ！？ なんだよ、それを早く言えよな！」

てつきり、このあと何時までに何処そこへ来い、というような果たし状的なものだと思っていた。

「あまりに話が弾んで忘れておつた。すまんのう」

「すまんのうじゃない！ ああもう、とにかく行つてくる！ 店番やっつけ！」

あいよ、<sup>デコード</sup>というジジ様の返事を聞き届けると、ホロ・ペーパーを<sup>ポータル</sup>展開する。転移システムのまぶしい輝きが、彼の身体を包み込んだ。

呼び出された対戦バトル・フィールドは、枯れ果てた荒野 たとえばテキサスのような 光景を模したものだ。ランダム選択か、あるいは呼び出した相手の趣味なのだろうか。

「……で、どこのどいつだ？」

早速思考内デスクトップから『ペルソナクライン』のコンソール・パネルにアクセスし、対戦相手の名前を探す。だが、名前を確認することはできなかった。

「フィルタがかかっている……だと？ はん、素性を簡単には明かしたくないってことか。ったく、この俺様ちゃんをナメんなよ。この程度のフィルタなんざ、小指の先で……」

「それには及ばぬ」

ずおつと、頭上から影が差した。のしかかるような重厚な気配に驚き、思わず横っ飛びで飛び退くと、天を衝くような巨大なアバターがそこに立っていた。

白銀に輝く西洋騎士にも似た甲冑を身にまとい、並のアバターよりも頭二つか三つ分は大きいその身体。見覚えがある。否、見忘れるはずがない。

「お、お前は……『太陽の騎士』<sup>ガウエイン</sup>ツ！？」

「見知りおき光荣だ、『黒い銃身』<sup>ジェット・パレル</sup>」

巨軀を傾け、頭を下げる。

そこには、魔女を前にしていたときの苛烈さはない。『騎士団長』の名に恥じぬ、物静かで紳士的な態度のアバターがいた。

「……な、なんであんたが？」

「卿と話がしたくてな。そこでこの場を用意し、旧知の者に頼んで卿に取り次いでもらったのだ」

「お、俺と話がしたいって、言われても……」

にわかには信じられない話だった。

確かに今のジェット・バレルは、魔女のパートナーとして警戒と注目が必要なアバターだろう。しかしながら、このガウエインこそは巨大アライアンス『白銀騎士団』のナンバーツーだ。断じて自分ごとのために、のこのこと敵地であるイケブクロ・エリアに姿を現していい存在ではない。

「信じられん……」

「そんなにおかしいだろうか？」

「あ、ああ。遠慮なく言わせてもらえば、何かの罠なんじゃないかと思うくらいだ」

「罠にかけられる可能性であれば、我のほうが高いと思うがな」

その言葉には、どこか自嘲めいた響きがあった。

勝つためには手段を選ばないという『白銀騎士団』。それは同時に、騎士団と戦う相手も、自然と手段を選ばなくなることの意味する。

もちろん矜持とかプライドとか、そういった単語で語られる無形の『何か』によって、自分たちの取るべき戦略・戦術を制限してしまふアバター、そしてアライアンスは少なくない。

しかし綺麗事を言っているのは、戦況に余裕があるうちだけだ。

もっとも悪辣で卑怯なアライアンスとして知られる『白銀騎士団』だが、同時にもっとも純粹に強大な戦力を抱えるアライアンスでもある。まともにぶつかりあって、持ちこたえられるアライアンスなど、そうは存在しないのだ。戦力差によってじりじりとすり潰されるように消耗し、追い込まれた敵対アライアンスはどうするのか。

答えは一つしかない。

『白銀騎士団』のやり方を模倣するのだ。「あいつらがやって来

たから」「あいつらもやっっているから」そんな言葉をつまらない免罪符にして、手段を選ばない反撃に出る。そうなれば後は泥仕合だ。しかし結局は正道においても邪道においても、そのような相手が『白銀騎士団』に及ぶことはない。いずれ、決定的な敗北を受け取ることになる。

だがルール上で白黒決着がついても、泥仕合によって生まれた遺恨はなくならない。試合が終わればノーサイド、などというのは幻想だ。彼らの恨み辛みは蓄積し、やがて『白銀騎士団』の構成員へと向けられることになる。そうした怨嗟の炎渦巻く最前線にいるのが、このガウエインというアバターなのだ。

スフィアに 『ペルソナクライン』に繋いでいる限り、その日常は危険と隣り合わせと云っていい。そんな状況下であるにも関わらず、ジェット・バレルに会いに来た。それは大事も大事、十分驚くに値することだった。

「……あなたの覚悟のほどはわかった。だったら、用件を言ってくれ。そんな危険を冒してまで、世間話に来たわけじゃないよな」

「無論」

こくり、と頭を動かすガウエイン。それだけで、こすれ合った金属製のヘルメットと襟がギンギシと音を立てる。どちらも重厚な装甲であることが、それだけでわかった。

「我は、卿に頼みがあつて来た」

「頼み？ あんたが俺に頼みだなんて……」

「卿にしかできぬことだ。ぜひとも、聞き届けて欲しい」

韜晦を許さない、決然とした口調だった。物腰こそ丁寧だったが、実際にはイエスカノーかで答える、そう強いられているような気がした。

「……話の中身を聞いてからだ。空手形は切れないよ」  
「話の中身か。そうだな、当然だ。だが……難しいことではない。  
一言一言で済むような内容なのだ」  
「え？」

それほど単純な内容だとは思っておらず、虚を突かれたかのように  
に間抜けな返事をするジェット・バレル。  
彼の様子をちらりと見つつ、ガウエインは静かにこう続けた。

「私の頼みはただ一つ。此度の『領土戦』で、卿が『剣の魔女』に  
肩入れすることを止めて欲しいのだ」



### 3 - 4 訪問者（後書き）

そういうわけでようやくスフィアパートに戻ります。

今回は前回最後の問いと対になるカウンターの問いの提示ですね。

当初出す予定なかったんですが、どうしてもクッション役が必要になつてキャラを追加。

しかもなんか思わせぶりなキャラにw

### 3 - 5 太陽の騎士

「敵に勝ちを懇願する……みたいな話だな、そりゃ。そういうのが、『白銀騎士団』の軍法なのかよ？」

「卿はまだ、敵ではない。我はそう思っている」

ガウエインの言葉は、一面では真実だ。実際、ジェット・バレルとして敵に回るかどうかを、今まさに悩んでいたところなのだ。

彼にそういう選択肢が与えられているなど、ガウエインが知っているはずもないが、あたかも知っているかのような言葉だった。

思わず返答に詰まる。

その間隙を突くように、ガウエインは体躯に似合わぬ流暢な弁をもって話を続けた。

「卿がどのような事情があつて魔女と知己を持ち、そして肩入れすることになったのか……それは我には分からぬ。だがしかし、過日我が同胞『蒼い氷壁』<sup>ブルー・グラード</sup>を一蹴した技の冴えは、さすが魔女が己の相棒と頼むだけのことはある、そう思った。言っておくがブルー・グラードは決して弱いアバターではない。我が騎士団において、一隊を任せるに足る男だ。油断であれなんであれ、それを倒したという事実は、おそらく卿が考えているよりも重い」

身に余る評価というやつだろうか。ストレーガに賞賛されたときもそうだったが、あまりにも褒め倒されると身体がむずがゆくなる。

「ブルー・グラードのように、アバター・ランキングに縛られぬスピット・ダンプの住人だからと甘く見る向きもあるようだ、我はそうは思わぬ。ランカーでないから弱い……そのような戯言が通用するのであれば、我ら『白銀騎士団』にしても、あるいは『四季姉<sup>フォー・シズ</sup>スターズ

妹社』や『ブラザーフット・オブ・オーバース超人同盟』にしても、もつと早くこの地を支配していたことだろう」

烏合の衆。

そう評されることの多いイケブクロ・エリアのアバターたちだが、一つの目的のために団結すると、意外なほどの力を発揮することがある。ジェット・バレルと同じように、彼らもルール無用の世界で戦いを繰り広げているのだ、ランカーたちとはまた別の意味で、歴戦の闘士たちと言ってはばかりない。

そんな彼らが団結さえすれば、巨大アライアンスにも劣らぬ戦闘力を発揮する。事実、これまでの『領土戦』においては、その個々の高いスキルによって幾度となく外敵からの侵略をはね除けていた。

ストレーガの行動も、このイケブクロ・エリアのアバターたちを無視してはいない。彼女とて、巨大アライアンスと対抗しうる戦力については、はっきり言ってアテにしていた。ジェット・バレルをパートナーとして選んだときの条件の一つに「イケブクロ・エリアへの影響力」を挙げていたことから、それがわかる。

彼女自身は強大な戦闘力を持ち、その力によって有象無象を退け敵中枢に斬り込むことは簡単だ。だが彼女の相棒となるアバターには、そこまでの戦闘力はない。多勢に無勢では、魔女が任せた真の目的 すなわち、ガウエインとの対決にまで持ち込むことはできないだろう。そこで考えたのが、イケブクロ・エリアのアバターを利用する方法だったのだ。彼らの協力を得る、あるいはそこまでいかなくとも都合良く動かすことが可能であれば、魔女の立てた空論は一気に現実味を帯びてくる。

実際、ジェット・バレルはイケブクロ・エリアの中ではエース格の存在だ。ジジ様ほどではないにせよ、顔は広いし腕も立つと知られている。彼が前線に立つのであれば、それを支えてくれる者は少なくないだろう。

そこまで読み切つての魔女の策だった。『白銀騎士団』がイケブクロ・エリアを攻めるこのタイミングで動いたのも、偶然ではないのだろう。学校内を含め現実とスフィア、両方にいくつか網を張っていて、そのうちの一つにジェット・バレルが引っかかったことで、一気に自分の策を現実化させようとしたに違いない。

しかし、これはとにもかくにも全てはジェット・バレル次第となる。一面では計算されているが、残りはあまりにも不確定であやふやだ。選択を全て他人に投げている。だからこそ、こうしてガウエインが介入する余地も出てきたのだ。

「此度の魔女の戦、卿こそが要だ。卿なくして、魔女の戦略は成り立たん」

「どうしてそう思う？」

わかりきつた答えを、確認するように問いかける。

「簡単だ。卿が、我を止めるのだろうか？ その役目を任されたはずだ。卿が我を止めているあいだに、魔女が女皇を倒す。実にシンプル、だがそれゆえに確実な戦法だ。乱戦必死の『領土戦』において、女皇の近衛である我を引き離し一対一を作り出すのに、これ以上は望めまいよ。そして乱戦そのものは……卿に与するイケブクロ・エリアのアバターに引き受けさせる。おそらく卿さえ引き込めば、その目論見は成るだろう」

的確な分析だ。ジェット・バレル自身もまさしく同じことを考えている。

「だからこそ、だ。卿にはこの戦に介入して欲しくない」

結論こそ、まさしく単純だった。ガウエインの話は、全てそこに

行き着く。そのために、ガウエインはこの機会を作り、わざわざジエット・バレルに会いに来たのだから。

「もちろん、それ相応の謝礼はする。まず卿には即金で二十万クレジット。また、イケブクロ・エリアの支配権こそ我らで握ることになるが、そのほかの環境については可能な限り現状を維持することを『太陽の騎士』の名にかけて約束しよう。必要な者があれば、我が『白銀騎士団』ほかへ大手アライアンスへの仕官の紹介もする。ほかにも必要なことがあれば、何なりと言ってくれて構わぬ」

「破格の条件だな。そんなにまでして、女皇を勝たせたいのかよ？」  
「無論。だが、それだけではない」

そう言つて、ガウエインは遠くへと目を向けた。今ではないいつかを見るような目。わかる、この目はきつと『かつて』を見ているのだ。これは、魔女やジジ様と同じ目。あの頃を知る者の目だった。

この目を前にする度に、どこかいたたまれない気持ちになる。自分分は場違いではないのかと不安になる。スフィアスフィアにはいけないのではないのかと思ってしまう。

そして　ガウエインはまさに、そう言っているのだ。

「関わるな」「前に立つな」「ここにいるな」　ガウエインの要求は、つまりそういうことになる。無論それはガウエインの立場から出た、勝手な言葉だ。ジエット・バレルが聞き届ける義務はない。だが同時に魔女の要求もまた、彼女の立場から出た懇願にすぎないのだ。二つは等価なものであり、価値は変わらない。

だからこそガウエインはここにいる。己の選択肢を、ジエット・バレルに選び取らせるために。

「……此度の戦、我がいる限り魔女の勝利はない。彼女は一面で偉大なるペルソナアバターだが、その敗北により、この世界より消え

去ることになるだろう。女皇は屈服させると言ったが、あのプライドの高い魔女が、それを受け入れるとは思えん」

「き、消え去るって……」

「アプリを消去し、二度とこの世界に関わらないということだ」

それだけではない。アプリを消す、ということとは埋めることのできない敗北感と空虚感を抱えたまま、それを抱えて生きていくということなのだ。

たかがゲームに　と他人は思うだろう。しかし一度ペルソナアバターとなったものはそうではない。ストレーガやジェット・バレルを含む、全てのペルソナアバターが奪い合うのは、ただスフィアに構築されたデジタルデータだけではないのだ。

奇しくもストレーガが以前、言っていた。自分たちが本当に奪い合っているものは、己自身のプライドなのだ。

そのプライド　面目を潰された以上、もはやこの世界にはいられない。汚名を返上する機会すら持たず、ただ敗者として去るのみ。

「だ、だったら俺は……」

魔女に手を貸す、と言いかけたジェット・バレルを、ガウエインは片手で制した。

「だから、卿には手を出して欲しくないのだ。これは儀式だ。『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup>が己の敗北、そして退場を飾るための」

「き、儀式……?」

「彼女がこの世界で果たすべき役目は、もう終わった」

ガウエインは静かに、しかし決然と言った。そうである、微塵の間違いもないことを確信した口調。傲慢極まりないとも思えるが、その巨躯に溢れる絶対的な自信は、言葉にさえ揺るがぬ信念を与え

ているかのようだ。

「ちょ、ちょっと待てよ、ガウエイン。わけがわからねえよ。果たすべき役目ってなんだ？　それが終わってたってなんだ？　自分の中だけで完結するなよ。あんた、俺を説得しに来たんだろう。だったら俺に分かるように話せ。あんただけ理解してても意味がない」

「このままでは、答えられぬと？」

「当たり前だ！」

「……一つ聞く。卿が魔女に肩入れする理由は、なんだ？　魔女との約定を反故にしたところで、卿には何の不利益もあるまい。あれは見切りの早い女だ。卿に脈なしと見れば、速やかに卿から離れていくことだろう。あれを今とどめているのは、卿の思わせぶりな態度ということになる。本気で踏み込む気がないのであれば、早く魔女を解放してやるのが情けというものだぞ？」

「解放つて……そんな、俺がストレーガを縛っているみたいに」

「縛っているのだ。あれは卿という希望を見つけたからこそ、この世界に舞い戻ってきたのだぞ」

「え？」

反射的に問い返すと、わからないのか。そう言わんばかりに、ガウエインの首が軽く傾いた。首を傾げたのだらう。敵つい外見に似合わぬコミカルな仕草に、思わず吹き出しそうになる。だが、ガウエインの語る言葉は真剣そのものだ。笑うことなど、一瞬たりとて許さないほどに。

「二年前。思いの丈を込めて、魔女は女皇とその築き上げた力に挑んだ。そして敗れたのだ。彼女はそのまま、この世界から遠ざかり、やがては消えるはずだった」

「……ストレーガは、諦めてなかったみたいだが」

二年間、探し続けていたと彼女は言っていた。女皇とガウエインに対抗しうる、自らの力を。<sup>バトナー</sup>そうして選ばれたのが、自分なのだ。

「……訂正しよう。諦めかけていた。そしてそのまま、諦めていた……はずだったのだ。卿が見つからなければな」

「穿つて見すぎだよ、そりゃ。もともとやる気はあつたはずだ。実際、俺じゃなくてもよかつたと言われたし」

「二年間、我は幾度か魔女の動向を探っている。あれが何を求め、どのような手を打ってくるのかも、ある程度は読めるつもりだ。そしてついに魔女が探し当てた存在が、卿なのだ。それは奇跡にも等しい確率だろう……卿である必要はなくとも、卿以外にはいなかつたのだ。天命は尽きつつあつた、そう考えるのが自然だろう」

「それをあんたが決めるのかよ」

「決めるのではない。ただの事実だ。きやつはもう、一度負けているのだぞ。言つただろう、ほとんど死んでいたアレを、甦らせたのは卿だ」

ガウエインの言葉はまぎれもない賞賛だ。しかし、言葉の奥にはそれと似つかわしくない、暗くて冷たい炎が燃えているように感じる。

仮面をかぶつたアバターの内心を推し量るのは難しい。ましてや、ガウエインのような巨漢は、視線を合わせるのだけでも大変だ。

それでも、どこことなく感じるのだ。ガウエインから贈られる賞賛の裏には、その氷にも似た無機質のシールド・コンタクトと同じような、冷酷なものがあると。

そしてその冷たい衝動こそが、今のガウエインという人物を動かしている原動力に違いない。ジェット・バレルはそう確信していた。

そう、わかる。腹の底を隠したまま、相手を自分の都合よく動かそうとしている。そういう手合いの目に、よく似ているのだ。



「……そこまで、俺がいると都合が悪いか」  
「有り体に言えばな。卿がいなければ、あれは緩やかに消えていくだけだった。もう二度と、女皇の心を惑わすこともなかった……！」  
「言うなあ。そこまで魔女が嫌いだよ」  
「はつきり言おう。大嫌いだ」

エフェクトのかかったガウエインの声であつてもなおわかる、その怒り。

そこまで断言されては、返す言葉もない。何かしようと思つていたジェット・バレルの指先が宙を泳ぐ。

「そ、それだつて魔女と女皇、二人の仲がこじれたのはすれ違いみたいなもんじゃなか。もう少し互いに歩み合つて、話し合つてだな……」

「そのような甘いことを言っていられる時期は、とうに過ぎたのだ」  
「！」  
「おおっ!?!」

ビリビリと空気が震える。

「卿は当時を知らぬ者だ。女皇が何を思い、何を考え、そして立ち上がったのか知らぬだろう。我はそのような者が、女皇の行く手に立ち塞がることを望まぬ。立つのであれば、ただ『ペルソナクライ』というアプリケーションのルールに則つて、競い合えば良いこと。そこに別の思惑を持ち込み、介入することなど許さぬ」

決然と言い放つガウエイン。気の弱いアバターならば、これだけで即口グアウトを考えるような剣幕だ。

「けどなガウエイン。その『ペルソナクライズ』の純粹性を今歪めているのは、あんたらの女皇じゃないのか。俺だつて噂くらいは聞いている、あんたらのやり口は。あんただつて自覚はあつたみたいだしな。そういう連中が吐いていい台詞かよ!？」

「そ、それは……我もわかつている。わかつている……いつか、女皇に理解させねばならぬ。だが、女皇は……今の女皇は、『友』の言葉しか聞かぬのだ……」

最後の台詞は、吐き出すような苦しさを伴っていた。

「ちよつと待て。間違つてると思つたら、止めてやるのが友達だろ。あんたそんな女皇のことを想つてるのに、友達じゃないのか!？」

「我は友ではない。友には……なれなかつたのだ」

「どうして!？」

「決まつている。女皇の心には、今も魔女が棲んでいるからだ!！」

ぞくりと背筋が震えた。声だけでライフ・ポイントが削られたかと、一瞬コンソール・パネルで確認してしまう。

「……女皇にとって友と呼べるのはただ一人。彼の者、『剣の魔女』のみなのだ」

「そ、それは……」

「わかるか、ジェット・バレル。かつて二年前、その魔女ですら女皇を止めることができなかつたのだ。それ以上を望むことはできない。此度に卿が助力したところで、勝つことは不可能だ。そして力無き者の言葉には、この世界では何の意味もない」

「あんたに手抜きしろ……つて言うてできるとは思えないもんな」

「……女皇はその手の嘘をたやすく見抜く。そしてその『裏切り』にまた傷つくのだ。そして我には、女皇を一人にすることもできん」

ガウエインにしてみれば、状況は詰みなのだろう。八方塞がり、どちらを向いても遠からず破滅があるだけ。残された手段は、女皇に殉じることのみである。そういう思い込みが、この忠心の塊のようなアバターを支配していた。

「女皇は魔女と決別せねばならぬ。しかし、ただ手切れをするには、状況がこじれすぎた。魔女の挑戦は千載一遇の機会なのだ。女皇は『友』への妄念を断ち切り、魔女は世界から消える。こうすることで、初めてこの世界から不幸がひとかけら消えるのだ。しかし……卿がいてはそれもならぬ」

「ど、どうして？」

「卿がいるかぎり、魔女は希望を捨てぬだろう。自分の力が及ばぬと認めず、卿を鍛え上げ、我に抗する存在としてふたたび挑むに違いない。そのあいだ、ずっと女皇の心は荒んだままになる。我は、それを捨て置けぬ」

「……要するに女皇がストレーガの引導を渡すことこそ、あいつらのためだっていうのか？」

「その通りだ。魔女に引導を渡す者も、また女皇でなくてはならぬ。なぜなら、彼女たちは『友』だったのだからな」

話は、それで全てだった。

重苦しい沈黙が、対戦バトルフィールドを満たしている。

ガウエインから視線を外し、しばし思索にふけるジェット・バレル。やがてふと思いついたように、ぼつりと呟いた。

「なあ、仮に……俺があんたの提案を蹴つたらどうするんだ？」

「異なことを聞く。そのとき取る行動など決まっているだろう」

「じゃあ、そのときは？」

「そのときは……この『太陽の騎士』<sup>ガウエイン</sup>、刃をもって丁重にお相手致す！」

「懸命な判断を期待する」

そう言い残すと、ガウエインは転移システムで姿を消した。

同時に構築されていた対戦バトルフィールドが解除され、ジェット・バレルも転移前の座標へと戻ってくる。だが仮面の下にあるその表情は、とても機嫌がいいとは思えないものだった。

そういう雰囲気を感じ取ったのだろう。代わりに店番をやっていたジジ様が、やや遠慮がちに声をかけてきた。

「渋い顔じゃな」

「うるせえよ」

「ひどい言い草じゃな。店番してやったのに」

「あ、悪い……」

バツが悪そうに頭をかくジェット・バレル。

そのまま、無然としているジジ様の横に腰を下ろした。

「……いろいろ話してきたようじゃのう」

「うん」

「腹は決まったのか？」

「だいたい」

「ならどうする？」

問いには答えず、少しだけジェット・バレルは顔を伏せた。最後のもうひと押しを、自分の中でまとめるように。

たっぷり三分は悩んだろうか。待ちくたびれたジジ様が、機会を改めようと腰を挙げたその時、ジェット・バレルが言った。

「……ジジ様。つなぎのある連中、集めてくれないか。話があるんだ」

### 3 - 5 太陽の騎士（後書き）

三章はここでオシマイです。

ようやく戦争開始ですね、次あたりから。

書きたかったパートがきたなあ。

気合い入れよう。

毎週日曜日、夜八時。

『領土戦』<sup>コンクエスト</sup>は、決まってこの時間に行われる。終了は夜十時。たった二時間の『戦争』だ。しかしその二時間こそが『ペルソナクライン』の全てである。そう断言するアバターも少なくない。

複数対複数、『城』<sup>シタデル</sup>を奪い合う攻防戦。対戦による戦闘経験の蓄積と、稼いだ資金<sup>クレジット</sup>による性能強化は、全てこの二時間のためにあるのだと、彼らは言う。

それが正しいかどうかは個々人の嗜好によるところが大きいだろうが、『ペルソナクライン』の祖であるFPSやTPSといった古のゲームと同じように、この手の集団戦が『華』であることには違いない。

『領土戦』は全てに参加者に対して公平でなくてはならない。そのため、この二時間においてはバトルフィールドの設定は全てシステム側で管理される。

赤い月。むせかえるような炎と煙。現実<sup>リアル</sup>の風景を残しつつも、戦火によって傷ついた街並み。そんな真紅に彩られた『領土戦』バトルフィールドを、アバターたちは『戦場』<sup>リアル</sup>ステージと呼んでいた。イケブクロ・エリア東部。現実<sup>リアル</sup>でいえば首都高速東池袋出入口付近にある高層ビル・サンシャイン60とそれに付随するサンシャインシティをベースに武装化された、要塞めいた巨大建造物。そこそがイケブクロ・エリア支配権の象徴である、イケブクロ・シタデルだった。

その鋼鉄の要塞に向かって、隊伍を組んで進軍する一団があった。数はざつと二百ほど。整然と進むその姿は、古代マケドニアの密集<sup>ファラ</sup>方陣<sup>リンクス</sup>を思わせる。

先頭に行くアバターの<sup>バイク</sup>が掲げ持つ長槍には、軍団旗が掲げられている。記されているエンブレムは銀色のドラゴン。さらに頭首を意

味する草色と、アライアンス直轄の軍団であることを示す桃色があしらわれている。

この百人ほどの軍団こそ『エンプレス・オプ・ダイクローム・センチュリオン白銀騎士団』の中核戦力、『エンプレス・オプ・ク聖銀の女皇』直轄軍団、『クローム・センチュリオン女皇警護騎士団』だ。

よく見れば、先頭を行く『女皇警護騎士団』の両翼には、草色と桃色を使わない旗が掲げられている。こちらは『女皇警護騎士団』以外、一般の騎士団員たちや支配下にあるアライアンスのアバターたちの軍団だろう。

無論、これが『白銀騎士団』の総戦力というわけではない。自領土の防衛や、後詰め伏兵など、ほかにアバターはいるはず。しかしどれだけ総戦力が多かろうと、たった一箇所の城を攻め落とすにすれば、この大軍団は明らかに過大な数だった。

何を警戒しているのか、ストレーガそんなものは、言うまでもない。最強のペルソナアバター、『ストレーガ剣の魔女』に対する備えに決まっていた。

「ガウエイン」

「何か？」

軍団の最後尾やや手前を進む『エンプレス・オプ・クローム聖銀の女皇』が、側にいた自らが最も信頼するアバター、『ガウエイン太陽の騎士』に声をかける。

「ストレーガは、来るかしら？　今さら逃げてしまったりとか……」

「それはない。必ず来る。売った喧嘩を反故にするような者ではない」

「そうよね……」

あの魔女が、戦を前にして逃げるはずがない。それを誰よりもよく知っているはずの彼女が、こつも念押しする理由は、周囲を覆う濃厚なノイズにあった。

戦火を再現したフィールド・エフェクトに巧妙に混ぜられた、索



敵感知情報収集を妨害するデータ・ノイズ 目視以外、ほとんどの情報がない状態で、彼ら騎士団は進軍していた。

「小細工を……誰の仕掛けだ？」

「あの子に決まってるでしょう。戦闘に勝つためなら、どんな手段でも使う子よ。城全域を覆うようにかけているノイズに、何の意味があるかはわからない。けど、警戒するに越したことはないわ。斥候を多く出しなさい」

「御意」

女皇の命令はもつともなものだ。ガウエインが頷く。

だがそのとき、夜闇を切り裂くように、高らかと少女の音が響いた。

「その必要はないっ!!」

「何奴……と問うのも愚かか。敵アバターの状態を確認せよ!」

ガウエインの下知が飛ぶと、幾人かのアバターから、前方に向けて強烈なライトが照らされる。

闇をくり抜くがごとき、円形の照明の中心 そこに立つ、まるでドレスを着ているかのようなシルエットは、今この場にいる者たちは誰であろうと見間違えるはずもない。

「敵は一人! 目視で確認、『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup>です! 『城』<sup>シタデル</sup>正門前に

陣取っています!」

「装備は!?!」

「重装! サンプリングデータにより大剣『七星剣』<sup>セブtentリオン</sup>、携行防盾『ウルトリクス復讐者』を確認! そのほか両肩に大型の増加装甲を装備! また、手には兜らしきものを持っている模様!」

「完全武装というわけか……」

ガウエインをして、息を飲ませる佇まい。圧倒的な威圧感。たった一人で大軍の前に立ち塞がるその胆力。どれをとっても『最強のペルソナアバター』の異名に恥ずかしくない。古の兵に勝るとも劣らない武者ぶりだ。

彼女は突き立てた剣を杖代わりに、不動の姿勢で女皇率いる軍団を待ち受けていた。

「まったく、待たせてくれるじゃないか。来ないかと思ってヒヤヒヤしたよ」

「それはこっちの台詞ね。あなたのほうこそ、怖じ気づいて来ないかと思っただわ」

女皇は戦列を開かせ、真正面からストレーガの視線を受け止める。今この瞬間に斬りかかってこられたら、女皇を守るものは何も無い。そして魔女は、この距離を一足で詰めることなどたやすい。にも関わらず、女皇は魔女と目を合わせるためだけに、軍団を左右に退かせた。それを実行する覚悟たるや、魔女に少しも劣るものではない。

「はっはっは、そりゃないよ。僕はこの通り身一つだ。失うものなど何もない。戦を恐れる理由などないさ。それが僕の強みだ」

「そうね。あなたはそれでいいのだね。でも、私は違う。私は私に従う皆のために、倒れるわけにはいかない。だから倒れない…  
…負けないのよ」

「オトモダチがたくさんつてわけだ」

「友ではないわ。部下…いいえ、『仲間』よ」

「仲間、ね」

そう言ったストレーガの声には、嘲笑めいた響きが含まれていた。

それが気に障ったのか、苛立ったように法杖を打ち鳴らしながら問う女皇。

「そう言うあなたこそオトモダチはどうしたの？　ひとりぼっちのようだけど？」

「ああ、フラれた」

「は？」

「だから、フラれたのさ。いやあ、世の中なかなか上手くはいかないもんだねえ」

あまりにもあっけらかんというストレーガに、女皇の動きが止まる。ついでに、後ろに控えていたガウエインの動きも止まった。

「まったく、僕のモーションを袖にするとは。参っちゃうよねホント」

「ばっ……バカにしているのっ！？　ふざけないで！」

「やれやれ、ノリが悪いなあ。顔真つ赤だぜ？　なーんて、お前のベルソナ仮面は銀色だけどサ」

そう言つて、コツコツと自分のスモーク・グレーのベルソナ仮面を指先で叩いた。

あまりにもみえみえな、露骨な挑発。普段ならば、別の相手ならば、女皇も決して感情的にはならない。鼻で笑つて重火砲の一発でも撃ち込ませるところだが、今度ばかりは相手が相手だ。感情的にならぬ理由がない。

「あなたつて人は……ガウエインっ！」

「はっ……はあっ！？」

「何を呆けているの、あなたまで！　騎士団に号令！　縦深陣に組み替え、総員突撃体勢！　あのバカ魔女を押し潰してしまえっ！」

「しかし女皇！ あんな言葉は信じられぬ！ 魔女が一人で出てくるなど、あからさまに……相棒が、『黒い銃身』<sup>ジェット・バレル</sup>がいる可能性は潰せぬ！」

「それはあなたが調略したのでしよう!？」

「し、しかしはつきりとした返事は……」

見かけに似合わずガウエインはかなりの慎重派だ。いや、女皇が苛烈かつ強引に物事を進めるタイプだったからこそ、そうならざるを得なかったと言うべきか。

女皇の至らぬところを埋める。ガウエインは、それが自分の存在意義だと自認している。数日前、ジェット・バレルと接触を持ったのも、そのためだ。

しかしそれは時として女皇と意見の食い違いを生み あくまでも女皇のサポートに生きるガウエインは、ついには押し切られてしまふのだ。

そして今も、そうだった。

「どつちでもいい！ とにかく、今は突撃して、魔女を叩き潰すの！ それともあなた、この場で足踏みさせるために騎士団を率いてきたの!？ 違うでしょう!？」

「ぎよ……御意！」

指揮下の『白銀騎士団』全軍に号令が下る。

イケブクロ・シタデル攻防戦は、こうして火ぶたを切って落とされた。

ドドドッと、道を踏み砕くような地鳴りと共に、『白銀騎士団』が突撃を開始する。

まるで雪崩が高速で迫ってくるような光景だ。気の弱いものなら、脅えすくんで動けなくなってしまうかもしれない。しかし魔女は仮面の下で微笑みを浮かべながら、その地鳴りを心地よいとさえ感じていた。

「はっはー、こんな時だがなんとも楽しくなってきたよ。果たすべき目的はあるにせよ、まずはやっぱりゲームを楽しまなくちゃね。あいつにやそれがないから、ダメさ」

とんがり帽子のような尖った先端を持つ兜をかぶり、大剣と盾を持ち直す。大剣の柄頭からは太い鎖が伸び、前腕部にぐるぐる巻きにされていた。乱戦中、武器を手放さないようにするための心得に見える。

そう、今回の『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup>の仕様は、すべて乱戦を前提にチューニングされたものだ。軽量高機動を旨とするストレーガだが、今回ばかりは肩の増加装甲など、予測しきれない攻撃に対処するための装備を取り付けてある。

攻撃など喰らわん、と豪語する彼女らしからぬ後ろ向きさ　と  
いうわけではない。純粹に、現実的なのだ。

乱戦ではどれほど腕が立っても、当たるものは当たる。それが二年前、彼女が敗北によって学んだことだ。この装備　『ストレーガ・ザ・デストロイヤー』は、そのときの反省を生かした、完全駆逐戦闘仕様なのだ。

「そろそろ……こっちも行くでしょうか」

ちらり、と背後のサンシャイン60に目を向けてから、ストレーガが全身のスラスタを起動する。スカートアーマーなど、全身の装甲が次々と展開していき、スリット状に青白い炎が一斉に吹き出すその様は、まるで炎に彩られた女神のようだった。

ととん、と踵を二三度鳴らし、グリップを確かめる。そのまま踏み込み ストレーガの姿が消えた。

「ソニック・チャージ  
音速突撃ッ!?!」

騎士団の誰かが叫んだ。

次の瞬間、激突音が響き、一人のアバターが宙を舞う。隊列の先頭にいたアバターだった。特に緑色の重装甲で身を固めた、あのブルー・グラードに似た重厚な印象のアバターが、あっけなく宙を舞った。大きさを二回り、重さで倍は違うアバターが、ストレーガの速さに負けたのだ。

一人分、隊列に空いた隙間。そこにストレーガが滑り込む。

「ごきげんよう、騎士団の諸君。そしてさようなら」

「くっ! 盾を回せ! 剣を振らせるな!!」

「いい反応だ。けど、無意味だよ!」

腰を入れて、上半身を回転させる。剣は腕で使うのではない、身体で使うのだ。そう言わんばかりの一撃が、一人のアバターがとっさに構えた盾の上から炸裂する。

熱したナイフでバターを切るように というのはこういうことだろうか。大剣はほとんど何の抵抗もなく盾に食い込み、そのまま敵アバターを一撃で両断する。

「ジンク!?!」

斬られたアバターの名を、誰かが叫んだ。

その間にすら、魔女は剣を振っている。手近な奴から片付けるのもつもりで、剣を逆袈裟に振り上げる。切っ先は盾と身体のあいだに滑り込み、哀れな獲物の腕を斬り飛ばす。だがそれで助かったわけ

ではない。狙われたアバターが失った腕の切り口を抑え、うずくまろうとした瞬間　頭上に降ってきた“返し”の剣で頭から胸までを斬り裂かれ、その場に崩れ落ちた。

「困め！　前後左右から同時に仕掛ける！　背中に目はないはずだ！！」

「僕を取り囲む？　そいつは無理な相談さ」

誰かの指示を嘲笑う。彼女にはそれだけの力があつた。

鎖を解きながら、剣を勢いよく地面を突き立てる。そのまま腕の力だけ身体を持ち上げ、跳躍して四方から殺到するアバターをかわすストレーガ。

「四方を埋めても逃げ道はある。上下を忘れちゃあダメだね」

鎖をたぐつて剣を引き寄せると、空中でくるりと身体を入れ替える。もちろん、そのまま素直に着地するはずがない。

ストレーガの行動は一事が万事攻防一体、攻めかかりながら守り、体を引きながら体をねじ込む。流水のように攻めと守りがつながっているその動きには、無駄というものは存在しない。

使うのは踵、そして臍。磨き、鍛え抜かれたストレーガの両脚は、どこで蹴つても刃物と同じ効果を持つ。それはまさしく足刀。空手道に同名の技があるが、比喻表現ですらない。当たれば事実、斬れるのだ。自在に動く長刀を、下半身に二本装備しているも同じこと。こと攻めに回っているかぎり、魔女に死角は存在しない。

「悪いね。踏むよ」

口でそうは言うものの、謝る気などさらさらない。

振り降ろした踵が足元のアバターの頭部に食い込み、斧のような

刃物でかち割ったように裂けて砕ける。彼女を体重を乗せた“かかと落とし”だ、頭部のように脆いところに喰らえばひとたまりもないのは当然。

もの言わぬ塊となったアバターの残骸を引きずり倒しながら着地するストレーガ。一瞬周囲に視線を走らせたかと思うと、今度は思い切り後退する。

それは鮮やかな後退だ。全力でスラスターを吹かし、一心不乱に後退したその動きは、いつそ見事といっていいほどだった。

「ひゅう、危ない危ない。やっぱり闇雲に斬り込むだけじゃあ突破できないかあ……」

汗をかかないペルソナアバターだが、彼女はわざとらしく、冷や汗をぬぐうような仕草を見せる。その視線の先には、さっきまで自分のいた位置に落とされた、黒い『網』があった。その横には、何体のガンナータイプのアバターも見える。皆、一様に同じ形の銃を持っていた。

「大型モンスター用の電磁捕獲ネットに、駆動制御系を破壊する情報伝達断裂弾ライフルか……なかなかわかってるじゃないか。まずは僕の『速さ』を殺さないと、勝負にもなんないもんね」

大剣を肩にかつぎ、ぐるりと首を回す。つかつかと小刻みにステップを踏んでいるのは、一息つきつつも、戦いのリズムを自分の中で崩さないためだ。

「この陣の厚さ……さすがはクロムの力と、まずは褒めておこう。この縦深陣の攻略が、今回のゲームでは一面扱ってところかな。まあ……こんなところでつまずくわけにもいかないからね、さくさく陣を破って、女皇を丸裸にしますか！」



カン、カンと地面を剣先で数回叩くと、魔女はそのまま剣を振り上げ、天まで届くような声で叫んだ。

「それじゃ出番だよ！ ダイレクト・カン・サポート 直接火力支援』 ツ！！」  
『ヤポール了解ッ！！』

応えたのは、通信システム越しの、ノイズ混じりの声。  
それと同時にキラリ、と一瞬天が光る。

次の瞬間、文字通り雨あられのように降ってきた銃弾が、『白銀騎士団』の前衛を襲った。

#### 4 - 1 開戦（後書き）

魔女無双2。

次が魔女無双猛将伝、その次が魔女無双エンパイアと続きます。  
嘘です。

次はまあ、弾撃ったり撃たれたりした人の話ですたぶん。

## 4 - 2 丁々発止

天から降り注いだ弾幕は、重装甲が自慢であるはずの騎士団アバターをやすやすと貫いていた。

並の弾頭ではこうはいかない。魔女は、そして狙撃者は、装甲を突破するために何らかの策を打ってきた。それは明らかだった。

「報告っ！ 何事だ！？」

ガウエインの下知が飛ぶ。

「上空……おそらくシタデル尖塔頂上部からの狙撃です！ 低速のホーミング弾のようなものが、前衛アバターの装甲が弱い部分を正確に……」

「なんだと？ ただの狙撃で、我が騎士団のアバターの装甲が抜けるはずあるまい！」

「おそらく、対重装甲用の特殊弾頭を使われたかと。サンプリングデータによれば、徹甲爆裂弾アイマー・クラッシュヤーの可能性が高いと思われまます！」

徹甲炸裂弾とは、らせん状に装甲に深く食い込んで情報組成を破壊する特殊弾頭だ。装甲が強靱であればあるほど大きなひずみを発生させるため、重装甲タイプのアバターの天敵ともいえる。無論欠点がないわけではなく、重く空気抵抗の高い形状は弾速が上がらず、ペルソナアバターの反応速度からすれば見切りやすく、また弾道は安定しないのが泣きどころだ。そのため、ここまでの精度で正確に弱点へと撃ち込むのは、神技といっても過言ではなかった。

「あんな弾で狙撃を？」

「事実、撃たれました！ イリーガル 非合法ぎりぎりの弾道補正プログラムな

ら、あるいは……ですが、装甲の弱点を正確に撃ち抜くというアバターの技量自体が、そもそも尋常ではありません」

「それは、つまり……」

「まぐれ当たりではありません。相手はあの距離から……こちらの装甲を突破できるということに」

ガウエインに報告しているアバターの声色には、絶望的なものにじんでいた。

間合いを詰めての突撃戦闘を旨とする『白銀騎士団』の性格上、火器の防御については装甲に頼ることしか考慮されていない。むしろ厚い装甲で敵の攻撃を受け止めながら、蹂躞・突破することが主戦術となっている。それはアバターによる集団戦というものを突き詰めた場合、機動力によって回避を行うことは、あまり現実的な戦術にはならないからだ。

それでも反撃用に火器を装備したアバターの一団は部隊内に配備されているが、それもあくまで常識的な装備の範囲だ。このような状況下での反撃は考慮されていない。

たしかにシタデル尖塔　つまりサンシャイン60の高さは約二百三十メートル。通常の狙撃ならばさほど問題なく命中を期待出来る。単純に距離だけ見れば難しい、という言葉は使われないだろう。しかし相手のように狙撃にはおよそ不向きな特殊弾頭を使い、吹き荒ぶ激しいビル風を計算に入れ、さらには複数のアバターに連続で当てているなどという芸当ができる者は、騎士団にはいない。それどころか、トップクラスのランカーにさえそうはいないだろう。つまるところこの狙撃は、直接対処不能の脅威そのものだった。

「ガウエイン、あの男なの？　撃ってきたのは、あいつなの？」

「わからぬ。だが、どちらにせよ放っておくわけにもいかないだろう」

女皇の問いにも、首を横に振るしかない。

仮に撃ってきたのがあの男だとすれば　甘く見ていた。甘く見ていたつもりはないが、甘く見ていた。彼の者の実力を、あの男を、まだ低く見積もっていた。

まったく、どれだけの力を隠していたのか。敵をナメてかかる習慣は、ガウエインというアバターにはない。しかしそのガウエインをもってしても、魔女がパートナーに選んだというその事実を、頭では理解できても実感はしていなかったということになる。

「……ッ！　敵アバターに熱源反応！　第二射、来ます！」

「チッ！　総員、対空防御姿勢！　盾で装甲の薄いところを守れ！」

騎士団のアバターが持つ携行防盾は、このような装甲で対処しきれない攻撃を防ぐためにある。

構えた盾が弾頭を受け止め、がりがり食い込ませながら火花を立てる。手足と違い、駆動系・制御系のシステムを内蔵していない盾ならば、その厚みで徹甲爆裂弾の威力を殺すことができるのだ。

しかし射撃が続くかぎり、こうして盾を構えなくてはならない。進軍は自然と遅れる。そしてそれは　隊列全面に立つ魔女にとつては、絶好の好機となるのだ。

「援護があるうちに……数を減らさせてもらおうよ！」

「魔女、来ます！」

「前を空ける！　我が迎撃する！！！」

女皇の近衛を離れたガウエインが、白いマント状装甲をはためかせながら、魔女に向かって突進する。巨体とは思えぬ速度は、足元のグライド・スピナー　それも大重量に対応するためブースターを組み合わせた『ラケーテン・スピナー』と呼ばれるタイプ　によるものだ。地面から幾度も火花を散らしながら、槍を構えたガウ

エインが突っ込む。

迎え撃つストレーガも負けてはいない。肩の増加装甲裏と、スカーフトに内蔵されたスラストを展開し、十分に加速しながら剣を構える。

「来い、ガウエイン！ 遊んでやるよ！」

「ほざくなー！」

大剣と槍がぶつかり合う。金属同士が弾け、火花が二人の仮面を焼く。仮面の下では不敵な笑み。いかに立場や怨恨があろうとも、強敵との戦いで笑えぬものは、けっして強くはなれないのだ。

「上は誰だ、魔女！ 誰が撃っている！？ あの男か！？」

「さあてね！ 孤独に戦う僕のために、神様がくれた助けかもな！」  
噛みつくような勢いで、ガウエインが吠える。だが、ストレーガは嘲るように答えるのみ。

「戯れ言を……ぬかすな！」

『重戮槍』の可動刃が唸りを上げる。槍でありながら、突くだけでなく振り回しても相手を引き裂く『重戮槍』、その高速回転する刃を喰らえば、軽量瘦躯のストレーガはひとたまりもない。

しかし しかした。喰らわないから魔女なのだ。逆袈裟気味に振り上げられた槍を、ストレーガは回避しようとして身体をひねる。だがガウエインの巨躯と同じくらいの長さを持つ槍だ。そのリーチたるや尋常ではない。斬るために踏み込んでいたストレーガを薙ぎ払うのに十分なほど届く。胴をえぐり取る、という意志を込められた一撃が、彼女を襲った。

「さっすが……ぶちかましただけは十人前だねガウエイン！」

賞賛の声を挙げると、槍に合わせて身体を浮かせながらぐるりと回転させる。装甲で受けない、身もかわさない。槍にぶち当てたのは大剣の腹。『七星剣』の腹を使い、可動刃の上を転がるようにして滑りながら、ガウエインと交叉するストレীগ。

「ええい曲芸か！ ナメた真似を！」

「そんな大振り当たるかバーカ！ 大雑把なんだよ！ そのくせ直せって、昔から言ってるだろ！」

「ふざける！」

だがそのまま好きにさせるガウエインではない。間違ひなく騎士団ナンバー・ツー、それはすなわちアバター・ランクもきわめて高いということだ。重ねてきた実戦の経験は、一合二剣を合わせた程度で、標的を取り逃がすことなどない。

「ぬん！」

突き込んだ槍をさらに押し込み、地面へとめり込ませる。それをブレイキ代わりにするかと思えばさにあらず。『重戮槍』の可動刃、それが生み出す螺旋の回転力と、ラケーテン・スピナーの突進力を組み合わせ、巨体からは想像もできないほどの速度で反転する。

「おおっ！？」

「貴様の技だ、魔女！！」

「覚えてかー、教えた甲斐があつたよ」

「言っておけ！」

「なんと！」

背後に迫るガウエインの槍を、担いだ剣で受け止める。いくら重

装とはいえ、超重量級アバターであるガウエインとの体格差は歴然。踏みとどまれずに、身体が前に吹き飛ばされる。だが、それは彼女が甘んじて受けたもの。浮いた身体をそのまま生かし、ブースターを吹かして推力に乗せる。ガウエインの打ち込みの威力を、そのまま空中でのダッシュユカへと変換したのだ。

「バカな！？ あの姿勢でっ！！」

「僕を誰だと思ってる？ 僕は…… 『ストレーガ剣の魔女』だ！」

普通はこんなことは考えないし、発想しても機体の反応が追いつかない。そんな奇策を大真面目に実行する決断力と行動力こそ、魔法の魔女たるゆえんの一つ。まさしくありきたりの常識を超える、ストレーガの『魔法』だ。

ガウエインからもらった勢いを利用して、騎士団の戦列へと一気に突っ込む。上空からの援護射撃をしのぐことにかまけていたアバターたちに、その奇襲を避ける術はない。

それでも座して斬られるならばと、幾人かのアバターは盾を捨てて魔女へと向き直る。手にした武器は斧やメイスだ。格好よさげな剣ではなく、実用本位の鈍器類を選ぶあたりに、実戦慣れしていることがうかがえる。

彼らは全方向から一斉に、押し潰すように魔女へと襲いかかった。それは正しい選択だ。実力差はもはや歴然。一対一、いや一対二でも勝ち目があるかは怪しいのだ。こういう手合いに立ち向かうには、複数で攻めかかるしかない。それも、さっきのように一対一を繰り返す状況を作らせてはダメだ。同時に、一斉に、まさしく包み覆うように、一度に攻めるべきなのだ。

「ほう……」

バカではない、そう言いたそうな口振りで、ストレーガが感嘆の



声を出す。しかしそれも一瞬。彼女が何かを告げる前に、包囲したアバターたちは得物を振り上げ、ほとんど同時に打ちかかった。

「……まあ努力は買う。それは賢策だよ。けどね、君たち程度が何人東になつてかかってこようと……僕をどうしようとしてのは無茶つてもんだ。相手が僕じゃなければよかったな！ パイル・スパイク展開ッ！！」

両肩に増設されていた、『アクティブ・アーマー』アクティブ・アーマーがにわかに輝きを帯びる。その表面にある、飾りのように見えた円形の穴から飛び出したのは、エナジー光の塊で出来た近接防衛用の『刺突杭』パイル・スパイクだった。

「や、やば……ぐげえっ！」

一瞬で飛び出した両肩あわせて六本のスパイクを、彼女を押し込んだ気になっていた騎士たちが避けられるはずもない。ある者は顔を、ある者は胸を、脚を、腹を、それぞれに貫かれる。急所に直撃をしていても、していなくても同じだった。串刺しになつて動きが止まった瞬間、大剣『七星剣』セフテントリオンと携行防盾『復讐者』ウルトリクスが唸りを上げて襲いかかるのだ。受けても地獄、避けても地獄の二段構え。魔女の強襲突撃アサルト・チャージに隙はない。

「弱いぞ！ こんなものかよ、『白銀騎士団』！」

「言わせておけばっ！！」

魔女の挑発に激昂した一人の騎士が突っかける。だがそれすらも、全ては彼女の掌のうち。瞬時に大剣が唸り、真っ二つに斬り飛ばす。

「そして……頭にすぐ血が昇る。動きがのろいし、頭ものろい！ いいとこなしだな！ 烏合の衆か、最大アライアンスが聞いて呆れ

る！！」

事実上、電腦空間最強のペルソナアバターにこう言われては、返す言葉などひとつもない。

彼女が一步踏み出すたびに、彼らは二歩後ろへ下がる。たった一人の魔女を前に、百戦錬磨の猛者であるはずの騎士団が、ひたすらに圧倒されていた。

「おのれ、魔女め……！！」

縦深陣を回り込み、女皇の近衛へと戻ったガウエインは、心の底から悔しそうにうめき声をあげた。無理もない、今のところ魔女とその協力者に、いいように引っかけ回されているのだから。

そんなガウエインとは対照的に、女皇は顔色ひとつ変える様子なく、魔女と交戦する自軍を見つめていた。

「焦っちゃダメよ、ガウエイン。数ではこちらが勝っているのだから問題ないわ。事実、騎士団は少なからず魔女を足止めできている。このあいだに、できることをやるべきよ」

「しかし……」

「物事は順番というものがあるのよ。まずは……あの小うるさい狙撃手を黙らせるべきじゃない？ 支援と前線を分断する。戦の基本だと、私は思うのだけど」

「ちゃりん、と法杖を小さく鳴らし、ビルの上を指す。その天辺には巧妙に物陰に隠れているが、確かにアバターの姿がある。あれをまずはなんとかせよ、というのは女皇の作戦というわけだ。」

「とはいえまいったわね、情報ノイズが出た時点で、もつと伏兵を警戒すべきだった……いえ、警戒が足りなかったのとは少し違うか。あの狙撃手の能力が、こちらの想定以上だったというだけかしら。どちらにせよ、その齟齬っていうのは修正が必要よねえ？ 手っ取り早いのは、即時排除することになるかしら」

「しかし、誰があそこまで？ 中から攻めるにしても外から攻めるにしても、あの徹甲爆裂弾の狙撃は厄介だ。あれに盾抜きで耐えられるのは、我くらいなものだが……」

「だったらあなたが行けばいいのよ。当然でしょ？」

「そ、それは」

虚を突かれたような言葉だった。たしかにあの狙撃に耐えうるのが自分しかいないのであれば、自分がやるしかない。だが自分には女皇の近衛という役目もある。自分の身はひとつしかないのだ。どちらが今、重要であるか。にわかに判断はつきにくい。

「我が女皇のそばを離れるわけには……」

「もつともな意見だわ。私とあなたの分断こそ、敵の目的だものね。でも、ここは相手の思惑に乗ってあげましょう」

「何故？」

「あなたの力ならば、上にいるのが誰であれ、軽々ひねり潰せるでしょう？ そうしたら、とんぼ返りで戻ってくればいいのよ。可能な限り早く。上手くいくかどうか、じゃないわ。やるのよ、勝機とはそうやって掴むものだわ」

「たしかに、これ以上戦力をすり減らされるわけもいかん。そこまですわられたなら、やってみせよう。だが、護衛は……」

「大丈夫よ。頭首支援スキルが効いてるもの。今の私なら、あの子とだってサシでやり合えるわ」

女皇の身体には、ぼおつとした光のエフェクトがかかっていた。

これこそ城を持つ頭首支援スキル、アライアンス・リーダーのみが恩恵を受けられる特殊な支援効果だ。ステータス能力の底上げや、自動防御フイルタなど、この恩恵によって頭首の戦闘能力は大きく引き上げられる。たしかに豪語するとおり、今の彼女ならば魔女と本気で立ち合うことも可能かもしれない。

「……了解した」

ガウエインもそれで納得したのだろう。首を動かさず、重々しくうなづく。そして鋭い目付きで、シタデル尖塔を見上げた。決然としたその雰囲気は、今までどこか違っている。ビリツと、空気が帯電を始めたような錯覚を覚えるほどだ。

「……待っている、すぐそこまで行ってやる」

ガチャリ、と音を立てて愛用の『ミニチ・ランサー重戮槍』を構える。キュルキュルと音を立てながら槍の可動刃が回り始め、それと連動するように先端部より赤黒い光が球状に集束していく。球状の大型エネルギー弾だ。

「フツッ!!」

気合いとともに、槍ごとエネルギー弾を撃ち出す。狙いは上空、もちろんさきほどの狙撃を行った者がいたあたりだ。

もちろん、この攻撃で対抗しようというのではない。射程や威力こそ十分だが、いかにせんガウエインの砲撃はチャージに時間がかかる。使い方次第とはいえ、専門のガンナーと撃ち合いをやるほどではない。

そう、つまりこれは威嚇であり、宣言だ。今から貴様を討ちに行くぞと、ガウエインは”どこぞの誰か”、すなわち『敵』に向かつ

て宣言したのだ。

一度腹を決めれば行動は早い。ガウエインは手近な味方に向かって命令する。

クローム・センチュリオン  
「女皇警護騎士を四人抜く！ 上空へ向かうぞ、機動装備で我に続け！ 全員で両翼を固めろ！！ 頂上の狙撃兵を囲んで一気に撃滅する！！！」

#### 4 - 2 丁々発止（後書き）

あれ、主役が出てこねえw

本当は今回出すつもりだったんだけどなあ。

魔女とガウエインの小手調べとかいれたから、尺がいっぱいになってしまったw

#### 4 - 3 第一の苦況

「ごうつという雷鳴にも似た響きと共に、ガウエインの撃ったエネルギー弾がシタデル尖塔の屋上へと迫る。半ば砦のようにあつらえられた建物を、抉り取るように吹き飛ばし、そして爆散した。

「ふういいい……おつかねー。すんげー威力だなオイ」

崩れかけた塔屋の影から出てきたのは、『黒い銃身』ジェット・バレルだ。ガウエインたちの見立ては間違っていた。彼こそが、この場所から地上に向かって狙撃を行っていた張本人だったのだ。

彼はいまだパラパラと破片をこぼし続ける一角から素早く離れると、立てかけてあったロングライフルを手に、はるか二百メートル下をのぞき込む。

今回、ジェット・バレルはアバターの仕様をいつもとかなり変更していた。その仮面には狙撃用の三連回転式レンズタレットを持つ眼帯型のスコープ・ユニットが取り付けられ、アバター本体の左肩には手にしているものと同型のロングライフルを収めたホルスター。腰には砲身を折りたたんだ重砲『ストライク・ワン』を横向きに、さらに背中には細身の身体には不釣り合いなほど大型のロケット・ブースターを装備している。

火力に関していえば、相当な重装備だ。この出で立ちを見れば、今回ジェット・バレルは今のような狙撃だけではなく、重装甲相手の突撃戦闘をも念頭において装備を選んでいることが理解できるだろう。

実際、彼は狙撃にこだわる気はなかった。地の利を生かし、先行して発生させておいた情報ノイズで相手の注意をそらせるうちに、先制して敵戦列を一撃しておこうと思っただけに過ぎない。本命はあくまでガウエインなのだ。あのアバターを釣り出すところぞ、ジ

エット・バレルの目的であり、役目だ。

「一応は成功ってことかな。まあ、やる気まんまんで向かってくる相手を釣り出したとは普通言わないだろうけど」

相手に乗せたのではなく、乗ってもらった。そのあたりのニュアンスの違いは、無論ジエット・バレルにもよくわかっている。相手は女皇とガウエインの分断がこちらの狙いだと承知した上で、あえて別れた。無策ということはありえない。全力でもって、彼を潰しにかかるだろう。

「まさか本当に二人で相手する羽目になるとか思わなかったもんなあ……ジジ様やみんなに、サンシャイン通り側を抑えてもらったのは失敗だったかな？ 騎士団分隊の足止めはやってもらえてるみたいだけど……突破してこつちに合流出来るかは微妙だよな」

ジエット・バレルはあの日、ガウエインとの交渉のあと、イケブクロ・エリアの主だったアバターを集めて、今回の『領土戦』での作戦会議を始めていた。その時にはもう、ジエット・バレルは腹を決めていたのだ。むしろガウエインとのやり取りが決め手となって、ストレーガに助力することを決めたとと言える。

もつとも、内心ではそれなりに葛藤はあったのだが　ともかく、一度方針を決めたジエット・バレルの行動は早かった。強大な『白銀騎士団』をいかにして倒すか。今回はかりは魔女とのやり取りがある以上、騎士団側も総力戦を仕掛けてくることは目に見えていた。そうになると、イケブクロ・エリアのアバターだけで支えきえることは不可能だ。戦はジョーカー的存在である『剣の魔女』をいかに上手く使うかがカギとなるのは自明の理だった。本人が言うとおり、彼女を女皇との直接対決に送り出し、そして倒す　それこそが唯一の方策。そのために二重三重に罫を張り、女皇を倒すための最大の



障害となるガウエインを引きつける方策を考えたのだ。

今のところ、その策は半分成功で半分失敗というところだろうか。どちらにせよ、まだ魔女は女皇まで辿り着いていない。もう少しは引きつけておかなくてはならないだろう。

「奥の手のひとつやふたつは持つてるが、それを見せるにやまだ早い。ここはまともに相手をしないほうが得策だな。おみやげだけ置いて、ずらかるとするか」

引つかき回して焦れさせて、隙を作ってから撃ち、倒す。横合いから背後から見えないところから届かないところから奇襲する。そういうクレバーな戦い方が最善手、ジェット・バレルのもっとも好むところだ。話に出た『おみやげ』も、そうして相手を奇襲し怒りに火を注ぐような、ロクでもないものだというのは言うまでもない。

インベントリから小箱のようなものを取り出すと、巧妙に瓦礫の影に隠しておく。トンと指先で軽く叩けば、ビル風にかき消されて聞こえないほど小さな音が鳴り始める。規則正しく時を刻むかのような、無機質な音。それが何であるかは、屋上へと辿り着いたガウエインたちが後ほど知ることになるだろう。

「んじゃ行くか。狙撃手がいつまでも同じところにいると思うなよ、と」

手首から細い、しかし強靱なワイヤーを射出。そのまま瓦礫となつた塔屋から突き出ている鉄骨へと、何重にもくくりつける。ぐいぐいと何度か引つ張り強度を確かめると、ジェット・バレルは屋上を飛び出し、空へと身を躍らせた。

ブースターは吹かさない。まだその必要はない。今はただ、安全地帯へと移動できればそれでいいのだから。

「アイゼン！」

百メートルほど降下したところで、壁面に足裏の滑り止めアイゼンを突き立て、減速をかける。人間ではなしえない、スラスタなどの補助推進器、そして姿勢制御を行うオート・バランスーを持つているアバターであるからこそ、可能な芸当だ。

「そろそろ……かな」

ちらり、と尖塔を見上げると、数体の人影がすでに到着しているのが見えた。ほぼ計算通り、頃合いよし　だ。

瞬間、屋上で瓦礫の中から複数の火球が膨れあがり、炸裂する。火柱が上がり、爆ぜた炎が周囲のものを次々に飲み込んでいくのが見える。

時限発火式の焼夷弾だった。もちろんジェット・バレルが、敵アバターの屋上までの到達時間を見越してセットしていったものだ。しかし屋上が燃え上がるさまを見上げる彼の、仮面の下にある表情は冴えない。

「レーダー反応がおかしい。デコイか……？　だった……らあっ！？」

猛烈な殺気を感じて、ワイヤーを一気に巻き上げる。ぐん、と身体が浮き上がり、十メートルほどを一気に上昇した。全重量を支えていた右肘が悲鳴を上げる。だがその痛みと引き替えにしても、避けねばならなかった。

足下で爆発音。そして巨大な熱が炸裂した。ついさっき体験したものと同じ、エネルギー弾による攻撃　断定できる、間違いない。

「ち……！」

振り向いて敵を確認するよりも早く、ロングライフルの引き金を引いていた。狙撃モードから突撃モードに切り替わった銃口を、着弾から予測される射撃地点　首都高速へと向けて掃射する。

キキン、と金属質の甲高い音が響いた。今撃つたのは徹甲爆裂弾ではなく、通常の弾頭だ。装甲で弾かれることは予測済み。そこに何かをがいることを確認するために撃つたのだ。

「ああもう、裏をかいたつもりが！」

「卿の考えていることくらい、我にも思いつくということだ」

首都高速のコンクリート壁の上に悠然と、ガウエインが立っていた。周囲には重装甲タイプのアバターの姿も見える。女皇警護騎士に間違いない。

「あれがデコイなのはわかったけど……どうして尖塔の裏側まで、こんなに早く？」

「道が平坦であれば、我もそこのアバターに速度で劣ることはない」

そう言いながら、がちりと踵を打ち鳴らすガウエイン。ジェット・バレルもそれで気づいた。ガウエインが見かけほどには鈍重ではないということに。

「そいつはラケーテン・スピナー……そうか、シタデルと首都高は内部で繋がってるんだから、それを利用したのか」

「ご明察だ。さすがだな、ジェット・バレル。それがわかるのなら、今卿が置かれている危機も理解できるだろう」

ジェット・バレルにとって、ガウエインははるかに格上の存在だ。

一人でも手を焼くどころか、全身全霊で相手をしたところで、勝ちが拾えることを計算できないほどの相手だ。そのガウエインが、部下にして最精鋭である女皇警護騎士を四人も連れてきている。危機とか、逆境とか、言葉で表現することがバカバカしくなるほどの苦況であつた。

「ひい、ふう、みい……くそ、ガウエイン入れて一対五かよ！ 死亡フラグビンビンじゃねーか俺！」

「なに、嘆くことはない。そこでじつとしている、すぐに片付けてやる。総員構え！」

ガウエインが自分の後ろに控えていたアバターに命じると、控えていた四人が携えていた長物を構える。馬上槍にも似たその武器は重火砲の一種だ。

そしてガウエインの『重戮槍』も合わせた五つの砲口に、エネルギーが集中していく。なるほど豪語するとおり、あんなものがひとつでも直撃すればジェット・バレルはおしまいだ。木っ端微塵ダメーザレベルから考えて、『活動臨界』に追い込まれるのは間違いない。なんと少しでも喰らいたくない一撃だ。

「じつとしてろ、ね。はいそうですかって、言うと思ってるのか？」

ぐいつと膝を曲げながら身を縮こませ、力を溜める。ガウエインたちのいる高速道路までは距離にして約二十五メートル。脚力のみでは、ひとつ飛びというわけはいかない距離だ。もちろん、勝算なきダイブをするつもりはない。そのためのロケット・ブースターだ。

「せえの……はあっ！！」

ぐんと膝に力を込め、食い込ませていたアイゼンを展開した瞬間、ロケット・ブースターに火を入れる。ごうんと、爆発するような音が背中で響き、急激な加速とそのGが全身を襲った。

重火砲の火線と交差するその身体。解き放たれた炎の矢　今のジェット・バレルはそういうものだった。爆発的な推力を生むロケット・ブースターは、単独での飛行すら可能とする。だが、今は飛ぶためではなく跳ぶために使っていた。

限界まで張り詰めたワイヤーがぶつりと切れた。なおも跳ぶジェット・バレル。一直線に、真っ直ぐに、狙った先にいるのは一人の女皇警護騎士だった。体格差は明白、バイクと自動車がぶつかるようなものだ。

だが、

「どおりやあつ！」

ロングライフルを盾代わりに、真正面からぶつかるジェット・バレル。しかし弾かれると思いきや、ぐいぐいとライフルを食い込ませながら、敵アバターを押し込んでいく。

「なんだと！？　ええい、そんな小兵一人！　さつさと立て直さなか！！」

「そ、それが、体勢を崩されたまま引き摺られて！」

ジェット・バレルを受け止めきれず、身体を後ろに流されている女皇警護騎士が悲鳴を上げた。彼が不甲斐ないわけではない。体格差を跳ね返す、大出力ロケット・ブースターの推進力。これこそジェット・バレルの用意した、対重装甲用の切り札だった。

白兵戦では体重の重い相手のほうが絶対的に有利だ。ウェイト差を埋めてなお余りある、ストレーガのような異常な白兵戦スキルを、彼は持ち合わせていない。ならばせめて、当たり負けしないだけの

パワーが欲しかった。そのためのロケット・ブースターなのだ。

「うおおおっ！」

自らのもてる推進力を使い切り、力いっぱい敵アバターの上半身を壁へと叩き付ける。鉄板とコンクリートでできた高速道路の壁が大きく揺れた。上手いこと頭でも打ったのだろう、敵アバターはびっくりともしない。とりあえずとどめを刺す必要はなさそうだ。

しかし、そこで一息つけるわけではない。女皇警護騎士は全部で四人。まだ三人も残っている。彼らが着地の隙を狙うのは必定だ。

事実、重火砲を手放した彼らは斧や棍を手に、ジェット・バレルに襲いかかる。そしてガウエインもまた、槍を振り上げ襲いかかる。

「相手はガンナーだ！ 距離を取らせるな！」

複数のグライド・スピナーが唸りを上げたのが聞こえた。どうやらガウエインだけではなく、女皇警護騎士も脚部にあの滑走装備を使用しているようだった。直線機動ならば間合いはあつという間に詰められる。この状況で、上下動でかわす余裕はない。

ならば、とジェット・バレルは即座に頭を切り換え、目の前でぐったりとしたアバターの脇にロングライフルをねじ込むと、てこの原理で投げ飛ばす。

「でいやあっ！！」

「うおおあっ！？ ギャラントをつ！？」

それは誰が言ったのか。ガウエインかもしれないし、ほかの女皇警護騎士なのかもしれない。ギャラントと呼ばれたアバターの太柄な身体に視界を奪われ、一瞬の動揺が走る。だがそれ以上のものではない。たとえ仲間の亡骸であっても、今はただの障害物だ。

ジェット・バレルを追い詰めた千載一遇のこのチャンス、ならば障害物をいちいち避けて進む法は、『白銀騎士団』には存在しない。

「ぬえええいつ！」

すまぬと心の中で祈りながら、戦斧が、鉄鎚が、棍棒が、『重戮槍』が、宙を舞うかつて仲間であった者の身体を次々と打ち据え、引き裂き、叩き潰す。

だがその向こうにあるはずのジェット・バレルの姿がない。そこにあるのは、ポツリと残されたいくつかの箱状の物体だった。それはデコイではなく、彼らが屋上に行っていたら、そのときそこで目にしたもの。不気味に繰り返す明滅は、今にも臨界に達しそうに激しくなっている。

「まずい！ 下がれ……」

直感的にラケーテン・スピナーを全力で逆回転させ、その場を離れるガウエイン。その加速力は絶大だ。戦闘領域からしばし離れてしまうことと引き替えに、絶対の安全が保証される距離まで一気に離脱できる。

だが、ほかの三人は間に合わなかった。

箱が避け、砕けて溢れるエネルギーの奔流。それは即座に大気と結びつき、強烈な炎となつて三人のアバターを包み込んだ。荒れ狂う炎は壁となり、三人の退路を断つ。

「ぐおおおっ!?!」

苦悶の声をあげる三人。だがもちろん、彼らは騎士団でも屈強な重戦闘アバター。この程度で戦闘不能になることはない。火だるまになり、悶えつつも、その目はまだ敵の姿を追っていた。身を灼く

炎よりもなお熱い憎悪の火をたぎらせて、消えたジェット・バレルの姿を探す。

「奴はどこだ!？」

「ここだよ」

一人のアバターの背後から声。だが彼が振り向くよりも早く、その頭部に突き付けられたロングライフルの銃口が火を吹いていた。ばつん、とドラム缶を撃ち抜くような音がして、そのままがくりと膝を突く。頭部に開いた、まるで見えないネジを打ち込んだようにねじれた穴から、情報粒子となった内容物をぶちまけて。

「なっ……」

「知ってたか？ 火ってステータス異常は厄介でさ。装甲が熱でかなりやわくなっちゃうんだよ。だからこんな簡単に撃ち抜くことだってできる」

両手に一丁ずつロングライフルを構えたジェット・バレルが走る。二人の女皇警護騎士は一瞬ひるんだものの、すぐに彼へと向き直った。たしかに今、装甲が弱っているのは事実かもしれない。ガウエインが後退し、すぐには自分たちの助けに入れないかもしれない。だが相手はジェット・バレルだ。スピット・ダンプの最下層アバターだ。そんな奴に負けてたまるか、やられた仲間の仇を取らずにおれるものか。

彼らは勇猛であり、そして自信があった。女皇の近衛の一人として、選ばれた者だという誇りがあった。その誇りこそが、炎に身を灼かれようと、敵を前にした退却を許さなかった。

「かかれえいつ!」



先行した一人が、火の粉をまき散らしながら斧を振るう。ジエツト・バレルは身を伏せてそれをかわすと、銃口を眼前にある相手の膝へと向けた。片側三発、両手で六発。速射された銃弾が、敵の膝を撃ち貫く。小さな標的を確実に撃つための六発。だが銃弾は狙い変わらず、すべてが吸い込まれるように関節を突き抜け、膝から下をもぎ取っていた。

「があっ!?!」

全体重を支えていた軸足が突然へし折れたのだ。ひとたまりもない。前のめりに崩れてくるアバターの背中にダメ押しの射撃を叩きこみつつ、ひらりと避けた瞬間　鉄鎚による横殴りの一撃が、ジエツト・バレルの肩を痛打する。

弾け砕けた肩部装甲をまき散らし、道路を転がりながら間合いを取る。だが、敵アバターの追撃が来る。逃がしてもらえるわけもなく、ジエツト・バレルはさらに数発、あちこちに痛撃を喰らってしまふ。

「ぐおっ!?!　さ、さすがに無傷は無理か!　会長みたいにやいかねえな!」

「黙れ雑魚の分際で!　俺たち騎士団が、女皇警護騎士が、貴様のようなチンピラにやられたままでいると思っか!?!」

「ぐっ……かさにかかってきやがって!」

右へ左へ打ち込まれる鉄槌を、なんとか受け流すのがやっとだ。

さすがに押し込まれると、地力の差というものが出てしまう。騎士団のほとんどのアバターは白兵戦を得意とするファイター・フレーム、対してジエツト・バレルは射撃戦に特化したガンナー・フレームを採用している。基礎性能レベルで接近戦での有利不利が明確に存在するのだ。

三人までは奇襲と奇略と奇策で倒せたが、こう真つ向勝負になつてしまうとさすがに弱い。まして、あと一分もしないうちに、後退したガウエインが戻ってくるだろう。あのアバターを含めた二対一では持ちこたえることすら難しい。なんとしてでも目の前にいるこの女皇警護騎士だけは、倒しきらなくてはならない。

さいわい、炎に包まれている敵の身は、こちらの攻撃が容易に通る。今ならばどんな攻撃でも当てさえすれば、相手にダメージを与えられるはずだった。

「どのみち時間をかけるわけにはいかないっ！ 突っかけるー！」

「ガンナーが！ クロスレンジで騎士に勝てるっ！」

二丁のライフルをだらりとぶら下げないように持ち、突進。見る間に迫る、敵の姿。確かに相手の言うとおり、クロスファイトでガンナーがファイターに勝つのは非常に難しい。だが……装甲の、耐久力のハンデがあるなら勝機もまた存在する。

「奥の手、そのいちい！ 『銃剣』展開ッー！」

ロングライフルの先端が変形する。銃口に覆い被さるようにバレルジャケットが展開、内部からスライドしながら出てきたのは、ライフル全長の四分の一ほども刃渡りのある実体刃だった。

「刃物だと！？」

「今のお前らなら、非力な俺でも十分斬れるんだよ！」

「くっ、かわすっー！！」

「届かないか！？ ハズしたら、今度はこっちが後がないー！」

身体を引き気味に倒す女皇警護騎士。さすがというべきか、薙刀に近い形状になったロングライフル・ブレードの間合いを見切り、

ギリギリのところであわせる間合いだ。しかし　それも上半身を狙っていればの話。

「ッ!？」

鋭い痛みとともにがくつとアバターの動きが止まる。

ジェット・バレルは相手のほうが速い、届かないと判断した瞬間、狙いを変えた。回避運動中、最後までその場に残る部分　すなわち引き脚の甲に、ブレードを突き立てたのだ。道路に深々と突き刺さったブレードが、女皇警護騎士の動きを縫い止める。

結論から言えば、彼はそのまま脚を引き千切っても後退すべきだった。しかし身を捨ててまで、痛みを受け入れてまで戦える猛者は多くない。そして彼はその数少ない猛者には残念がらなれなかった。

とつさに脚をかばう女皇警護騎士。後ろに下がるはずだった身体が止まれば、間合いを詰められる。もはや勝負は決まった。

「もらったあつ!!!」

もう片方のブレードを、敵アバターのあごの下へと突き込み、ひねり、ねじ切るようにして、そのまま首をはね飛ばす。情報粒子が血飛沫のように首から吹き出し、最後の一人であった女皇警護騎士も動きを止めた。

「いよしっ!　なせばなるってか!」

敵の脚に突き立てたブレードを引き抜きながら、周囲を一瞥する。動く物は今、いない。だが耳を澄ませば少し離れたところから、地面をグライNDERで削り取るようなスキル音が聞こえてきた。誰かと問うまでもない、ガウエインだ。

時限焼夷弾の焦げた煙を突き破り、その巨躯が姿を見せる。倒れた部下たちの有様を見て、その胸に去来するものなどは一つだろう。

「少し分断されていたあいだに全滅……『白銀騎士団』最強の女皇クローム・センチュリオン警護騎士が四人もいて、このザマとはな」

石臼をこすり合わせるような、怒りをたたえた口振りのガウエイン。声質が重く、硬く、そして油断がない。なにせ数で囲んで押し潰すつもりが、まんまとハメられ、分断され、そして倒された。一騎当千の魔女とは違うが、それとはまた別の意味で厄介なペルソナアバターであると再認識したのだろう。

「確かに戦績もスペックも、あんたらは俺なんぞ比較にならないほど上だろう。だけど、やり方が素直過ぎるんだよ。俺みたいなアウトローからすれば、付け入る隙が山ほどあった。相互にミスを補完する集団戦に慣れすぎた弊害だろうな」

「違う。彼らは一流のアバターだ。それが敗れたのであれば、それは卿が強かったというだけのことだ」

「相変わらず、人をおだてるのが上手いぜ、ガウエイン」

「事實は事實として認めなくてはなるまい。だが……我も同じようにいくとは思うなよ？ どれだけ時間を稼げと言われたか知らぬが、五分耐えたら上出来だぞ？」

「……あんたが別格なのはわかってる。ストレীগだって、俺に足止めしか頼まなかった。それしかできないと思ってた……けど、それは少しばかり悔しいし、仕事しかできない男と思われるのもシヤクだ」

「なに？」

「それにな、ガウエイン。あんたには個人的な話がある。こいつで話がな」

がちやり、とロングライフルが音を立てる。

ジェット・バレルの目は笑っていない。シールド・コンタクトの奥では、はつきりと情熱の炎が燃えている。彼は本気だった。

#### 4 - 3 第一の苦況（後書き）

なんかもう文字数がバンバン増えるなW  
もうあと二息かそこらなんだけどなあ。  
がんばれ俺。  
書け、書くのだ！

時限焼夷弾の火はようやく収まり、燻った煙も細く消えていく。紅蓮の炎ではなく、天に浮かぶ赤い月の光が、二人のアバターを明るく照らしていた。

両手にロングライフルを下げ、今にも飛びかからんと力を溜めるジェット・バレル。それとは対照的に、槍を地面に突き立て、どつしりと構えるガウエイン。瘦躯と巨躯、狙撃者と騎士。魔女の同胞と女皇の守り手。そして 弱者と強者。あらゆる意味で対照的な二人が、ここに対峙していた。

一触即発、だがそれでも口を開いてたずねるくらいの余裕はまだあった。少なくとも、ガウエインのほうには。

「個人的な話……とは？」

「……大したこっちゃない。なんで俺が、あんたの敵に回ったか、だよ」

「ほう、それは興味深い。我も知りたかったところだ」

「本当か？ けど残念だが、これ以上は言わねえよ。今は……な」

「そうか。ならば、残りはこれで聞くとしよう。だが……潰れる前には、喋ってほしいものだ」

巨大な『重戮槍』ヘヴィ・キル・サウーを軽々と引き抜き、可動刃を始動させる。アバターを破砕するためにある鋼鉄の刃が、地獄の獣のように低い唸りをあげた。

「言ってくれる。だがあんたには言うだけの力があるってか！」

「敵の強さを認められるのは、真に強い証拠だな。さあ、来るがい。もつとも、この間合いは……少しばかり我のほう有利だが」

平坦な高速道路上で五メートル。ガウエインならば一足で踏み込める距離だ。おまけに遮蔽物はない。あえて言えば倒されたアバタたちの亡骸だが、隠れるには少々物足りない大きさだ。

(かといって、素直に間合いを開けさせてくれるような相手じゃねえよな。こつちのブースターの始動より、あいつのスピナーのほうが速いはずだ。どのみち最初の一発はしのがなくちゃならないってか……)

笑えない想像だ。あの『重戮槍』は下手に触ればそれだけで敵を引き裂き打ち砕く。突いてよし難いでよし、しのぐなどと希望に満ちた台詞が似合う武器ではない。

発射の遅い遠距離のチャージ・カノンこそ脅威ではないが、ガウエインの巨体とレーザー・スピナーも相まって、近距離から中距離までなら完全にカバーする。この間合いから付け入る隙は皆無と言えた。

ならば黙ってやられるか。無論、そんなつもりはない。今ある持ち駒である槍を攻略することこそ、絶対条件。戦いを前に進める第一歩だった。やらねばならぬのだ。

「ようし、んじゃいくか!」

地面を蹴りつけ、一気に飛び込む。まずは一撃して相手の出足を止めなくては、どうしようもないのだからこれしかない。しかし、それゆえに　ガウエインもその動きを読んでいる。

「やはりな!」

槍を手元から投げるがごとく、ジェット・バレルの軌道上を薙ぎ払う。当たれば一撃必殺の『重戮槍』、仮に直撃でなかったとして



もただではすまない。“受け”はない、ただ避けるのみだ。

「りゃあっ！」

踏み込みながら身体をひねり、『重戮槍』をギリギリでかわす。先端がほんのわずかに仮面の頬をかすったのを感じる。それだけでピリツと感電したような痛みがあった。

だが、かわした。一撃目はかわした。即死はまぬがれた、ならば次だ。追撃 “かえし”の槍が来る前に、ガウエインの懐へと飛び込む。巨体アバターゆえに、腕の内側に入ってしまったえば、その強力な槍も振るうことは難しくなる。

「ここで！」

「甘い……な！」

「ぐがっ!？」

膝蹴りだ。薙いだ槍を引き込む勢いを、槍を持つ腕ではなく脚に乗せて、ガウエインはジェット・バレルに叩きこんだのだ。

打突部位として武装化されているわけでもない、何の変哲もない膝蹴り。だがガウエインほどの巨体、そして呆れるほどの重装甲を誇る脚部を用いたそれは、尋常ではない威力があった。

くの字に身体を折り曲げ、よろよろと後ずさるジェット・バレル。四倍近い体重差があるのだ、耐えるという概念すら存在しない。これがアバターでなかったら、胃の中のものも容赦なく盛大にぶちまけていることだろう。

「まだだ！」

機を見るに敏、ガウエインは膝を降ろすと『重戮槍』を振り上げる。しかし、大きく振り上げられた両腕が『攻撃する』という目的

のために、一瞬無防備になった瞬間　銃声が響いた。

「っ!？」

ばちつと弾けたような音がして、『重戮槍』を取り落とす。それだけで槍は地面を大きく揺らし、震わせる。

後方に飛び退きながら、ガウエインは右肘を押さえていた。苦悶の声を飲み込んだのは、ハイランカーとしての意地であるのか。抑えた肘のあたりから、激しい放電のようなパルスがほとばしっている。肘から先が細かく震えていた。

「ゆ、油断も隙もない……!　その体勢からここに当ててくるか！」

ガウエインが吠える。

ジェット・バレルは吐き戻すかのような醜態をさらしながら、一瞬の隙を突いて反撃したのだ。槍を振り上げたがために無防備にさらされたガウエインの肘。そこに銃弾を叩きこんだ。

だがもちろん、ジェット・バレルの醜態は演技ではない。それ以上の追撃はせず、これ幸いと腹を押さえながら距離を取る。むしろダメージは彼のほうが大きくすらあった。

(き……効いたア……!　冗談じゃねーぞ!　武器なんかなくても、どつき回されるだけでこっちはボロ雑巾じゃねえか!)

無理もない。あまりにも体格が違いすぎるのだ。体重差が生み出すパワーと耐久力の差は、小手先の手段で埋めるのは無理だ。女王警護騎士たちとはまさしく段違い。それが文字通り身に染みた。

そう、ガウエインは巨大すぎる。アバター・ランキングという、レギュレーションもつとも戦闘規格が厳しいルールで戦ってきたアバターであるはず

なのに、明らかに規格外イレギュラーのサイズを持つその身体。冷静に考えてみれば、あの巨体はおかしいのだ。単純にいえば、ありえない。

(……そうなんだよな。あの身体を、どうやって規格内のデータサイズに収めてるんだ？ でかさからして自作スクラッチ・フレームなのは間違いないけど、その場合データは規格品よりでかくなるのが常だ)

それもおよそ、戦闘規格の範囲では収まらないほどに。しかしガウエインは、『白銀騎士団』精鋭の例に漏れず、高いランクを持つアバターとしてそこにいる。

ランキングのほうをごまかしているという可能性はないだろう。イリーガル・プログラムに詳しいジェット・バレルだからわかる。システム中枢に近い個人認識管理プログラムのハックは不可能だ。それができるという話は聞いたことがない。

(だとすりゃあ、仕掛けがあるとすりゃアバターのほうなんだが……)

だがそれ以上、彼に考える時間は与えられなかった。

「手足の末端を狙う……我と戦ったアバターの常套手段だが、関節こぶしに当ててきたのは卿が初めてだな。しかし、こんなかすり傷では我を止めるに至らんぞ……！」

ダメージなどない。それを証明するかのように、『重戮槍』を振り回す。肘一つ動かなくなつた程度で止められるものかとはかりの猛威。高速道路のアスファルトがえぐれ、まるで芝生のようにめくれあがり、ちぎれ飛ぶ。

あの圧倒的なパワーを攻略しなければ、一分の勝ちも拾えない。だがどうやって？ 小学生とプロレスラーが喧嘩をするようなもの

だ。ジェット・バレルの頭脳が、めまぐるしく計算する。

生半可な策など正面から力で粉碎するパワー。通常のアバターの倍を優に超える巨体は、体躯にふさわしい絶対的な防御力を持つ。ならば少しでも装甲の薄い関節を狙う、という選択肢は間違っていないはずだ。

だが荒れ狂う暴風のようなガウエインの猛攻を前にして、それを実現するのは口で言うほどたやすくはない。

実際、今のヒットにしても、偶然に助けられた面は大きい。相手が運良く動きを止めた瞬間を、うまく撃ち抜いてやっただけだ。いくら動体視力に自信があつたとしても、動き回る標的、それも末端部をピンポイントに撃ち抜くというのは相当な難事なのだ。

おまけにライフルを撃ち込んだくらいでは関節部ですらかすり傷程度。かといって背中の中火砲を使おうとしても、チャージが長いせいでめまぐるしく動き回るクロスレンジで当てるのは難しい。

つまりこれから敵の攻撃をしのぎ、距離を作り、隙を作る。それでようやく反撃ができるのだ。

「ともかく、なんとかして距離取らねえと……そうだ、こいつで！」

背中ブースターを始動させながら、両手のロングライフルを構え弾幕を張る。速射弾が耳をつんざくような音を立てて、ガウエインに、そして高速道路に炸裂する。

だが『重戮槍』と両腕でがつちりと守りを固めたガウエインには、ロングライフルの銃弾はまるで有効打にはならない。装甲表面で弾かれ、軽い金属音を奏でるのみだ。

「小口径弾では効かんぞ！ 無意味なことを……！」

「そうだろうな！ けど、あんたに効くかどうかと、撃つて意味があるかどうかは、別に関係ないんだぜ……！」

銃身が真っ赤に焼けるほどのフルオート連射。一丁につき秒間50発を超える銃弾が狙うのは、ガウエイン本体だけではない。その大半は高速道路へと降り注いでいた。

「ッ!? しまった、おのれそうかつ!!」

「さすが気づいたか! けどもう工事は完了なんだよ!」

ブースターで後方に大きく飛び退きながら、ロングライフルを肩のホルスターへと戻す。ガウエインはそんなジェット・バレルを追いかけない。いや追いかけてはいるのだが、スピードは上がらず突き放されるばかりだ。

「くっ……!! こ、こう道が荒れていては、ラケーテン・スピナーが……!!」

ジェット・バレルの射撃は、高速道路の舗装を粉々に打ち砕き、道を悪路ダートに変えていた。砂地や荒野であるならばともかく、ズタズタに舗装を破壊され、細かい瓦礫が積み重なった状態にあるこの路面では、ラケーテン・スピナーはまともに走ることはできない。

「もらったぞ、ガウエイン! さすがのあんたもこいつは豆鉄砲だとバカにはできまい!」

腰に装備していた二つ折りの重火砲にがつんと一発肘を入れ、ベルトラインのレールに沿って、大きくスウィングさせる。遠心力によって砲身が展開し、その真なる姿を取り戻す重火砲『ストライク・ワン』。

「ち……ソードオフしたエネルギー榴弾砲か。攻城兵器とは、えげつないものを用意してくるものだ。しかし威力はあっても卿のアバ

ターでは反動が強すぎて、砲撃が安定すまい！」

「あんたらの重装甲とやり合うんだ、このぐらいの火力は持ってないとやってられねえんだよ！ 当たらないと思うんなら、その場で突っ立てるがいい！」

セレクターをチャージモードにセットし、ゴーグルのターレット・レンズが目まぐるしく回転する。最適の射撃タイミングを求めて弾道補正プログラムと連動し、標的であるガウエインのモーション・サンプリングを行っているのだ。

ジェット・バレルの射撃はこの『目』によるモーション・サンプリングによる動作予測を元に行われる。射撃タイプのアバターにとつて目の良さは生命線だ。ありとあらゆるカスタマイズで、視覚について強化している。ジェット・バレルもまた例外ではなかった。

ターレット・レンズ越しにガウエインの姿をにらみ付ける。またとない好機に、心が昂ぶった。チャージタイムはもう少しかかる。だがこの距離があれば、ガウエインは間合いを詰めるのは間に合わない。そして自分は 外さない。

「終わりにしてやる！」

「それは早計というものだな、ジェット・バレル！ 卿ではないが、我にも奥の手のひとつやふたつはある！」

ガウエインの持つ『重戮槍』がひときわ強く唸りを上げた。空気が渦巻く。らせん状に配置された可動刃によつて風の断層が生まれ、竜巻となって槍へと集中しているのだ。足をしっかりと踏みしめないと、引き込まれてしまいそうだ。

「な、なにを？」

「ジェット・バレル！ 我がインファイターだから想定しなかったか？ チャージ・カノン以外にも、飛び道具があるということを！」

！」

どつと槍が突き出された瞬間、荒ぶる大気がまるで龍のようにうねりながら射撃体勢にあったジェット・バレルに襲いかかった。カウンターを取られたのだ、避けようがない。渦を成した強烈な風圧は、ただそれだけでも尋常ではない威力でジェット・バレルの身体を引き裂こうとする。その上、巻き上げられた瓦礫が渦に混じり、それ自体が意思を持つようにアバターの身を打ち据えるのだ。あたかもミキサーの中に放り込まれたかの暴威。下手に動けば完全に巻き込まれ、その時点でおしまいだ。

文字通り渦中にあるジェット・バレルは、歯を食いしばって耐える。ただ耐えているだけではない。光明を、活路を探していた。瓦礫を巻き込んでいるがゆえに、いびつに変化する気流。ゆえに生まれるほんのわずかな気圧の乱れ、風のほころびを見定める。

「ぐ……こ、こんのおっ……！」

ライフルでかき分けるようにして風の中をもがき、ロケット・ブースターを点火。ほころびを通じて強引に渦を突っ切ると、アバターのフレームが無理な機動にみしみしと悲鳴をあげた。

「逃れたか。まずはさすがとっておこう。だが次はこんなものではないぞ」

「……くそ！ このまま押されっぱなしでたまるかよ！」

ホバリングしながらガウエインをにらみつけるも、余裕というものはまるでない。きしむ身体から、風に引き裂かれた装甲がバラバラとこそげ落ち、内部フレームが露わになる。もともと防御力などないようなセッティングだが、こうまでなると一撃一撃が致命傷だ。これ以上は一発たりとて喰らいたくない。

(とはいえ……今の竜巻は『ストライク・ワン』のチャージ・シヨツトより出が早い。かといって、チャージなしでの装甲を抜けるかは怪しいな。くそっ、付け入る隙が見当たらねえな。手持ちのカードが違いすぎる。対抗できる手札がなけりゃ、どうにも……)

武器が要る。道具ぶきではなく、長所ぶきが。

「対戦中に考えごとか？ まだまだ余裕があるようだな」  
「ほっとけ！」

まだ距離はある。速射で足下を狙い、ガウエインをけん制しながらなおも考える。

自分の武器は何か。ガウエインに勝るところは何か。もちろん、今さらこの場で都合よく、新しい能力が発現するなんてことはありえない。今自分が持っている力ものの中から、勝機ぶきにつながる長所ぶきを見つけなくてはならないのだ。

(……このまま粘り続ければ、いいのかな)

ふらりと、そんな弱い考えが頭をよぎる。そもそもストレーガがジェット・バレルに求めたことは、ガウエインの分断と足止めにすぎない。間違っても勝てるなどと、そんな期待は抱いてなかった。勝ちをあきらめ逃げを打つても、決して彼女は責めないだろう。

百戦錬磨のアバターであるストレーガの見立てだ。自分のスペックを使い切っても、おそらくそこが関の山なのだろう。彼女がそう考えたからには、それは九割九分の事実には違いない。

だがそれでも、その予測を覆したかった。彼女に信用されているのはわかる。キミは強いと、何度もジェット・バレルを励まし諭したストレーガが、彼を見くびっているということはない。



彼女が真摯であればあるほどに、ジェット・バレルは己のふがいなさが身にしみた。彼女のために　とか、そんなお題目ではない。単純に、下に立つ自分が悔しかった。

ガウエインの提案を蹴ったのも同じ理由だ。あれは彼を下に見ていた。部外者であれと断ぜられた。それが悔しかったから、彼は提案をその場で蹴りつけた。そうだ、結局ジェット・バレルはこの戦いで、己の意地を通じたかったのだ。

思い出した。女王も魔女も関係ない。ただスピット・ダンプでくすぶっていた己の過去を払拭し、決別するためにこそ、今日という機会を使おうとしたのだ。

魔女に力を貸すとはそういうことだ。本当の意味でのギブ・アンド・テイク　『剣の魔女』と『黒い銃身』が結んだ契約の、誰も知らない本当の意味だ。

ならば、今ここでこそ意地を張る。それこそが『意味』で『目的』なのだから。

「だったら……もう一回だ！　まだ使っていない技もある！　逃げを打つなら、その後でいいよなっ！！」

「ほう、全力でくるか！　ちようどいい、こちらこそそろそろ……時間になくなってきたのでな！」

「いつでも倒せるつもりで、付き合ってたっていうのかよ！」

「そうでなければ、女皇の近衛は務まらない！」

ガウエインがラケーテン・スピナーの回転を上げる。パワーを増やして、無理矢理悪路を乗り越えようという算段なのだろう。

対するジェット・バレルももはや間合いを開けようとはしなかった。相手のほうが先に動いた。これならばぎりぎり、ガウエインの槍が先に届く。ならば得意レンジにこだわるよりも、前に出てカウンターを取りに行く。乱暴な手段だが、ガウエインという強敵を相手にした以上、定石通りで勝ちを拾えないのはすでに証明された。

奇襲と奇策、戦場では尊ばれることのない一か八かの運否天賦に賭ける。まさしく乾坤一擲だ。

だが思い出せ、『剣の魔女』ストレーガと戦ったときはどうだった。そのギリギリの選択こそが、彼女に一撃を与えたではないか。

今しかない。今こそ、自分の潜在能力ポテンシャルを信じるのだ。

ジェット・バレルは加速する。

速く、速く、さらに速く。そしてついに互いの制空圏まあいが激突した。

#### 4 - 4 意地（後書き）

思ったより時間がかかってしまった。  
本当は昨日中に上げたかったんですけどね。  
けどようやく道筋がついたかな……。  
なんとなりそうだ、これは。

#### 4 - 5 乾坤一擲

ガウエインの『重戮槍』とジェット・バレルの銃剣。バヨネット まともにつかれば、圧倒的なパワーの前に吹き飛ばされるのは必定。が、その瞬間。

「だらあっ!!」

「なにっ!?!」

尻餅を突くように身体を沈ませ、スライディングしながら槍の下をくぐり抜ける。

まさしくそれは刹那の見切り、本当にギリギリのスレスレだ。かすった刃がジェット・バレルの仮面を削り、火花を散らす。コンマ一秒タイミングがズレていたら、首から上を持っていかれるほどにきわどい。

「ちいつ! やらせはせぬ!!」

さすがはガウエイン。瞬間的な上下動にも敵の姿を見失うことなく、即座に反応し、膝を繰り出す。先ほどのように迎撃してくれと言わんばかりの蹴り。しかし突撃姿勢で前方に偏った重心を引き戻すには、わずかなタイムラグがあった。

ガウエインという巨大な移動要塞に生まれた、ほんのわずかのほころび。今こそ、鉄壁に蟻の一穴が開いた瞬間だった。

ほんの少し、ほんの少しだけ、ジェット・バレルが先に動く。膝蹴りが迫るよりも速く銃剣のブレードを立てて、膝蹴りの勢いを受け流す。本来ならば比較するのがおかしいくらいに段違いのパワーであるが、こんな無理な姿勢から放った攻撃なら、さばくくらいはなんとかできる。

だがそれでも相手はガウエインだ。ジェット・バレルが出会った中で、もつとも強大なパワーを持つ超重量級アバター。その一撃は受け止めたはずのジェット・バレルの身体を、大きく横にスライドさせる。

「……さすがっ！　だが、これも、だっ！！」

スライディング中に新たに与えられた横殴りのモーメントは、軽いジェット・バレルのの体勢を大きく崩し、ねじれるような回転スピンを与える。

しかしそれこそがジェット・バレルの狙い。懐に入られると膝を繰り出すガウエインの動き、それを誘い出したのだ。膝蹴りの瞬間、ほんのわずかではあるが片足が浮く。ガウエインの規格外の巨体を支えるものが、軸足一本のみとなる。

「ここぞ！」

「なにっ!?!」

右腕に抱えていた『ストライク・ワン』をしつかりと握り直すと、身体に与えられたスピンの遠心力を利用して、地面スレスレをぬぐい払うように身体ごとスイングさせる。長いバレルの残像が弧を描き、ガウエインの脛部を強打した。

ダメージ自体はさほどないだろう。見上げるような体躯のガウエインは、巨大さに比して装甲も厚い。特に腰から下の下半身は、通常のアバターならば軽量化のために装甲を外している関節部まで、念入りに装甲化されている。それだけの重装甲は、蹴りを放つときの武器にもなれば、巨大な『重戮槍』を振り回すためのカウンター・ウェイトとしても機能しているほどだ。

しかし自慢の重装甲も、バランスを崩してしまえば付け入る隙はある。まさしくそれが今だった。『ストライク・ワン』のバレルに

強打された瞬間、ガウエインの脚が後ろへとまるで滑るように跳ね上がる。この瞬間だけは、あのガウエインの巨体が完全に宙を舞っていた。

だがこんな単なるテイク・ダウンを取るために、己の頭部を賭けたわけではもちろんない。ここからが本番、これからが本命。ジェット・バレルは『ストライク・ワン』から手を離すと、両手でロングライフルを握りしめる。そのまま先端に展開されているブレードを、思い切り地面へと突き刺した。

スピしながら前へ滑り込もうとしていた身体が、突然現れた杭ピッケによって強引に地面に縫い止められる。腕が引きちぎれるかのような反動。だが、ジェット・バレルは歯を食いしばってそれに耐えていた。

「奥の手……その二いつ!!」

ジェット・バレルが浮いたガウエインへと向き直った瞬間、背部に装備したブースター・ポッドが前後にぐるりと反転する。

「ブースター・カノンだつ!!」

それは推進に使う出力をそのまま攻撃力に転化した、強力なエネルギー砲だった。もちろん本来は射撃用途に用いるものではない。精度など出ないし、射程もごく短いものだ。本当にエネルギーを瞬間的に衝撃として発射するだけ。しかし、足下へと滑り込んだ今の状態ならば、それで十分だった。届くし、当たる。間違いなく。

ごおんという爆音とともに、エネルギー衝撃波が撃ち出される。重量級アバターさえも押し込むロケット・ブースターのフルドライブ。その強大なパワーを瞬間的に圧縮し、撃ち込んだのだ。

「ぐわあっ!?!」

ガウエインの身体に叩きつけられた不可視の衝撃は、超重装甲を突き抜けてダメージを与えるのに十分な威力だった。

びしり、と体躯のあちこちが痛打に耐えかね、ひび割れクラックを作る。強靱であつたはずの装甲ごと、今度こそその巨体が大きく吹き飛び、高速道路の壁へと叩き付けられる。

しかしまだ終わらない。この程度では終わらない。終わらせてなるものか。

突き立てたロングライフルから手を放す。ブースター・カノンの反動はまだ残っている、身体が後ろに流されそうになるのを感じた。だがここが文字通り最後の踏ん張りどころだ。片脚を突き出し、強引に体勢を立て直す。脚の骨格が悲鳴を上げ、部品が弾け飛んだ。断線したようにあちこちがスパークし、焦げ臭い煙を上げる。それでもなお足首に力を入れ、射撃姿勢をしつかりと維持する。

腰のレールにぶら下げた『ストライク・ワン』の機関部をフルドライブ。かなり無茶のある急速チャージだが、間に合わなければ意味がない。一発限りでぶっ壊す覚悟でジェネレーターを回しながら、火器管制を目的ターレット・レンズへと繋ぐ。

重火砲の機関内圧が上がるとエネルギー脈動し、まるで心臓のように高鳴るのを感じる。完全に密閉されているはずの機関ごしに、熱く輝く熱が伝わってくる。『ストライク・ワン』の状態が、手に取るようにわかった。

「今度こそ……決めるッ！！ 全部、出し切つて！！」

グリップを握りしめる。急制動の反動は、ぎちぎちといまだジェット・バレルの全身を締め上げる。しかし、その痛みで照準が狂うことなどない。どれだけ身体がきしみ、悲鳴を上げようとも、この構えた砲だけは外さない。不転の決意なるものが、今の彼には漲っている。

「……奥の手その三ッ！ こいつも使う！ 全部使うっ！！」

ぶっん、とジェット・バレルの全身が淡い輝きを帯びた。巨大な熱量が生まれ、それはさらに重火砲のチャンバーへと送り込まれる。ブーストされたエネルギーはうねり、荒れ狂い、今まさに発射の時を待っていた。

「いつ……けえっ！！」

トリガーを引いた瞬間、身体ごと吹っ飛ぶような猛烈な反作用がジェット・バレルを襲った。しかし、エネルギー弾は確かに発射された。

まるで弾けたように放り出されるその身体。だがジェット・バレルの目はどのような姿勢になろうとも、自身の切り札がガウエインへと襲いかかるのを最後まで見つめていた。

「こ、これは……このパワーは！？ 貴様！ まさか貴様が……」

巨大な光の塊が、長い光跡を引きながら、ガウエインに直撃する。標的は上半身、それも一撃でライフポイントフレイク・アウト全損を狙える頭部。せめてもの抵抗か、かばうように左腕を差し出したが、それすらも光に飲み込まれ、一瞬で解け崩れ、蒸発していく。その奥にあるガウエインの頭部もやがて融解し、形を失い　そして。

「おおおーっ！？」

光が爆発する。強大なエネルギーは臨界を超えて膨張し、ガウエインと高速道路の一部を飲み込みながら、巨大な火球となって周囲に衝撃と爆風をまき散らす。



「ずずず、と道路が揺れた。弱くなっていた道路の一部が一気にひび割れたのだ。あまりにも巨大すぎる破壊エネルギーは、戦域オブジェクトである高速道路の基礎構造までも破壊していた。」

「あ、やば……！」

ジェット・バレルがそれに気づいた時にはもう遅い。彼と、そしてガウエインもろとも、高速道路が一気に崩れる。瓦礫に巻きこまれながら、彼らははるか数十メートル下の地面へと、逃げる間もなく落下していく。

「こ、こなくそっ！」

こんなものに巻きこまれては、たまったものではない。なんのためにここまでやったのだ。その思いだけが、ひたすらに身体を突き動かす。ロケット・ブースターをなんとか動かし、火を入れる。本来想定していた用途ではないブースター・カノンなどしたせいか、機構のあちこちが痛んでいる。だがそれでも、今命綱となるのはこれしかない。

「動けちくしょう！ 動けつてば……！」

ポンコツのエンジンよろしく、何度か黒いガスを吹く。ガタガタと音を立てるだけのブースター。もうダメかと思ったそのとき、か細くだが推力が生まれたのを感じた。

「よおしっ……！」

ブースターを吹かし、一気に横へ飛び出すジェット・バレル。だがそれが精一杯、瓦礫の山に飲み込まれずには済んだものの、その

まま勢いを失って墜落する。二度三度と無様に地面を転がるジェット・バレル。だがそれでいい。今、自分は生き残った。生き残った者こそが勝ちなのだ。

「は……はは、ははは。やつ……たあ」

もがくように身を起こしながら、瓦礫に顔を向ける。墜落で強打した身体中が痛かったが、それ以上の達成感が、彼に痛みを忘れさせた。瓦礫を見るために、自らの勝利を確認するために、ジェット・バレルは夢中で身体を動かしていた。

視線の先にある瓦礫の山。そこには半ば埋もれる形で、片腕と頭部を失ったガウエインが倒れている。それこそが、彼の勝利の証。己が本懐今こそ果たしたと、ジェット・バレルの内に、大声で叫び出したいほどの喜悦が満ちる。だがそれをぐつとこらえると、彼は己のうちに今一度冷静さを取り戻した。

「まだだ。会長はどうしてるんだ？ くそつ、情報ノイズはまだ消えないのかよ。こんなに濃密に散布するんじゃないやなかつたぜ」

スピアのロングライフルを取り外し、杖代わりにして立ち上がる。風に乗って剣戟の音が聞こえる。ジェット・バレルはその音に導かれるまま、ゆっくりと歩き始めた。身を引き摺るようにしながら、だがそれでも行かねばならぬのだ。

そして彼の背後で　瓦礫の山から小石が一つ、からりと音を立ててこぼれ落ちた。

「ど、どうなってんだこりゃ……？」

死屍累々、屍山河。

折り重なったアバターの死体、死体、また死体。十や二十ではきかない数だ。

見れば、どれもこれも頭か胸を一刀で斬り捨てられた亡骸ばかり。誰が倒したのかなど、一目瞭然だった。

「……会長だな。さすがって言うべきかね、こりゃ。そっぴゃさっき戦ってる音が聞こえたよな。どっちだ？」

高速道路でガウエインと戦っていたせいで、いつの間にか主戦場であったイケブクロ・シタデル正門前からは離れてしまっていた。

アバターが斬り倒される音を頼りに、ストレーガの姿を探して歩くジェット・バレル。一応、敵から奇襲を受ける可能性もある。ここまで来て、つまらないミスで倒されてしまうのはもったいない。

魔女と女皇の戦いの行く末は、ぜひとも見届けたい。

ロングライフルを腰だめに構え。ゆっくりと進んで行くジェット・バレル。時折戦いの爪痕だろうか、部屋道やらが粉々に砕けたり、ガラス状に融解している場所があった。強力な熱線攻撃でも浴びたのだろうか？

しかし、よくもそんな砲撃を使って彼女に挑もうなど考えたものだ。正直、あのストレーガ相手に真っ向から飛び道具を当てる自信をジェット・バレルは持っていない。多大な幸運と周到な準備、それに加えて捨て身の覚悟がなければ、ストレーガに射撃を直撃させることはきわめて難しいだろう。

そういう意味では、彼女が不意の射撃に倒されるなどという心配はまったくしていなかった。彼女の隙のなさ、まるで背中目でもついているのではないかと思わせるほど。射撃どころか、どの間合いから襲いかかって、一刀の元に斬り捨てる。そうしてできたのが、この亡骸の山に違いないのだ。

幸い、死体にまぎれた伏兵などとは出会わなかった。シタデル攻

略戦に投入した『白銀騎士団』本隊は、残っていた全戦力を魔女との戦いに投入したらしい。分隊のほうもどうやら、ジジ様たちイケブクロ・エリアのアバター連合がきっちり足止めをしているようだ。時々、駅のほうから爆発音がするのは、あちらの戦いもまた、佳境を迎えているということなのだろう。

どちらにせよ 勝負を決めるのは魔女だ。彼女が勝たなくては、自分がガウエインを倒したことも、駅前の戦闘も、何もかもが意味を失う。

今日の『領土戦』はもはや、ただの魔女の復讐戦ではない。イケブクロ・エリアの行く末を決める戦いでもあるのだ。

ジエット・バレル自身を含め、このエリアのアバターは、一人残らず魔女という札に賭けた。彼女と手を組み、『白銀騎士団』と敵対するというのは、自らの身代全てを賭けたのと同義だ。

あの日、ジジ様の手引きでイケブクロ・エリアのアバターを集めたとき、ガウエインの出した条件については包み隠さず伝えていた。あの破格の条件に惹かれ離反するアバターもいるのではないかとジエット・バレルは予想していたが、以外にもそれはごく少数にとどまった。

しかし考えてみれば当然だ。はきだめと蔑まれようと、大アライアンスの支配を嫌い、この地を自由都市として盛り立ててきた面々なのだ。今さら甘い飴を見せられようと、首を簡単に縦に振るはずがない。

そしてまた、そんなガウエインの態度が気に入らなかった者も多い。ジエット・バレル自身がそうだ。結局のところ、ガウエインというアバターもまた、大アライアンスに所属するがゆえの奢りからは逃れられなかった。なぜなら、ガウエインは彼らを買収叩こうとした。金子で縛って『命令』しようとしたのだ。

命令 それだけは、受け入れたくない。そういうアバターが、このイケブクロには非常に多い。

だが、魔女は違った。発端こそ強制だったが、それもまた賭けの

結果だ。ジェット・バレルの自己責任とも言える。だが最後に彼女は『懇願』した。

「私を助けてください」

ストレーガ、音に聞こえた最強の魔女が、こんな　まさしくこんなスピット・ダンプの住人に、ジェット・バレルに力を貸してくれと頼んだのだ。

かたや『命令』、かたや『懇願』。ならばどちらに力を貸すかなど、考えるまでもないこと。

ましてや、ジェット・バレルはストレーガの現実<sup>リアル</sup>を知っている。あの完全無欠の美少女生徒会長が、秋月雪乃ともあるう者が、同じ学校のぼんくら一般生徒に助けってくれと頼んだのだ。美少女の頼みを無碍にするほど、ジェット・バレル　いや、真壁陸朗は枯れてはいない。だからこそ、己の持つ全てを尽くして、今の今まで戦って来たのだ。

「俺にここまでやらせたんだ。勝ってくれないと困るぞ、会長」

「冗談めいた、だがその実心の底から願っている台詞をひとりごちる。その時だった。」

「……ん？」

夜空に、一条の閃光が走った。まるで月を射貫くような、天を突き破る真っ直ぐな光だった。空が一瞬だけ昼になったかのような、圧倒的な光量。

思わず見上げたジェット・バレルの眼前に、“それ”は振ってきた。それは人型のもの。それはペルソナアバター。それは　、

「ス…… 『ストレーガ剣の魔女』 ツ!？」

思わず目を疑った。しかし、見間違えることなどない。  
それは間違いなく、自慢のドレス状装甲を半壊させた彼の相棒、  
ストレーガだった。

4 - 5 乾坤一擲（後書き）

ガウエイン死す！

そして魔女に何があったのか！？

乞うご期待！

……… 明後日くらいに。

## 4 - 6 水銀龍

状況を理解するのに、少しかかった。五秒か、あるいは十秒か。こんなことが起こるだなんて、想像だにしていなかったのだから、無理もない。

あの『ストレীগ剣の魔女』が、仰向けになって倒れていた。輝くオペラ色の装甲は見る影もないほど傷だらけになり、激戦をくぐり抜けてきたことが容易に見て取れた。

考えてもみれば、ジェット・バレルの倒したガウエインとその手回り四人を除き、残り九十人近いアバターをたった一人で相手にしていたのだ。負けずとも傷ぐらいいはつこうというもの。むしろ中枢部には一切攻撃を通さず、すべて装甲表面までダメージを止めているこの状態は、神がかり的な戦いぶりと言えた。

「う……」

「か、会長!？」

頭を振りながら、ゆっくりと身を起こすストレীগ。どうやら意識を飛ばしていたようで、両目が落ち着きなく動いて周囲の様子を探っていた。

「くそっ、直撃をもらつとは……って、ジェット! どうしてここに!？」

「どうしてというか、俺のいたところにあんたが降ってきたんですか」

「ああ、そうか……こりゃ、格好悪いところ見られちゃったな」

よっこらせ、などとおどけたような声を出しながら、スラスタ―を軽く吹かして横着に立ち上がる。両手に握る剣と盾の感触を確か



めながら、彼女はふと気付いたようにたずねた。

「どうしてここに？ あ、もしかしてガウエインを振り切ってきたのかい？ よく逃げ切れたね」

「いや、その……」

倒してきたと反論しかけたものの、普通はそう思うよなと一瞬考えてしまった。

「ガウエインの相手は辛いだろうけど、もうひとがんばりしてくれないかな。悪いね、こっちはもう少しかかりそうだ。思ったより手こずってる」

よく見ると、ストレーガの手足は細かく痙攣していた。あまりにも多数の相手と戦いすぎて、アバター手足の制御にあそびが出始めているのだ。

一対一では無敵と豪語し、実際それだけの實力を持つ彼女だが、一対一を十度二十度と繰り返すような『領土戦』で無事であるというわけではない。ましてや、一対多を強いられた状況も無数にあつたはずだ。初めのうちは調子がよくても、いつか必ず傷を負う。その結果が、今のボロボロになったドレス状装甲の姿なのだ。

思ったよりも手こずっている というのは、かなり鼻肩目の入った表現だろう。そもそもが無茶な戦いなのだ。『白銀騎士団』の中核部隊ほぼ全員を、たった一人で相手にするなど、彼女以外が口にしたら正気だとは思われないのは間違いない。だがその無謀を現実に変えつつあるのが、今のストレーガなのだ。

剣はあちこちが刃こぼれし、盾など傷ついていないところが見当たらない。どれだけの敵を斬り、殴ればこうなるのか。想像すらできなかつた。

「どうしたんだい？ 戦いはまだ続いているよ、呆けるのはよくないな」

「あ……そうじゃなくて！ 俺、倒しました。倒したんです！」

「？」

「だから、倒したんです！ ガウエインを！」

仮面のせいで表情の見えないペルソナアバターだが、今彼女がどんな顔をしているかなど、見なくても分かる。さぞかし怪訝そうな表情を浮かべていることだろう。

しかし、本当のことなのだ。信じてもらえない苛立ちから、つい声が荒くなる。首級の一つでも獲ってくればよかったかもしれないが、あいにく首は『ストライク・ワン』の砲撃で吹き飛ばしてしまった。

「本当だ！ 本当に俺は、あいつを……」

「ッ！ 下がって！ 下がれッ！！」

「え？」

突然、ストレーガの悲鳴じみた怒鳴り声を聞いた瞬間、身体が浮いたのを感じた。

何をされたのかわからなかった。ゴツ、と鈍い音がしたと思えば、ストレーガの盾が腹にめり込んでいる。耐えるという考えにすら至らないうちに殴り飛ばされていた。

片腕で抜き打ち気味に殴りつけられただけで、軽々と五、六メートルは吹っ飛ぶジェット・バレル。何をされたのか分からず、混乱する。

「な、なんでこんないきなりっ!？」

「動くなっ!!!」

ストレーガが立ち上がるうとした彼を鋭く静止したそのとき、目の前を一条の閃光が突き抜けた。

「なあっ!?!」

鼻　は仮面だからないのだが、まさしく鼻の先スレスレをエネルギーの塊が通過していく。いや、塊というよりもこれは刃だ。触れたものを切り裂き削り取るような、まるで刃のように鋭い光の奔流。街と亡骸を吹き飛ばし、粉みじんに粉碎する。そのまま膨大な熱量によって物質の気化さえ起こす、悪魔のような神々しい光。

「う、うわ……い、今のは!?!」

一体なにが起きたのか。攻撃を受けたのは間違いないが、これほどの破壊力を持った武装に心当たりがない。攻城兵器である自身の重火砲『ストライク・ワン』とて、ここまでの破壊を行うことなど無理だ。

「……『キャスティング 詠唱兵装・ブレードスベル 斬撃魔術』だ」

地面に刻まれた、底が見えないほど深い谷を隔てた向こう側で、ストレーガが呟いた。

彼女の口にした『キャスティング 詠唱兵装』という単語に、思い出すものがあった。それはかなり昔に流行った、大規模戦闘向け攻撃スキルのことだ。『詠唱兵装』という言葉どおり、攻撃用プログラムを吟じることで、超常現象に近い破壊を引き起こす。まさしくそれは『魔法』以外のなにもでもなかった。

しかし反面、使用する攻撃用プログラムは非常に高度かつ複雑であり、データ容量も多い。『詠唱兵装』を使うための特殊なロジックを積んだ専用のキャスター・フレームは、ほかの全てのステータ

スを犠牲にしてプログラム処理にリソースを回していたため、対戦シーンが高速打撃戦闘が主流になるにつれ、廃れていった。それに当時の『詠唱兵装』は、いくらなんでもここまでの破壊力は持っていないかったはずだ。

これほどの大規模破壊を行うのは、相当なカスタマイズが行われている証拠。生半可なチューニングでは、ここまではならない。それこそアバター・ランキングのトップクラスに載るような、この『ペルソナクライン』にかけるひたむきな情熱が必要だろう。そして今、このイケブクロ・エリアでそれほどの情念を抱えたアバターなど、一人しかいない。

ストレーガを見る。彼女は静かに頷いた。

「来るよ、あいつがね……！」

一直線に切り裂いた地面に向こうに、一人のアバターが立っていた。

ハイヒールのような足先をかつりかつりと鳴らしながら、ゆっくりとこちらに近付いてくる。

それはまさしく異形のペルソナアバターだった。大きく広がっている、三角形を組み合わせた翼のようなものは装甲版だろうか？腰の後ろから生えた長いスタビライザーをまるで尻尾のように引き摺っている。頭部の仮面を飾っている冠は、あたかも角のように見えた。手にする杖の先端からは、死神の鎌のごとき光刃が伸びている。

「会長、印象が……なにか全然違うんですが？」

「クロク装甲外套が開いてるんだよ。あいつの戦闘形態だ」

戦闘形態。つまりは、今こそ彼女は本気を出しているということなのか。どちらにせよ、それはジェット・バレルが知っている姿と

はずいぶん違っていた。

「あれが『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』の正体……いや、もともとの姿さ。僕とつるんでいたころのあいつの姿。人はあいつを……『マーキュリー・ドラゴン水銀龍』と呼んだ」

「……『キャスティング詠唱兵装・ホーミングスベル追尾魔術』」

『エンプレス・オブ・クロム水銀龍』 『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』の音が響く。彼女に周囲に半透明の魔法陣を模した攻撃用プログラムフィールドがいくつも展開され、急速に実体化したエネルギー弾を撃ち出した。

「攻撃してきたっ!?!」

「ジェット! こいつは乱数解析で回避できない! 撃墜してくれっ!?!」

「は、はいつ!?!」

すでに頭を切り換えていたストレーガの指示が飛ぶ。否と答える理由はなかった。

ロングライフルのセクターをスプレッド散弾モードに。薄い帯を引いて飛ぶ無数の光弾に向かってトリガーを引いた。拡散する弾頭と女皇の光弾が交差。一瞬だけ遅れて爆発を起こす。一つではない。迫り来る無数の光弾が、ジェット・バレルの弾幕に引っかかり、何度も何度も連続して爆発した。

「くっ!?!」

爆風から身を守るだけで手一杯だ。それだけ、あの小さな光弾に

内包されているエネルギーが絶大なものなのだろう。こうして耐えているだけで、アバター本体にまで引火しそうだ。

「ふふ……ちようどいいところに、その男がいたものね。それとも、わざわざ呼び寄せたのかしら？」

自らの攻撃を潰されたというのに、女皇は微塵も悔しそうなそぶりを見せなかった。荒ぶらないその態度は、自分の勝利を確信しているという自信の現れか。格の違いというものが、彼女と自分のあいだに天までそびえるような壁として存在することを、否が応でも思い知らされる。

「彼が僕のピンチに駆けつけてきてくれたのさ。愛されてるんだよね、僕はさ」

「ええっ!？」

「……なんでキミが驚くんだよ？」

「ああいえ、その、事実無根ではないかなと……」

「こういうときは話を合わせて欲しいよ」

「す、すいません」

空気が一気に弛緩する。だが同時に、女皇に飲まれかけ浮き足だっていた心が、自分の中に戻ってきたのを感じた。

「彼のことをずいぶん信頼しているようだけど……木っ端アバターの一人や二人の加勢で、私を倒せると思ってるのかしら？」

「そ、それは……」

ストレーガが口籠もる。彼女らしからぬ、弱気な態度。一対一ならば負けはしないと言った、彼女の言葉はなんだったのか。

ぼうつと身体を光らせながら、ストレーガを嘲笑する女皇。あの

光こそは頭首支援スキルの輝きだ。その光を見て、ジェット・バレルは理解した。あれだ、あれなのだ。あの光、頭首支援スキルこそが、ストレーガに臍をかませたその理由。たしかに一对一での戦いならば、ストレーガは女皇を下す自信があったのだらう。だが、ステータスを大幅に底上げするスキル効果が効いている状態では、話は簡単には運ばない。

もちろんストレーガともあろう者が、このスキルのことを忘れていたはずもない。むしろ彼女は積極的に、頭首支援スキルを使っていた。

(俺のせいだ……！)

ジェット・バレルは、自分を力任せに殴りつけたい衝動にかられた。

そう、実はジェット・バレルたちも、ライアンスを組んでいた。たった二人きりのライアンス。少しでも戦いを優位に運ぶため、それを組織した。だがそのとき、頭首として登録したのはストレーガではなく、ジェット・バレルのほうだった。

頭首となったジェット・バレルはジジ様たちの了解を得て、イケブクロ・シタデルを占拠。一時的に自分たちの領土とし、イケブクロ・エリアの頭首支援スキルを使って、ジェット・バレルを強化した。少しでも長く、ガウエインを引きつけ、押しとどめるために。

スキルによるステータスアップがなければ、『ストライク・ワン』でガウエインを倒し切れたかは怪しいところだ。押しとどめるどころか倒せてしまった、そういう意味ではプラスだったと言える。だがそのツケはすべて、ストレーガに回っていたのだ。

頭首支援スキルで守られたペルソナアバターを一对一で倒すことはかなり難しい。『領土戦』においても、敵の頭首を務めるアバターが出てきたならば、自陣営は多大な犠牲を覚悟しつつ、一对多の集団戦に持ち込むか、同じく頭首をぶつけるしかない。

頭首同士の一騎討ちなどハイリスク極まりないが、それでもなければ対抗できないのだ。放っておけば、無駄死にするアバターが増えるばかり。たった一人のアバターのために、戦線は崩壊する。一般アバターと頭首とは、それほど戦闘力に差があるのだ。

それでも対人戦において絶対的な戦闘力を持つストレーガならば、対抗できない話ではない。それは彼女の異常性ゆえだが、その異常性をもってしても、今度ばかりは勝手が違った。

決して弱卒とは言い難い、『白銀騎士団』の存在だ。すでにかつての戦いでストレーガと交戦した経験のあるアバターはガウエイン以外いないが、それでも『白銀騎士団』が『剣の魔女』という一人のアバターに崩壊寸前まで追い込まれたという屈辱の結果だけは皆知っている。

その汚名を返上しようと全員が玉砕をも恐れぬ覚悟で、徹底的にストレーガに食い下がったのだ。これにはさすがのストレーガも苦戦した。そのあげくが全身の傷であり、ボロボロになった剣であり、盾だった。

そんな状態で、万全な体勢にある女皇と一戦交えて勝てるものだろうか。勝てると断言するのは、よほどの楽観主義者が真性の愚か者か、なさねばならぬ覚悟を持つ者だけだ。

しかしいくら覚悟があろうとも、そう簡単に結果は覆らない。その事実を女皇も、そしてストレーガ自身もよく分かっている。口籠もったのは、つまりそういうことなのだ。

『ストレーガ！』

『……なんだい、いきなり？』

アライアンス間のみで利用可能な秘匿回線を通じて、彼女に声をかける。少しうっとうしそうに答えた彼女の声から、だいぶ焦りを抱えているのが分かった。



『頭首を交替しましょう！ そうすれば五分の戦いに……』  
『それは無理だよ。戦いが始まったら、システムメニューはロックされる。当然だろ、頭首をコロコロ変えられたりしたら、戦術ってものが成り立たなくなるからね』  
『あ……う……』

自分のアイデアが無意味な空論に過ぎないと諭され、声も出ない。そんな彼を慰めるように、ストレーガは優しく言った。

『キミの気持ちは嬉しい。そこまで僕を心配してくれるなんて、久しぶりの体験だ。思わず胸がときめいたよ。だがなーに、心配は要らないって。頭首支援スキルなんかなくて、ちゃんと勝ってみせるさ。だから、キミはキミの仕事をやってくれ。僕が離脱の隙を作る、タイミング合わせて！』  
『ストレーガ！』

引き留めようとした瞬間、ぶつりといきなり回線が切れた。  
すでにもう、彼女は動き出していた。猛烈な加速でダッシュするストレーガの身体。長い放熱索フロントをなびかせて、一直線に、まるで鵜色の流星のように、ただひたすら女皇に向かって突っ込んでいく。

「さあ女皇クロム！ もう一勝負といこうじゃないか……！」  
「……いいわ！ 来なさいストレーガ……！」

ぎゅおんと風を鳴らしながら振り抜かれる魔女の剣。それを女皇は難なく受け止め、打ち払う。だが打ち払われた瞬間、すでにストレーガは次の打ち込みのために踏み込んでいた。

まるで暴風のような、乱打にも見える攻撃。だがその実一回ごとの斬撃は、全て女皇の急所と関節を狙いすましている。

だが女皇も負けてはいない。間違いなく全アバター中最高峰であ

るストレーガの打ち込みを、手にした大鎌で受け止めていた。あらゆる基礎能力に劣るキャスター・フレームというハンディキャップを持ちながらも、ストレーガの猛攻と互角以上に渡り合っている。もちろん頭首支援スキルの恩恵はあるうが、それ以上に『エンブレス・オブ・ク聖銀の女皇』というアバターの技量が卓越しているのだ。

そしてなにより、かつて二人は親友だった。お互いの手の内など、全て分かりきっていることだろう。

拮抗する戦い。何かしなくてはと思いつつも、ジェット・バレルは崇高ささえ漂わせる二人の対決を前にして、身じるぎ一つでできなかった。

#### 4 - 6 水銀龍（後書き）

ようやく女皇と魔女の直接対決。

そしてガウエイン戦で主人公が妙に強かった理由はこれでした。  
あと回収してない伏線はなんだったっけなあ。

## 4 - 7 失策

『ストレーガ剣の魔女』と『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』。二人の戦いはクロスレンジ白兵戦においてまさに互角。ストレーガの得意分野でこの苦戦は、極めて苦しい状況であると言わざるを得ない。

だが少しでも距離を離せば、強力な『キャストイング詠唱兵装』による遠隔攻撃が飛んでくる。さすがに詠唱時間にかかる超大規模な攻撃は使えないようだが、射出までが早い誘導弾による攻撃は、ストレーガの切り払いをかくぐつて彼女へ確実にダメージを与えている。このままではじり貧だ。先にライフポイントが尽きるのが魔女であるのは、誰の目にも明らかだった。

(どうする……!?)

見守るジェット・バレルの心中では、焦りが募るばかりだ。自分の仕事をすると彼女は言っていた。だが、本来任されたガウエインを引きつけるという役目はすでに終わっている。だったらこの上、何をしろというのか。

何もしない という選択肢はない。何故この場に自分がいるのか。魔女と手を組み、魔女を助けるためではなかったか。それを忘れるような選択など、できるわけがない。

かといって、彼に出来ることは多くない。見とれるほどに激しく戦う二人の間に、割って入るだけの勇氣も技量もない。下手に近付いて手を出せば邪魔になり、かえって魔女を不利にするだけだ。悔しくとも、それが事実。

ならばどうする。ならば、持ち味を生かすしかない。遠距離からの支援射撃 ジェット・バレルにできることと言えば、それだった。

しかし目まぐるしく攻守入れ替わる二人の戦いには、彼の射撃精

度をもつてしても、容易に弾を撃ち込むことができない。だが、やるしかないのだ。このまま放っておけば、魔女は　魔女は、“負ける”。そう、負けるのだ。

(負けさせるわけには、いかないっ！)

彼はもう、覚悟を決めた。

本体に負けず劣らず傷だらけのロングライフルを構え、チャンスを待つ。もっとも効果的な支援射撃とは何かを考えながら。

おそらくジェット・バレルの火力では、女皇を守る頭首支援スキルマスター・バの一つ、自動防御フィルタを貫通するのは難しいだろう。ジェット・バレルも彼女と同様にスキルの恩恵を受けている身だが、支配領域が増えるほど効果が強力になるという頭首支援スキルの特性上、その強化される幅が違うのだ。悔しいが、もともとのスペックと技量を鑑みると、直接彼女を狙うことは無意味に等しい。

何より、ストレーガはそれを望まないだろう。そしてまた、あくまでも主役は彼女であるべきなのだ。たしかに自分を一人のアバターとして見ようともしない女皇や、買ひ叩くことができるは無意識に軽んじていたガウエインには腹が立つ。『白銀騎士団』に目に物見せてやるうと思った、その気持ちには嘘偽りなどない。

しかし、あくまでも自分は介添え役であるべきだ。魔女を女皇に勝たせることこそ、自分という存在を知らしめる手段なのだ。最後に魔女が勝ったとき、その横に自分がいればそれでいい。彼女を助け、守ることができればそれでいい。

多くは望まない。ただ千載一遇の好機だけが、今の彼は欲しかった。

「はっ、ははっ、ははははははっ！　どうしたのストレーガ！　動

きが鈍くなってきたわよ？ そろそろ決着というところかしら？」

「ふっ。さすがの僕も疲れてきているからね、確かにさっさと決着をつけたいよ。僕が勝つことでねっ！！」

「それは無理よ！ 無理、絶対に無理！ 何故なら私が許さないから！！」

「ぬかすなよクロム！ 僕がお前に負けると……！！」

「負けるわ。今日こそ負ける、今こそ負ける。あなたは私に屈服するの！ 私の元に戻るのよ！ さあ！！ 倒れなさいストレীগ！」

『キャステイング 詠唱兵装・爆裂魔術』ッ！！  
『エクスプロードスベル ツ！！』  
「ぐっっ！！」

大鎌のごとき法杖をねじり込むようにして相手突き放し、距離を作った女皇が詠唱を始める。周囲にすぐさまいくつもの魔法陣型プログラムフィールドが発生し、サッカーボール大の燃え盛る火球が次々と形成された。

「焼き尽くしてあげる！ 終わりよストレীগ！！」

「ま、まだだ！」

どうつと唸りを上げながら、火球が次々と襲いかかる。『キャステイ 詠唱兵装・ホーミングスベル 追尾魔術』に比べれば追尾性能は大したことはないが、エネルギー量が桁違いだ。切り払った瞬間、爆裂に巻き込まれるのは目に見えている。しかも一つが爆発すれば、次々と連鎖して爆発するよ。うな仕掛けになっているのだ。なんとか逃げるしかない。

「逃がすと思うの？ 『キャステイング 詠唱兵装・シューターズベル 射撃魔術』ッ！！」  
「追撃っ！ 厄介なっ！！」

女皇の法杖から、レーザーのような光が何条も撃ち出される。狙いは魔女本人ではない。その行く手を阻むように、足下を崩すよう

に、巧妙かつ精緻にコントロールされた攻撃だった。

「ほらほら、走りなさいストレীগ！ 当たってしまえば、痛いじやすまないわよ？」

「うるさいっ！ そのやかましい口を閉じる、クロムツ！」

いつもの余裕ある態度をかなぐり捨てて、必死になって逃げ回るストレীগ。その姿が十分に上に溜飲を下げたのか、女皇は上機嫌に笑っている。

だが、

「ストレীগ、伏せろっ！！！」

「っ！？」

声に言われるまま『射撃魔術』をかいくくりつつ、地面に身を投げ出すストレীগ。そんな彼女の頭上を、数発の銃弾が通り過ぎていく。銃弾の向かう先は燃え盛る炎、女皇が撃ち出した『爆裂魔術』だった。

数発の弾丸が、ひとかたまりとなって迫り来る火球の一つを撃ち抜いた。轟音と共に爆発し、天まで届く火柱を吹き上げる『爆裂魔術』。それだけではない。最初の一つがまき散らした熱と炎が引火して、周囲の火球も次々に爆発していく。夜が昼になったかど錯覚するような輝きが、イケブクロ・シタデルを照らし出した。

「無事かストレীগ！？」

踏み込みながらライフルを乱射し、女皇をけん制しつつ彼女を抱き起こす。

「ど、どうして？」

「どうしてって……やられそうだったじゃないですか！ 当たり前でしよう、助けるのはー！」

「そうじゃない！ どうしてこっちに来た！ ガウエインは……」

「言っただろう！ ガウエインは俺が倒した！ もうあんたのサポートに専念できるー！」

何度も言った台詞を、また繰り返す。どうしてそんなにもガウエインにこだわるのか、どうしてそんなにも、自分の台詞を信じられないのか。それが理解できない。

「ガウエインはもういない！ 二人で女皇を倒しますー！ 俺もやりますー！！」

「違うんだ！ 本当にガウエインを倒したのか！？ キミは……」

なおも食い下がるストレীগ。よほど信用がないのか、ここまで頑なだと怒りさえ覚える。だが、今はもうくどくど説明している場合ではない。このまま女皇を倒せば全てが終わるのだ。それだけで今は十分だ。

「立ってストレীগ！ 立って倒せ、あいつを倒せ！ 女皇を……おおっ！？」

突然、地面が震動を始めた。地震のようだ、だが今のイケブクロ・シタデルを形成する『戦場』ステージでは、このような大規模な戦域変動効果は起こらないはずだった。

しかし今、現実に地面が揺れている。何が起ころうとしているのか、まるで分からない。女皇の使う『詠唱兵装』かと思っただが、それも違う。女皇は息を整えながら、何かを待っているかのように、じっと動かない。だが同時に、何が起こるのかを彼女は分かっているかのようにも見えた。



(ど、どついつことだ……?)

猛烈に嫌な予感がした。立っているだけで震えているのは、フレームの疲労によるコントロールのあそびでも、地震の影響でもない。背筋を凍らせるような悪寒が、彼を芯から震えさせていた。

「ス、ストレーガ、これは……!?!」

「バカッ！ 逃げるんだ！ そこを逃げるジェット・バレル!!」  
「え」

地面が爆発する。何が起こったか理解できないまま、天高く打ち上げられる。

それでもなんとか首を動かし、足下へと目を向けた。

「『ミンチ・ランサー重戮槍』 ツ!! まさかつ!?!」

「その……まさかだツ!!」

地面の中から現れたのは、頭と片腕を失った『ガウエイン太陽の騎士』だった。土と埃とアスファルトのかけらにまみれ、ズタボ口になったその姿。一目で分かった、このアバターは、ステージの地面を掘り進んでここまで現れたのだ。

「なんで！ 頭を潰したのに！ 仮面を壊したのに何故動く!?!  
なんでだつ!!」

「我は不死身よ！ 女皇の敵があるかぎりな!!」

それ以上の話は無用とばかりに、ガウエインは『重戮槍』を振りかぶり、ジェット・バレルを撃ち貫かんと突き出した。掘削機代わりに無理矢理地面を掘り進んできたためか、『重戮槍』もまたボロ

ポロだ。可動刃すらもう動いていない。しかしそれでも大質量の武器が直撃すれば、ジェット・バレル程度を粉碎するのは容易いだろう。

(不死身の……ガウエイン……)

その身が『重戮槍』に貫かれようとする瞬間、彼はかつてストレーガから聞いた異名を思い出していた。よぎるのは後悔。ガウエインが本当に死んだかどうか、確かめなかった自分のミス。

そして今なら分かる。魔女があれだけ頑なに、ガウエインを倒したことを信じなかったわけが。そうだ、たしかに自分はガウエインを倒してなどいなかったのだ。愚かさの報い、浅はかさへの痛撃。痛恨の、悔やんでも悔やみきれない失態。

ならばそれを死で報いるのは必定。しかし だけれども、この場に、それを否とした者がいた。

「やらせないっ！！」

「『剣の魔女』ッ！！」

全身のスラスターを全開にしながら、真っ直ぐに突っ込んでくるその姿。

『重戮槍』が装甲を貫こうとするその瞬間、横合いからの斬撃が、巨大な槍を真っ二つにへし折る。ストレーガだ。ストレーガがジェット・バレルを助けようと、割り込んだのだ。

「愚かだな、魔女！ ジェット・バレルを救うため、その身を犠牲にするか！」

「なにつ！」

三人のアバターが入り乱れたその瞬間、ジェット・バレルを救お

うと飛び込んだその瞬間、ストレーガには隙が生まれていた。なりふり構わぬ打ち込みは、見事『重戮槍』を破壊する。だがそれに全身全霊を込めたからこそ、次の一手に対応できない。先の先を読む彼女らしくない失策。だがそうしなければ、ジェット・バレルを救うことはできなかった。

だが、それゆえに 彼女の天運が今、尽きる。

「くたばるがいい！」

ガウエインが腰の後ろに手を回し、そこに挿していた新たな武器を握りこんだ。それは、それこそは、銃剣が展開したままの、ジェット・バレルのロングライフル。ガウエインの巨大な手で握られたライフルは、まるでナイフかダガーのようだ。しかし、それで十分だった。細くて華奢な、ストレーガの胸元を貫くには。それで十分だったのだ。

「がはっ!?!」

ミリミリと音を立てて装甲を引き裂きながら、ブレードが食い込んでいく。パワーがありすぎるのか、刃だけではなく銃身部分までもが彼女に食い込み、その中枢を破壊する。もともと特別に頑強というわけではない。絶対的な見切り、回避能力の高さこそが、地名の一撃を避けさせ、ここまで戦い抜くことができたその理由。避けられない状況であるならば、彼女の守りは一般のペルソナアバターと何も変わらない。

「あ、ああ……」

まるでやにえのように突き上げられたその身体。血液のように吹き出す、情報粒子の白く光る奔流。すでにその五体に力はなく、

ずるりと『剣の魔女』<sup>ストレーガ</sup>の手から剣が落ちる。気を失ったときですら離さなかった剣を、己の象徴、己の命である剣を、彼女は取り落とした。

「……………くっ!? あ、握力が……………!!」

だがストレーガの全力での打ち込みは、ガウエインに残る右腕もただでは済まさなかったようだった。ばちつと全体が帯電し、ガタガタと大きく震え出す。『重戮槍』を破壊された衝撃は、その巨腕にまでもダメージを与えていたようだった。

すでに手指は用をなさないので、その手からライフルごとストレーガの身体が滑り落ちる。

「う……………わあああああつ!!」

走っていた。駆けだしていた。ジェット・バレルは何もかもを顧みず、狂乱したように叫びながら、倒れた魔女に向かって走り出していた。

今がどこであるのか。誰がここにいるのか。自分はどうしなくてはならないのか。その全てが頭から抜け落ち、走っていた。

「会長! 会長ツ!!」

「か、会長つて呼ぶなって言ったる……………!!」

もはや身じろぎもできないのか、仰向けに倒れたまま、今にも消えてしまいそうな細かい声で、ストレーガが答えた。

そんな彼女を抱き起こす。もしかしたら、こんなにも近くで触れたのは初めてかもしれない。こんなにも細く、軽いアバター。この細身で、その細腕で、百人に迫るアバターと戦い抜いたなど、到底信じられない。

「なんで！　なんでこんなっ！　あんたが、あんたが勝たなきゃダメじゃないか！　なんでこんなことしたんだよ！　何で俺なんか助けたんだよッ！！」

「……ふ」

たぶん、笑ったのだろう。ひび割れたスモーク・グレーの仮面の下で、目を覆うシールド・コンタクトがわずかに動く。

苦しげに、ゆっくりとストレーガの右手が動いた。今までずっと剣を握っていた右腕が開かれ、そっと自分を抱き起こしたジェット・バレルの顔をなでる。

「変なことを……聞くね。目の前で死に瀕した相棒を、どうして黙って見捨てられるんだい？　助けるのが当たり前……それは、キミが言ったことじゃないか……」

「言った！　言ったけど！　でも、この戦いは……あんたが勝たなきゃ意味がない！　あんたが生き残らなきゃ意味がない！！」

「ふふ……そう、だね……その通りだ……！　全部、台無しにしてしまったかもね……だけど……」

そこで言葉を切る。苦しげに呻く彼女。一撃で『活動臨界』リミット・バーストに追い込まれなかったのは、かえって残酷なことだった。

「それでも……キミを見捨てるよりかはずっといい……！　キミを……見捨てて……勝ったとしても……それではきつと……あいつを納得させられない……！！　それは……あいつがやって……るの……と、同じこと……だから……ね」

「だ、だからって……！！」

何か反論しようとしたが、上手く言葉が出てこない。そして、それ以上の言葉を重ねる前に　二人の背後に、誰かが立つ気配があった。

「……結局、あなたは彼女の足手まといでしかなかったわね」

『エンプレス・オブ・クローム  
聖銀の女皇』だ。皮肉げな口調で言う彼女に、反論の言葉が一切ない。ただ俯いて、浴びせられた言葉を受け止めるだけしかない。

「分かりきっていたのよ、この結果は。二年前もそうだった。あなたは私を止めてくれなかった。止められなかった。今度もそう。もう止まらない、止められない。私は、私の『白銀騎士団』は、行き着くところまで行ってしまっわ。あなたが止めてくれなかったから。そう、だから私は……悪くない」

「なん……だと……！」

ストレーガをそつと地面に横たえ、怒気をはらませたジェット・バレルが立ち上がる。彼もまた満身創痍だ。その身体からは、もはや制御しきれなくなったエネルギーが炎となってあちこちを包んでいる。ダメージの蓄積によるオーバーロードだ。だがそれは、怒りに燃える彼の心が、まるで形になったかのようにだった。

「そこを……どけ、ジェット・バレル。魔女にトドメを……刺す。それで、この戦いは終幕だ。そして……魔女の戦いもな」

女皇の横に立つガウエインが、ジェット・バレルを押しつけようと手を伸ばす。だが彼はその手を殴るように振り払う。ぼつっと、オーバーロードの炎が渦を巻く。

「どくもんか。トドメを刺すだと？ ふざけるな！ 彼女はやらせない、絶対にやらせない。相手をしてやる……俺が相手だガウエイン！ 俺が相手だ、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』ッ！！！」

「よせ。意地を張るな……これは卿の戦いではない。魔女の……魔女と我らの戦争だ」  
「違う！」

彼は叫んで否定する。そして、言わねばならぬことを叫んだ。もう一度 あの時、彼女が言った言葉を、はっきりと宣言した。

「ストレーガは言ったはずだ。これは彼女だけの戦争じゃない……お前ら『白銀騎士団』と、俺たち二人との戦争だ！！！」

#### 4 - 7 失策（後書き）

ガウエイン再登場。

そしていよいよ真・ラストバトル開始です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9585u/>

---

仮面の魔女と黒い銃

2011年12月28日23時49分発行